中央自動車道長野線
埋蔵文化財発掘調査報告書14

—長野市内その2—

鶴前遺跡

1994

日本道路公団名古屋建設局
長野県教育委員会
(財)長野県埋蔵文化財センター

中央自動車道長野線
埋蔵文化財発掘調査報告書14

—長野市内その2—

鶴前(つるまえ)遺跡

1994

日本道路公団名古屋建設局
長野県教育委員会
(財)長野県埋蔵文化財センター

序

(財)長野県埋蔵文化財センターによる善光寺平の調査は、昭和62年度にはじまり、当初の長野自動車道関連の調査から、上信越自動車道、北陸新幹線関連に加え、現在に至るまで実施され続けています。今回報告いたします鎌前遺跡の調査は、昭和62年に最初に着手いたしました遺跡であり、その後行われる大規模な調査の先駆けとなった遺跡でもあります。

遺跡は、善光寺平南部の筑摩山地から平野部に延びる小さな丘陵上に立地します。長野自動車道のルートと重ね合わせますと、筑北盆地から「田毎の月」で有名な姥捨山をトンネルで抜け、右手に善光寺平を一望しながら、山麓部を緩やかにカーブを描きながら再びトンネルに入り、平地の水田地帯に抜けます。その出口に遺跡はあります。周囲の丘陵部には、前期古墳として有名な川柳将軍塚、中郷神社古墳があり、眼下に広がる千曲川の自然堤防上には塩崎遺跡群・篠ノ井遺跡群が展開しており、一帯が古代において信濃の政治的拠点として重要な位置を占めていたことがわかります。

調査の内容につきましては、すでに県埋文センター発行の「ニュース」・「年報」や、現地説明会、遺物展示会等で、その一端を紹介してまいりましたが、整理作業を進めます中で、新たな知見を得て、本書に収録することができました。時代的には、旧石器時代から中・近世に至るまで途切れなく生活の痕跡を認めることができます。その中でも、特に弥生時代後期から古墳時代前期の資料は、集落や遺物研究を進める上で質量とも充実しており、今後の研究に大きな指針を与えるものと自負しております。

また、整理作業を実施しておりました平成5年3月に長野自動車道が豊科ICから須坂長野東ICまで開通し、現在長野県の南北を結ぶ交通の大動脈として、調査した遺跡の上を多数の車両が通行している姿を目にしますと、感慨もひとしおです。

最後になりましたが、発掘調査を開始する段階から本報告書の刊行にいたるまで、深い御理解と御協力をいただいた、日本道路公団名古屋建設局、同長野工事事務所、長野県高速道局、同長野高速道事務所、地元長野市、同教育委員会、篠ノ井農業協同組合、地区用地被買収組合(者)等関係機関及び地元協力者の方々、発掘・整理作業に従事協力された多くの方々、発掘から整理作業まで適切な御指導・御助言をいただいた長野県教育委員会文化課と、本書の刊行までこぎつけた県埋文センター職員の努力に対し、心から敬意と感謝を表す次第であります。

平成6年3月31日

財団法人　長野県埋蔵文化財センター

理事長　佐藤　善處

例　　言

1　本書は、中央自動車道長野線（長野自動車道）建設工事に係わる、長野市鶴前遺跡（ＢＴＵ）の発掘調査報告書である。

2　本書で使用した地図は、日本道路公団作成の中央自動車道長野線平面図（１：1000)、長野市発行の長野市都市計画図（１：2500）をもとに作成したほか、建設省国土地理院発行の２万５千分の１の地形図を複製した。

3　すでに本遺跡の概要については、県埋文センター発行の『長野県埋蔵文化財センターニュース』25・26・29、『長野県埋蔵文化財センター年報』５・６等で報告している。それらと本書での記述に若干の相違があるが、本報告をもって最終的な報告とする。

4　発掘調査、報告書作成にあたり、多くの研究者・機関から御指導をいただいた。氏名・機関名のみを第１章第３節に記させていただいた。御了承願いたい。

5　発掘調査の体制、本書の執筆および刊行に関する分担については、第１章第３節に一括掲載してある。古代の土器については、既刊の県埋文センター報告書３吉田川西遺跡・４総論篇に従って記述しているので、参照されたい。

6　鶴前遺跡は旧石器時代から中世にわたっており、各時代毎に特色があり記述・遺物実測図の調整の表現等に違いがある。

7　調査は２年度にわたる分割調査となったため、他の大規模の発掘調査との平行による調査研究員の異動・重複が加わり、十分に検討する時間が取れず、記述の方針・方法に一貫しない部分が生まれた。今後の反省としたい。

8　県埋文センターは、鶴前遺跡から石川条里遺跡・篠ノ井遺跡と連続して調査しており、内容とすると丘陵部の集落遺跡、水田を中心とした生産遺跡、自然堤防上の拠点的集落遺跡となり、これらは一連の有機的なつながりをもっていたと考えられる。今後、後続する上記二遺跡の整理作業の成果と考え合わせ、千曲川西岸一帯の調査のまとめを考えている。

9　参考文献は各節ごと末尾に一括した。

10　本書で報告した鶴前遺跡の記録及び出土遺跡は、財長野県埋蔵文化財センターが保管しているが、今後は長野県立歴史館(仮称)に移管される。

本 文 目 次

序
例　言
本文目次
挿図目次
表目次
写真図版目次

第1章　序　説
第1節　調査の概要……1
第2節　調査の方法……3
1　遺跡の名称と記号　2　発掘調査
第3節　調査の体制と経過……5
1　調査の組織　2　調査の経過　3　指導者及び執筆分担

第2章　周辺の環境と遺跡の概観
第1節　周辺の環境……9
1　地理的及び歴史的環境　2　基本層序
第2節　遺跡の概観……13

第3章　遺構と遺物
第1節　旧石器時代……19
第2節　縄文時代～弥生時代中期初頭……19
1　縄文時代早期……20
(1)　遺構外出土遺物
2　縄文時代前期……21
(1)　遺構と遺物　(2)　遺構外出土遺物
3　縄文時代中期……24
(1)　遺構と遺物　(2)　遺構外出土遺物
4　縄文時代後期……26
(1)　遺構外出土遺物
5　縄文時代晩期終末～弥生時代中期初頭……26
(1)　遺構と遺物　(2)　遺構外出土遺物　(3)　まとめ
第3節　弥生時代後期～古墳時代前期……34
1　遺構と遺物……35
(1)　竪穴住居址　(2)　土　坑　(3)　遺物集中箇所　(4)　溝　址
2　遺構外出土遺物……68
第4節　古墳時代中期……81
第5節　奈良・平安時代……83
1　遺構と遺物……84
(1)　竪穴住居址　(2)　掘立柱建物址　(3)　溝　址　(4)　土　坑　(5)　その他の遺構
2　遺構外出土遺物……109

第6節　中世以降 …… 112
1　遺構と遺物 …… 112
(1)　掘立柱建物址　(2)　土　坑
2　遺構外出土遺物 …… 115

第4章　調査の成果と課題
第1節　縄文時代晩期終末の石器群について …… 119
第2節　弥生時代後期～古墳時代前期の遺構・遺物 …… 123
第3節　奈良・平安時代の遺物と集落 …… 136

第5章　結　語 …… 139
付　章　SK162出土人骨 …… 獨協医科大学　茂原信生助教授他 …… 140

挿　図　目　次

第1図　周辺地形及び発掘範囲図（1：4000） …… 2
第2図　測量基準点杭式図 …… 3
第3図　調査地区割付設定図 …… 4
第4図　周辺地域地形区分 …… 9
第5図　周辺遺跡分布図（1：25000） …… 10
第6図　トレンチ配置図及び地層図 …… 12
第7図　遺構全体図（1：1000） …… 14
第8図　遺構分布図1（1：300） …… 15
第9図　遺構分布図2（1：300） …… 16
第10図　遺構分布図3（1：300） …… 17
第11図　遺構分布図4（1：300） …… 18
第12図　旧石器時代石器実測図（1：2） …… 19
第13図　縄文時代遺構全体図（1：1000） …… 20
第14図　縄文時代早期土器拓影（1：2） …… 21
第15図　SB13実測図（1：60） …… 22
第16図　縄文時代前期土器実測図・拓影（1：3） …… 23
第17図　SB13出土石器実測図 …… 24
第18図　SK173実測図及び縄文時代中期土器実測図・拓影 …… 25
第19図　SB60実測図及び出土土器拓影 …… 27
第20図　SB60・SK169石器実測図 …… 28
第21図　SK169実測図及び出土土器拓影 …… 28
第22図　縄文時代後期～晩期土器拓影及び土偶実測図 …… 29
第23図　縄文時代晩期～弥生時代中期土器拓影（1：3） …… 30
第24図　SD09・遺構外出土石器実測図 …… 32
第25図　弥生～古墳時代遺構全体図（1：1000） …… 34
第26図　SB02実測図 …… 35
第27図　SB02出土土器実測図・拓影 …… 36
第28図　SB04実測図及び出土土器実測図1 …… 37
第29図　SB04出土土器実測図2・拓影（1：3） …… 38
第30図　SB05実測図及び出土土器実測図・拓影 …… 39
第31図　SB06実測図及び出土土器実測図・拓影 …… 40
第32図　SB07実測図及び出土土器実測図・拓影 …… 41
第33図　SB10実測図及び出土土器実測図・拓影 …… 41
第34図　SB11実測図（1：60） …… 42
第35図　SB12実測図（1：60） …… 42
第36図　SB12出土土器実測図・拓影 …… 42
第37図　SB14実測図（1：60） …… 42
第38図　SB28実測図 …… 44
第39図　SB28出土土器実測図（1：4） …… 45
第40図　SB28出土遺物実測図・拓影 …… 46
第41図　SB29実測図 …… 46
第42図　SB29出土土器実測図・拓影 …… 47
第43図　SB32・35実測図及び出土土器実測図・拓影 …… 48
第44図　SB34実測図及び出土土器実測図・拓影 …… 49
第45図　SB36実測図及び出土土器実測図・拓影 …… 50
第46図　SB37・39実測図 …… 51
第47図　SB37出土遺物実測図・拓影 …… 52
第48図　SB39出土土器実測図・拓影 …… 52
第49図　SB38実測図（1：60） …… 53
第50図　SB38出土遺物実測図・拓影 …… 53
第51図　SB40実測図及び出土土器拓影 …… 54
第52図　SB41実測図及び出土遺物実測図・拓影 …… 55
第53図　SB42実測図（1：60） …… 56
第54図　SB42出土土器実測図・拓影 …… 57
第55図　SB54実測図及び出土土器実測図 …… 58
第56図　SB62実測図及び出土土器実測図 …… 59

第57図　SB68実測図及び出土土器実測図 …… 59
第58図　SK112実測図（1：60）……60
第59図　SK112出土土器実測図（1：4）……60
第60図　SQ11実測図（1：40）……60
第61図　SQ10実測図（1：40）……60
第62図　SQ12実測図（1：40）……60
第63図　土器集中箇所出土土器実測図（1：3）……61
第64図　SD09出土土器実測図1（1：4）……62
第65図　SD09出土土器実測図2（1：4）……63
第66図　SD09出土土器実測図3（1：4）……64
第67図　SD09出土土器拓影（1：4）……65
第68図　遺構外出土土器実測図1（1：4）……66
第69図　遺構外出土土器実測図2・拓影（1：4）……67
第70図　遺構外出土遺物実測図3・拓影（1：4）……68
第71図　遺構外出土土器拓影（1：3）……69
第72図　古墳時代中期遺物出土範囲図（1：1000）……81
第73図　古墳時代中期出土土器実測図（1：4）……82
第74図　奈良・平安時代遺構全体図（1：1000）……83
第75図　SB01実測図及び出土遺物実測図 …… 84
第76図　SB03実測図及び出土土器実測図 …… 85
第77図　SB08実測図（1：60）…… 86
第78図　SB09実測図（1：60）…… 86
第79図　SB15実測図及び出土土器実測図 …… 86
第80図　SB17実測図（1：60）…… 87
第81図　SB20実測図及び出土土器実測図 …… 87
第82図　SB21実測図（1：60）…… 88
第83図　SB22実測図（1：60）…… 88
第84図　SB23実測図及び出土土器実測図 …… 88
第85図　SB24実測図及び出土土器実測図 …… 89
第86図　SB25実測図及び出土土器実測図 …… 89
第87図　SB26・27・31実測図（1：60）…… 89
第88図　SB43実測図及び出土土器実測図 …… 90
第89図　SB45・63実測図及び出土土器実測図 …… 92
第90図　SB47実測図及び出土土器実測図 …… 93
第91図　SB48実測図及び出土土器実測図 …… 94
第92図　SR51実測図及び出土土器実測図 …… 95
第93図　SB52・53実測図及び出土土器実測図 …… 96
第94図　SB55実測図（1：60）…… 96
第95図　SB56・66実測図及びSB66出土土器実測図 …… 97
第96図　SB57実測図及び出土土器実測図 …… 97
第97図　SB64実測図及び出土土器実測図 …… 98
第98図　SB65実測図及び出土土器実測図 …… 98
第99図　ST02実測図（1：60）…… 99
第100図　ST03実測図（1：60）…… 100
第101図　ST05実測図（1：60）…… 100
第102図　ST06実測図（1：60）…… 101
第103図　ST07実測図（1：60）…… 101
第104図　ST09実測図（1：60）…… 102
第105図　ST10実測図（1：60）…… 103
第106図　ST11実測図（1：60）…… 103
第107図　ST12実測図（1：80）…… 104
第108図　溝址遺構全体図（1：1000）……105
第109図　SD06～11（09を除く）出土土器実測図
（1：4）…… 106
第110図　SD09実測図 …… 106
第111図　SD09出土土器実測図（1：4）…… 107
第112図　土坑一括（SK70を除く）出土土器実測図
（1：4）…… 107
第113図　SK70実測図及び出土土器実測図 …… 108
第114図　SB18・19実測図 …… 110
第115図　遺構外出土土器実測図（1：4）……111
第116図　中世以降遺構全体図（1：1000）……112
第117図　ST01実測図（1：60）…… 113
第118図　ST08実測図（1：60）…… 114
第119図　SK162実測図及び出土銭貨拓影……114
第120図　SK163実測図及び出土銭貨拓影……115
第121図　SK172実測図（1：40）……115
第122図　SK177実測図及び出土銭貨拓影……115
第123図　遺構外出土遺物実測図（1：4）……116
第124図　遺構外出土銭貨拓影（2：3）……116
第125図　遺構及び遺構外出土石製品実測図（1：3）…117
第126図　遺構外出土石白実測図（1：6）……118
第127図　縄口縁分類Ⅰ（在地系）……123
第128図　甕口縁分類Ⅱ（北陸系）……123
第129図　甕口縁の外来系土器比率別住居分布図……125
第130図　北陸系土器群調整技法1……126
第131図　北陸系土器群調整技法2……127
第132図　北陸系甕形土器……128
第133図　高杯形土器の分類……129
第134図　北陸系器台・高杯脚部……129
第135図　弥生～古墳時代時期別遺構分布図（1：1000）……130
第136図　奈良・平安時代竪穴住居址全体図（1：1000）…137

表 目 次

第1表　弥生時代後期～古墳時代前期遺物観察表…70～80
第2表　石器の消長表 …… 121
第3表　住居別甕口縁分類表 …… 124
第4表　弥生～古墳時代住居址一覧表 …… 132
第5表　編年対称表 …… 133
第6表　竪穴住居別遺物の出土量 …… 136
第7表　鶴前遺跡出土人骨の上顎歯の計測値と比較資料…141
第8表　鶴前遺跡出土人骨の下顎歯の計測値と比較資料…141

写 真 図 版 目 次

PL.　1　調査遺跡周辺
PL.　2　遺跡全景
PL.　3　遺　構1
PL.　4　遺　構2
PL.　5　遺　構3
PL.　6　遺　構4
PL.　7　遺　構5
PL.　8　遺　構6
PL.　9　遺　構7
PL.　10　縄文土器1
PL.　11　縄文土器2
PL.　12　縄文土器3
PL.　13　遺構出土石器1
PL.　14　遺構出土石器2
PL.　15　遺構出土石器3
PL.　16　遺構出土石器4
PL.　17　遺構出土石器5・他
PL.　18　遺構外出土石器1
PL.　19　遺構外出土石器2
PL.　20　遺構外出土石器3
PL.　21　遺構外出土石器4
PL.　22　遺構外出土石器5
PL.　23　弥生時代後期～古墳時代前期土器1
PL.　24　弥生後期～古墳前期土器2
PL.　25　弥生後期～古墳前期土器3
PL.　26　弥生後期～古墳前期土器4
PL.　27　弥生後期～古墳前期土器5
PL.　28　弥生後期～古墳前期土器6
PL.　29　弥生後期～古墳前期遺物
PL.　30　古墳中期土器・平安時代土器1
PL.　31　平安土器2
PL.　32　平安土器3
PL.　33　中・近世遺物1
PL.　34　中・近世遺物2
PL.　35　SK162出土人骨

第1章　序　　説

第1節　調査の概要

当財団法人長野県埋蔵文化財センター（以下「県埋文センター」という。）は、その設立主旨から国及び県の機関（文化財保護法施行令（昭和50年令第267号）第1条に定める法人を含む。）により実施される公共開発事業において、事業の実施に先駆け調査を済ませる義務をおう者（以下「事業者」）の委託を受けて、埋蔵文化財の調査を行うほか、埋蔵文化財の保護のための必要な事業及び研究を行う。この時、県埋文センターが委託を受けて行う調査（以下「受託調査」という。）は、それに先立ち長野県教育委員会（以下「県教委」という。）が、行政上の調整を済ませた上で県埋文センターにおいて受託して行うことが適当であると認めたものについて実施される。

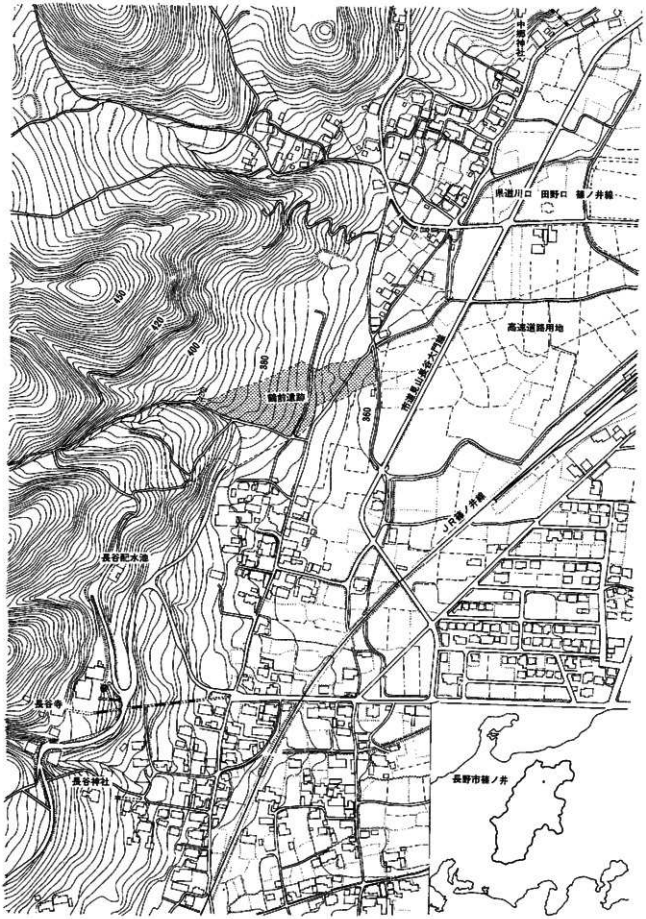
昭和63年度は、昭和57年度に県埋文センターが発足して以来、岡谷地域より継続している高速道路建設工事事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査が善光寺平にはじめて展開をみた年度である。今回の長野市篠ノ井塩崎字鶴前1583番地他所在の鶴前遺跡は、善光寺平においてはじめて実施された長野自動車道建設事業による発掘調査となった。鶴前遺跡は、篠山山系の東斜面上に存在し、東方眼下に石川条里遺跡を見下ろす位置にあり（第1図）、当初より、石川条里遺跡を取り囲む集落跡の一部を構成し、生産域と生活域を明らかにする上で重要な遺跡とされていた。昭和62年度、本格的な調査に先立つ県教委による試掘調査（高速道路建設用杭番号STA714＋40A及びSTA714＋80B地点にテストピットを設定）の結果、弥生時代後期・奈良・平安時代の複合遺跡との所見を得、また周知の遺跡の範囲（市道352号長谷北線）より更に西側の未周知地域へ100mほど範囲が拡大する可能性あるとして確認調査の指導を受けた。

昭和63年度の長野調査事務所における当初計画は、坂北村2遺跡、更埴市1遺跡、長野市塩崎地区3遺跡で合計6遺跡であった。しかし、用地買収等により発掘調査可能な遺跡が限定され、このためほとんどの遺跡において発掘調査の開始時期が大幅に遅れるという状況になった。加えて、赤沢城跡が新規に追加され調査対象となり、当初の調査計画は大幅な変更を余儀なくされた。また、石川条里遺跡の調査が予想を上回る情報量と極めて軟弱な湿地帯遺跡として難航した。このため、鶴前遺跡における県埋文センターの受託調査は、他遺跡との発掘調査工程の絡みから、2年度に渡らざるをえなかった。

発掘調査初年度の昭和63年度は、周知の遺跡範囲を主体とした調査を実施した。またそれ以外の西側地域は、トレンチ試掘調査により遺構の広がりを確認し、調査は次年度に持ち越しとなった。発掘調査期間は、昭和63年4月18日～同年8月2日まで、調査対象面積は5,900㎡。ちなみにこの年は、長野市篠ノ井塩崎地区の赤沢城跡及び石川条里遺跡を加えた3遺跡の調査が実施されている。

平成元年度は、前年度の調査結果を受け、新たに範囲として見積られた調査区を発掘調査の対象とした。ここは市道長谷北線より西側に当たり、これに昨年の残件部分として市道大石～湯之崎線直下を加えた。発掘調査期間は平成元年8月1日～同年12月22日まで、調査対象面積は、5,400㎡となり、前年度分とあわせて総調査面積は、11,300㎡となった。

報告書刊行にむけての整理作業は、発掘調査終了後1年の間をおき、平成3年度より2年間実施し、平成5年度の報告書刊行をもって、整理作業を終了することとなった。



第1図 周辺地形及び発掘範囲図（1：4000）

第2節　調査の方法

1　遺跡の名称と記号

遺跡の名称は、長野県教育委員会作成の遺跡台帳に掲載された「鶴前遺跡」とした。遺跡を表す記号は、アルファベット3文字にしたがい頭文字に長野県を9地区に分割した長野市に該当する「B」と記し、次の2文字「TURUMAE」の「TU」を付加して「BTU」とした。この遺跡記号使用の目的は、発掘調査段階での便宜を図ることはもとより、今後の情報処理におけるデータベース化に対応するためのものである。従って、これら3文字の構成に重複はない。なお遺物への注記、遺構・遺物実測図についても「BTU」の略号を用いて表記してある。

また、遺構も同様の観点より、その性格から分類化した記号を用い、後に個々の番号を付加した。使用した遺構記号は下記の通りである。この記号は、遺構検出時に付すため精査をすすめていく中で、略号と性格が異なってきた場合も、変更はしていない。例としては、竪穴住居址と想定し「SB」の略号を付したが土坑となった場合も「SB」の記号はそのままとしてある。本報告書の際も同様である。

ＳＢ……竪穴住居址　　ＳＫ……土坑
ＳＴ……掘立柱建物址　　ＳＱ……遺物集中箇所
ＳＤ……溝址　　ＳＸ……その他、不明

2　発掘調査

ア　予備調査

遺物の包含層、埋没状況、遺構の分布を把握するため、用地内全面にテストピットおよび幅2mのトレンチを設定し、人力により掘り下げを実施。

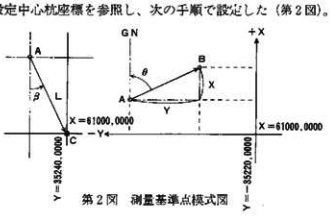
イ　面的調査

予備調査の成果をもとに、範囲を設定し、重機（バックホー）による表土剥ぎ、次に手作業による遺構検出を行い、その後遺構の精査を実施する。

遺構の精査は、先行トレンチを入れて土層の状況を確認した後、面的に掘り下げるという一般的な方法によっている。

ウ　測量基準

測量基準点及び測量基準線の設定方法は、国土地理院発行ユニバーサル横メルカトル図法の座標で表示された点に基づき、40の倍数値にて割り切れる任意の数値を設定することより始める。本遺跡の場合においては、高速道路工事用設定中心杭座標を参照し、次の手順で設定した（第2図）。



第2図　測量基準点模式図

(1) 既知点ステーションナンバーSTA715－40・715＋60より座標北（GN）を算出。

		X	Y
A	STA715＋40	61007, 0102	－35258, 2285
B	STA715＋60	61013, 1284	－35239, 1875

STA715＋40を基点として、STA715＋60を視準する。

$$X = 61013,1284 - 61007,0102 = 6,1182$$

$$Y = -35239,1875 - 35258,2285 = 19,041$$

$$@\ \theta = \tan^{-1}\frac{Y}{X} = \tan^{-1}3,11218986 = 72,18689705$$

$$\therefore = 72^\circ\ 11'\ 12,83''$$

反時計廻りに72° 11′ 12, 83″ の方向が座標北となる。

(2) 次に座標上、40で割り切れる任意の数値を決める。

$$x = 61000,0000 - 61007,0102 = -7,0102$$

$$y = -35240,0000 + 35258,2285 = 18,2285$$

$$@\ \beta = \tan^{-1}\frac{Y}{X} = \tan^{-1} -2,600282446 = -68,96457421$$

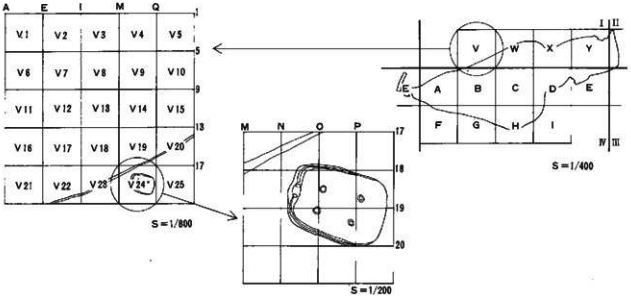
$$\therefore = -68^\circ\ 57'\ 52,47''$$

反時計廻りに68° 57′ 52, 47″ の方向を視準する。

$$@\ L^2 = \sqrt{X^2 - Y^2} = \sqrt{(-7,0102)^2 + (18,2285)^2}$$

A点より距離Lの地点C点（X＝61000, 0000　Y＝－35240, 0000）が測量基準点となる。このC点を基準点として、X軸Y軸に40m間隔に座標線を引き交点すなわち大地区を求める。さらに、大地区を五分割し8m間隔で中地区を設定する。

設定した測量用の大・中・小地区の割付および名称は、第3図に示すとおりである。遺構の測量は、すべてこの地区設定を用いている。



第3図　調査地区割付設定図

第3節　調査の体制と経過

1　調査の組織

＝発掘調査＝

(1)　昭和63年度　事務局長（兼総務部長兼長野調査事務所庶務部長）　半田順計
調査部長（兼長野調査事務所調査部長）　笹沢　浩
調査研究員　中平智昭　平林芳明　福島厚利　三上徹也　越川長治　太田典孝
山崎博也　宮尾栄三　久保直隆　山崎光顕　青木一男　西山克己
春日文彦　内山美彦　池田　哲　市川隆之　臼居直之　中村敏生
綿田弘実　伊藤友久

(2)　平成元年度　事務局長（兼総務部長兼長野調査事務所庶務部長）　半田順計
調査部長（兼長野調査事務所調査部長）　笹沢　浩
調査課長　臼田武正
調査研究員　小平恵一　平林芳明　三石俊司　伊藤友久

＝整理作業＝

(1)　平成3年度　事務局長　塚原隆明
総務部長　塚田次夫　調査部長　小林秀夫
長野調査事務所長　峯村忠司
整理課長代理　原　明芳
調査研究員　伊藤友久

(2)　平成4年度　事務局長　峯村忠司
総務部長　神林幹雄　調査部長　小林秀夫
長野調査事務所長　岡田正彦
整理課長　原　明芳
調査研究員　伊藤友久　西嶋　力

(3)　平成5年度　事務局長　峯村忠司
総務部長　神林幹雄　調査部長　小林秀夫
長野調査事務所長　岡田正彦
整理課長　原　明芳
調査研究員　臼居直之　西嶋　力

2　調査の経過

昭和62年度

12月22日　県教委文化課による遺跡範囲確認のための試掘調査。調査場所は高速道路建設用杭番号STA714＋40A及びSTA714＋80B地点にテストピットを設定。調査の結果、遺構分布範囲は周知の遺跡範囲より（市道長谷北線）西へ更に120m程広がる可能性を指摘。

発掘開始式（プレハブ内）

検出作業風景

昭和63年度

4月1日　発掘調査計画書の作成。
4月7日　長谷・越地区地元説明会（長谷越公民館）。
4月14日　市道長谷北線より東調査区においてトレンチ調査開始。
4月16日　市道長谷北線から市道犬石湯之崎線間の表土剝ぎ開始。
4月18日　発掘調査開始式。
4月28日　測量杭の設定作業開始。
5月16日　市道長谷北線より西調査区のトレンチ試掘調査開始。
5月24日　高速道路工事用道路設置のため本設置箇所の優先調査開始。
6月5日　発掘調査現地説明会。
6月29日　市道長谷北線南側直下掘り下げ。
7月1日　高速道路工事用道路設置箇所の変更のため、優先調査区域拡大。
7月11日　市道犬石湯之崎線より東調査区の表土剝ぎ開始。
8月2日　鵜前遺跡に於ける本年度分の発掘調査終了。
12月19日　整理作業開始。
3月31日　本年度の整理作業期間終了。

SD02・03発掘風景

SB28発掘風景

平成元年度

7月24日　発掘調査開始。
8月2日　測量杭の設定。
（7月24日から9月27日までの間は石川条里遺跡②－1調査区と平行調査。）
10月18日　空中写真撮影。
10月20日　市道長谷北線北側直下の調査開始。
11月15日　昭和63年度調査残件市道犬石湯之崎北側直下の調査開始。
11月22日　本年度分調査区の調査終了。
12月1日　市道犬石湯之崎線北側部分の調査終了。
12月16日　昭和63年度調査残件市道犬石湯之崎線南側部分の調査開始。
12月21日　残件市道直下の調査終了。これにより高速道路用地内における鵜前遺跡の発掘調査は全て終了する。
1月4日　整理作業開始。
2月28日　本年度の整理期間終了。

平成3年度

7月1日　報告書作成のための整理作業開始。
　　土器石器等の洗浄、注記、選別、接合、実測作業開始。
1月6日　遺物図版、写真図版作業開始。

平成4年度

5月1日　原稿執筆、編集作業を実施。
8月2日　遺物写真撮影開始。
3月31日　図版組作業終了。

平成5年度

1月8日　鶴前遺跡報告書刊行のための起案書提出。
1月28日　報告書入札。
3月31日　報告書刊行。

3　指導者及び執筆分担

(1)　指導者

発掘調査・整理作業の際には以下の方々に、お世話になった。お名前のみを記してお礼としたい。(敬称略)

赤澤徳明　久々忠義　倉澤正幸　田鳴明人　山下誠一　中山誠二　前島　卓
矢口忠良　青木和明　千野　浩　飯島哲也　寺島孝典　島田哲男　吉田秀享
出越茂和　笹沢　浩

(2)　報告書作成の分担

調査報告書の図版作成・執筆にかかわる分担は以下の通りである。

第1章　伊藤友久
第2章　伊藤友久・原　明芳
第3章第1節　伊藤友久
　　第2節　伊藤友久（遺構）・中沢道彦（早期土器）
　　贄田　明（前期土器）・寺内隆夫（中期土器）・原　明芳（後・晩期土器、まとめ）
　　第3節　臼居直之
　　第4節　原　明芳
　　第5節　伊藤友久・原　明芳
　　第6節　伊藤友久・原　明芳
第4章第1節　町田勝則
　　第2節　臼居直之
　　第3節　原　明芳
第5章　原　明芳

実測図作成及び写真撮影作業員

青木　明美　近藤　朋子　半田　純子　立岩　洋子　西村はるみ　田中　由美　北村久美子
鍬田美和子　北沢　節子　塚田　祐子　半田　訓子　待井　明美　今井　博子　小根山貞子
小林とも子　鈴木ひろみ　中沢ヒデ子　原田美峰子　大内　秀子　吉沢　朝子　北島　康子
小出　紀彦　飯島　公子

その他　遺物実測：伊藤友久（石器等）
　　臼居直之（弥生時代後期～古墳時代の土器）
　　原　明芳（奈良・平安時代、中世陶器）

遺物写真撮影・現像・焼付け・遺構写真焼付け：西嶋　力
石器鑑定：町田勝則
石質鑑定：市川桂子
金属製品保存処理：白沢勝彦
人骨鑑定：茂原信生（依頼鑑定）
総合編集：原　明芳、臼居直之、伊藤友久、飯島公子

第2章　周辺の環境と遺跡の概観

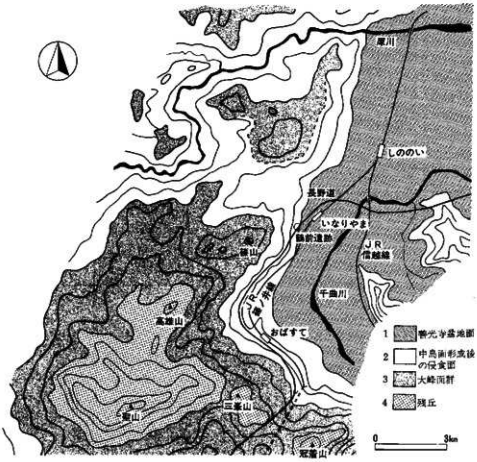
第1節　周辺の環境

1　地理的及び歴史的環境（第4・5図）

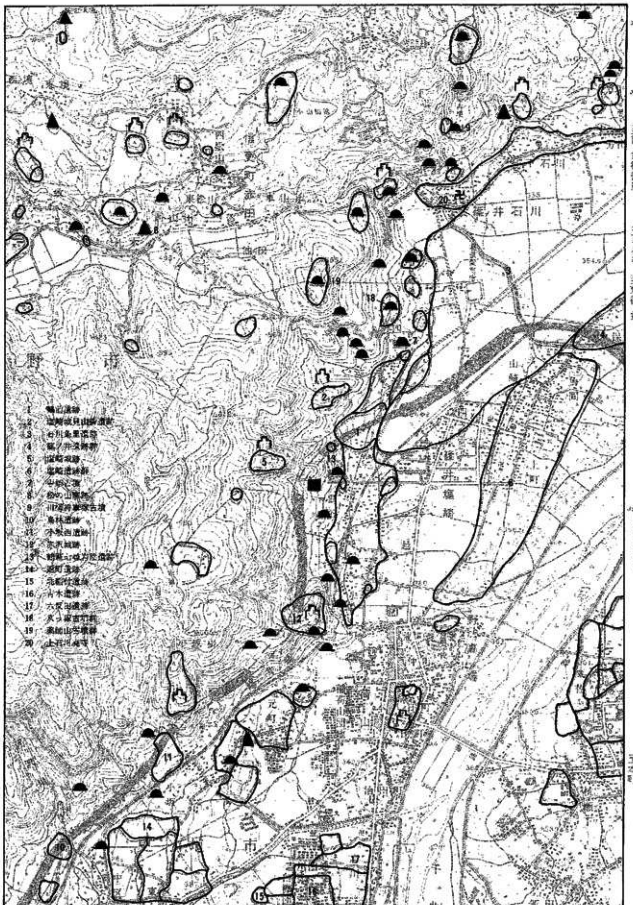
鶴前遺跡は、長野県内の主要都市長野市と松本市を結ぶJR篠ノ井線稲荷山駅の西南1.2kmに位置する。遺跡に立つと、遠く長野盆地の南部を一望することができ、また東側の眼下には肥沃な塩崎地区の水田地帯と、緩やかに蛇行して流れ日本海に向かって北上する千曲川を望むことができる。背後には聖山から東に向かって延びる篠山がそそり立っており、西方への視界を妨げている。現在ではすでに長野県の南北を結ぶ交通の大動脈長野自動車道が開通して、調査地点は大きく開削されトンネルの出口となっており、もとの地形をうかがうことはできない。

周辺の地形及び地質・歴史的環境については、『県埋文センター報告書16（長野更埴その1）』で詳細にふれているため、ここでは簡単に述べておきたい。

長野盆地西南部は、山地を除くと大きく山麓部と盆地部に分けることが可能である（第4図）。山麓部は聖川をはじめとするいくつかの小河川が北東流し、規模の異なる扇状地群や地すべり性の崖錐地形を形成している。その東にのびる崖錐地形の小規模な丘陵の標高380mほどの緩斜面に、遺跡は位置する。眼下に広がる水田地帯（沖積地）との比高差は30mほどで、高速道路建設までは畑地・果樹園として利用されていた。周辺にはこのような沖積地に延びる小規模な丘陵がいくつかみられ、遺跡の存在が知られている（第5図）。特に中郷神社古墳（前方後円墳）をはじめとして、横穴式石室をもつ円墳など古墳が数多くみられる。やや離れるが長野県最大の前方後円墳、川柳将軍塚も同様な立地である。また中世には塩崎城・赤沢城など山城も構築される。盆地部は



第4図　周辺地域地形区分



第５図　周辺遺跡分布図（１：25,000）

谷底平野でそのほとんどを占める千曲川の氾濫原は、自然堤防と旧河道の砂地や中州の微高地と、旧河道や後背湿地より構成される。自然堤防上には塩崎遺跡群・篠ノ井遺跡群が展開し、近年の調査により弥生時代から平安時代・中世の継続的な拠点的集落であることが明らかになっている。また後背湿地には、石川条里遺跡が展開しており、県埋文センターの長野自動車道建設に先立つ調査により、弥生時代から中世にわたる水田遺構が検出された。伴出した多量の木製品とともに、現在整理作業が進められており、その成果の公表は長野県内の水田・木器の研究を大きく前進させるものと期待されている。

近世には、自然堤防上の稲荷山・塩崎が信濃を南北に横断する交通の大動脈北国西街道沿いの中心的集落として栄えた。特に稲荷山は善光寺平でも指折りの商業の中心地として著名である。しかし近代になり、鉄道が開通し、篠ノ井線と信越本線の接続する篠ノ井が流通の拠点として重要な位置を占めるようになり、経済的な中心地としてその地位を奪うことになる。近年は、住宅地としての開発も進み長野市のベットタウン化が著しい。現在、高速道路や新幹線をはじめとした高速交通網の整備が進められており、長野市南部も今後大きな変貌を遂げることが予想される。

2　基本層序（第6図）

予備調査の段階でトレンチ及びテストピットを掘削し土層を観察した結果、大別して下記の様に基本層序として位置づけた。

Ⅰ層…現耕土層。

Ⅱ層…褐色土　粘土混細粒砂層。一部で、下層内に凝灰岩の細風化礫がまじり込む。

Ⅲ層…黒色～黒褐色土。広範囲の時期にわたる土器を含む包含層。

Ⅳ層…黄褐色土　凝灰岩礫層。褐花凝灰岩等の崖錐性堆積。この層の上面を遺構検出面とする。

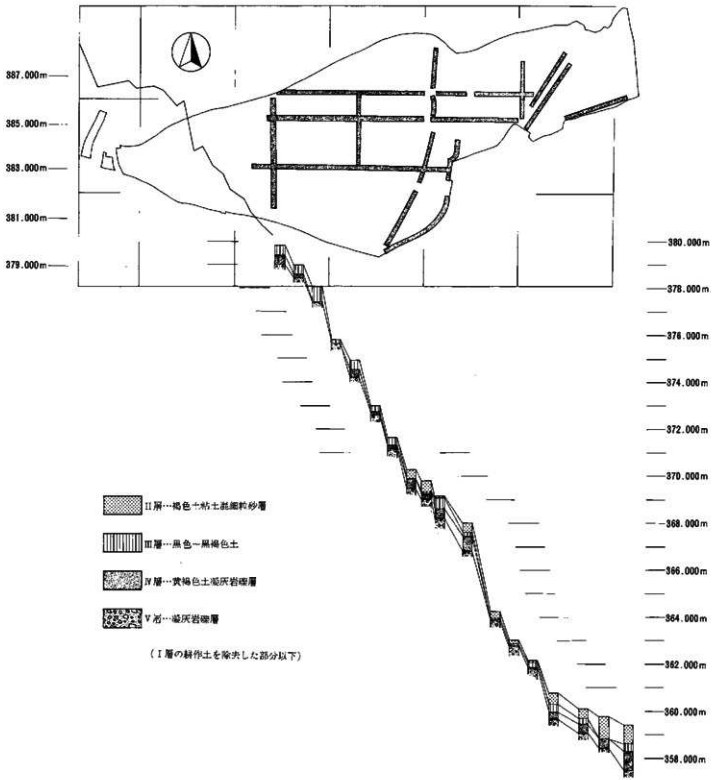
Ⅴ層…凝灰岩礫層。

主要土層の観察であるが、Ⅱ層は調査区域内の西側においては確認できず、北東側に集中する点から、流れ込みにより生成された可能性が高い。

Ⅲ層については、その堆積過程で数軒の竪穴住居址が構築されているとの所見が得られている。遺構の大半はⅣ層を掘り込んでいる状況は確かであり、Ⅲ層を基調とした土が埋土となっていることは断定できる。このため二時期あるいは徐々に堆積したと思われる。埋土はⅢ層を基調とした土が不純物の割合や堆積状況を異にして混入しあっている。その堆積時期の単位は大まかな分層として可能かどうかであろう。Ⅲ層の黒褐色土については、黒色の程度からいえば、立派な黒ボク土と言えるが比重が重いように感じること、大きい石英の結晶が認められる点に疑問が残る。しかしこのことは活性アルミニュウムテストをすればわかる。黒ボク土は、ほとんどの場合、このテストで赤変する。

$>Al-OH+NaF \rightarrow >Al-F+OH^{-}Na^{-}$

日本に観られる特徴的な黒色の土は、ほとんどが黒ボク土と言われている。その成因は、5000～6000年以前に降下した火山噴出物（スコヤリ、パミス、火山灰など）が堆積、風化し、土壌化したものが大部分である。鶴前遺跡の黒色土の成因は、火山噴火物によるものではなく、基盤岩である凝灰岩が風化、土壌化して、その内の多くが後に二次堆積して現状のようになったと考えるのが自然である。



第6図　トレンチ配置図及び地層図

第2節　遺跡の概観

遺跡の立地は、前節で述べたように緩やかな傾斜地であるため、Ⅱ層が形成されるように土砂の供給もなされたが、それ以上に小規模な流出が長期間継続的に続いたと考えられる。また、近代になると畑地・果樹園とするための小規模な造成が何回となく行われている。これらの理由のため、平均地表下50cmという浅い面で検出される遺構の残存状況は極めて悪い。この傾向は西側の傾斜の急な部分で顕著であり、遺構の上面は削平され浅くなっており、竪穴住居址の片側の壁が失われてしまった例も多くみられる。当然、平地式あるいは盛り土をしてつくられた生活の痕跡は、「遺構」として検出することはむずかしく、浅い掘り込みの痕跡も同様と考えられる。今回調査の対象となった遺構は、比較的深く掘られた生活の痕跡といえる。しかし遺構の認識がこのようになった原因としては、前述した自然的及び後世の人為的要因以外に、調査技術上の問題点もあげなければならない。それは、包含層としたⅢ層から掘り込まれた遺構の存在は調査中も予想されたが、遺構埋土がⅢ層をベースとしているため識別が困難で、Ⅳ層まで検出面を下げざるをえなかったことである。そのため、結果的にⅣ層まで掘り込まない生活の痕跡は、遺構として認識できなかったことになる。

遺跡の内容としては、従来弥生時代後期～古墳時代前期、奈良・平安時代の集落として調査概要を公表してきたが、出土遺物をみる限り旧石器時代から近世まで途切れない生活の痕跡を見いだすことができる。しかし遺構・遺物の質・量から考えられる人間行動の様式は、移動の際の短期間の居住から、長期にわたる居住まで様々の想定が可能で、特に後者の場合には、今回の調査範囲内の全域を一律に居住域に利用するのではなく、大きく場所を変えているのも特徴である。

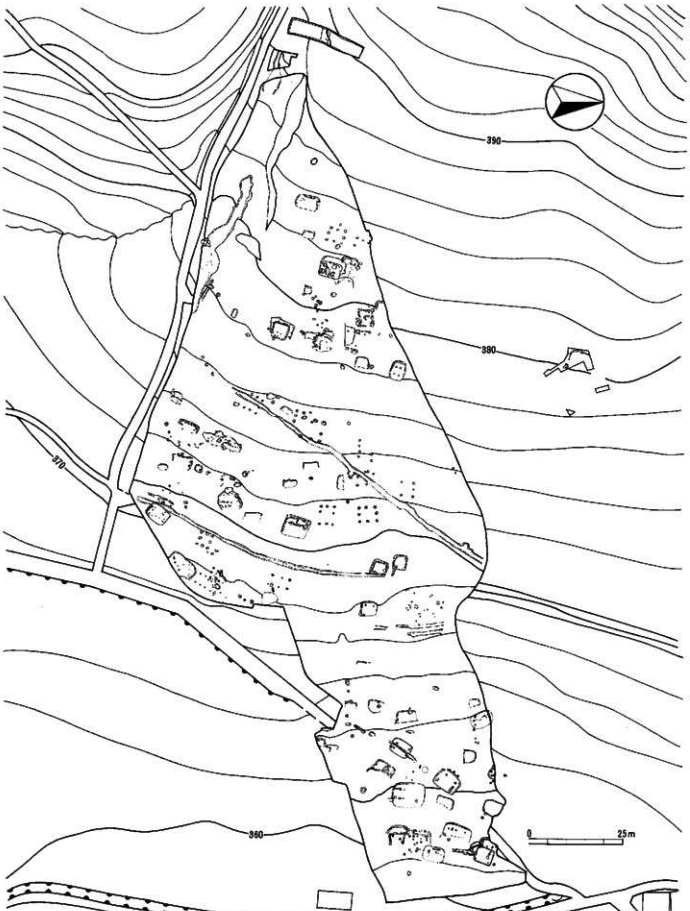
調査した遺構の全容は第7～11図に示す通りであり、時期的に大きな幅をもっているため、当然各時期の遺構量は少なくなる。次章以降で、各時代ごとに遺構・遺物について詳しくふれるわけであるが、簡単に概要を述べておきたい。

旧石器時代は遺構が認められず、石器の出土のみである。縄文時代は、早期・前期・中期・晩期と生活の痕跡がみられるが、遺物のみの検出という時期も多く、遺構の検出は、住居址が1軒程度と小規模である。しかし善光寺平では、従来縄文時代の調査例は少なく、今回の調査で得られた資料は貴重である。

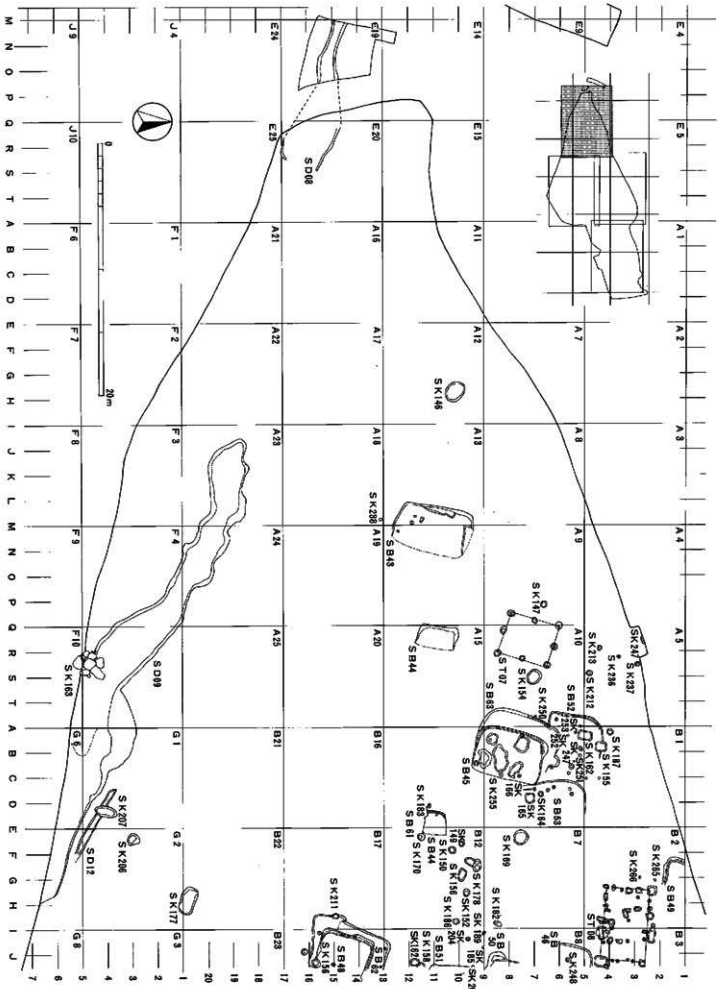
この地が本格的に居住域として利用されるのは、弥生時代後期からで、それは古墳時代前期まで継続するが、立地は大きく替えられている。眼下の水田地帯（石川条里遺跡）も該期にいたり本格的に形成されてきたことが近年明らかになってきており、両者の関係が注目される。また遺物については、古墳時代前期の北陸系土器の占める割合の多さは注目され、該期の土器様式の成立を考える上で好資料を提供することになるであろう。しかし、このような集落も姿を消し、再び居住域としては利用されなくなる。ただし古墳時代中期に、石川条里遺跡の水田地帯との境で土器の集中箇所がみられ、水田祭祀と関係した遺構として無視できない。

次に居住域として利用され始めるのは奈良時代になってからである。西側の傾斜のきつい部分に竪穴住居址・掘立柱建物址等で構成される小規模な集落が想定できる。しかし短時間で廃絶してしまい、若干の空白をおいて再び9世紀後半に竪穴住居址を主体とする集落が形成される。この段階は1世紀ほど継続しているが、塩崎遺跡群にみられるような大規模な集落には発展しない。

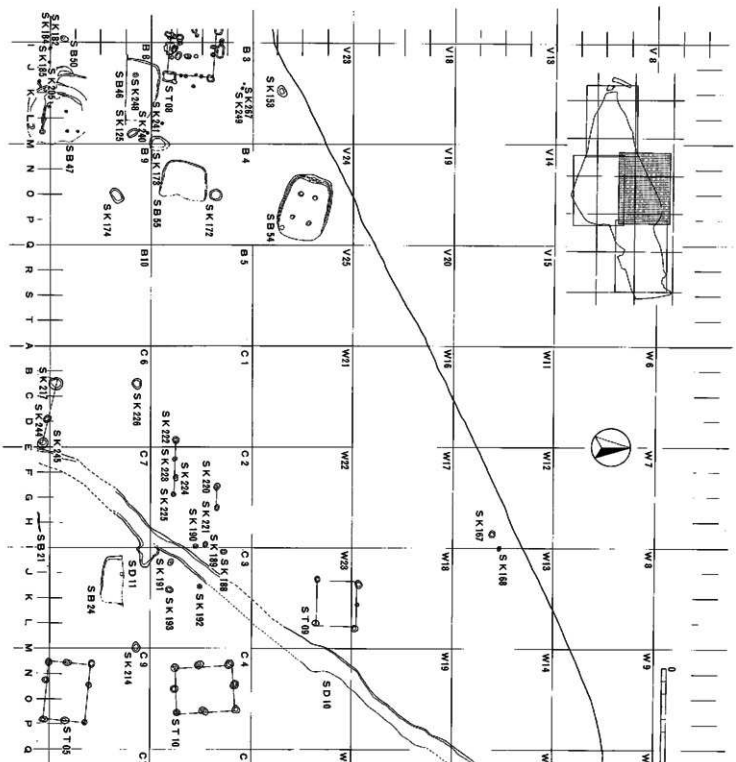
次に若干の空白期間をおいた後、中世に掘立柱建物が散在する集落が形成され、墓地としても利用され、近世になると居住域とはならず、果樹園・畑地等として利用され現在に至ったと考えられる。



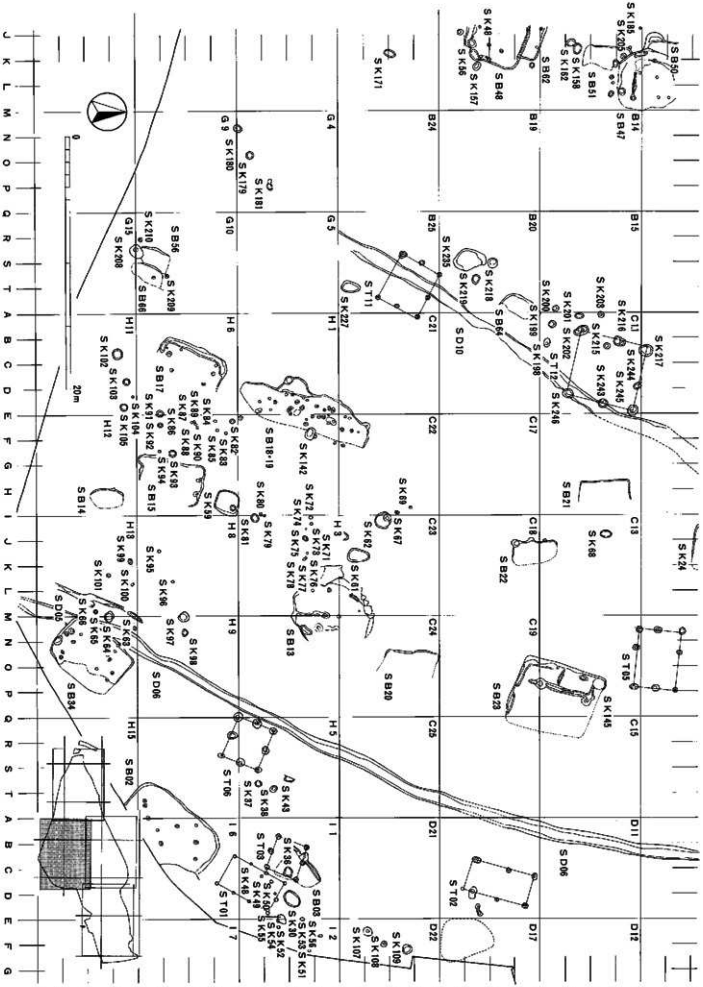
第７図　遺構全体図（１：1000）



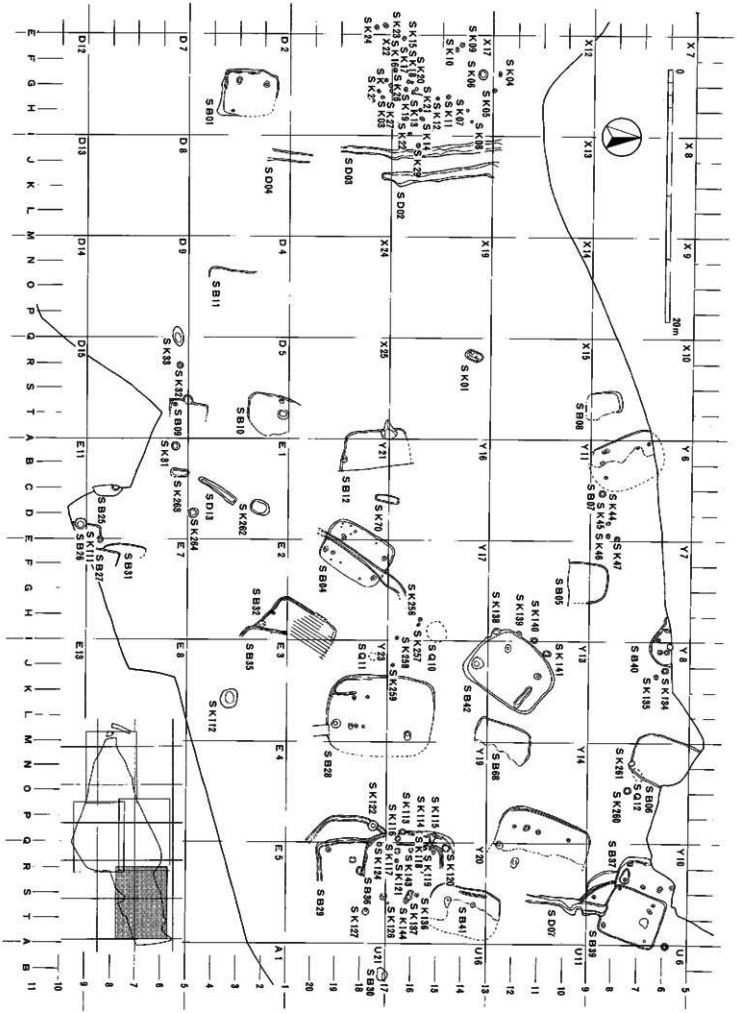
第8図　遺構分布図1（1：300）



第9図　遺構分布図2（1：300）



第10図　遺構分布図３（１：300）



第11図　遺構分布図４（１：300）

第3章　遺構と遺物

第1節　旧石器時代

(1) 遺　物

縄文時代以前に属する遺構は、調査区内において確認されていない。しかし、調査区内最上部北東側（グリッドⅣB－2）の皿層中よりナイフ形石器（第12図）が1点出土した。素材は黒曜石で、幅広の横長剥片を使用している。外見は縦長状の剥片を利用しているようであるが、裏面（腹面）を観察すると表面からの剥離が切っており、二次的に表面を剥離し縦長状に整えたと考えられる。調整は、上端に裏面側が刃つぶし（ブランティング）により打面の除去、下端は切断後の調整、側面部は細かな刃つぶし加工をする。その結果、二側辺加工のナイフ形石器となる。

ナイフ形石器は、善光寺平において出土例は少なく、長野市塩崎城見山砦遺跡〔長野県埋文センター；1994〕出土例と比較すると、時期的に先行する可能性がある。

第12図　旧石器時代石器実測図（1：2）

なお、素材が頁岩製の槍先形尖頭器が耕作土中から1点採集されている（PL.18左端下）。時期的には縄文時代草創期の可能性がある。

第2節　縄文時代～弥生時代中期初頭

概　観

ここでは、便宜的に弥生時代中期初頭を含めて記述する。

遺物量に多少はあるが、早期押型文期から弥生時代中期初頭までみられる。それに対し、遺構は調査区西部にわずかに竪穴住居址2軒と土坑3基が点在してみられる程度である。時期的には、遺物が数点あるいは遺構が土坑1基という時期もあり、今回調査した部分は、長期的に継続した居住地としてではなく、一貫して一時的な生活の場として利用されたことを物語っていると思われる（第13図）。

時期的にその特徴をみると、早期は遺物がみられるのみ、前期前半は竪穴住居址が1軒、中期中葉に土坑1基、中期後半・後期前半は遺物のみである。従来善光寺平の該期の遺跡は、今回のように小丘陵上へ立地するのが一般的であり、小規模な集落がほとんどであるとされてきた。しかし、近年県埋文センターが調査した自然堤防上の石川条里遺跡、松原遺跡、屋代遺跡等で、地表下5mの部分から規模の大きな拠点的な集落遺跡が発見されている。今後それらの整理作業が進む中で、今回提示する少量の資料も生かされ、縄文時代の「鵜萢遺跡」の性格にも評価が下されるであろう。晩期末から弥生時代中期初頭は、竪穴住居址1軒と土坑1基、遺物は比較的まとまった量が出土している。該期は、遺物のみの出土が多く集落の性格がはっきりしない場合が多く、貧弱な資料ではあるが貴重な蓄積となろう。

そこで以下では、時期ごとに遺構の事実記載と、遺物については詳細な説明をしていくにとどめる。な

お、SD09の遺構説明については、第5節でおこなう。

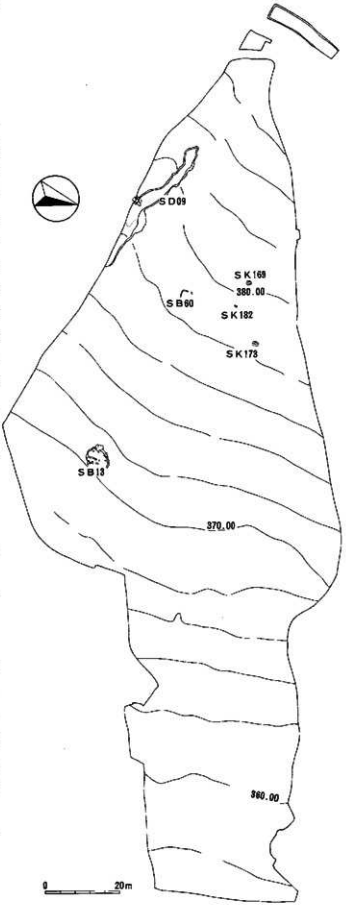
1　縄文時代早期

(1)　遺構外出土遺物（第14図）

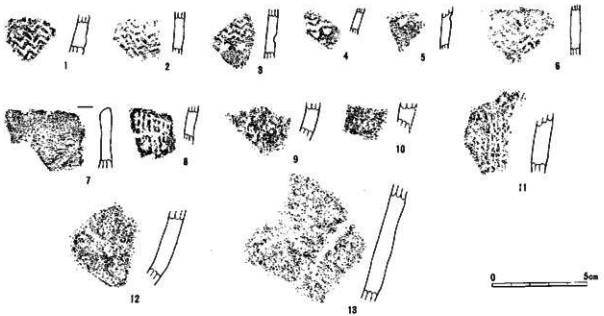
1・2は横方向の山形文で、1は原体の長さが2cm以上になると思われるが、ともに帯状施文か密接施文かは判断できない。3・4は横方向に山形文が帯状施文され、無文帯には原体で下方向からの刺突がされる。5は無文部に刺突がある。4・5は胎土・色調・刺突の施文具から同一個体であろう。3～5の類例は諏訪市經久保〔松沢；1957〕・北相木村栃原岩陰〔北相木村教委；1984〕・和田村男女倉各遺跡〔和田村教委；1975他〕などにみられる。大川式との関連を指摘される資料であるが、押型文土器型式全体のクロスデイティングを考慮すると、その影響関係については慎重な態度を取るべきであろう。所謂「經久保式」に相当する。6は横方向の山形文であるが、1・2に比べ、山形文がやや大ぶりであり、原体は2.8cm以上になろう。1～6の押型文土器は全体的に色調が赤褐色、焼成は良好、堅緻である。7は無文で、1～6に胎土が類似しており、1～6に伴うものであろう。

8～13は早期後半～末葉と思われ、摩耗が著しい。8・9・11～13は外面に櫛状工具による条痕が施され、内面は無文でナデ調整される。8・11は少量の、9・12・13は多量に繊維を含み、ともに黄褐色を呈し、胎土、調整も類似しており、同一個体であろう。10は摩耗が著しいが、僅かに横方向に施文された絡条体圧痕が確認される。おそらく0段の撚紐を細い棒状軸に巻き上げた絡条体であろう。節と節の間隔が節一つ分ほど開き、内面は無文でナデ調整がなされる。色調は褐色で、胎土に繊維を多量に含む。

1・6・12がSK182、2はSB12、4・5・7・8はSB13から出土したが、遺構の時期とは明らかに異なり、混入と思われる。他は、包



第13図　縄文時代遺構全体図（1：1000）



第14図　縄文時代早期上器拓影（1：2）

含層の出土である。

2　縄文時代前期

(1)　遺構と遺物

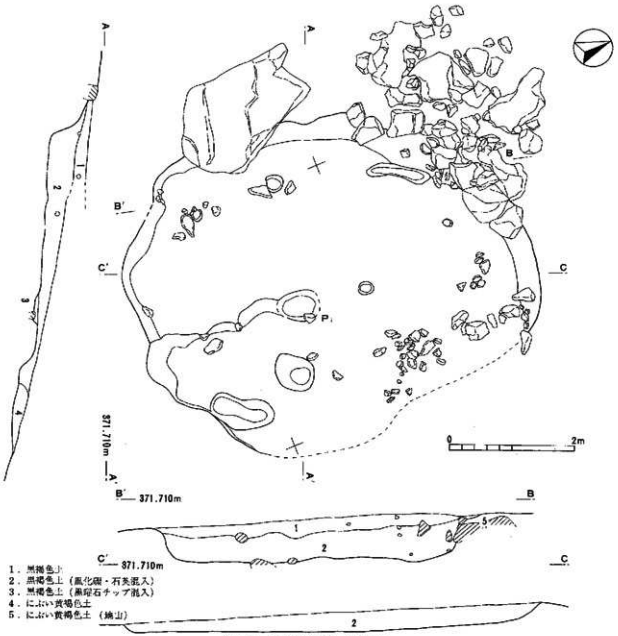
竪穴住居址

SB13（グリッドⅣC－23・24，ⅣH－3・4）〔第15～17図　PL.4・10・13〕

遺構：調査区中央域内の南寄りに位置し、東壁が失なわれている。現状より、南北6.66m、東西5.60mの楕円形と推定される。壁は、西壁のみ明瞭でやや急に立ち上がり、壁高約60cmを測る。他の壁は、東にいくに従い高さを減じ、東壁はみられなくなる。また西壁から北壁沿いにかけては、地山（Ⅳ層）の凝灰岩巨礫が露出しており、岩壁の観がある。床は、西半部はⅣ層を掘込み整地し平坦面とし、東半部はⅣ層上に鈍い黄褐色土が部分的に堆積し安定した床面とはいえない。施設としては、西壁沿いに長さ約1m、深さ10cm弱の溝が設けられ、炉跡は中央部のP_1がその位置と形状より地床炉の可能性があるが、焼土・炭化物は認められていない。柱穴は、炉跡と考えられる以外のピットと思われるが、位置が不規則であり、上屋構造を判断する材料に乏しい。

出土遺物：土器（第16図）――1を除いて縄文のみを施文した土器である。1はやや肥厚気味の口縁端部に横方向に爪形文が刺突され、胴部には0段多条の縄文RLとLRが施文される。2～4・8～25・27～32・41はいずれも単節縄文の土器で、この多くは縄文RLとLRの羽状構成になると考えられる。4・8は同一個体で、口縁端部直下よりやや崩れた羽状縄文が全面にある。19・21・22・25・27・28も同様であろう。23・24は胴部破片で、菱形構成の羽状縄文である。2・11・13・16・29・30は縄文RLを、9・10・12・17・20・31・32は、縄文LRを施文する。これらのうち2・20は斜状構成になると思われる。また16・20・31は0段多条の単節縄文であろう。17・20・23～25・31・41にはループ文が観察され、31・41には、足の短いループ文が重ねて施文される。41は底部の破片でありやや上げ底気味となる。5～7は同一個体で、複節縄文LRLを、26・33は不鮮明であるが附加条の縄文であろう。34～38はRとLを組み合わせた撚糸文、39・40は束の縄文を施文する。なお、5～7・23・24は胎土に繊維の混入が認められる。

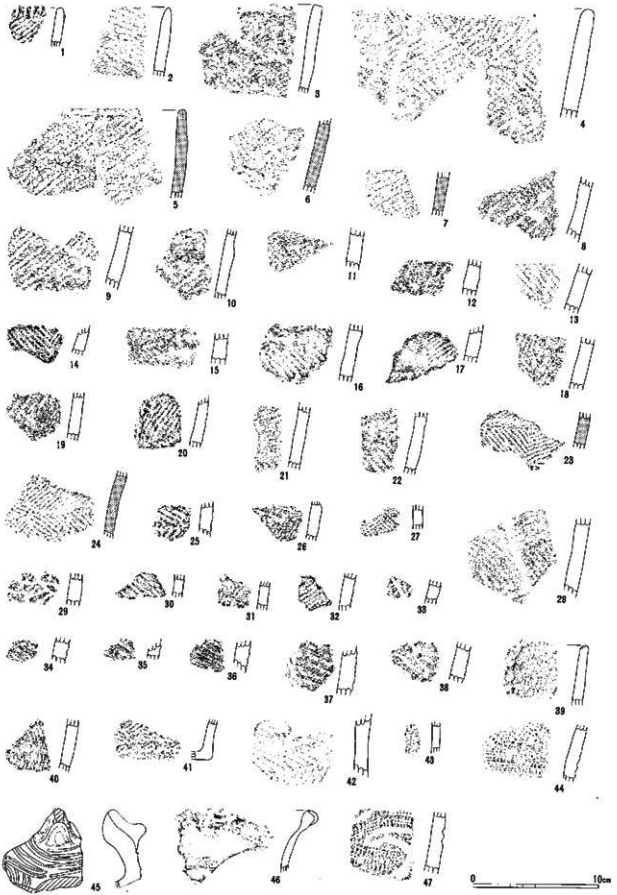
施文された文様の特徴から、34～38は前期初頭に、1・5～7・17・20・23～26・31・33・39～41は前



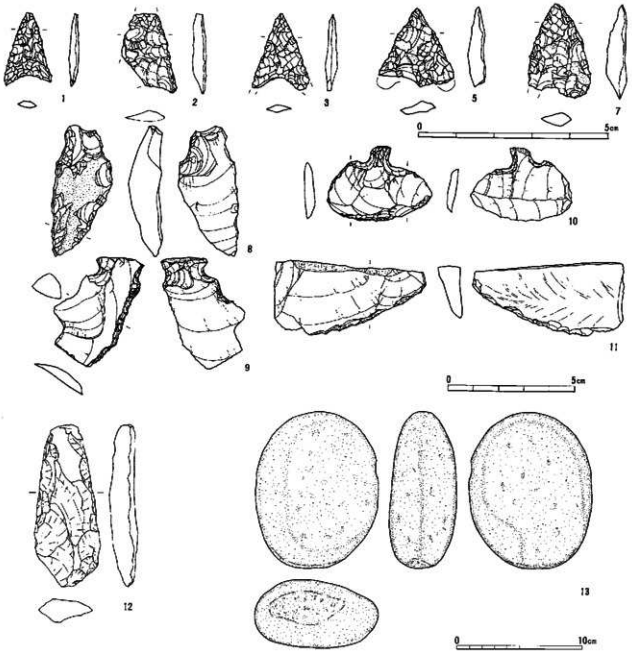
第15図　SB13実測図（1：60）

期中葉に位置付けられる。また、縄文のみの土器は、そのほとんどが後者に属す事が考えられよう。

石器（第17図　PL.13）――1～4は凹基無茎式鏃である。1・2は茎部のえぐりが浅い例で、3・4は若干深い例である。いずれも側辺が直線的で、先端および脚部末端部を欠く。5～7は石鏃の未製品と考えられる資料で、調整剥離が粗雑で、厚さにして0.3～0.4㎜ほど他より大きい。基部の作出開始後に欠損した例と思われる。予想される形態は、いずれも凹基無茎式である。1～7はすべて黒曜石製。8～10は石匙である。8・9が縦型に、10が横形に相当する。刃付けはいずれも片刃で、10は外湾刃を呈する。8が黒曜石、9は頁岩、10がガラス質安山岩製である。11は刃器（削器）である。刃部は外湾刃の両刃。頁岩製。12は撥形の打製石斧。刃部平面形は尖刃を呈し、先端には使用による摩耗・線状痕が観察できる。粘板岩製である。13は擦石（磨石）である。側面上部に敲打痕をとどめ、片面のみ摩耗する。安山岩製。



第16図　縄文時代前期土器実測図及び拓影（1：3）



第17図　SB13出土石器実測図

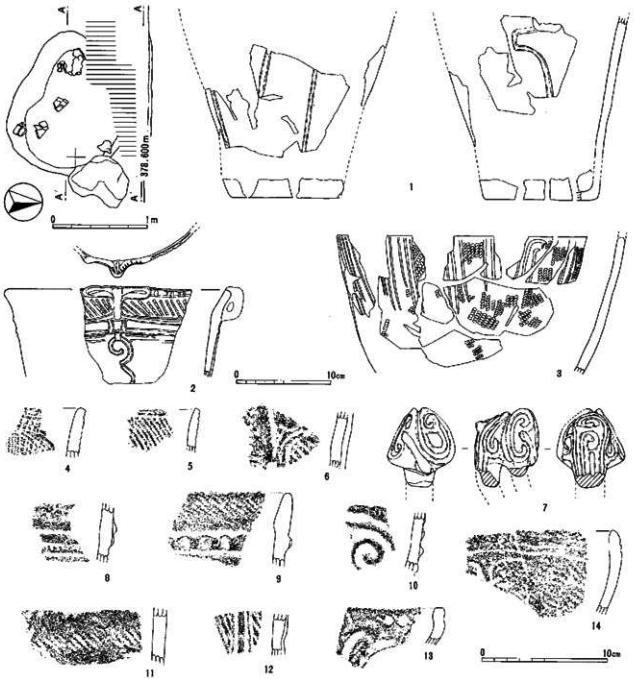
(2)　遺構外出土遺物（第16図）

42は、縄文RL・LRが羽状構成に施文され、内面はナデ整形が行われ、色調は茶褐色を呈する。43は組紐を施文する。42は縄文前期中葉、43は関山II式であるが、いずれも胎土に繊維は含まない。44は低い隆帯上に爪形文が、45は沈線文によって文様が描かれており、口縁部の波頂部に獣面把手が付けられる。ともに諸磯b式である。47は刺突文上に太い沈線で文様が描かれており、縄文前期末葉に位置付けられよう。

3　縄文時代中期

(1)　遺構と遺物

土坑



第18図　SK173実測図及び縄文時代中期土器実測図・拓影

SK173（グリッドⅣB－3・4）（第18図　PL.4・11）

遺構：調査区西地域内の北東寄りに位置する。重複関係はないが、遺構北東側の一部が後世の撹乱により削平されている。平面形は南北に長軸をもつやや不整な南北1.53m、東西は現状の最大幅1.20mを測る楕円形と思われる。南東隅側は凝灰岩巨礫が接し壁面の一部をなし、深さは検出面より4cm程度と浅く、底面は平坦でなだらかに立ち上がる。他に、同時期に属する遺構は認められない。

出土遺物：縄文時代中期中葉の土器3点が伴出している。1は体部に4単位の懸垂文を配する。色調はやや赤みがかった褐色を呈し、混和材には白色粒子を多量に含んでいる。勝坂Ⅰ式（狢沢式）の可能性が高い。2は口縁部文様帯に角押文、頸部に隅の狭い区画文、口唇部には後退した交互刺突文をもつ。色調は褐色～暗褐色で、雲母を多く含んでいる。勝坂Ⅰ式（狢沢式）の古い段階に比定される。3は、地文に

LR縄文が施され、半截竹管による縦位の装飾がみられ、一部は「B」字状に分化している。色調は、にぶい黄褐色～にぶい黄橙色を呈しており、他の2個体とは大きく異なっている。北陸新崎式の系統を引く土器である。

(2)　**遺構外出土遺物**（第18図、PL. 11）

4・6は半截竹管による格子目文が崩れた土器で、中期初頭（五領ヶ台式土器併行期）に属する。4は表面が黄灰色、裏面はにぶい黄褐色、6は赤褐色から暗褐色を呈する。5は半截竹管による斜行する集合沈線文が施され、色調はにぶい赤褐色である。中期前葉あるいは中葉の斜行沈線文土器の可能性がある。8は半截竹管のハラによって整形された隆線と平行沈線文が横方向に重なり、隆線下には連続刺突文がみられ、色調は赤褐色～暗褐色を呈する。仮称“深沢式土器”（高橋：1989）である。9はLR縄文を地文に、連鎖状隆線が施されている。中期中葉あるいは後葉の可能性がある。11は横方向に帯状のLR縄文がみられ、12は平行沈線の沿う隆線が縦位に配され、空間は斜行する平行沈線で充塡される。7は中期後葉、唐草文系土器の把手、10は低い隆線による渦巻文がみられ、色調は褐色を呈する。13・14にはLR縄文が施され、沈線による装飾がみられる。13はにぶい褐色、14はにぶい黄褐色を呈する。いずれも加曽利E式後半である。

4　縄文時代後期

(1)　**遺構外出土遺物**（第22図、PL. 12）

1は棒状工具により右下から左上の方向に多条の沈線が施され、内面は横方向にナデられ、色調は赤褐色を呈する。後期初頭か前半の土器であろう。2は口唇部に棒状工具により1条の沈線が施される。堀之内I式に併行する土器であろうか。3は波状口縁を呈し、縦方向にRLRの複節縄文が施され、沈線内に棒状工具による連続刺突をもつ2条の沈線により磨消される。2条の沈線区画の外に僅かながらも斜方向の沈線が確認される。磨消縄文はおそらく所謂逆J字文か渦巻文になろう。内面は内そぎ状になり、波頂部は肥厚する。称名寺式併行に相当しよう。

4は板状土偶で幅3.8cm、厚さ1.2～8.9cm、正面には乳房状の突起をもち、正中線や両脇に沿って、また裏面は円形二重の沈線文が施される。胎土には、1～2mm大の石英が目立つ。棒状工具の施文具、板状の形態等から後期初頭から前半に比定される。

5　縄文時代晩期終末～弥生時代中期初頭

(1)　**遺構と遺物**

竪穴住居址

SB60（グリッドⅣB－17・18）（第19・20図　PL. 11・13）

遺構：西側地域内の東寄り中央に位置する。北東側をSB48とSB62及びSK156により切り込まれ、また西壁の一部はSK211にきられる。従って大半は失われており、平面形状は東西3.94m・北東2.40mの長方形と想像されるが、はっきりしない。壁は緩やかに立ち上がり、壁高は約12cmを測る。床は、Ⅳ層を掘りくぼめ平坦に整地したと思われるが、残存状態は概めて悪く貼床は認められない。柱穴は検出されていないが、南壁面側にピット1基がある。炉址は不明である。

出土遺物：土器――すべて浮線文系土器である。第19図1は浅鉢と思われ、2・3・7・8は甕、4は鉢あるいは深鉢、6は壺、5は不明である。甕の口縁には隆線手法を残し（2・3）、体部破片には細密条痕をもちいるが、肩部の張りははっきりしない。壺（6）は頸部に沈線が三条入れられる。全体として

一括性のある資料であり、浅鉢が不明瞭、細密条痕を施す深鉢の消失、甕にみられる隆線手法の残存といった点から氷Ⅰ式段階後半に属する。

石器（第20図左上・下）――1は基部を欠損した石鏃である。残存部から判断すると凹基無茎式鏃と考えられる。2は砕片を利用した刃器である。急斜度な剥離によって刃部を作出した例で、形態的には直線刃・片刃の削器である。1・2ともに黒曜石製。

3は横長の剥片で、チャート製1～3の他、黒曜石の石屑が少量出土している。

土坑

SK169（グリッドⅣB－7）

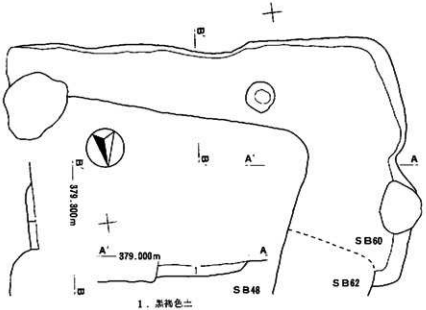
（第20・21図　PL.4・12・13）

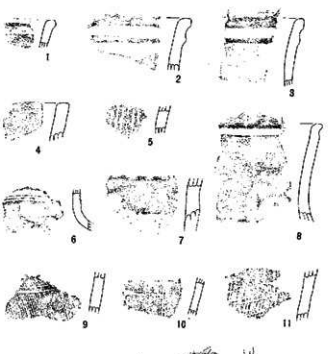
遺構：調査区西側地域内の中央に位置する。Ⅳ層上面において黒褐色土を埋土として検出した。平面形は、直径1.12mのやや不整な円形である。深さは30cmで、底面は平坦で壁は垂直に近い角度で立ち上がる。

出土遺物：土器　―大きく浮線文系（1～8）と条痕文系（9・10）に分けられる。前者はすべて深鉢あるいは甕で、口縁部に隆線手法を残す例（5）と無文の例がある。2は肩部の隆線帯の可能性があり、7・8は体部下半で細密条痕がみられる。

一括性のある資料で、SB60と同時期と考えられ、氷Ⅰ式段階後半に位置づけられる。

石器（第20図右上・下）――1は剥片を利用した刃器である。急斜度な剥離によって作出された内湾刃（抉入刃）の片刃。黒曜石製。2は粘板岩製の剥片である。打製石斧あるいは大形刃器に関連する破片資料の可能性がある。





第19図　SB60実測図及び出土土器拓影

(2)　遺構外出土遺物（第22・23図）

調査区全体より出土しているが、ここで取り上げる遺物のほとんどはSD09より出土で、旧期の遺構が重複していた可能性がある。

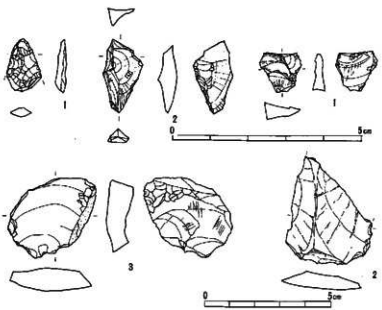
縄文時代晩期土器（第22・23図）――第22図５～７・12、第23図14・17は、口縁部に粗大な貼付突帯をもつ広口の壺と思われる。口唇部と降帯上には指頭によるらしい圧痕が施され、肩部にも隆帯がつくかもしれない。浮線文系土器と同一の成形・調整で、条痕文系壺の強い影響下に在地で成立した可能性が高く、類例は茅野市御社宮司遺跡〔長野県教委；1982〕をはじめとして県内に散見される。

第22図８・19～37・39、第23図19は、浮線文系の浅鉢あるいは鉢である。大きく網状施文（第22図８・19・20～26・29・34・36、第23図19）や工字文（第22図21）施文の有文の一群と無文の一群に分けられる。前者は頸部無文帯が発達し、肩部に稜をもつ氷Ⅰ式段階の典型例がほとんどである。後者には同例がある（第22図32・39）。

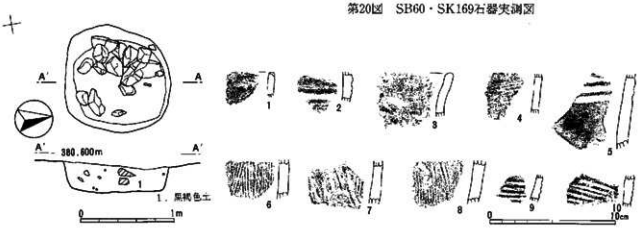
第22図９・13～18・38・40～58、第23図１～12・15・20・25～37・53は、浮線文系の甕である。口縁部に隆線帯（第22図14・16～18・41～50・58）あるいは沈線帯（第22図９・51～56）をもつ一群と、無文（第22図38・40、第23図４～12・15・20）の一群に分けることが可能である。肩部の稜は成形により明瞭に作り出しており（第23図27）、稜以上はナデ、以下は細密条痕（第23図25～37）で、稲妻状構図の可能性もある。風化が進み器面調整が不明の沈線帯の一群は後出的要素ではあるが、隆線帯の一群との時間差と考えて良いかは不明である。53は甕あるいは深鉢の底部で網代圧痕が見られる。

第22図21・22は肩部に沈線帯をもつ壺であるが、遠賀川系土器との関わりは不明である。23・24は小型で有文の器高の低い壺で、鉢にも分類できる。女鳥羽川・薙川・氷Ⅰ式段階といった系譜の精製土器とは別系統の浮線文系精製土器と思われる。口縁部に突起を中心とした隆線文、体部に渦文、肩部には工字文系の構図が用いられている可能性が高い。

第22図10は有文浅鉢であるが編年的位置づけははっきりしない。11は浮線文系浅鉢で縄文後期の可能性もある。第23図13は条痕文系か浮線文系かはっきりしないが甕である。16は浮線文系の甕で、隆帯貼付けという類例のない手法が用いられる。18は内面に沈線文があり、条痕文

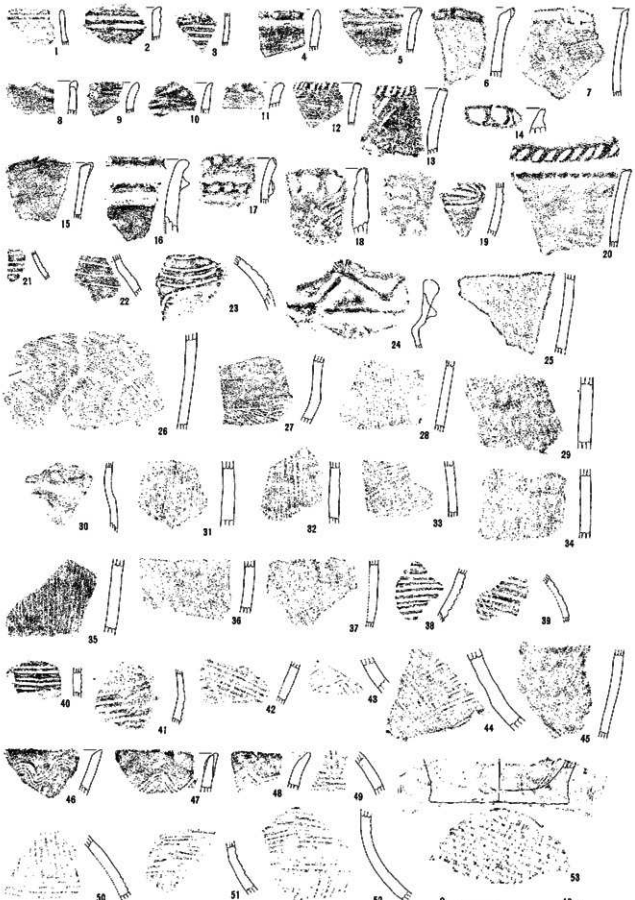


第20図　SB60・SK169石器実測図



第21図　SK169実測図及び出土土器拓影

第22図　縄文時代後期～晩期土器拓影及び土偶実測図



第23図　縄文時代晩期～弥生時代中期土器拓影（１：３）

系の壺あるいは甕である。

全体としては、氷Ⅰ式段階で、前段階の女鳥羽川・離山段階と後出の氷Ⅱ式・刈谷原・柳坪段階はみられない。器種に占める浅鉢の比率が高いことは、氷Ⅰ式段階の前半とも後半ともいえるが、有文浅鉢はすべて設楽分類〔設楽；1982〕のBタイプであることおよび深鉢が欠落することからすれば、氷Ⅰ式段階の後半に位置するといえようか。いずれにしても量的には少ないが良好な一群である。

弥生時代中期土器（第23図）―　42～45は縦位羽状条痕の壺であり、水神平～岩滑段階と思われるが、搬入品かどうかは不明である。46～48は櫛描波状文をもつ壺の可能性が高く、条痕文系ならば42～45と同時期となろう。49はヘラ描沈線、ヘラを用いた条痕の壺で、庄の畑式の典型例である。

全体として、庄の畑・岩滑式期に帰属しよう。

石器（第24図　PL.14～16）――1～7は石核である。打面は4のみが剥離面で、他は自然面ないし摂離面である。打面の転移はほとんど行われず、作業面に認められる剥離面数も1～2枚程度である。1・2・4が黒曜石。3は鉄石英、5～7はメノウである。8～11両面剥離痕がある剥片である。はさみ打ちの痕跡は上下縁部に観察でき、その状態が線状を呈する組み合せ例（9・10）と、面そして線状による例（8）、線と点状をとる例（11）に分かれる。形態的には四角形状（8・9）と棒状（10・11）がある。すべて黒曜石製である。12～23は石鏃である。12・13は平基無茎式で、13は先端及び側辺部の加工途上にある未製品である。14～17は凹基無茎式である。15・17は先端と脚部を欠損している。18～23は凹基有茎式で、21以外は先端または茎部のいずれかを欠損している。20は鋸歯状の側辺を呈する。12・14・17・22がチャート、13・16・20が貫岩、15・18・19・21・23が黒曜石製である。

24～35は刃器である。24～26は原石表皮部の残る剥片を利用し、急斜度な調整剥離によって刃部を作出した掻器、27～31・34・35は緩斜度な刃部を作出した削器である。刃部の特徴は27・34・35が直線刃、28が内湾刃（抉入状）である。すべて単刃。29・30は直線刃と内湾刃が平存する複刃である。器種としては34・35が人形の刃器に相当する。32・33は茎部（つまみ部）角度が刃縁に対して30度未満で交わる縦形石匙である。2例とも直線刃の片刃。27～29・32が黒曜石、30・34が貫岩、31がチャート、33はガラス質安山岩、35が粘板岩である。

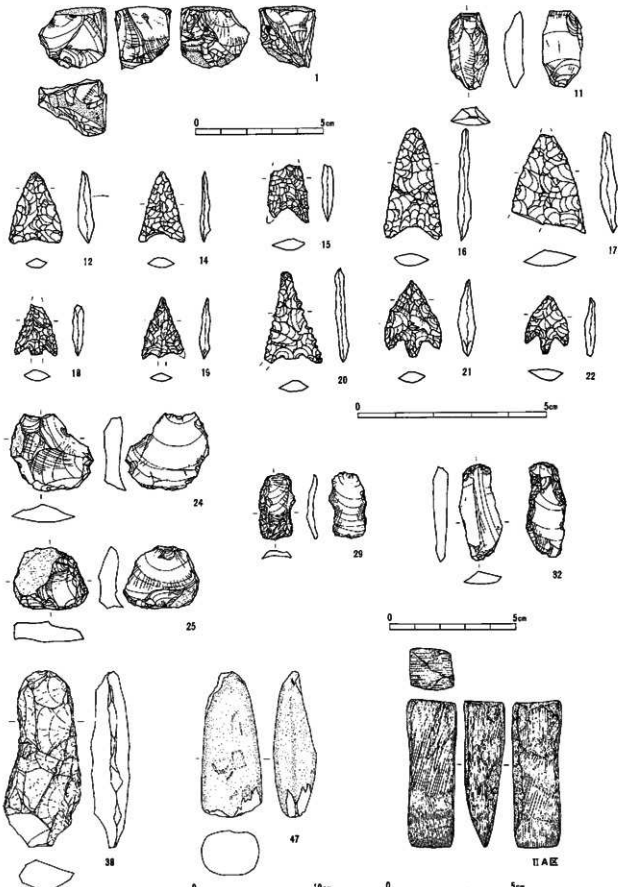
36～44は打製石斧である。36は刃部を欠損するが撥形を呈すると考えられる例で、37・38は一側辺に抉りのある短冊形の変形例である。39・40は頭部のみの例、41～43は刃部のみの欠損例である。44は短剣形を呈し、形態的に異質な例である。石材は36が貫岩、37～43が粘板岩である。

45～48は磨製石斧である。45は刃部が使用の衝撃によってか、極度につぶれた例で、蛇紋岩製。46～48は鈍重で、胴部断面形が円に近い楕円を呈する。また全面に敲打痕を留め、給刃状の刃部のみ良好に研磨している。特徴的な磨製石斧で、後で詳述する。

49～56は擦石〔磨石〕である。49は球状を呈し全面使用された例、50～53は偏平な楕円形で、敲打部（凹部）をもつ例、54は角柱状を呈し、側面部に敲打痕跡を留める例である。石材は51の花崗岩以外、安山岩である。55・56は棒状で一側面を極度に使用したいわゆる特殊磨石である。55は½欠損例で、石材は安山岩。56は凝灰岩製である。57は硬砂岩製の敲石である。

(3)　まとめ

縄文時代晩期は、ほぼ氷Ⅰ式期に限定される。該期の竪穴住居址の例としては、大町市トチガ原〔大町市教委；1980〕・駒ヶ根市荒神沢・茅野市和田遺跡〔茅野市教委；1970〕などがあり、いずれも1軒のみで、小規模で施設も判然としない。本遺跡の例も同様である。一方炉址のみ、柱穴群のみの集落例としては、大町市長畑〔大町市教委；1991〕・茅野市御社宮司遺跡などがある。土坑の発見例は多く、長野盆地では長



第24図　SD09・遺構外出土石器実測図

野市篠ノ井遺跡（体育館地点）〔長野市教委；1990、同；1992〕・更埴市屋代清水遺跡〔更埴市教委；1992〕がある。今回の例のように単独のほか、群在する例としては大町市長畑・塩尻市五輪堂遺跡〔塩尻市教委；1989〕等をあげることができる。以上のように、近年該期の集落の一端が把握される例が急増しており、今回の資料も今後の解明に貴重となろう。

参考文献

大町市教育委員会；1980　「トチガ原遺跡立ち合い調査」『借馬遺跡II』
大町市教育委員会；1991　『長畑・清水氏屋敷跡』
北相木村教育委員会；1984　『勝原岩陰遺跡発掘調査報告書』
更埴市教育委員会；1992　『屋代清水遺跡』
駒ケ根市教育委員会；1979　『荒神沢遺跡』
塩尻市教育委員会；1989　『五輪堂遺跡』
設楽　博己；1982　中部地方における弥生土器の成立過程『信濃』34巻4号
高橋　保；1989　「県内における縄文中期前半の関東・信州系土器」『新潟考古学談話会会報』第4号
茅野市教育委員会；1970　「茅野和田遺跡緊急発掘調査報告書」
長野県教育委員会；1982　「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書――茅野市その5――」
㈶長野県埋蔵文化財センター；1994　「坂崎城見山砦」「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書13」
長野市教育委員会；1990　「篠ノ井遺跡群III」（長野市の埋蔵文化財第37集）
　　1992　「篠ノ井遺跡群(4)」（長野市の埋蔵文化財第46集）
松沢　亜生；1957　「組久保遺跡の押型文土器」『古代』25・26

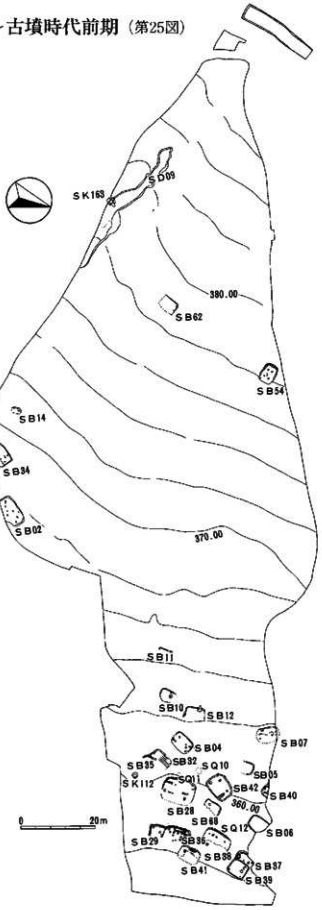
第3節　弥生時代後期～古墳時代前期（第25図）

概　観

本遺跡の弥生時代後期から古墳時代初頭に属する遺構は、竪穴住居24軒、土坑1基、溝1条、土器集中箇所3である。遺跡が斜面に立地しているため竪穴住居の大半は東側を削られて検出され、確認面からの覆土の堆積状況も極めて薄い。遺構内の覆土上層は崖錐地形による土砂の堆積がみられ、凝灰岩の風化礫を多く含んだ黒褐色土が一時的に覆った状況であった。

遺構の分布は、弥生後期中葉の竪穴住居が丘陵中位に点在し、同後期終末の遺構群が丘陵端部に密集していた。後者の竪穴住居は標高364.0m以上には存在していない。遺物は破片となった土器の出土が圧倒的に多く、ことに弥生後期終末の土器群は特定の竪穴住居に集中していた。覆土の堆積土量から含まれている土器量に差がでることは当然であるが、出土遺物量の差が遺構存続の時間差となって反映されており、弥生後期中葉の竪穴住居からの出土遺物は極めて少ない。このことは、弥生後期の竪穴住居と後期終末期のそれとの区分を可能にしているばかりでなく、後期終末期の竪穴住居内への土器投棄を示唆するものである。また、出土遺物からは後期中葉と後期終末期の大きな隔絶がよみとれた。竪穴住居の構造に関しては、残存状況が悪く全容を把握できたものが少ない。

出土遺物で注目すべきものは、SB28の鋼鉞片、SB37・41の管玉と弥生後期の在地土器群に混じって北陸地方に本貫を置く多量の外来系土器群である。この北陸系土器群の各遺構における主体的な出土は、周辺の同時期集落遺跡とはまったく異なった様相を示している。本遺跡は弥生後期終末の「土器移動」の中で北陸北東部の土器群が各地域で出土している要因に対して「集落移住」という視点をあたえた。



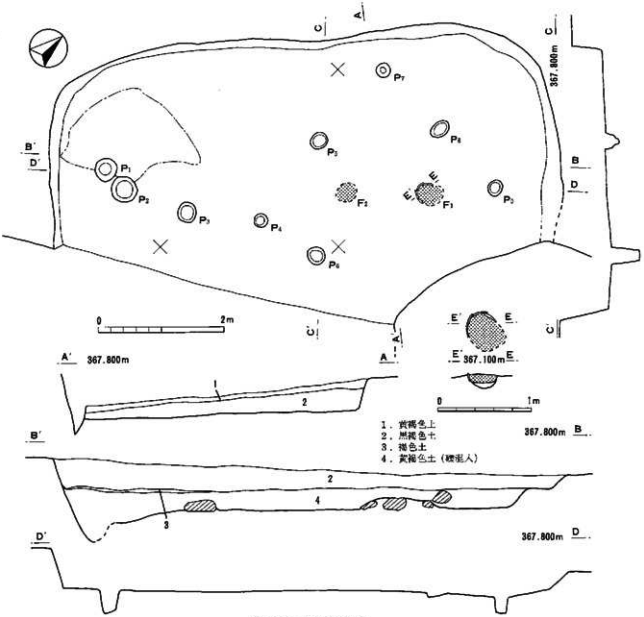
第25図　弥生～古墳時代遺構全体図（1：1000）

1　遺構と遺物

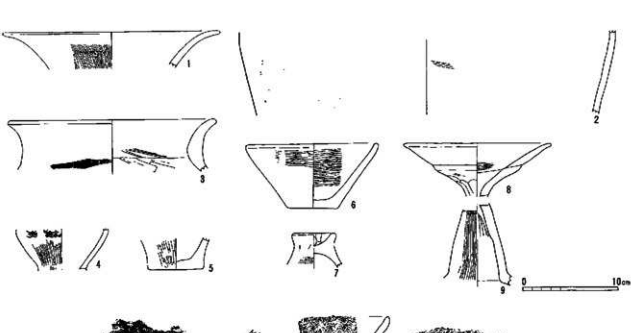
(1)　竪穴住居址

SB02　(グリッドⅣH－10・15, ⅣI－6・11)（第26・27図　PL. 4・23）

調査区南東寄りの丘陵中位に位置している。北東部コーナーは攪乱により削り取られ、東側は調査区外のため遺構の約1／3を欠く。**形状・規模**：隅丸長方形のプランと推定され、南北に長軸をとり7.7×(5.0)mの比較的大型の竪穴住居である。主軸方向はN33°E。**埋土**：2層に分層された。下層は黒褐色粘土、上層は凝灰岩を多量に含んだ自然堆積層であった。**床面**：平坦に掘り込まれた褐色砂礫層と貼り床からなる。入口と思われる南西部は堅く締まった貼り床が顕著に認められた。**炉**：焼土を伴うピットは、中央やや北東寄りに2か所検出された。奥壁寄りの炉F_1は炉壁を壺の胴部破片で部分的に囲っており、焼土が硬化していた。中央部に位置する炉F_2は掘り込みが極めて浅いことから前者が主炉として機能したと考えられる。**柱穴**：ピットは9基検出された。P_1・P_6は床面下40～50cm、P_8・P_9は30cm前後の深さで、ほかはいずれも浅い掘り込みであった。各ピットの配列が不規則なため主柱穴を決めるのがむずかしい。



第26図　SB02実測図

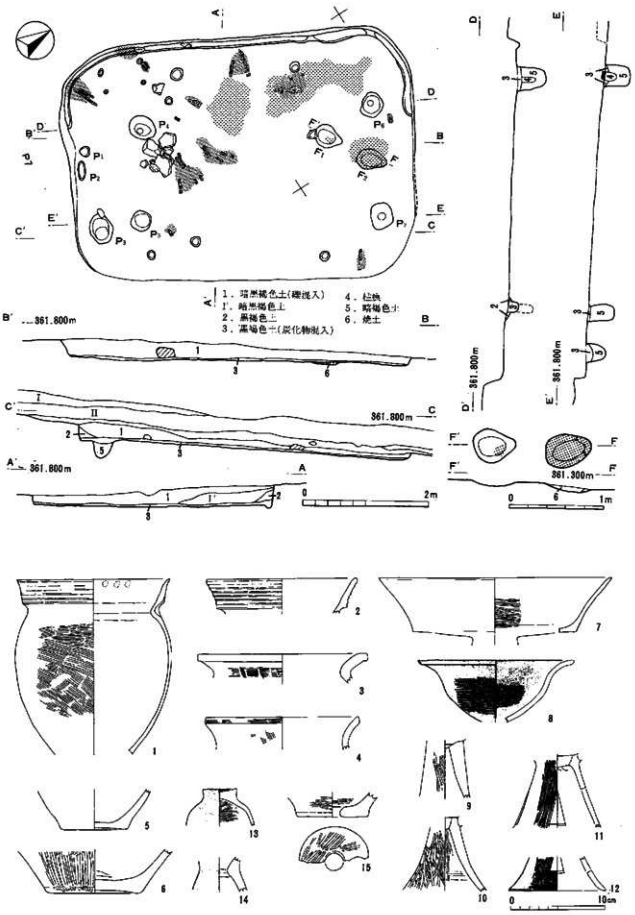


第27図　SB02出土土器実測図・拓影

遺物の出土状況：炉体土器のほかは全て覆土中からである。覆土上層から平安時代の須恵器片、黒曜石片、緑色凝灰岩の原石等が出土している。下層には弥生時代後期前半～古墳時代中期の土器片が散在していた。本址に確実に伴うと思われる遺物は炉体土器（2）と床面直上より出土した鉢（6）である。**時期**：弥生時代後期中葉。

SB04（グリッドＩＹ－17・21・22）（第28・29図　PL. 4・23・29）

調査区北東寄りの丘陵端部に位置している。南北に伸びる溝SD01によって北東壁の一部を欠き、埋土が部分的に撹乱を受けていた。床面・覆土から炭化材、焼土が出土した焼失住居である。**形状・規模**：隅丸長方形のプランをもち、南北に長軸をとる。5.4×3.8mの中型の竪穴住居である。主軸方向はN30°E。**埋土**：上層は自然堆積層であるが、覆土は一時的に埋没した状況で、少量の炭化粒子が含まれていた。西側の床面上を中心に炭化材、炭化粒子、焼土の広がりが認められた。**床面**：黒褐色粘土による貼り床によって平坦に構築されていた。西側床面からは焼土、炭化材の出土もあってか茶褐色に変色した状況が見られ、硬化も著しかった。**炉**：焼土を伴うピットは北東寄りに2か所検出された。主柱穴のほぼ中央に位置する炉F_2は楕円形状で炉壁が被熱により硬化しており、焼土が多量に出土した。炉F_1も楕円形で浅い掘り込みをもつものの、焼土の広がりは部分的であった。炉F_2が主として機能していたものと考えられる。**柱穴及びその他の施設**：ピットは大小全部で17基検出された。P_4～P_7が40～50cmの深さの主柱穴となり、P_4・P_6・P_7の上面からは径10cmほどの柱が炭化して出土した。貯蔵穴P_3は主軸東側、出入り口方向に位置し壁面から円礫が出土している。南西部には主軸上に深さ20cmのP_1・P_2が検出され、出入り口施設に伴うものと考えられる。西壁沿いに周溝がめぐる。P_4東側床面から40cm大の角礫を配した集石状の遺構が検出され礫群の下より壺の底部（6）が出土している。**遺物の出土状況**：覆土及び床面から多



第28図　SB04実測図及び出土土器実測図1

第29図　SB04出土土器実測図2・拓影（1：3）

量の土器片が出土した。床面からは甕（1～3）が出土しているが上層の出土遺物と接合するものもある。出土遺物は一括投棄と考えられるので本址にかかわる遺物と判断した。上層からはガラス小玉が1点出土している（PL.29）。**時期**：弥生時代後期終末古。

SB05（グリッドＩＹ－7・12）（第30図　PL.5・23）

調査区北東寄りの丘陵端部に位置している。遺構南側は試掘トレンチによって削られたため約1／3を欠く。**形状・規模**：（4.5）×3.1mの南北に長軸をとる隅丸長方形と推定され、炉・柱穴が検出されなかったことから小型の竪穴状遺構と考えられる。**埋土**：2層に分層され、自然堆積であり、炭化物粒子が多量に含まれていた。**床面**：黒褐色粘土による貼り床であるが、軟質であった。**遺物の出土状況**：覆土上層から多量の土器片が出土した。個体がまとまった状況で出土したものもあり一括投棄と考えられるが、下層の土器と接合したことから本址にかかわるものと判断した。**時期**：弥生時代後期終末新。

SB06（グリッドＩＹ－4・8・9）（第31図　PL.23）

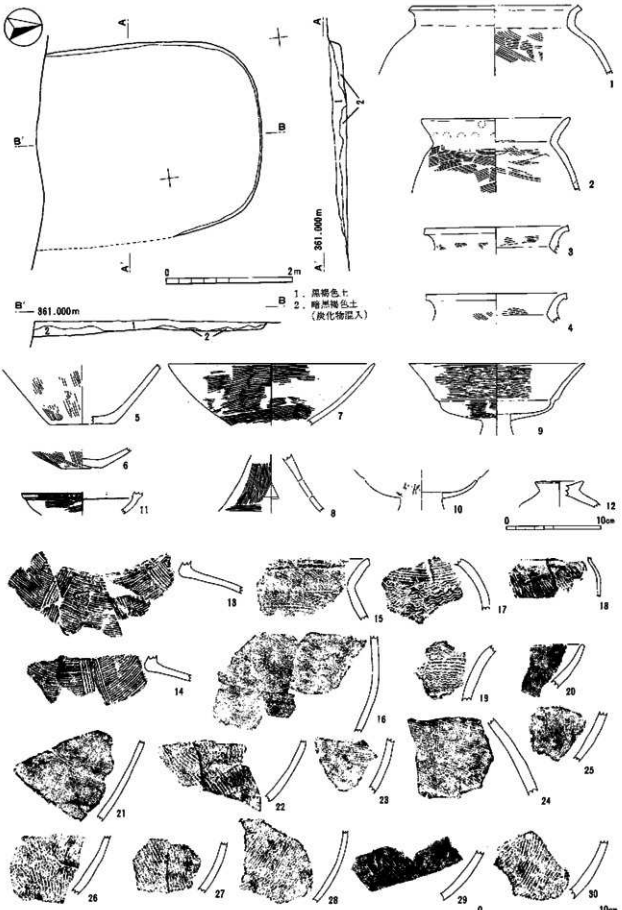
調査区北東寄りの丘陵端部に位置している。南東側は調査区外のため遺構の約1／3を欠く。**形状・規模**：東西に長軸をとる隅丸長方形と推定され、SB05同様に炉・柱穴をもたない（5.3）×3.8mの小型の竪穴状遺構と考えられる。**埋土**：2層に分層され、凝灰岩を多量に含んだ自然堆積層が認められた。**床面**：平坦に掘り込んだ褐色砂礫層からなり、硬化していた。**遺物の出土状況**：南側床面より甕（1・2）・高杯（4）・器台（10）等の土器片が少量の礫と共にまとまって出土した。南側床面以外からは少量であるが本址にかかわる土器群が出土した。**時期**：弥生時代後期終末新。

SB07（グリッドＩＸ－10，ＩＹ－6）（第32図）

調査区北東寄りの丘陵端部に位置している。地形の傾斜による流失、耕作による攪乱が深く南東側は削られていた。このため西側の床面と炉・ピットの痕跡のみをを検出した。**形状・規模**：残存する床面等の状況から隅丸長方形のプランになり、長軸を南北にとる（5.8）×（3.6）mの中型の竪穴住居と推定される。主軸方向はN28°W。**埋土**：自然堆積層。**床面**：平坦に掘り込んだ褐色砂礫層からなり、硬化していた。**炉**：中央北よりに焼土を伴ったピットが検出された。床面が削られていたため形状等不明であるが、北側は焼土の硬化が著しく底面は被熱による変色が見られた。**柱穴及びその他の施設**：ピットは6基検出された。P_1は床面から50cm、P_2・P_3・P_5は25～40cmの深さがあった。配列からP_1・P_2・P_5が主柱穴になると考えられる。**遺物の出土状況**：覆土、床面から少量の弥生後期の土器片が出土した。床面には破片であるが高杯（1・2）・甕（6）があり、これらが本址に伴う土器と考えられる。**時期**：弥生時代後期終末。

SB10（グリッドＩＸ－25，ⅣD－5）（第33図　PL.27）

調査区北東寄りの丘陵端部に位置している。地形の傾斜による流失、耕作による攪乱が深く西コーナーの一部と炉のみを検出した。**形状・規模**：隅丸長方形の竪穴住居になると推定されるが、規模は不明。主軸方向はＮ7°Ｅ。**埋土**：自然堆積層であり、30～50cm大の大形礫が多量に出土した。**床面**：平坦に掘り

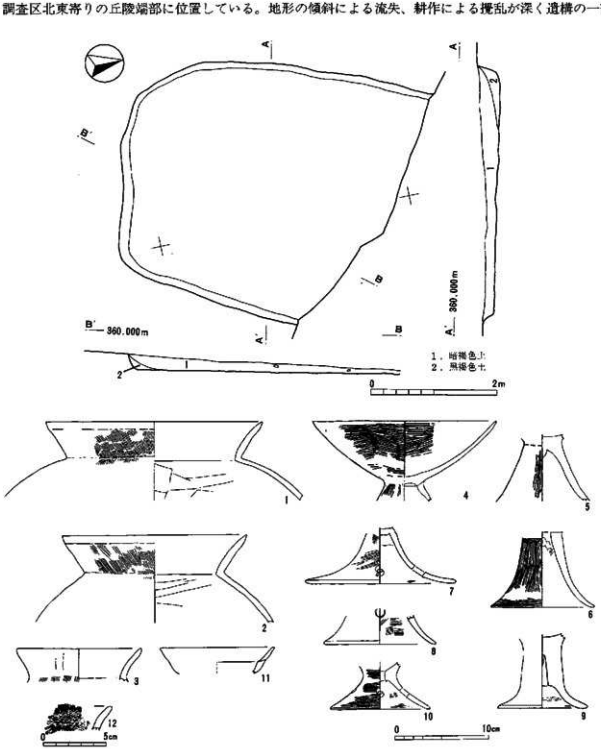


第30図　SB05実測図及び出土土器実測図・拓影

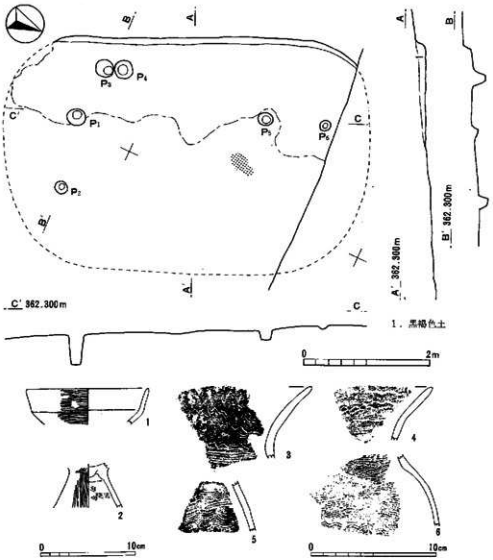
込んだ褐色砂礫層からなるが、礫や凹凸が目立つ残存状況であった。**炉**：中央西寄りに長径80cmの楕円形ピットを検出した。焼土はなかったものの20cmの掘り込みをもち底には炭化粒子が堆積していた。**柱穴及びその他の施設**：柱穴は不明。西壁と炉の中間に深さ10cmのピットを検出したが性格は不明である。**遺物の出土状況**：埋土中の大形礫の下より少量の土器片（1～3）が出土したほか、縄文土器の小破片も混入していた。本址に確実に伴うものは不明である。**時期**：弥生時代後期終末か。

SB11（グリッドⅣD－4）（第34図）

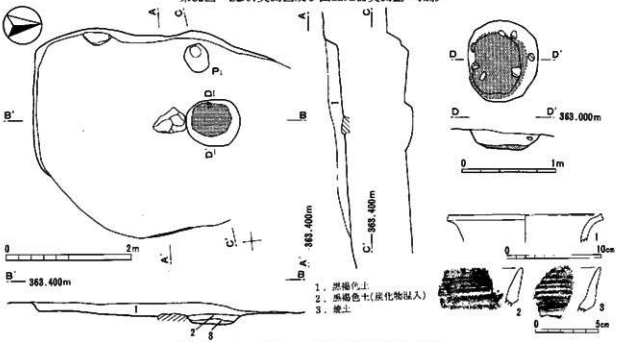
調査区北東寄りの丘陵端部に位置している。地形の傾斜による流失、耕作による攪乱が深く遺構の一部



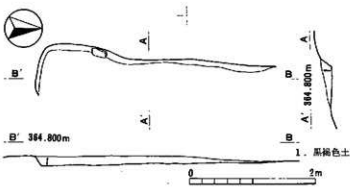
第31図　SB06実測図及び出土土器実測図・拓影



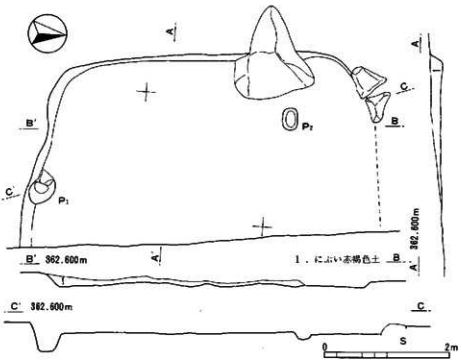
第32図　SB07実測図及び出土土器実測図・拓影



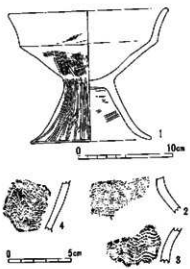
第33図　SB10実測図及び出土土器実測図・拓影



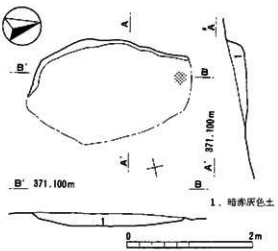
第34図　SB11実測図（1：60）



第35図　SB12実測図（1：60）



第36図　SB12出土土器実測図・拓影



第37図　SB14実測図（1：60）

分を検出したにすぎない。このため形状・規模、付随する施設等は不明であるが、床面などから竪穴住居と認定した。**埋土**：自然堆積層。**床面**：残存する床面は黒褐色粘土の貼り床であった。**遺物の出土状況**：覆土中より赤彩の壺土器片が少量出土したが、図示できるものはない。**時期**：弥生時代後期か。

SB12　（グリッドⅠX－20・25，ⅠY－21）（第35・36図　PL. 5・23）

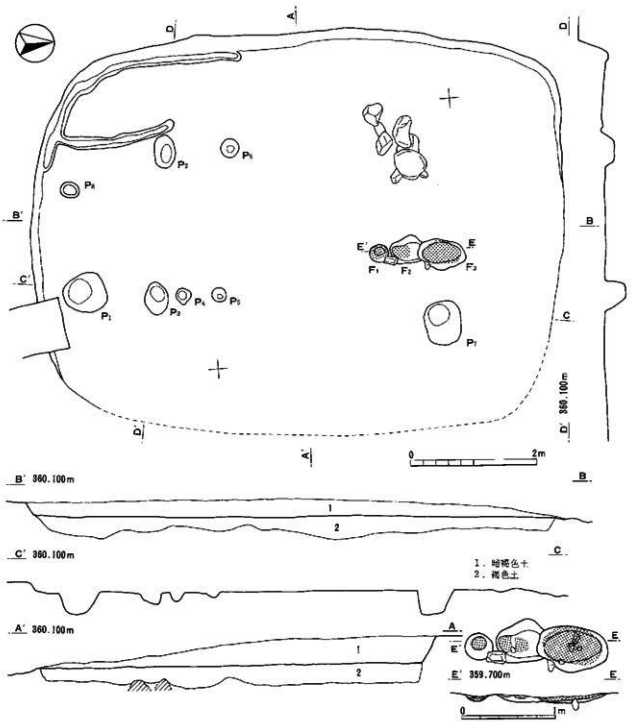
調査区北東寄りの丘陵端部に位置している。東側は地形の傾斜による流失で削られており、約1／2の検出であった。**形状・規模**：南北に長軸をとる隅丸長方形と推定され、南北（5.5）mの中型の竪穴住居となる。**埋土**：自然堆積層。**床面**：平坦に掘り込んだ褐色砂礫層からなり、硬化していた。**炉**：不明。**柱穴及びその他の施設**：ピットは2基検出されたが、柱穴は不明。P_1は深さ25cmで壁から40cm大の方形の平石が出土した。P_2は窪み程度の掘り込みであった。西壁には1.5×1.2m大の礫が住居内に露呈しプランを変形させているが、本址に伴うものと考えられる。**遺物の出土状況**：西コーナー床面から高杯（1）が杯部を下にして出土した。また床面上から甕（2～4）の破片が少量出土している。**時期**：弥生時代後期終末。

SB14　（グリッドⅣH－12）（第37図）

調査区南西寄りの丘陵中位に位置している。東側は地形の傾斜による流失で削られており西側一部のみ検出であった。このため形状、規模は不明である。**埋土**：自然堆積層。**床面**：平坦に掘り込んだ褐色砂礫層からなり、硬化していた。**炉**：住居北寄りに焼土の集中箇所を検出したが、焼土の堆積が極めて薄く床面の掘り込み、被熱された状況がないことから炉としてさ機能はなかったものと考えられる。**柱穴**：不明。**遺物の出土状況**：床面付近より若干の弥生後期土器片が出土しているが、図示できるものはない。**時期**：弥生時代後期か。

SB28　（グリッドⅠY－18・23）（第38～40図　PL. 5・23・24・27・28・29）

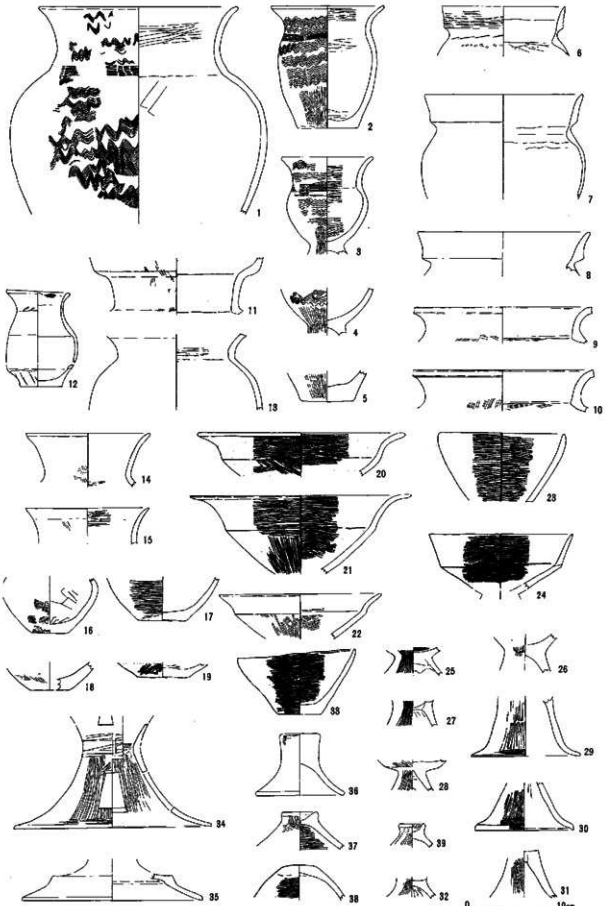
調査区北東寄りの丘陵端部に位置している。南壁の一部が近代の暗渠排水路によっ撹乱を受け、東側は地形の傾斜による流失で削られていた。**形状・規模**：検出された床面の広がりから推定して隅丸長方形のプランをもち、南北に長軸をとる。8.3×（6.2）mほどの大型の竪穴住居である。主軸方向はN4°E。**埋土**：自然堆積層。**床面**：平坦に掘りこまれた褐色砂礫層からなる。床面直下からは多量の大小の礫が出土し、土層観察によって掘り方が認められたものの明瞭な貼り床は検出されなかった。**炉**：焼土を伴うピットは3基検出された。いずれも住居北寄りの主軸ライン上に位置し、壁面は燃焼により変色していた。炉F_1・F_2の焼土は硬化が著しく、また炉F_3によって切られている状況から住居廃絶時は炉F_3のみが機能していたものと考えられる。さらに炉F_3からは焼土とともに被熱を十分に受けた礫が数点出土した。**柱穴**：床面下深さ20～50cmのピットが8基検出された。配列からP_2・P_3・P_7が主柱穴になると考えられるが、P_2・P_3は床面から20～30cmと浅い掘り込みであった。炉を挟んでP_7と対する位置の床面上に30～50cm大の礫群が出土しており柱穴に相当する施設が想定される。**その他の施設**：主軸ライン東側、南壁寄りに深さ50cmのP_1（貯蔵穴）が検出され、内から依存状態の良い土器がまとまって出土した（2・20・23・24・33）。南東コーナーに周溝が、さらに南壁からP_2付近まで「間仕切り」と思われる溝が検出された。**遺物の出土状況**：覆土中及び床面直上より多量の土器片が出土した。施設内からはP_1の他P_3から高杯脚部（30）が出土し、拓影図中の一部の土器（41～45）のほかは床面もしくは覆土下層の出土であった。銅鈴（62）が小破片となって住居中央部の覆土下層より出土した点が注目される。**時期**：弥生時代後期終末古。



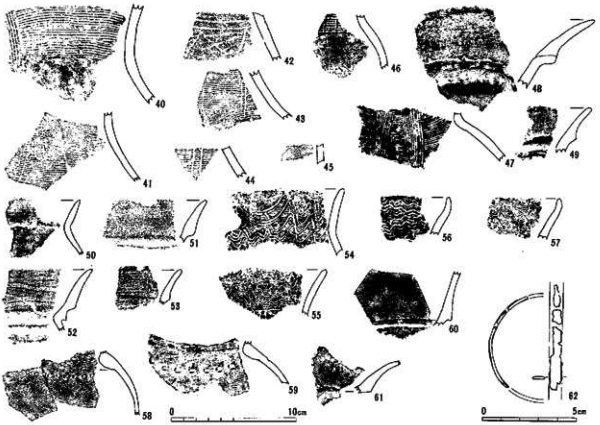
第38図　SB28実測図

SB29（グリッドＩＹ－24・25）（第41・42図　PL. 24・27・28）

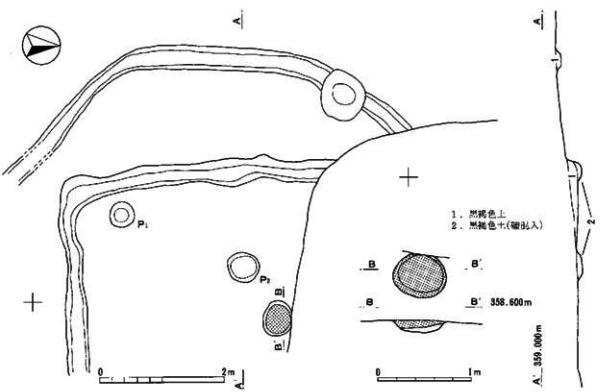
調査区北東寄りの丘陵端部に位置している。東側は地形の傾斜による流失で削られ、北側はSB36によって切られており、炉を含めた南西側の一部を検出したにすぎない。このため形状・規模は不明であるが、住居南西コーナーの状況から方形のプランになると推定される。**堆土**：自然堆積層。**床面**：平坦に掘り込まれた褐色砂礫層からなる。残存する床面は硬化していた。**炉**：SB36に一部切られる状況で北東寄りに１基検出された。南北に長軸をとる楕円形で、浅い掘り込みであった。被熱により底面が変色し、焼土も多量に出土した。**柱穴及びその他の施設**：ピットは２基検出されたが、床面から深さ10～20cmであり、柱穴と認識されるものではなかった。遺構の残存する壁面沿い（南西側）に周溝を検出した。また西側に



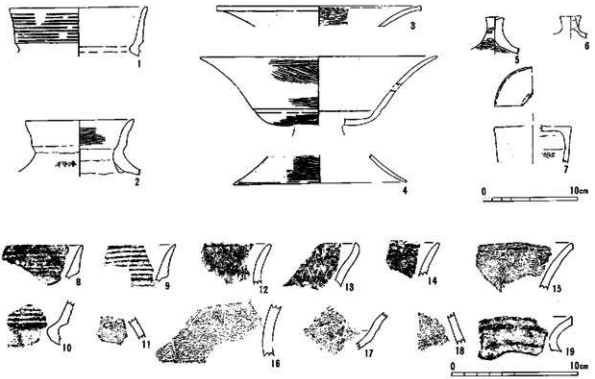
第39図　SB28出土土器実測図(１：４)



第40図　SB28出土遺物実測図・拓影



第41図　SB29実測図



第42図　SB29出土土器実測図・拓影

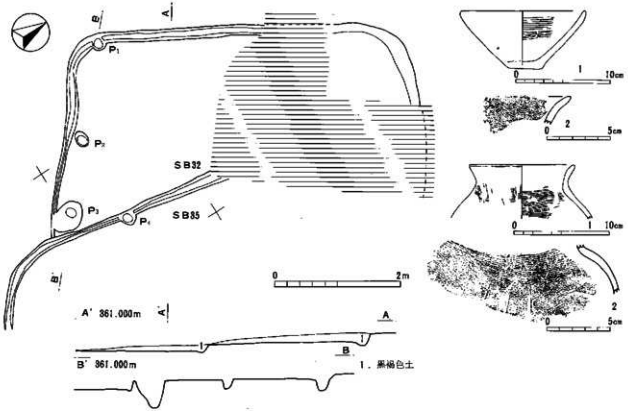
本址を取り巻くかにも見受けられる溝があり、住居址内出土土器とほぼ同一時期の土器が出土した（2・5）。しかしこの溝が本址と関連する施設であるかは不明。**遺物の出土状況**：確認面からごく浅い覆土中より多量の土器片が出土した。P_2内出土の高杯（4）破片が周辺の覆土中より出土したものと接合した。従って小破片が多いがいずれも本址廃絶時にかかわるものと思われる。確認面上からは奈良・平安時代の須恵器・土師器が出土した。**時期**：弥生時代後期終末古。

SB32（グリッドＩＹ－22, VIE－２）（第43図　PL.５・24）

調査区北東寄りの丘陵端部に位置している。北西側一部はガス埋設施設のため未検出となり、北東側はSB35に切られている。**形状・規模**：検出箇所が少ないが隅丸方形のプランをもち、東西に長軸（5.8m）をとると推定される。**埋土**：自然堆積層。**床面**：平坦に掘り込まれた褐色砂礫層からなり、硬化していた。**炉**：不明。**柱穴及びその他の施設**：ピットは４基検出されたが、柱穴と断定できるものはない。P_3は床面から深さ50cmであった。また残存する南西壁面沿いに周溝を検出した。**遺物の出土状況**：覆土中より土器片が僅かに出土し、P_3直上より完形の鉢（1）、内部より破片が数点出土した。**時期**：弥生時代後期終末古。

SB35（グリッドＩＹ－22, VIE－２）（第43図）

調査区北東寄りの丘陵端部に位置している。北側はガス埋設施設のため未検出となり、東側は地形の傾斜による流失で削られていた。このため西側の一部を検出したにすぎない。**形状・規模**：不明。**埋土**：自然堆積層。**床面**：平坦に掘り込まれた褐色砂礫層からなり、西壁寄りの一部が硬化していた。**炉**：不明。**柱穴及びその他の施設**：壁沿いには周溝が検出されたが、ピットは確認されなかった。**遺物の出土状況**：覆土中より土器片が僅かに出土した。**時期**：弥生時代後期終末古。



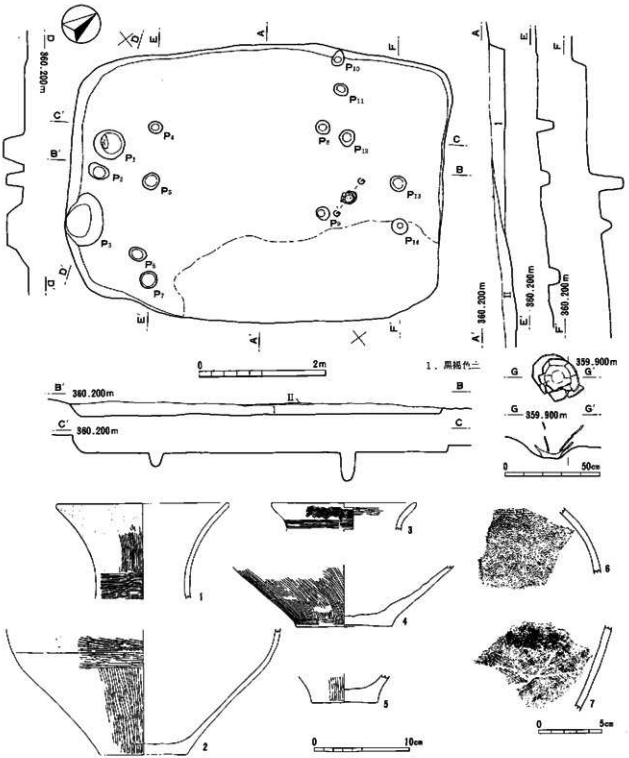
第43図　SB32・35実測図及び出土土器実測図・拓影

SB34（グリッドVIH－14）（第44図）

調査区南東寄りの丘陵中位に位置している。西壁上層の一部がSD06によって切られ、東コーナーが地形の傾斜による流失で削られている。**形状・規模**：東西に長軸をとる5.4×4.4mの隅丸長方形のプランの、中型の竪穴住居である。主軸方向はN45°E。**埋土**：自然堆積層で凝灰岩風化礫が多量に含まれていた。**床面**：平坦に掘り込んだ褐色砂礫層からなり、硬化していた。**炉**：焼土を伴うピットは検出されなかったが、住居内北東寄りのほぼ主軸上に少量の炭化物を伴った壺が出土した（1・4）。壺底部（4）は浅い掘り込みに置かれた状況で、また口縁部（1）は破片が逆位の状況で少量の炭化物とともに出土した。**柱穴及びその他の施設**：ピットは大小14基検出された。この内床面から深さ40cm以上のピットはP_{12}・P_{13}のみである。大半が深さ20cm前後であるため、配列から柱穴を想定するとP_4・P_6・P_{12}・P_{13}が該当すると考えられる。出入り口部と思われる南壁寄りはP_1・P_2・P_3があり、P_3（貯蔵穴）は大形不整形で、少量の土器片が出土した。**遺物の出土状況**：住居確認面上からは奈良・平安時代の須恵器・土師器が出土したが、覆土中からは少なく床面上に少量の破片が散在していた。したがって炉体土器（1・4）をはじめ、須恵器・土師器を除く遺物は全て本址に伴うものと考えられる。**時期**：弥生時代後期中葉。

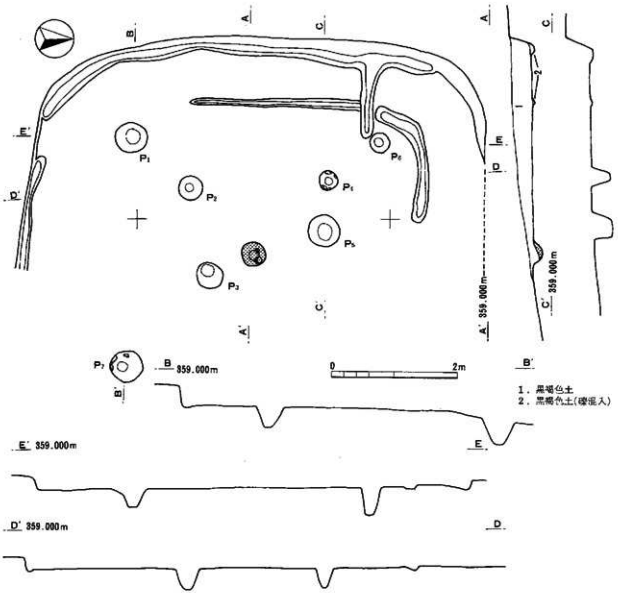
SB38（グリッドIY－19・20・24・25）（第45図　PL.5・25）

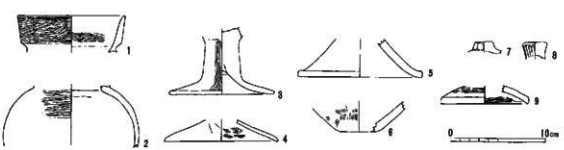
調査区北東寄りの丘陵端部に位置している。東側は地形の傾斜による流失で削られており、約1／2が検出された。**形状・規模**：残存する床面とピットの状況から隅丸方形になると推定される。南北に長軸をとり推定（7.3）×（6.5）mほどの大型住居である。主軸方向はN4°E。**床面**：平坦に掘り込んだ褐色砂礫層からなり、部分的に薄い貼り床が確認された。**炉**：住居のほぼ中央に焼土を伴うピットが1基検出された。炉周辺には貼り床がないものの深さ20cmで炉内からは被熱した礫が2個出土した。**柱穴及びその他の施設**：ピットは7基検出された。床面から深さ40cm以上のピットはP_6・P_7、30cm以上はP_1・P_2・



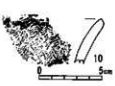
第44図　SB34実測図及び出土土器実測図・拓影

P_4・P_5であった。ピットの形状・配列からP_1・P_6・P_7が主柱穴と考えられる。P_4・P_7の壁沿いに小礫が出土した。残存する南・西壁沿いに周溝、更に内側に「間仕切り」と思われる溝が北西側一部に検出された。ピットと間仕切り溝の状況から住居の拡張があった可能性が考えられる。**遺物の出土状況**：小破片が多くすべて覆土中である。SB68出土の土器と接合した液もあり（1）、本址に確実に伴う遺物は不明。**時期**：古墳時代前期か。



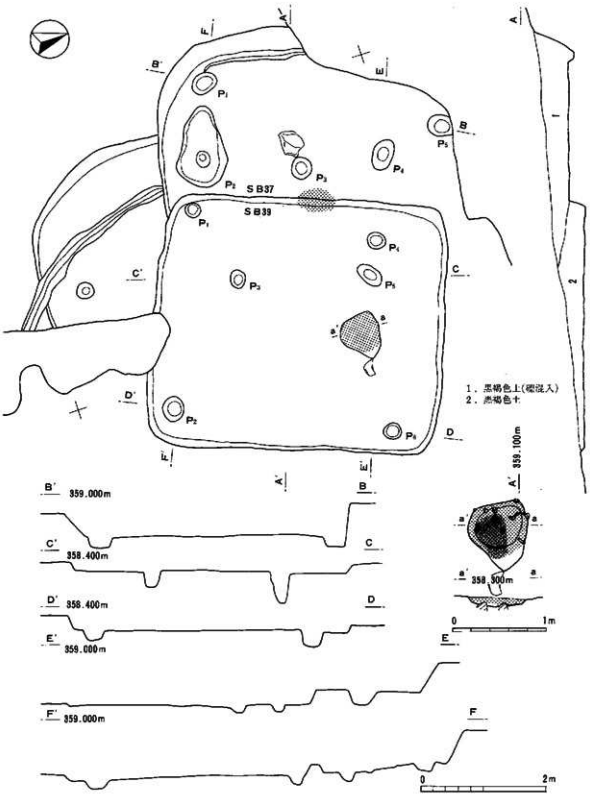


第45図　SB36実測図及び出土器実測図・拓影



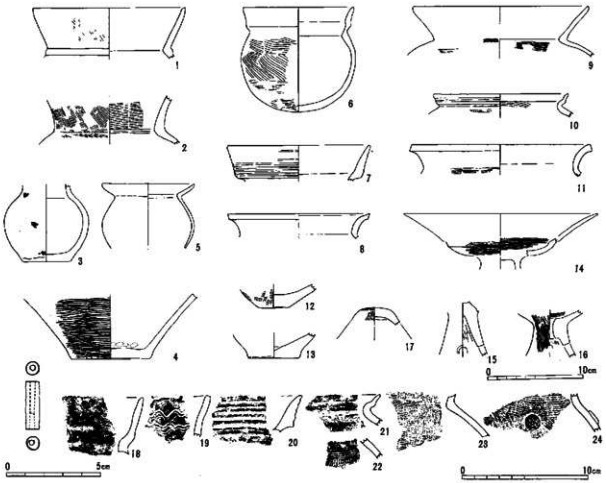
SB37（グリッドⅠY－10）（第46図　PL.5・25・27・28・29）

調査区北東寄りの丘陵端部に位置している。北西側は調査区外であり、南側は地形の傾斜による流失で削られたため約1／3の検出であった。本址はSB39上に構築されているため東側部の検出に曖昧さを残している。**形状・規模**：南西コーナーの形状から隅丸方形と推定される。**埋土**：自然堆積層である。重複関係をもつSB39の埋土と判別しがたいが、本址の埋土中には5cm大の凝灰岩風化礫が多量に含まれていた。**床面**：平坦に掘り込んだ褐色砂礫層と薄い貼り

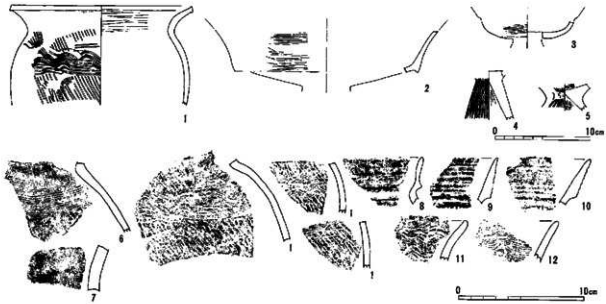


第46図　SB37・39実測図

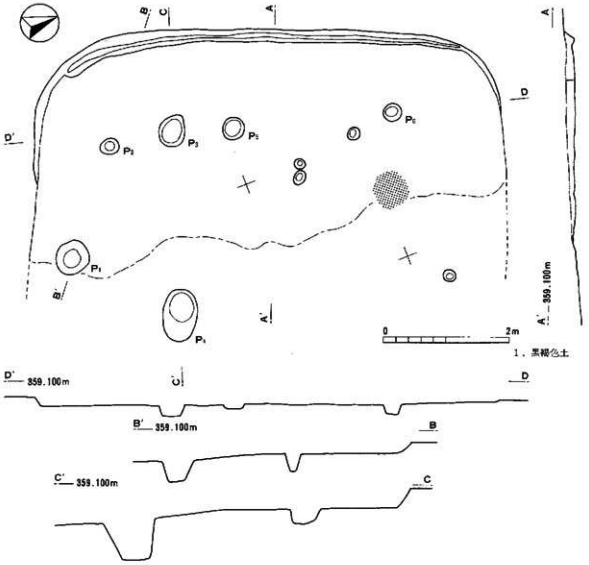
床からなるが、南側は貼り床が軟質のため礫が認められた。**炉**：SB39との境界部に厚さ3cmほどの焼土を伴う浅い掘り込みを検出した。約1／2はSB39の埋土上に構築されていた。**柱穴及びその他の施設**：ピットは5基検出された。P_1・P_2・P_5は埋め戻しの痕跡を残しており、床下のピットと思われる。西壁沿いに周溝が検出されている。柱穴は不明。**遺物の出土状況**：小型壺（3）・甕（6・12）・器台（16）



第47図　SB37出土遺物実測図・拓影



第48図　SB39出土土器実測図・拓影



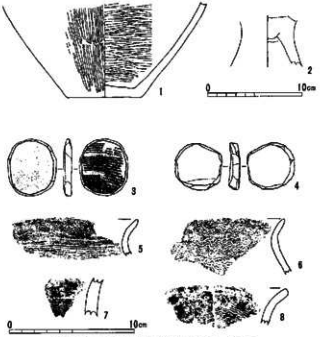
第49図　SB38実測図（1：60）

が床面から、ほかは覆土中からの出土であった。本址とSB39の検出状況が不明瞭であったためSB39出土としている土器群のなかに本址に含まれるものもある。P_3とP_4の中間に位置する覆土下層中より管玉が出土している。**時期**：古墳時代前期。

SB39（グリッドＩＹ－10，ⅡＵ－６）

（第46・48図　PL.27・28・29）

調査区北東寄りの丘陵端部に位置している。SD07によって南壁の一部が欠け、南東側は地形の傾斜による流失で壁の立ち上がりが極めて浅いものであった。**形状・規模**：長軸を南北にとる長方形プランで、4.4×3.8mの小型の竪穴住居である。主軸方向はN18°E。**床面**：平坦に掘り込ん



第50図　SB38出土遺物実測図・拓影

だ褐色砂礫層からなり、硬化していた。**炉**：多量の焼土を伴ったピットが北寄りの中央部に検出された。径約60cmの不整形で炉中心部は焼土が硬化し、底は被熱による変色が見られた。また炉内には被熱した小礫が多量に出土した。**柱穴及びその他の施設**：ピットは6基検出され、P_1・P_2からは炭化物が出土した。床面から深さ30cm以上のピットはP_2・P_3・P_6であるが、配列が不規則なため柱穴は不明。**遺物の出土状況**：P_3から高杯脚部（5）が出土したほかはすべて覆土中からである。SB37の構築状況から本址に確実に伴うものは不明である。**時期**：弥生時代後期終末。

SB38　（グリッドＩＹ－９・10・14・15グリッド）（第49・50図）

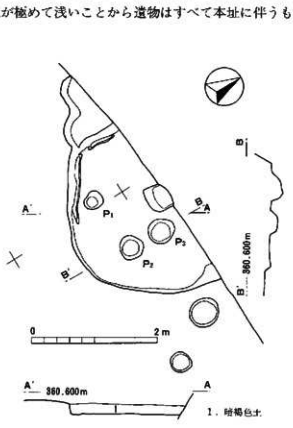
調査区北東寄りの丘陵端部に位置している。東側は地形の傾斜による流失で削られていたため約１／２の検出であった。**形状・規模**：残存する床面の状況から南北に長軸をとる隅丸長方形になると推定される。長軸7.4×(4.9) m、主軸方向N22°Eの比較的大型の竪穴住居である。**埋土**：自然堆積層。**床面**：平坦に掘り込んだ褐色砂礫層からなり、硬化していた。**炉**：住居北側に径約60cmの円形のピットが検出された。上部は削り取られていたが多量の焼土を伴っており10cm程度の掘り込みが残存していた。**柱穴及びその他の施設**：ピットは大小10基検出された。床面から深さ70cmのP_4以外は20～30cmの深さで、その配列からP_3・P_4・P_8が主柱穴、P_1が貯蔵穴になると考えられる。西壁沿いには周溝が一部めぐる。**遺物の出土状況**：覆土中、床面より土器片が少量出土した。P_4内からは壺の底部（1）南側出入り口付近の床面から甕（5・6）、土製円盤（3・4）が出土した。。覆土が極めて浅いことから遺物はすべて本址に伴うものと考えられる。**時期**：弥生時代後期中葉。

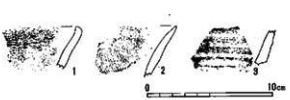
SB40　（グリッドＩＹ－７・８）（第51図）

調査区北東寄りの丘陵端部に位置している。北側の大半が調査区外のため形状・規模・炉等全容は不明。**埋土**：自然堆積層。**床面**：平坦に掘り込んだ褐色砂礫層からなる。**柱穴及びその他の施設**：ピットは4基検出されたが性格は不明。南西コーナーに部分的な周溝を検出した。**遺物の出土状況**：覆土中から少量の土器片が出土した。**時期**：弥生時代後期終末。

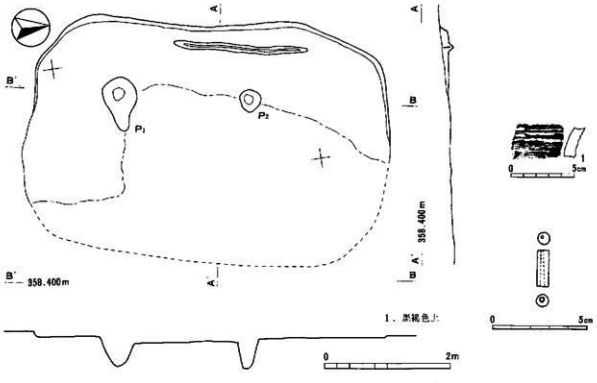
SB41　（グリッドＩＹ－15、20）（第52図　PL.29）

調査区北東寄りの丘陵端部に位置している。東側は地形の傾斜による流失で削られていたため約１／２の検出であった。SB36の東斜面に位置しているが西壁は深さ10cm程度の残存状況であり、本址は検出状況からSB36以前の住居である。**形状・規模**：残存する床面とピットの状況から隅丸長方形になると推定される。南北に長軸をとり5.8×(3.7) mの規模をもつ中型の竪穴住居である。**埋土**：自然堆積層。**床面**：平坦に掘り込んだ褐色砂礫層からなり、硬化していた。**炉**：不明。**柱穴及びその他の施設**：ピットは2基検出され、いずれも床面から深さ45cmであった。西壁より





第51図　SB40実測図及び出土土器拓影



第52図　SB41実測図及び出土遺物実測図・拓影

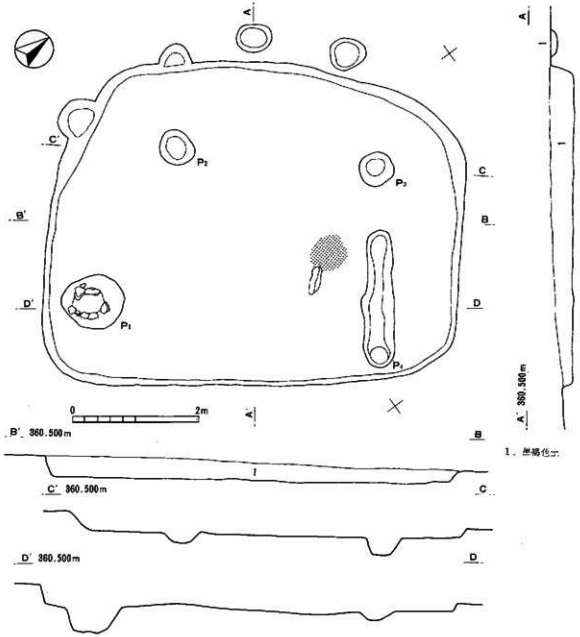
やや内側に部分的な周溝が検出された。**遺物の出土状況**：薄い覆土中より弥生後期の土器小片が僅かに出土し、P_2と周溝の間から管玉が出土した。本址に確実に伴う遺物は不明。**時期**：弥生時代後期終末。

SB42　（グリッドＩＹ－12・13・17・18）（第53・54図　Pl.、5・27）

調査区北東寄りの丘陵端部に位置している。上層は地形の傾斜による流失で削られていたものの、東壁においても10cmほどの掘り込みが残存していた。南西壁の一部がSK138・139によって切られている。**形状・規模**：南北に長軸をとる隅丸長方形となるが、西側壁(斜面上部)がやや膨らむ形状となる。6.3×4.9mの中型の竪穴住居である。主軸方向はN44°E。**埋土**：自然堆積層。**床面**：平坦に掘り込んだ褐色砂礫層からなり、硬化していた。**炉**：北東中央寄りの主軸上に位置する。焼土は多量に出土したが床面を僅かに窪めた程度の掘り込みであった。径50cmの円形で縁石を伴う。**柱穴及びその他の施設**：ピットは4基検出した。出入り口付近にある貯蔵穴P_1は床面から深さ50cmに掘り込まれ、上部壁面に15～25cm大の礫がめぐっていた。P_3～P_4は約20cmの深さであり配列から主柱穴と考えられる。**遺物の出土状況**：全域の覆土中から多量の土器片が出土したが、本址に確実に伴う遺物は不明である。**時期**：古墳時代前期か。

SB54　（グリッドＩＶ－24）（第55図　Pl.、6）

調査区北西寄りの丘陵中位に位置している。東側は地形の傾斜による流失で削られていたが床面はほぼ完全な形で残されていた。**形状・規模**：南北に長軸をもつ隅丸長方形となり、4.8×3.5mの中型の竪穴住居である。主軸方向はN73°W。**埋土**：自然堆積層。**床面**：平坦に掘り込んだ褐色砂礫層と貼り床からなる。貼り床は褐色砂礫層の上面を覆う状況で薄い黒褐色土が貼られており、硬化していた。**炉**：中央東寄りの位置に炭化物粒子の集中箇所が検出された。焼土は伴わず、床面を僅かに窪めた程度の掘り込みであった。**柱穴及びその他の施設**：ピットは7基検出された。出入り口施設に関連するP_1・P_2は深さ約20cm

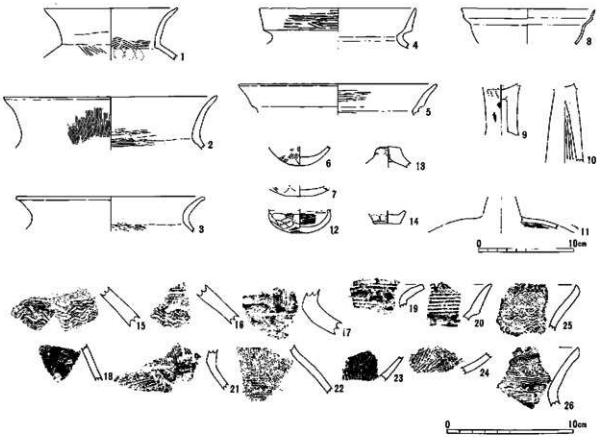


第53図　SB42実測図（1：60）

で対になっている。主柱穴P_3～P_6は床面から30～40cmの掘り込みをもち、P_4・P_5からは小礫が出土している。P_7は深さ10cmと浅いがピット内からは土器片の出土をみた。南北西壁沿いに周溝が検出された。**遺物の出土状況**：覆土中及び床面から弥生後期の土器片が出土した。P_5上から甕（2）が置かれた状況で、P_6と炉の中間地点から甕（1）が潰れて出土した。またP_7内からは高杯（4）と櫛描波状文の土器が出土している。**時期**：弥生時代後期中葉。

SB62　（グリッドⅣB－13・17・18）（第56図）

調査区西寄りの丘陵中位に位置している。遺構上面は耕作による攪乱が深く及んでおり、また大半は平安時代のSB48によって切られていたため北西の壁と床面の一部のみの検出であった。**形状・規模**：床面残存範囲から長軸を南北にとる隅丸長方形のプランが推定され、（4.5）×3.3mの中型の竪穴住居になると考えられる。**埋土**：自然堆積層。**床面**：平坦に掘り込んだ褐色砂礫層からなり、硬化していた。**炉**：不

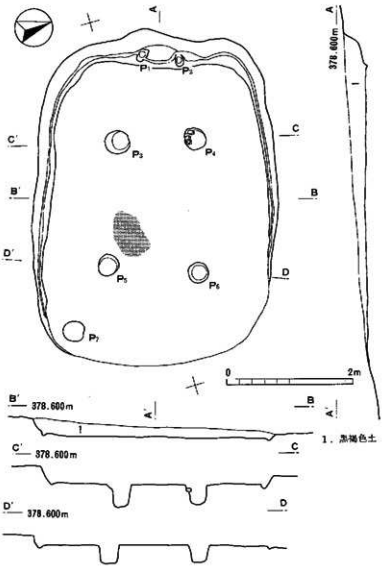


第54図　SB42出土土器実測図・拓影

明。**柱穴及びその他の施設**：北壁沿いに深さ約15cmのピットが2基検出されたが、性格は不明。**遺物の出土状況**：覆土中より縄文晩期土器片および平安時代の須恵器・土師器等が混入して出土した。床面上から甕の底部（1）・甕（2）が出土しており本址に伴うものと判断した。**時期**：弥生時代後期中葉。

SB68　（グリッドⅣB－13・17・18）（第57図　PL. 25）

調査区北東寄りの丘陵端部に位置している。東側は地形の傾斜による流失で削られており、約1／2を欠く。**形状・規模**：床面残存範囲から南北に長軸をとる隅丸長方形と推定され、長軸4.3mの小型の竪穴住居である。**埋土**：自然堆積層。**床面**：平坦に掘り込んだ褐色砂礫層からなり、硬化していた。**炉**：中央やや南寄りに焼土の集中箇所を検出したが、床面の掘り込みや燃焼の痕跡はない。**柱穴**：ピットは検出されず柱穴はなかったものと考えられる。**遺物の出土状況**：東コーナー付近の覆土下層及び床面から集中して土器片が出土した。これらの甕（1・2）が本址に伴うものと考えられる。**時期**：古墳時代前期。



(2) 土　坑

SK112（グリッドⅣE－3）

（第58・59図　PL. 6）

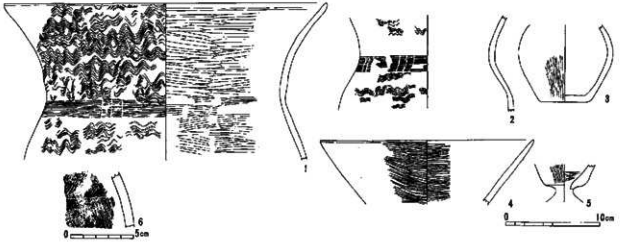
調査区北東寄りの丘陵端部に位置している。付近には北西にSB35北東にSB28がある。埋土は礫を少量含む黒褐色土であり、竪穴住居の埋土と同様であった。平面形は径0.7mの円形を呈する。深さ20cmと浅く底面は平坦となり、逆台形の断面形状をとる。遺物は古墳時代前期の壺が北西側隅底に沿って出土した。土坑の性格は不明である。

(3) 遺物集中箇所

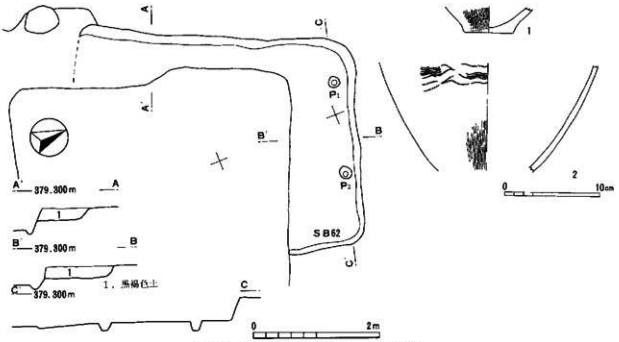
SQ10（グリッドⅠY－17・18）

（第61・63図　PL. 26）

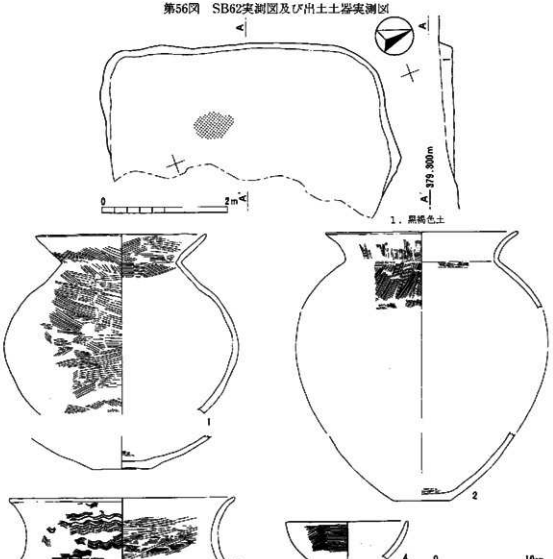
調査区北東寄りの丘陵端部の竪穴住居群内、SB04・SB28・SB42の中間に位置している。黄褐色砂礫層上の、2.0mの範囲から検出された。摩滅の少ない土器であり、散個体が潰れた状況で出土した。付近にはピットがあることから竪穴住居内の遺物としての可能性も残るが付随する施設（床等）は認められなかった。土器はすべて弥生時代後期中葉に属する。（第63図1～3・8）



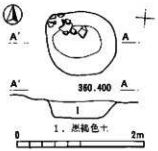
第55図　SB54実測図及び出土土器実測図



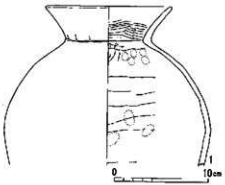
第56図　SB62実測図及び出土土器実測図



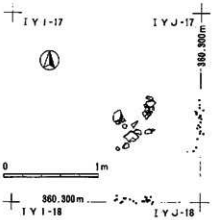
第57図　SB68実測図及び出土土器実測図



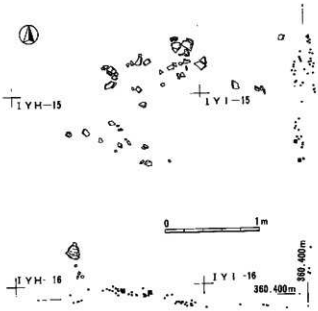
第58図　SK112実測図（1：60）



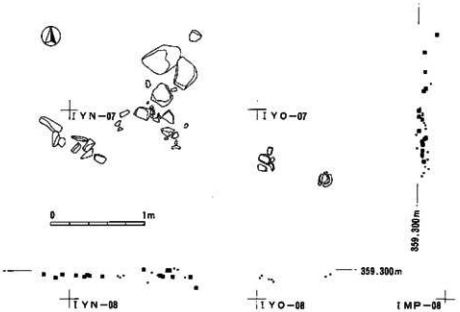
第59図　SK112出土土器実測図（1：4）



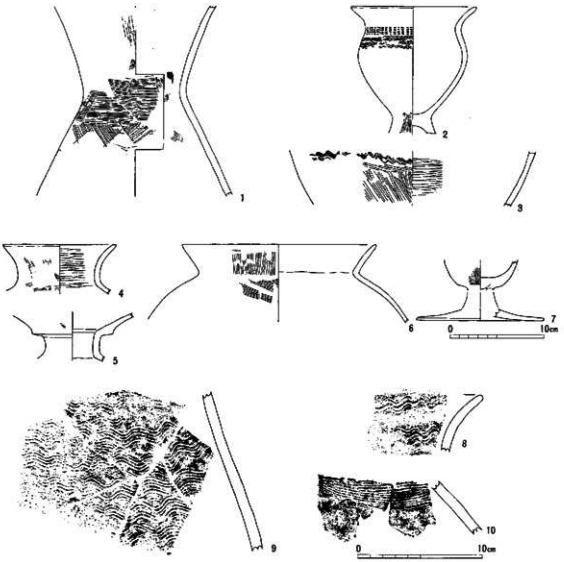
第60図　SQ11実測図（1：40）



第61図　SQ10実測図（1：40）



第62図　SQ12実測図（1：40）



第63図　土器集中箇所出土土器実測図（1：3）

SQ11（グリッドＩＹ－23）（第60・63図）

調査区北東寄りの丘陵端部の竪穴住居群内、SB28西側に位置している。黄褐色砂礫層上、0.8mの範囲から検出された。摩滅の少ない土器片であったが、小破片のため個体として復元できるものはなかった。SQ10同様遺物はすべて弥生時代後期中葉に属するものであった。（第63図９・10）

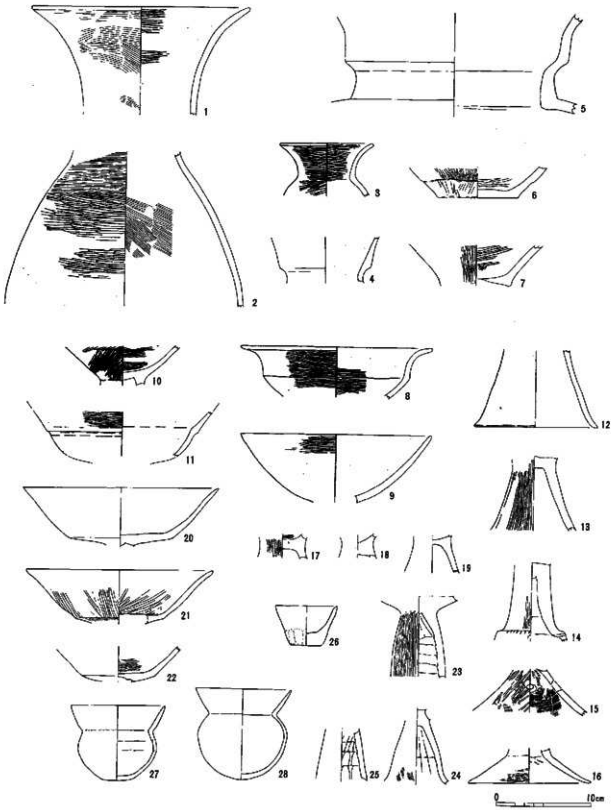
SQ12（グリッドＩＹ－９）（第62・63図）

調査区北東寄りの丘陵端部の竪穴住居群内SB06南側に位置し、住居確認面と一部重複する。黄褐色砂礫層とSB06覆土である黒褐色土層上に10～50cm大の礫とともに平坦な広がりをもって検出された。本址付近にはSK260・261があり付随する施設の可能性もある。土器はすべて古墳時代前期に属するものであった。（第63図４～７）

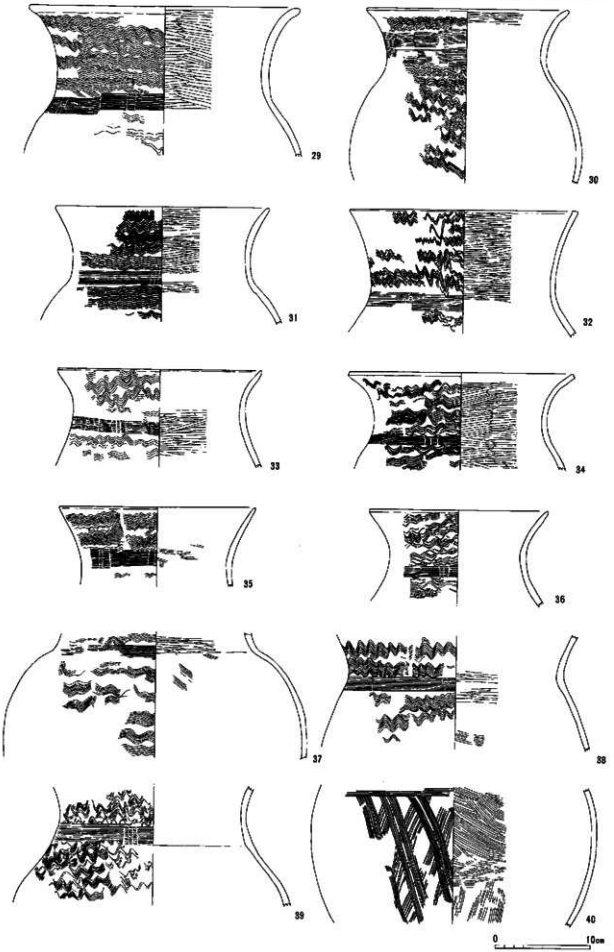
(4) 溝　址

SD09（グリッドⅠY－9）（第64～67・110図　PL. 25・26・27・29）

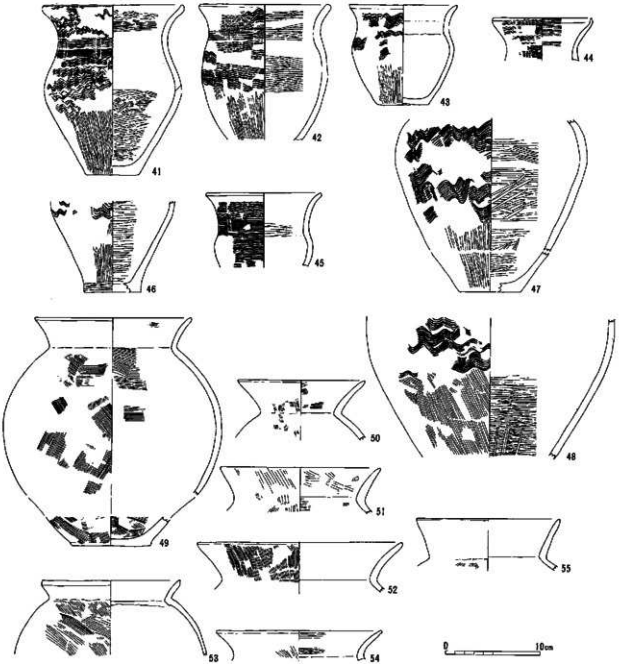
調査区北西の丘陵中位に位置している。遺物は西寄りの未調査区境に集中して出土した。丘陵中位には



第64図　SD09出土土器実測図1（1：4）

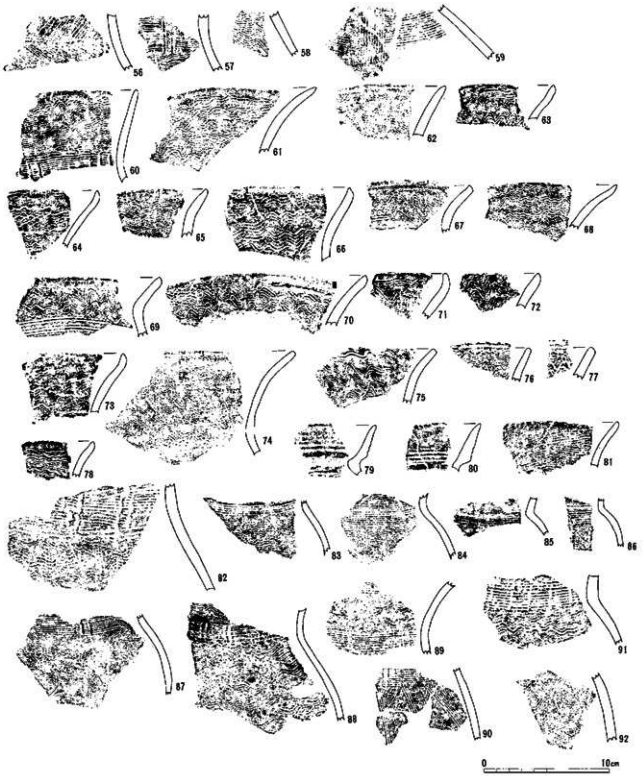


第65図　SD09出土土器実測図２（１：４）

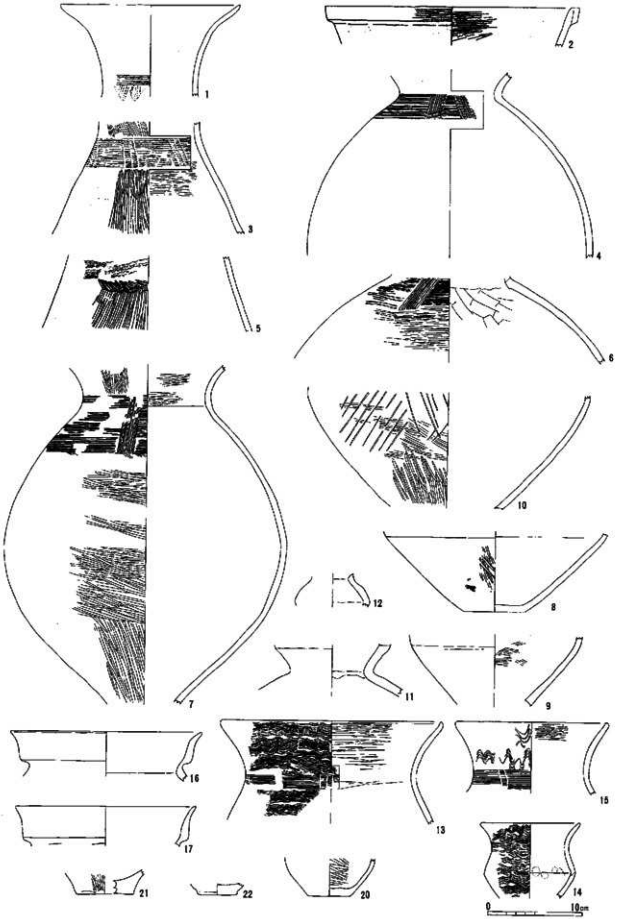


第66図　SD09出土土器実測図3（1：4）

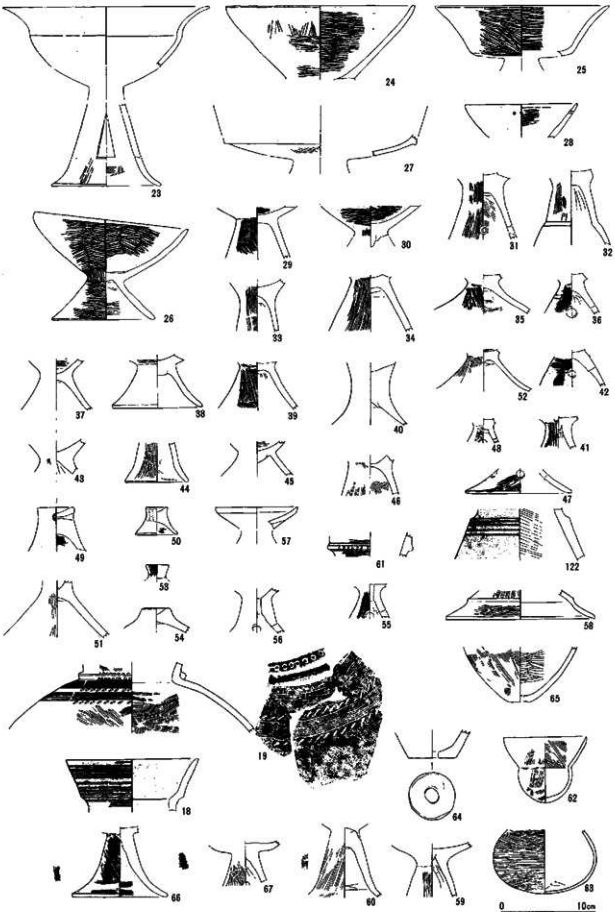
弥生後期の竪穴住居が散在しており、甕を主体とする土器がまとまっていることから、該期の住居址等の異なる遺構が溝址によって攪乱された可能性も考えられる。土器は比較的遺存状況が良く後期中葉の甕を主として後期終末～古墳前期・中期のものがある。また緑色凝灰岩製の管玉がこれらの土器とともに出土した。古墳中期の器種だけが高杯（20～24）・小型丸底（27・28）に限定されるのも、本遺跡における特徴を現している。



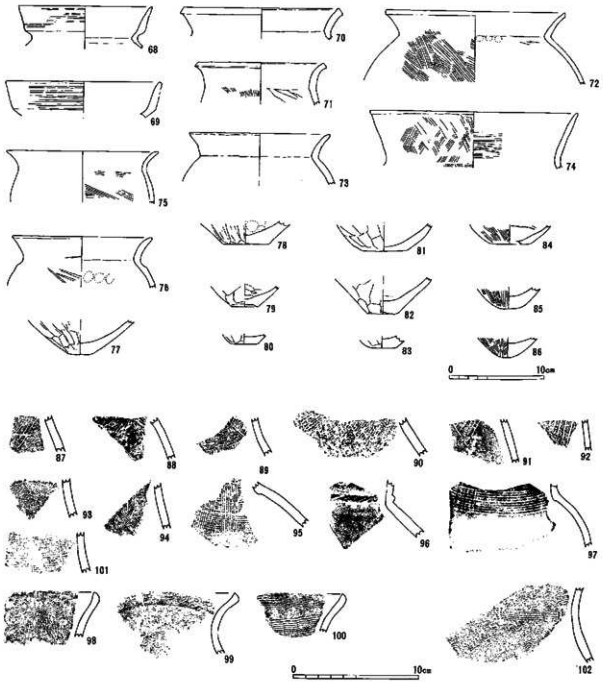
第67図　SD09出土土器拓影（1：4）



第68図　遺構外出土土器実測図1（1：4）



第69図　遺構外出土土器実測図２・拓影（１：４）

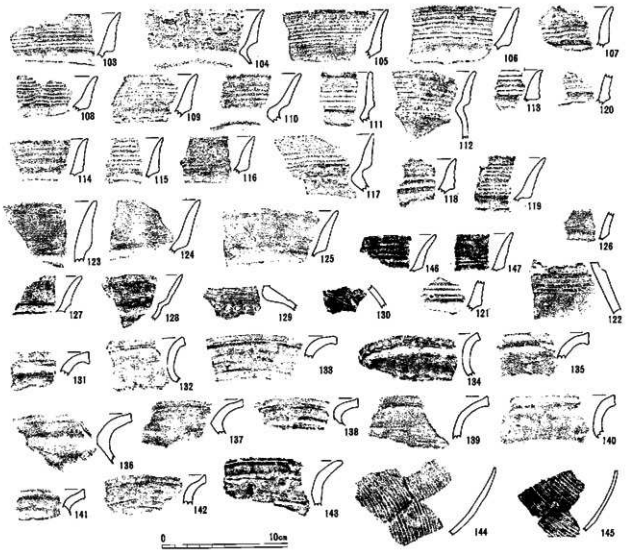


第70図　遺構外出土土器実測図3・拓影（1：4）

2　遺構外出土遺物（第68～71図　PL.26・27・28・29）

遺構検出時及び平安時代以後の各遺構から出土した土器である。弥生後期終末～古墳前期のものは調査区東の丘陵端部周辺からが多く、ことに北陸地域に系譜をもつ土器群（第70～71図）は各住居に帰属していたとみられる。

壺では、細頸で口縁が緩く外反し体部下半が立ち気味になり無花果型の器形になるもの（1・3・5・9・10・87～93）と、頸部の屈曲が強く口縁が外反し球形の体部器形になるもの（4・6・7・8・95・97）とがある。前者が後期中葉、後者が後期終末に属する。1・3・5は頸部文様に櫛描横線文・鋸歯文



第71図　遺構外出土土器拓影（1：3）

・簾状文・波状文が、4・6・7はT字文が施文されている。また10にはヘラ描き沈線が斜状に施されている。後期終末期の壺には赤彩が見られなかったのも特徴のひとつである。北陸地域（18）と東海地域（19・96）に系譜をおく土器もある。

壺は在地（13～15・98～102）・北陸地域（16・17・68～86・103～143）・東海地域（144・145）のものがあり弥生後期中葉から終末に属する。北陸系土器はいくつかに分類され、詳細は次章に記す。144・145はS字口縁の壺でハケ調整が強く胎土も在地と異なる。

高杯は在地の形状（23・24）と外来の要素が取り込まれたもの（25～27）とがある。小型が多く、脚部に穿を有するもの（32）、焼成後に円孔を穿つもの（31）がある。122は脚部に多条沈線が施され、胎土も在地と異なる。

第1表　弥生時代後期～古墳時代前期遺物観察表

色調　A…褐色～明褐色　B…橙褐色　C…灰褐色～灰色　D…暗褐色～黒褐色　E…茶褐色
F…赤褐色　両者が見られるものはABなどと表示

胎土　ⓐ…石英・長石・チャート・茶色の小礫を多量に混入　在地の土器がもつ胎土
Ⓑ…在地がもつ胎土を基本にしているが比較的精選されているもの
Ⓒ…小礫がほとんど含まず精選された胎土をもつもの　搬入品と認識されるもの

S B02

遺物No.	器種	口径	底径	器高	残存度	色調	胎土	外面	内面	備考
1	壺	22.8			口縁部¼	B	ⓐ	ミガキ(縦位、口縁部)→ナデ	ナデ(口縁部)→赤彩	
2	甕				胴部½	AB	ⓐ	赤彩	ハケメ	炉体　被熱を多く受け て摩滅
3	壺	21.4			口縁部¼	B	ⓐ	ハケメ(縦位、頸部)→ナデ (口縁部)	ケズリ(頸部)→ミガキ (横位、口縁部) →ナデ	
4	台付壺				脚下半½	B	ⓐ	波状文→ミガキ (縦位)	ナデツケ	
5	壺		3.0		底部	D	ⓐ	ミガキ(縦位)　摩滅	ナデツケ　摩滅	
6	鉢	15.6	5.0	6.8	⅔	AB	ⓐ	ミガキ(横位、胴部)摩滅顕著	ミガキ(横位、胴部)摩滅顕著	
7	壺	4.6			¼	AB	ⓐ	ミガキ(口縁部)	指頭圧痕(口縁部)	
8	高杯	15.4			杯部⅔	B	ⓐ	沿おさえ(杯部下半)→ハケメ (斜位、杯部上半) →ナデ	ナデ	
9	高杯				脚部½	B	ⓐ	ミガキ(縦位、脚部)摩滅	絞り(下半部)　ナデ(脚端部)	

S B04

遺物No.	器種	口径	底径	器高	残存度	色調	胎土	外面	内面	備考
1	甕	16.2			¼	AB	ⓐ	ハケメ(斜位、横位、胴部) 擬凹線文(口縁部)	ナデ(口縁部・胴部)指頭圧痕	最小器厚3mm
2	壺	15.4			口縁部¼	AB	ⓐ	櫛歯縁文　ナデ(頸部)	ナデ	
3	壺	17.8			口縁部¼	AB	ⓐ	ナデツケ→ハケメ(横位) →ナデ	ナデ	口縁端部平坦
4	壺	16.8			口縁部¼	黒灰色	ⓒ	ナデツケ→ハケメ(斜位、横位、口縁端部)	ナデ	口縁端部外面平坦—尖底
5	壺			6.5	底部	AB	ⓐ	ミガキ　摩滅	摩滅	
6	壺		9.5		底部	AB	ⓐ	ミガキ(縦位)	ナデ	
7	高杯	24.6			口縁部¼	D	ⓐ	摩滅	ミガキ →ナデ	
8	高杯	16.6			杯部¼	AB	ⓐ	ミガキ(横位)→赤彩(杯部)	ミガキ(横位)→赤彩(杯部)	
9	高杯				¼	AB	ⓐ	ミガキ(縦位、脚部)	ナデ	
10	高杯				¼	B	ⓐ	ハケメ(斜位)→ミガキ (縦位、脚部)	ハケメ(縦位) →ナデ	
11	高杯				¼	B	ⓐ	ミガキ(縦位) →赤彩(脚部上部)	ナデ	穿孔4、三角窓4
12	高杯		10.3		¼	B	ⓐ	ミガキ(縦位、脚部上部・横位、脚部下部)→赤彩(脚部)		穿孔3
13	壺	3.6			⅓	AB	ⓐ	赤彩	ミガキ(横位)	
14	高杯				¼	AB	ⓐ	ミガキ→赤彩(杯部)	ミガキ	
15	有孔鉢				¼	AB	ⓐ	ミガキ	ミガキ	

S B05

遺物No.	器種	口径	底径	器高	残存度	色調	胎土	外面	内面	備考
1	壺	17.4			¼	B	ⓐ	ナデ　磨滅	ハケメ(横位、斜位、胴部) →ナデ	口縁端部平坦、胴部擬凹線
2	甕	15.6			¼	B	ⓐ	指頭圧痕(頸部、口縁部)→ハケメ(横位、頸部)→ナデ	ハケメ(横位、胴部) →ナデ	
3	壺	15.0			口縁部½	BD	ⓒ	ハケメ(斜位、横位) →ナデ	ハケメ(横位、口縁部)→ナデ	口縁端部平坦
4	甕	15.0			口縁部¼	BD	ⓒ	ハケメ(斜位、頸部)→ナデ	ハケメ(横位、口縁部)→ナデ	口縁端部平坦
5	甕			3.5	底部¼	D	ⓐ	ミガキ	摩滅	

S B05

遺物No.	器種	口径	底径	器高	残存度	色調	胎土	外面	内面	備考
6	壺		4.2		底部	B	⑥	ハケメ(斜位刷毛)	ハケメ	刺底部張付痕
7	高杯	21.8			¼	B	⑥	ミガキ(横位、口縁部・横多位、杯部)→赤彩	ミガキ(横位、口縁部・横斜位、杯部)→赤彩	No.8の脚部と接合か
8	高杯				脚部½	B	⑥	ミガキ(縦位、脚部・横位、縦位、脚部(矩))→赤彩	指痕圧痕→ナデ	三角窓No.7の杯部と接合か
9	高杯	18.6			½	BD	⑥	ハケメ(横位、口縁部)→ミガキ(横位、口縁部)→ナデ	ハケメ(横位、口縁部)→ミガキ(横位、口縁部)→ナデ	黒斑
10	高杯				杯部¼	E	⑮	ナデツケ　絞痕あり	ナデツケ	
11	小型装飾壺				杯部½	B	⑥	隆帯刻み→ミガキ(横位)→赤彩	赤彩	
12	甕	5.1			½	AB	⑥	ナデ　摩滅	ナデ　摩滅	

S B06

遺物No.	器種	口径	底径	器高	残存度	色調	胎土	外面	内面	備考
1	壺	23.0			口縁部¼	BD	⑩	ナデツケ→ハケメ(口縁部、頸部)→ナデ	ナデツケ(ハケ状工具)→ナデ(口縁部)	
2	壺	19.6			½	BD	⑥	ナデツケ→ハケメ(口縁部、頸部)→ナデ	ナデツケ(ハケ状工具)→ナデ(口縁部)	
3	壺	13.2			口縁部⅓	AB	⑥	ハケメ(縦位)→ナデ　ヘラ線状痕	ナデ	口縁部線状痕
4	高杯	19.6			杯部¼ 脚部½	AB	⑥	ミガキ(斜位)→ナデ→赤彩(杯部、脚部)	ミガキ(横位)→赤彩(杯部)	脚部粘土貼り
5	高杯				脚部⅔	AB	⑥	ミガキ(縦位)→赤彩　摩滅	ミガキ(縦位)→ナデ　摩滅	杯部はめ込み
6	高杯		10.8		脚部¼	AB	⑩	ミガキ(縦位、上部・横位、下部)→赤彩(脚部、杯部)ナデ(底部)	絞り→ナデ	
7	高杯		15.0		½	AB	⑥	ハケメ(縦位)→ミガキ(斜位)粗い	ハケメ(斜位)→ナデ	穿孔4　杯部はめ込み
8	高杯		11.6		½	AB	⑥	ハケメ→ミガキ	ハケメ(横位、斜位)	脚部穿孔4
9	高杯		9.0		脚部⅔	AB	⑥	ミガキ(縦位)　摩滅	ハケメ(横位)　ナデ摩滅	
10	器台		10.4		½	AB	⑥	ミガキ(縦位)→ナデ(端)→赤彩(脚部)	ハケメ(横位、脚部)→ミガキ(器内内面)→赤彩(器内内面)裾部面取り	穿孔4
11	鉢	12.8			口縁部⅓	AB	⑥	ナデ　摩滅	ナデ　摩滅	布目痕

S B07

遺物No.	器種	口径	底径	器高	残存度	色調	胎土	外面	内面	備考
1	高杯	12.8			口縁部	AB	⑥	ミガキ(横位)→赤彩　摩滅	赤彩　摩滅	
2	高杯				接合部	AB	⑥	ミガキ(縦位)→赤彩	ハケメ(横位)摩滅	杯部はめ込み

S B10

遺物No.	器種	口径	底径	器高	残存度	色調	胎土	外面	内面	備考
1	壺	16			口縁部⅓	B	⑥	ハケメ(横位)→ナデ	口縁部平坦、尖底状の口縁端となり内側にとびでる	

S B12

遺物No.	器種	口径	底径	器高	残存度	色調	胎土	外面	内面	備考
1	高杯	16.8	12.6	13.8	⅚	AB	⑥	ハケメ(縦位)→ミガキ(杯部下半、縦位、脚部)→ナデ(杯部)	ハケメ(横位、脚部)→ナデ(杯部上半、下半)	赤彩の可能性あり

S B28

遺物No.	器種	口径	底径	器高	残存度	色調	胎土	外面	内面	備考
1	壺	20.6			½	AB	⑤	波状文→鋸状文(7単位3段)→ナデ	既剥粗いハケメ→口縁ミガキ	口縁端部平坦　面取り
2	壺	12.4	6.4	12.9	⅚	AB	⑥	ミガキ(縦位、胴部下半)→櫛状文(8本2重)→波状文→ナデ(口縁部)　ミガキ(底部)	ナデツケ→ハケメ→ミガキ(口縁部)→ナデ(口縁端部)	外面張付痕

S B28

遺物No.	器種	口径	底径	器高	残存度	色調	胎土	外面	内面	備考
3	台付き壺	9.4			½	B	⑤	ミガキ(縦位、頸部下半)→波状文→櫛状文(8、3櫛止)→ナデ　摩滅	ミガキ(横位)	
4	台付き壺				½	B	⑤	ミガキ(縦位、頸部下半)→波状文　摩滅	摩滅	
5	甕		5.7		底部	DE	⑤	ミガキ	ナデツケ	
6	甕	12.8			口縁部½	AB	④	ナデ→四点波→口縁部擬凹線文	ケズリ→ナデ	口縁端部尖根
7	壺	16.8			口縁部½	AB	④	ハケメ→ナデ　摩滅	ナデ　摩滅	尖底の口縁、黒斑
8	甕	19.4			口縁部½	AB	④	ハケメ→ナデ　摩滅	ナデ　摩滅	口縁部黒斑　№22と同一個体の可能性あり
9	甕	19.0			口縁部½	AB	④	ハケメ(縦位)→ナデ	ハケメ(斜位)→ナデ	口縁端部平坦
10	甕	19.0			口縁部½	AB	④	ハケメ(縦位)→ナデ	ハケメ(横位・斜位)→ナデ	口縁端部平坦
11	壺				頸部¼	AB	④	ハケメ(縦位)→ミガキ→赤彩　摩滅	赤彩　摩滅	受口状口縁
12	小型壺	7.0	4.5		½	AB	④	ナデ	ナデ　赤彩	黒斑　(注)混入土器粉彩の底外観著
13	壺	(13.6)			口縁部¼	AB	④ 白色微粒子多量混入	摩滅	ナデ(口縁部)摩滅	外面黒斑　二重口縁壺と考えられる
14	壺	13.0			口縁部¼	A	④	ハケメ→ナデ	頸部ハケナデ→ナデ　口縁端部(強いナデ)	
15	壺	13.2			口縁部½	E	④	ハケメ→ナデ	ミガキ	
16	壺		3.6		¾	AB	④	密なハケメ(斜位、縦位、軍部)	ハケ様状痕　粗いハケメ	
17	壺		5.0		¼	AB	④	ミガキ(横位、頸部)→赤彩	摩滅	
18	壺		4.0		底部	E	④	ハケメ	ナデツケ	
19	壺		5.4		底部	AB	④	ミガキ(斜位)・赤彩	ハケメ一部あり	やや上底
20	高杯	21.6			杯部¾	BD	④	ミガキ(横位、外位、杯部上半)→赤彩	ミガキ(横位、杯部上半)→赤彩	
21	高杯	19.4			杯部¼	AB	④	ミガキ(横位、杯部下半・縦位、杯部上半)→赤彩	ミガキ(横位、斜位、杯部)→赤彩	
22	高杯	17.2			口縁部¾	AB	④	ハケメ(斜位)→ミガキ(縦位、斜位)→ナデ	ナデ　摩滅	黒斑、赤彩があった可能性あり
23	高杯	13.0			¼	AB	④	ミガキ(横位、脚部)→赤彩	ミガキ(横位、脚部)→赤彩	口縁内湾気味
24	高杯	15.2			口縁部●	赤色	④	ミガキ→赤彩	ミガキ→赤彩	
25	高杯				接合部	AP¾	④	ミガキ(縦位、杯部、脚部)→赤彩	ミガキ(横位、杯部)→赤彩(杯部)摩滅	
26	高杯				接合部	AB	④	ミガキ(縦位)→赤彩　摩滅	ナデ(脚部)→赤彩(杯部)摩滅	
27	高杯				脚部¼	AB	④	ミガキ(縦位、脚部)→赤彩　摩滅	ナデ(脚部)→赤彩(杯部)摩滅	粘土接合脚部から
28	高杯				接合部	AB	④	ハケメ→ミガキ　摩滅	ナデ(杯部)絞り(脚部)摩滅	円孔
29	高杯		11.6		脚部¾	B	④	ミガキ(縦位、脚部下半・横位、脚部下半)→赤彩　摩滅	摩滅	
30	高杯		10.4		脚部¾	BD	④	ミガキ(縦位、脚部上半・横位、脚部下半)→赤彩	ナデ(脚部下半)絞り	
31	高杯				脚部½	B	④	ミガキ(斜位、脚部上半)摩滅	ナデ(脚部)摩滅	
32	高杯				脚部½	AB	④	ミガキ(縦位、斜位、脚部)摩滅	絞り　摩滅	
33	鉢	12.6	4.8	6.5	⅞	B	④	ミガキ(横位、杯部上半)→赤彩	ミガキ(横位)→赤彩	
34	器台		21.0		脚部	AB	⑤	ハケメ(斜位)→ヘラ描沈線文・ヘラ描縦線文ミガキ(縦位)→ナデ	指頭圧痕→ミガキ(縦位)・ナデ	方形窓4

S B28

遺物No.	器種	口径	底径	器高	残存度	色調	胎土	外面	内面	備考
35	器台		19.0		脚部½	A B	⑤	摩滅	摩滅	
36	壺	4.4	9.6	6.5	⅔	A B	⑤	ハケメ(縦位、上半部)→ナデ	ナデ	
37	壺	4.0			½	A B	⑤	ミガキ(横位、胴部)→ミガキ(縦位、口縁部)摩滅	ミガキ(斜位、横位)→ナデ 赤彩 摩滅	中央部穿孔
38	蓋				⅓	A D	⑤	ミガキ→赤彩	ナデ	
39	器型土器 ミニチュア	2.8			摘み部	A B	⑤	粗いミガキ(縦位)	ナデ　ツメ痕	
40	銅鏡	厚 0.15			½	摩滅				

S B29

遺物No.	器種	口径	底径	器高	残存度	色調	胎土	外面	内面	備考
1	壺	14.2			口縁部⅓	A B	⑤	擬凹線文→赤彩	赤彩	
2	壺	11.4			口縁部	A B	⑤	ハケメ(斜位)→ナデ	ナデ	
3	高杯	21.6			⅙	B	⑤ 雲母	ナデ→赤彩　摩滅	ミガキ	
4	高杯	25.0	18.4		杯部½ 脚部¼	A B	⑤	ミガキ(横位、杯部上半、下半脚部)摩滅	ナデ　ミガキ　摩滅	
5	壺	1.8			摘み部	A B	⑤	ミガキ(横位)	ミガキ(斜位)	
6	壺				摘み部	A B	⑤	ミガキ(横位、摘み上面)→赤彩	指頭圧痕(波形状)摩滅	
7	小型	8.2			胴部下半	B	④	赤彩　摩滅	ハケ　摩滅	

S B32

遺物No.	器種	口径	底径	器高	残存度	色調	胎土	外面	内面	備考
1	鉢	23.1	3.6	6.0	⅚	A B	⑤	ミガキ→ナデ	ミガキ(横位)摩滅	

S B34

遺物No.	器種	口径	底径	器高	残存度	色調	胎土	外面	内面	備考
1	壺	18.3			口縁部⅓	B	⑤	ミガキ(縦位)頸部、胴部横線文(10)・沈彩　摩滅	摩滅	
2	壺		9.0		底部⅓	B	④	ミガキ(縦位、胴下半・端位、胴中央)→赤彩　摩滅	摩滅	
3	甕	15.2			口縁部½	B	④	櫛描文(波状文)口縁部→鋸状文、胴部→ナデ	ミガキ(横位)	
4	壺		10.2		½	B	⑤	ミガキ(斜位、縦位、胴下半)摩滅	摩滅	黒斑
5	甕		7.0		底部	B	④	ミガキ(縦位、底下半)	ナデツケ	内面　煤付着

S B35

遺物No.	器種	口径	底径	器高	残存度	色調	胎土	外面	内面	備考
1	甕	11			⅙	B	④	ハケメ(水位、縦位、胴部下半)→ナデ(口縁)	ハケメ(斜位、横位、胴部下半)→ナデ(口縁部)	

S B36

遺物No.	器種	口径	底径	器高	残存度	色調	胎土	外面	内面	備考
1	壺	11.4			口縁部½	B	④ 雲母	ミガキ(横位)→ナデ	ミガキ(横位)→ナデ	
2	壺				胴部½	A B	④	ミガキ(横位)	ナデ	
3	高杯		10.8		脚部½	A B	大粒の白色チャート混入	ミガキ(縦位)	ミガキ　摩滅	
4	小型高杯		12.0		脚部	A B	④	ヘラ描線状痕	ハケメ(斜位)	黒斑
5	高杯		13.0		脚部	A B	④	摩滅	摩滅	
6	壺		4.0		底部½	A E	④	ハケ	摩滅	
7	壺	摘み部 1.8			摘み部	D	④	指頭圧痕→赤彩、上面平坦面	赤彩	

S B36

遺物No.	器種	口径	底径	器高	残存度	色調	胎土	外面	内面	備考
8	壺	摘み部 2.6			摘み部	AB	⑤	ミガキ(横位)→赤彩、上面平坦面		
9	甕		9.2		⅙	AB	⑩	ミガキ(横位)→ナデ(頸)	ミガキ(横位)	黒斑

S B37

遺物No.	器種	口径	底径	器高	残存度	色調	胎土	外面	内面	備考
1	壺	16.0			口縁部⅙	B	⑤	ハケメ(斜位)→ナデ　頸部粘土帯	ナデ	
2	壺				頸部⅓	B	⑥	ハケメ	ハケメ→ミガキ(頸部下半)→ナデ	
3	壺		5.0		⅓	B	⑤	ハケメ(縦位)→赤彩　摩滅	摩滅	炭化物付着
4	壺		8.2		底部	BD	⑩	指頭圧痕(底部)→ミガキ(横位、胴下半)→赤彩	指頭圧痕→ハケメ(横位)	煤付着　黒斑
5	甕	9.6			⅙	B	⑤	ナデ　摩滅顕著	ナデ　摩滅顕著	粘土　白斑色　チャート多量混入　石墨系
6	壺	12.6		11.1	⅓	B	⑥	ハケメ(横位、斜位、胴部)→ナデ(口縁部、頸部)　ケズリ(底部)	ナデ　摩滅	丸底、黒斑　底部板痕あり
7	壺	15.1			⅙	B	⑩	櫛円線文	ナデ	
8	壺	15.2			口縁部⅙	D	⑩	ナデ	ナデ	
9	壺	18.4			⅙	B	⑤	ハケメ(縦位、頸部・横位、胴部上半)→ナデ	ハケメ(横位、胴上半)→ナデ	
10	S字状口縁台付壺	14.2			口縁部⅙	B	⑥	ハケメ(斜位、胴部上半)→ナデ	ハケメ(横位、頸部)→ナデ	小破片の為復元に無理がある
11	壺	19.2			口縁部⅙	B	⑤	ナデ→ハケメ	ナデ	
12	壺		3.1		底部	D	⑤	ハケ　摩滅	摩滅	左右の歪みあり
13	壺		5.4		底部	A	⑤	ナデ	摩滅	
14	高杯				杯部⅙	B	⑤	ミガキ(横位、杯部下半・斜位、杯部下半)→赤彩	ミガキ(横位、杯部上半・斜位、杯部下半)→赤彩	
15	高杯				脚部上半	B	⑤	摩滅	絞り　摩滅	穿孔3、杯部接合部で欠損
16	器台				接合部	B	⑤	ミガキ(縦位、斜位)→赤彩	ハケメ(横位)→ナデ(脚部)→ミガキ(横位)→赤彩(杯部)	穿孔3
17	蓋	3.4			摘み部	B	⑤	ミガキ	ナデ・ケケ	
18	管玉		長 2.5 径 0.7		光在	両面穿孔　緑色凝灰岩				

S B38

遺物No.	器種	口径	底径	器高	残存度	色調	胎土	外面	内面	備考
1	甕		8		⅓	AB	⑤	ミガキ(縦位、胴部下半)	ミガキ(斜位、胴部下半)指頭圧痕	
2	高杯				⅙	AB	⑤	ナデ→赤彩(脚部上半)摩滅	ナデ　摩滅	
3	土製円盤	径 3.6~3.9 厚 0.6			完存	AB	⑤	ミガキ	ハケ	壺破片の転用
4	土製円盤	径 3.6 厚 7.5			光在	AB	⑤	摩滅	摩滅	壺破片の転用

S B39

遺物No.	器種	口径	底径	器高	残存度	色調	胎土	外面	内面	備考
1	壺	19.0			⅓	AB	⑤	ハケメ(斜位)→ヘラ描波状文→ナデ	弱いケズリ→ナデ　口縁部ヘラミガキ(横位)	焼成良好　外面　煤付着
2	高杯				杯部⅓	AD	⑩	ミガキ	摩滅	
3	高杯				杯部⅓	AB	⑤	ミガキ→赤彩	ナデ	
4	高杯				脚部⅓	B	⑤	ミガキ(縦位、斜位)→赤彩	絞り	
5	高杯				底部接合部	B	⑤	ミガキ→赤彩	ハケメ(横位)	

S B41

遺物No.	器種	長	径	残存度	備　考
1	管玉	1.9	0.6	完存	片面穿孔　緑色凝灰岩

S B42

遺物No.	器種	口径	底径	器高	残存度	色調	胎土	外　面	内　面	備　考
1	壺	14.0			¼	B	⑤	ミガキ(斜位、胴部)横ナデ	ハケメ(斜位、横位、口縁部)→ナデ	頸部に指頭圧痕
2	甕	22.6			口縁部¼	BD	④	ハケ→ナデ	ハケ→ミガキ→ナデ	輪積痕
3	甕	19.8			口縁部¼	BD	⑤	ナデ(口縁部)　ケズリ(胴部)	ナデ	
4	甕	15.9			口縁部⅓	B	⑤	ハケメ(横位、頸部) 櫛刺縄文(口縁部、ハケ状工具による)	ケズリ	
5	甕	21.0			口縁部⅓	BD	⑤	ナデ	ナデ	
6	甕		2.6		底部	AB	④	ケズリ		煤付着
7	甕		3.4		底部	AB	④	ハケメ(斜位)→ナデ	ナデ	
8	小型丸底鉢	14.0			⅓	B	⑤	摩滅	摩滅	
9	高杯				脚部½	B	⑤	ハケ(縦位)→ミガキ(不明) →赤彩(脚部上半) 指頭圧痕	赤彩(杯部)	
10	高杯				脚部	B	④	摩滅	絞り　摩滅	
11	小型高杯				脚部⅓	AB	⑤	摩滅	ハケメ(斜位、脚部ド半)摩滅	
12	小型丸底		1.4		底部	C	④	ケズリ→ミガキ(横位)	ミガキ(横位)	
13	器	2.4			摘み部	B	④	ナデ、指頭圧痕　摩滅	摩滅	煤付着
14	ミニチュア		2.8		底部	B	④	ナデ　指頭圧痕		

S B54

遺物No.	器種	口径	底径	器高	残存度	色調	胎土	外　面	内　面	備　考
1	甕	34.2			口縁部⅔	B	④	ミガキ(縦位)　3箇止→簡描文(簾状文、波状文)→ナデ口縁端部	ハケメ(横位)→ミガキ(横位)	
2	甕				頸部	AB	④	櫛描波状文、口縁部、櫛描簾状文　頸部　櫛描波状文　胴部	摩滅	
3	壺		5.0		胴部下半½	AB	④	ミガキ(胴部下半)摩滅(底面)	摩滅	
4	高杯	22.8			口縁部⅓	F	④	ミガキ(縦位)→ナデ(口縁端部)→赤彩	ミガキ(横位)→ナデ(口縁端部)→赤彩	
5	小型高杯				底部	AB	④	ミガキ(縦位)	ミガキ(横位)	

S B62

遺物No.	器種	口径	底径	器高	残存度	色調	胎土	外　面	内　面	備　考
1	壺		5.0		底部	B	④	ミガキ→ナデ	ハケメ	
2	壺				胴部上半½	DB	④	櫛状文→ミガキ	ナデツケ	

S B68

遺物No.	器種	口径	底径	器高	残存度	色調	胎土	外　面	内　面	備　考
1	甕	18.0	6.2	(21.6)	½	AD	④	ハケメ(斜位、横位)→ナデ	ナデツケ　ハケメ(口縁部) ナデ(口縁端部)	二器の歪み顕著、底部との接合不明
2	甕	20.4	6.2	(28.6)	¾	BD	④	ハケメ→ナデ	ハケメ→ナデ	
3	甕	24.0			口縁部½	B	④	波状文→簾状文→ナデ(口縁端部)	ハケメ→ミガキ	
4	高杯	13.0			¼	F	④	ミガキ(横位、斜位)→ナデ(口縁端部)→赤彩	ナデ(口縁端部)→赤彩	

S K112

遺物No.	器種	口径	底径	器高	残存度	色調	胎土	外面	内面	備考
1	壺	13.2			½	B	⑥	ナデ　摩滅	ハケメ（口縁部）ナデ（口縁端部、胴部）指頭圧痕	輪積痕

S Q10・12

遺物No.	器種	口径	底径	器高	残存度	色調	胎土	外面	内面	備考
1	壺				頸部	淡橙褐色	④	ハケ→ミガキ→赤彩→横線文→櫛描波状文	ハケ→赤彩（上部）	
2	台付壺	13.2	5.0	13.4	⅔	淡橙褐色	④	櫛状文→波状文　摩滅	ハケ　摩滅	
3	壺				胴下半⅔	D	⑤	波状文→ミガキ	ミガキ	
4	壺	12.0			口縁部	B	⑥	ハケメ（横位、口縁・斜位、頸部）→ナデ（口縁端部）摩滅	ミガキ（横位、口縁部）摩滅	
5	頸口壺				頸部	B	⑥	ハケメ（縦位）→ミガキ不明（縦位）摩滅	ミガキ　摩滅	
6	壺	20.4			口縁部⅙	B	④	ハケメ（横位、口縁部・斜位、頸部）→ナデ（口縁部）	ナデツケ	
7	小型高杯		13.5		杯部 脚部½	B	⑥	摩滅	ハケ残存（脚部）摩滅	

S D09

遺物No.	器種	口径	底径	器高	残存度	色調	胎土	外面	内面	備考
1	壺	23.0			口縁部⅚	A	④	ハケメ→ナデ（口縁端部）	ミガキ→赤彩	吉田
2	壺				底部⅚	B	④	ミガキ（横位、胴部）→櫛描文（横線文）→赤彩	ハケメ	黒斑
3	壺	10.0			口縁部	B	④	ミガキ（横位、口縁部・縦位、頸部・斜位、胴部上半）→赤彩	ミガキ（横位、口縁部、頸部）→ナデ（胴部上半）→赤彩（口縁部、頸部）	
4	壺				頸部¼	A	⑤	ミガキ→赤彩	ミガキ→赤彩	
5	壺				口縁部¼	B	④	摩滅	ナデ　摩滅	
6	壺		8.6		底部	B	⑥	ミガキ→ナデツケ 軟土器残存	ナデツケ	
7	高杯				底部¼	B	④	ミガキ（縦位、胴部下半）→赤彩	赤彩	
8	高杯	20.4			¼	A	④	ミガキ→ナデ→赤彩	ミガキ→ナデ→赤彩	
9	高杯	20.4			杯部¼	A	⑤	ミガキ→赤彩	ミガキ→赤彩	
10	高杯				杯部½	B	④	ミガキ（斜位、杯部・縦位、接合部）→赤彩（杯部）	ミガキ（横位、斜位）→赤彩（杯部）	内面煤付着
11	高杯				杯部¼	E	⑤	ミガキ→赤彩　摩滅	ミガキ→赤彩　摩滅	
12	高杯		13.0		脚部	灰白色	⑤	赤彩　摩滅	摩滅	
13	高杯				脚部⅚	B	④	ミガキ（縦位）→赤彩	ナデ	杯部接合ツブシ
14	高杯				脚部⅚	B	⑤	ミガキ（縦位）キザミ（脚部下半）	摩滅	有段部下円孔
15	高杯				脚部¼	B	④	ハケメ→ミガキ（斜位、底部）	ハケメ（横位）	穿孔4
16	高杯		14.0		脚部¼	B	④	ミガキ（横斜位、脚部ド半）→ナデ	ナデ　ヘラ先状痕	
17	高杯				接合部	B	④	ミガキ（縦位）→赤彩（接合部）	赤彩（杯部）	
18	高杯				接合部	B	④	摩滅	摩滅	
19	高杯				脚部¼	B	④	摩滅	ナデ　摩滅	
20	高杯	20.7			杯部¼	A	④	摩滅顕著	摩滅顕著	
21	高杯	19.6			杯部	AB	④	ミガキ（斜位）→ナデ（口縁端部）	ミガキ（斜位）	

SD09

遺物No	器種	口径	底径	器高	残存度	色調	胎土	外面	内面	備考
22	高杯				杯部¼	B	⑥	鉄分の黒積出現により不明	ミガキ→ナデ	脚部接合部で欠損
23	高杯				脚部⅔	B	⑥	ミガキ（縦位）	絞り　輪積痕	
24	高杯				脚部⅔	B	⑥	ハケ　摩滅	絞り　輪積痕　摩滅	
25	高杯				脚部¼	B	⑥	摩滅	粘土帯に指頭圧痕　摩滅	
26	ミニチュア	6.6	3.2	4.2	⅔	D	⑥	ナデ（口縁端部）指頭圧痕　摩滅	摩滅	
27	小型丸底				ほぼ完存	B DE	⑥	摩滅	摩滅	輪積痕
28	小型丸底	10.2		9.6	½	AB	⑥	摩滅	摩滅	
29	壺	28.4			口縁部	AD	⑥	ハケメ→ミガキ→波状文→簾状文（2）→ナデ（口縁端部）	ミガキ→ナデ	
30	壺	21.4			⅓	A	⑥	簾状文（櫛描2段7）→波状文→ナデ（口縁端部）	摩滅	
31	壺	22.6			¼	BE	⑥	簾状文（9）→波状文（7）→ナデ（口縁端部）	ミガキ→ナデ（口縁端部）	
32	壺	24.0			口縁部⅔	E	⑥	肩接横線文→波状文→ナデ（口縁端部）	ミガキ→ナデ（口縁端部）	
33	壺	21.6			口縁部⅓	E	⑥	簾状文（7）→波状文→ナデ	ミガキ→ナデ	
34	壺	23.6			⅓	DE	⑥	ハケメ→波状文→簾状文→ナデ（口縁端部）	ミガキ→ナデ（口縁端部）	
35	壺	20.8			口縁部½	CD	⑥	簾状文（2・3）→波状文→ナデ	ハケメ→ナデ	
36	壺	19.0			口縁部¼	A	⑥	波状文・簾状文（7）・ナデ（口縁端部）	摩滅	
37	壺				⅓	BD	⑥	ハケメ（斜位、胴部）→波状文（胴部上半）→簾状文（8、4簾胴部）	ハケメ（口縁部、胴部）→ミガキ（口縁部）	
38	壺				胴部½	BD	⑥	櫛描横線文（12）→波状文（12）	ハケメ→ミガキ　摩滅	
39	壺				頸部⅔	B	⑥	波状文（口縁部、胴部上半）→簾状文（頸部）	ミガキ　ハケメ残存　摩滅	煤付着
40	壺				頸部½	D	⑥	ハケメ→櫛描格子（9～11）→横線文	ハケ	
41	壺	14.4	5.4	18.0	¾	BD	⑥	ミガキ（底部下半、底部）・波状文・簾状文（2段2重止）→ナデ（口縁端部）	ハケメ（横位、斜位）・ミガキ（口縁、胴部）→ナデ	黒斑
42	壺	13.2			½	D	⑥	ミガキ→波状文→簾状文→ナデ（口縁端部）	ミガキ→ナデ	
43	壺	11.7	5.8	10.5	½	B	⑥	ミガキ（縦位、底部下半）→波状文（8）→ナデ（口縁端部）	ナデ	黒斑
44	壺	10.4			口縁部½	D	⑥	波状文・簾状文（3連止）	ミガキ	
45	壺	12.2			½	DE	⑥	簾状文（2連止）→波状文→ナデ	ミガキ→ナデ→ミガキ	
46	壺		5.0		胴部下半½	AB	⑥	ミガキ（横位、縦位、胴部下半）・波状文	ミガキ（横位）	
47	壺		6.6		胴部½	AB	⑥	ミガキ（縦位、胴部下半）→波状文（7～9）	ハケメ→ミガキ	
48	壺				胴部下半½	B	⑥	ハケメ→ミガキ（斜位、胴部下半）・波状文	ミガキ（横位、胴部下半上、斜位、胴部下半上）	
49	壺	16.6			ほぼ完存	B	⑥	ハケメ（斜位）→ミガキ→ナデ（口縁部）	ハケメ（横位、斜位）	
50	壺	13.5			口縁部½	AB	⑥	ナデツケ→ハケメ→ナデ	ナデツケ→ナデ	
51	壺	17.0			口縁部	AB	⑥	ハケメ→ナデ	ハケメ→ナデ	

SD09

遺物No	器種	口径	底径	器高	残存度	色調	胎土	外　面	内　面	備　考
52	甕	21.8			口縁部1/3	B	⑥	ナデ	ハケメ	
53	甕	14.6			3/4	AB	⑥	ハケメ（斜位、胴部）→ナデ（口縁部）	ナデ	口縁端部平坦面ナデ
54	甕	17.5			口縁部1/2	B	⑥	ハケメ→ナデ	ハケメ→ナデ	
55	甕	15.0			口縁部2/3	B	⑥	ハケメ→ケズリ→ナデ	ナデ	
93	管玉	長 1.8 径 0.5			残存完存	両面穿孔　緑色凝灰岩				

遺構外

遺物No	器種	口径	底径	器高	残存度	色調	胎土	外　面	内　面	備　考
1	壺	18.8			口縁部1/4	AB	⑥	ヘラ描沈線文→櫛描横線文	赤彩	
2	壺	27.0			口縁部1/8	A	⑤	ミガキ→赤彩	ミガキ→赤彩	折り返し口縁
3	壺				頸部	B	⑥	櫛状文→ミガキ（縦位、胴部）→赤彩	ハケ状工具の調整痕	
4	壺				1/4	BD	⑥	T字文（頸部）　ナデ（肩部）　やや摩滅	やや摩滅	縦位溝
5	壺				胴部1/3	A	⑥	櫛描波状文→ミガキ→赤彩	摩滅	
6	壺				胴部1/4	B	⑥	T字文→ミガキ（横位）	ナデ	
7	壺				1/2	A	⑥	ミガキ→T字文（10）	ミガキ→ナデツケ	
8	壺		3.5		底部2/3	C	⑥	ハケメ→ミガキ　赤彩	摩滅	
9	壺				胴部下半	A	⑥	摩滅	ハケメ	
10	壺				胴部下半1/4	A	⑥	ハケ（斜位）→ヘラ描文　ミガキ	摩滅	吉田
11	二重口縁壺				頸部1/4	AB	⑥	摩滅	摩滅　指頭圧痕	
12	小型壺				胴部1/4	AB	⑥	ナデ	ナデ	
13	壺	23.6			口縁部1/4	B	⑥	波状文9～10（口縁、胴部上半）→櫛状文10、3重止（頸部）→ナデ（口縁端部）	ミガキ（横位）	
14	壺	10.4			1/6	B	⑥	波状文→櫛状文→ナデ	ナデ　指頭圧痕	弥生後期　黒斑
15	壺	15.8			口縁部1/2	AB	⑥	波状文（口縁部）→櫛状文2重（頸部）→ナデ（口縁端部）	ミガキ（横位）→ナデ　摩滅	弥生後期
16	壺	20.0			口縁部1/4	B	⑥	ナデ	ナデ	
17	壺	19.0			口縁部1/2	B	⑥	ナデ（横位）	ナデ（横位）	
18	壺	14.2			口縁部1/4	AB	⑥	擬回線文→赤彩	赤彩	
19	壺				頸部1/4	E	⑥	ミガキ→櫛描横線文（10～11）→ハケ 斜突文2段　円形刺突文 頸部	ハケメ→ナデ	
20	壺		4.5		底部	B	⑥	ミガキ	ハケメ→ミガキ	
21	壺		6.2		底部	B	⑥	ハケメ→ミガキ	ケズリ	
22	壺		4.2		底部	B	⑥	ミガキ	（ナデツケ）	
23	高杯	22.0	11.6		3/5	AB	⑥	赤彩　摩滅	ハケメ（横位、胴部） 赤彩（杯部）摩滅	
24	高杯	20.0			杯部	AB	⑥	ハケメ（縦位）→ミガキ（横位）→赤彩　摩滅	ミガキ（横位）→赤彩	
25	高杯	18.2			杯部1/6	AB	⑥	ミガキ（横位、斜位）→口縁端部ナデ→赤彩	ミガキ（斜位）→赤彩	
26	高杯	16.4	10.0	10.6	5/6	B	⑥	ミガキ（横位）→ナデ→赤彩	ミガキ（横位）→ナデ（杯部）→赤彩（杯部）	
27	高杯				杯部1/6	外B 内黒色	⑥	ハケメ→ミガキ→ナデ	摩滅	
28	鉢	12.0			口縁部1/6	C	⑥	赤彩　摩滅	ミガキ→赤彩	口縁部　穿孔2
29	高杯				接合部3/4	EF	⑥	ミガキ（縦位、赤位）→赤彩	ミガキ（杯部）→赤彩（杯部）ナデ（脚部）	方形窓

遺構外

遺物No.	器種	口径	底径	器高	残存度	色調	胎土	外面	内面	備考
30	高杯				杯部 接合部	B	⑤	ミガキ（横位）→赤彩	ミガキ（横位）→赤彩	黒斑
31	高杯				脚部	AB	②	ミガキ（縦位）→赤彩	ハケメ	穿孔
32	高杯				接合部 脚部	AB	⑤	ハケメ→ミガキ（縦位、脚上部）→赤彩	ナデ　絞り（脚部）	脚部に穿あり
33	高杯				接合部	AB	②	ミガキ（斜位）→赤彩	赤彩（杯部）	
34	高杯				脚部	F	②	ミガキ・赤彩	赤彩（杯部）摩滅	
35	高杯				接合部	B	②	ハケメ（横位）→ミガキ（斜位）→赤彩	ハケメ（横位）→ミガキ（脚部）→赤彩（杯部）	
36	高杯				接合部	B	⑥	ミガキ（横位、斜位）→赤彩	ナデ	穿孔
37	高杯				接合部	AB	⑥	摩滅	摩滅	
38	高杯		9.6		接合部 脚部	AB	⑥	ミガキ（横位接合部）摩滅	ナデ（脚部）摩滅	
39	高杯				脚部	F	②	ミガキ→赤彩	ナデツケ　棒状圧痕残存	
40	高杯				接合部	B	②	ミガキ（斜位）→赤彩　摩滅	指頭圧痕→ナデ（横位）摩滅	
41	高杯				接合部	B	⑥	ミガキ（縦位）→ナデ（横位）→赤彩	ナデ→赤彩（杯部）	
42	高杯				接合部	AB	②	ミガキ（斜位）→ナデ（横位）→赤彩	ナデ（脚部）赤彩（杯部）	
43	高杯				接合部	B	②	ハケメ（縦位）→ミガキ	ナデ（杯部、脚部）絞り	
44	高杯		6.8		脚部	AB	⑤	ミガキ（縦位）→ナデ（脚部縦）	ナデ	
45	高杯				接合部	B	②	ミガキ（斜位）摩滅	ミガキ→ナデ　摩滅	
46	高杯				接合部	AB	⑤	ハケメ（斜位）	ハケメ（斜位）	
47	高杯		11.0		脚部	BD	⑥	ミガキ（斜位）→赤彩	ナデ	
48	高杯				接合部	B	⑤	ミガキ（斜位）摩滅	ナデ（脚部）摩滅（杯部、脚部）	穿孔
49	壺				2/3	A	②	赤彩	ミガキ→赤彩	貫通する穴
50	壺	2.0	4.5	3.0	1/2	B	②	指頭圧痕	ハケメ（横位）	ミニチュア
51	壺				1/2	AB	⑤	ハケ→ミガキ（縦位）→ナデ（縦位）摩滅	ミガキ（斜位）→ナデ　赤彩　摩滅	
52	高杯				接合部	BD	⑥	ミガキ（縦位、脚部、杯部）	ミガキ（縦位、杯部）ナデ（脚部）	
53	壺				頸部	F	⑥	ミガキ　赤彩		
54	壺	2.6			頸部	AB	②	ミガキ　摩滅	ナデ　摩滅	内面接合痕
55	器台				接合部	AB	②	ミガキ（斜位）→赤彩	ナデ	穿孔
56	器台				接合部	AB	②	ミガキ	ナデ	穿孔3
57	器台	9.0			杯部1/4	A	⑥	摩滅	摩滅	
58	器台		15.8		脚部1/4	A	②	ミガキ	摩滅	
59	高杯				接合部	AB	⑥	ミガキ（縦位）摩滅	絞り　摩滅	
60	高杯				脚部	F	⑥	ハケ	ナデツケ	
61	不明 （装飾壺）				頸部1/4	AB	②	キザミ→ミガキ（横位）・ナデ・赤彩	赤彩	
62	小型丸底	8.7	6.9		2/3	D	⑥	ミガキ（頸部）→ハケ→ナデ（口縁端部）	ハケ→ナデ	
63	坩				底部3/4	A	②	ミガキ	ハケ	
64	有孔鉢		5.0		底部	AB	⑥	ミガキ（縦位）　摩滅	摩滅	穿孔焼成前
65	有孔鉢		2.4		耳部	E	②	ハケメ	ミガキ	底部穿孔径0.8
66	鉢	15.8			1/2	B	⑥	ミガキ・赤彩	ミガキ→赤彩	
67	鉢	11.3		5.9	2/3	D	⑥	ケズリ→ミガキ　摩滅	ハケ→ミガキ　摩滅	

遺構外

遺物No.	器種	口径	底径	器高	残存度	色調	胎土	外面	内面	備考
68	甕	14.0			口縁部¼	A	⑥	強凹線文　摩滅	摩滅	
69	甕	16.4			口縁部⅙	B	⑥	強凹線文　摩滅	摩滅	
70	甕	16.4			口縁部⅙	B	⑥	ナデ	ナデ	
71	甕	13.2			口縁部	AB	⑥	ハケメ（縦位）→ナデ（口縁部）	ナデツケ（胴部）→ナデ（口縁部）	
72	甕	18.6			胴部⅔	B	⑥	ハケメ（斜位、胴上半）→ナデ 口縁端部平坦	指頭圧痕　ナデ	
73	甕	15.0			口縁部¼	D	⑥	ナデ	ナデ	
74	甕	21.8			口縁部⅙	D	⑥	ハケ	ハケ→ナデツケ	
75	甕	16.0			口縁部¼	E	⑥	摩滅	ハケ	
76	甕	14.6			口縁部	AB	⑥	ハケ（斜位）	指頭圧痕　ナデ	
77	甕		2.2		⅛	AB	⑥	ケズリ（脚部下半）	摩滅	
78	甕		4.8		⅛	B	⑥	ケズリ（胴部下半）	ナデ　指頭圧痕	やや上底
79	甕		2.8		底部	BD	⑥	ケズリ	指頭圧痕	上底
80	甕		2.7		底部	B	⑥	ケズリ→摩滅	ナデ	
81	甕		5.0		⅛	B	⑥	ケズリ（胴部下半）	ナデツケ	
82	甕		4.4		底部¼	B	⑥	ケズリ→ハケメ（斜位、胴部下半）	ハケ	底面ケズリ
83	甕				底部	AB	⑥	ケズリ		
84	甕		2.6		底部	AB	⑥	ケズリ	ナデ　摩滅	底穴
85	甕		1.0		底部	B	⑥	ケズリ→ハケメ（縦位）	ケズリ	丸底
86	甕		1.5		底部	AB	⑥	ケズリ→ハケメ（斜位）	ナデツケ	丸底
122	器台				⅛	C	⑥	赤彩　沈線（4）	ハケ（斜位）	

出土土器拓影のなかで在地の胎土をもたないもの。

SB28－60・61…高杯　　SB37－18…甕　　SB39－8…甕　　遺構外－128…甕

遺構外－144・145…S字甕

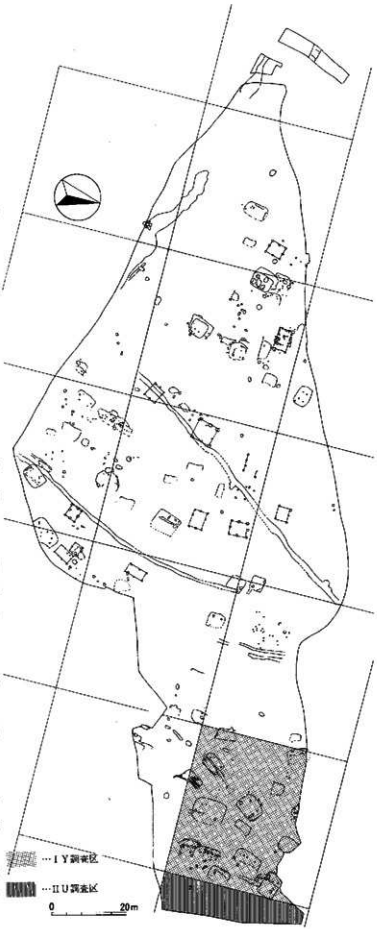
第４節　古墳時代中期

遺物の分布：この期の遺構は認められない。ただし、遺物のみが東端のグリッドⅡU・グリッドⅠYからまとまって出土しており、前者からの出土が多い。前節で扱った古墳時代前期とは遺物及び遺構の分布範囲とも異なっており、地形的にみると丘陵部から低地（石川条里遺跡）への転換点に位置している。その石川条里遺跡の調査は県埋文センターにより昭和63年度より始まったが、弥生時代から中世にわたる水田遺構が検出され、この一帯が集落部分と生産地部分の境界になることが判明した。

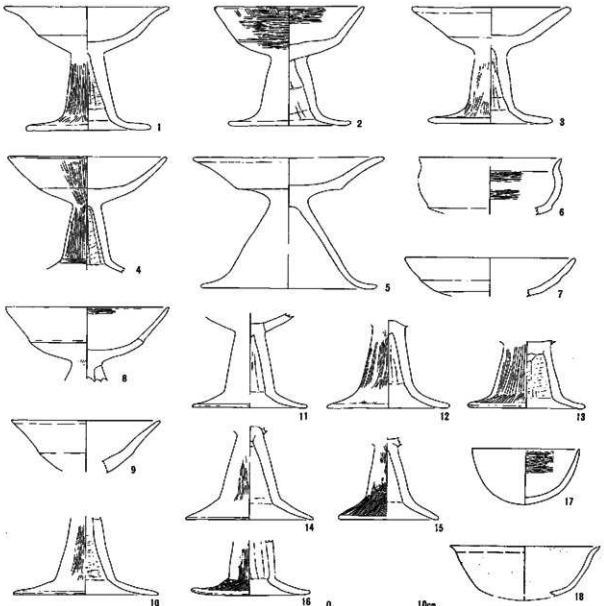
遺物の分布は、比較的広い範囲にわたっており、明確に「集中」しているとはいえない。しかし、同期の竪穴住居址等の遺構は周囲になく、また他の地点から流れ込んだとも考えられず、人為的に置かれたと考えるのが適当であろう。器種をみると、煮炊具・貯蔵具等はなく、高杯のみであること、すなわち祭祀的色彩の強い土器がほとんどを占めることに特徴がある。このような高杯等の祭祀関係の遺物が集中する遺構は、規模は大きく異なるが菅光寺平では長野市駒沢新町〔長野県史刊行会；1990〕・中村遺跡〔長野市教委；1979〕にみられ、「祭祀遺構」と性格づけられている。しかしこの分布を安易にとらえて「祭祀的遺構」とするのは問題ではあるが、もしその可能性を考えるならば、東に広がる水田地帯との関連、稲作に関連した祭祀と考えることもできよう。

出土遺物（第73図　PL. 30）：遺物は、包含層の土質の関係からか脆弱になっており、接合が困難なため、図示できるものは少ないが、それ以外にも多く出土している。また摩耗も著しく、調整も観察できない場合も多い。

器種的にみると、ほとんどが高杯でわずか



第72図　古墳時代中期遺物出土範囲図（1：1000）



第73図　古墳時代中期出土土器実測図（1：4）

に杯類がみられる。

高杯（1～16）は、形態的に大きく三種類に分けることが可能である。1～4は、杯部が平坦な底部から口縁が大きく開き、脚部はやや広がりながら直線的に下がり、裾部が大きく広がる。成形をみると脚部と杯部を二段でつくり、調整は脚部外面は縦方向のヘラミガキで、杯部は横方向（2）と縦方向（4）の二者がみられ、脚部内面もしぼり痕を残す例（2・3）とケズリで仕上げる例の二者がある。5は同様な杯部をもつが、脚部は一段で成形されている点が異なる。6はやや外側に湾曲し口縁が短く外反する杯部をもつが、脚部は不明である。なお、7は杯部に稜をもつ可能性がある。

杯は、断面が半球形（17）と口縁をやや外反させる半球形（18）の二者がある。調整ははっきりしないが、18は赤彩されている。

参考文献

長野県史刊行会；1990 『長野県史』遺跡編　東北信
長野市教育委員会；1979 『中村遺跡』

第5節　奈良・平安時代

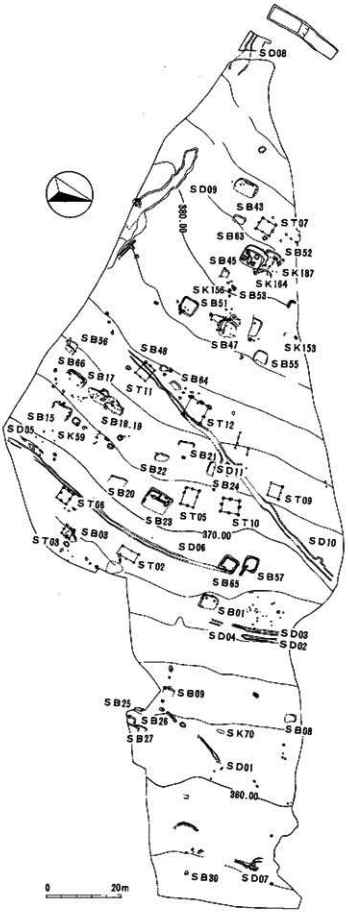
概　観

奈良時代から平安時代にかけての竪穴住居址は26軒を数える。検出状況において共通して認められることは、基本土層Ⅳ層を検出面とし、覆土は基本土層Ⅲ層基調の黒褐色土が堆積している状態でプランが明瞭に検出できたことである。ただし傾斜地という地形環境から、後世の自然流失や削平などの二次的な影響によりその残存状況は極めて悪いことも大きな特徴であり、住居址の構造等を解明するために必要とする資料が得られない場合が多々ある。この地形環境は当時の生活にも大きな影響を与えたことは容易に想像できる。その分布状況は、第74図に示す通りで、弥生時代末から古墳時代前期と大きく異なり、斜面の上断面上に集中して認められることも特徴である。また後背湿地の平安時代の水田が検出された石川条里遺跡にかけての下方には、疎らな分布を示す。

掘立柱建物址は、調査の際に検出した多数の柱穴の中から建物として認識できた例のみを取り上げた。

溝址は、いくつか検出されたが、SD09は自然流路の可能性が考えられ、斜面に沿って造られる以外は、等高線に沿っている。連続していない部分もあるが、傾斜地のため後世流失してしまった可能性が高い。

土坑に関しては、その代表的な遺構を個別に取り上げて解説した。そのため大半はその詳細には触れていない。特記されるのは、土壙墓SK70である。この遺構は県内の土壙墓に見られる多量の食器具と一点のみの貯蔵具が組み合わさるという習慣を踏襲している。ちなみに松本市南栗遺跡〔長野県埋文；1990〕のSK1069と同時期ではほぼ同内容の出土遺物を伴い、この点で注目される。



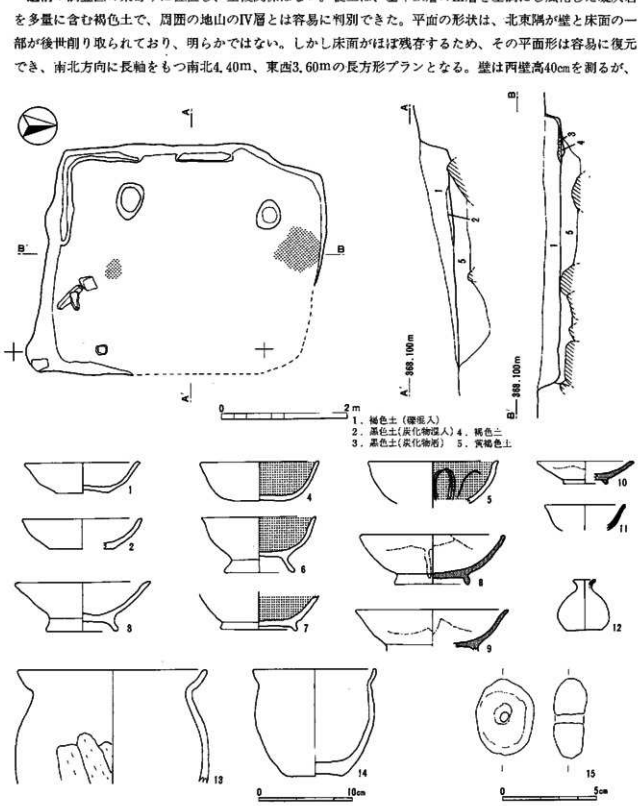
第74図　奈良・平安時代遺構全体図（1：1000）

1　遺構と遺物

(1)　竪穴住居址

SB01　（グリッドⅣD－2）（第75図　PL.6・30・34）

遺構：調査区の東寄りに位置し、重複関係はない。覆土は、基本土層のⅢ層を基調にし風化した凝灰岩を多量に含む褐色土で、周囲の地山のⅣ層とは容易に判別できた。平面の形状は、北東隅が壁と床面の一部が後世削り取られており、明らかではない。しかし床面がほぼ残存するため、その平面形は容易に復元でき、南北方向に長軸をもつ南北4.40m、東西3.60mの長方形プランとなる。壁は西壁高40cmを測るが、



第75図　SB01実測図及び出土遺物実測図

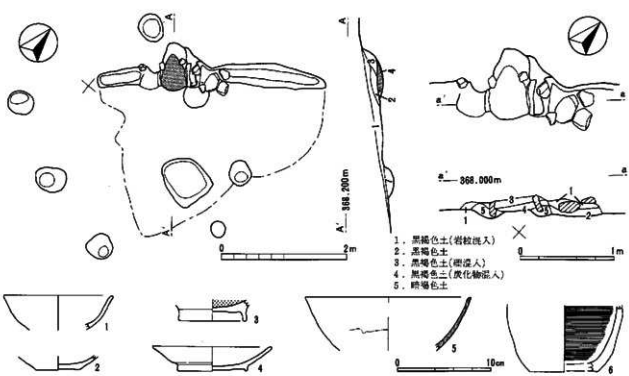
東側は失われている。床面は、直下22～50cmまでを掘り方とし、Ⅳ層内の礫を取り除き土を埋め戻し整地した様子が窺えた。カマドは、北壁沿い中央東寄りに、北壁面と床面に焼土粒の広がりが確認されたが、前者は煙出し部、後者は火床部に相当しよう。火床部上には、炭化物を多量に含む覆土が覆っていたが、カマドの骨材や支柱石はその痕跡を残していない。柱穴は、西壁沿いの二箇所のみで東側からは確認されていない。双方の柱穴中には炭化物を多量に含む覆土が堆積していた。周溝は、西壁中央沿いと南西隅にかけて存在するが、途中で途切れ継続しない。

出土遺物：比較的多い。食膳具では、土師器椀杯A（1・2）、黒色土器杯AⅡ（2）・椀（5・6）、須恵器盤（8）、灰釉陶器椀（9）・皿（10）、緑釉陶器片等が出土している。煮炊具では、全体をロクロで調整し体部下半をヘラケズリで仕上げる甕（13）・ロクロ小型甕（14）、貯蔵具として須恵器小壺（12）・甕・長頸瓶頸部がある。底部ヘラキリの須恵器杯A（11）は混入であろう。この他、中央に1孔がある軽石製の石錘（15）が出土している。

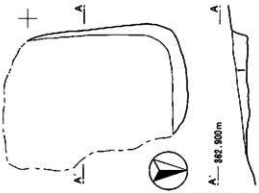
SB03（グリッドⅣI－1・2）（第76図　PL.30）

遺構：調査区内の中腹南東側に位置する。ST03とSK36との間で重複関係にあり、前者に切られ、後者を切っている。残存状況は悪く、山側の壁沿いに構築されたカマドとその周辺部の壁と床面を残すのみであり、平面の形状等全容は不明である。床は、良好な貼床のため残存範囲が確認できる。貼床の厚さは2～10cmと均一ではない。カマドは石組で、上部が削り取られているものの両脇の袖部は残り、平石を袖部の芯としており、支柱石はない。柱穴はなく、周溝は北西壁沿いのカマド周脇にまたがって残存する。

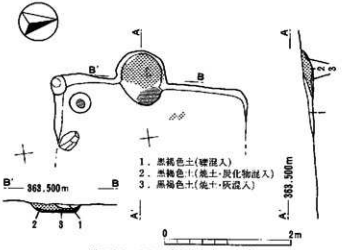
出土遺物：土師器杯A（1・2）の破片が多く、灰釉陶器椀（5）・皿（4）と黒色土器A椀（3）の他に小型ロクロ甕（6）・須恵器大甕が出土する。



第76図　SB03実測図及び出土土器実測図



第77図　SB08実測図（1：60）



第78図　SB09実測図（1：60）

SB08（グリッドⅠX－10・15）（第77図）

遺構：他遺構との間に切り合い関係はない。本遺構は、基本土層Ⅳ層上面を掘り込む形で黒味の強い褐色土が覆土として検出された。後世の自然流失等により削平されており、平面形状は不明である。壁は北西側で壁高25cmを測るが、他はほとんど失っている。床面もほとんど削平され、わずかに残存する程度である。

出土遺物：全体に少量で、土師器・黒色土器杯A・須恵器杯B片が出土している。煮炊具は、甕破片が多く、武蔵型甕やロクロ甕が含まれる。

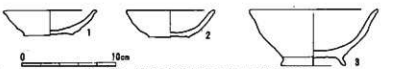
SB09（グリッドⅣD－5・10）（第78図）

遺構：重複関係はない。10cmと低い西壁が残り、中央部からカマドの張り出し部が確認されたため住居址と判断した。一部残存する床は、礫まじりで硬くしまる。カマドは、壁より外部へ突出しておりそこには焼土粒及び炭化物が残るが、石などの構造材は認められなかった。柱穴は、南西隅にあるが、本址に伴うかは不明である。

出土遺物：全体的に極めて少ない。食膳具類は認められなかった。煮炊具は武蔵型甕及び刷毛甕が少量あり、すべてカマド周辺から出土した。

SB15（グリッドⅣH－7）（第79図　PL. 6・31）

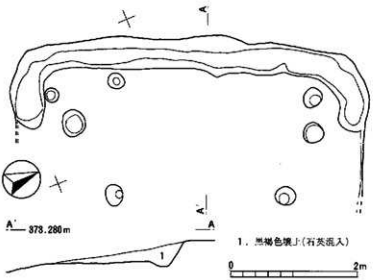
遺構：調査区内の中腹南寄りに位置



第79図　SB15実測図及び出土土器実測図

し、切り合い関係にはない。東側は、自然流失や耕作のため削平されるが、南北に長軸をもつ長方形プランと判断できる。床は貼床で、一様に厚さ4cm程度に敷き詰められていた。カマドは、北壁沿い中央に位置し、両袖は粘質土としてその塊が僅かに残される。石などの構造材はなかった。柱穴は認められず、周溝が西壁沿いの中央に部分的に設けられている。

出土遺物：食膳具としては土師器杯AII（1・2）・椀（3）があり、他に若干の黒色土器A椀、灰釉陶器皿が少量みられる。煮炊具は土師器長胴甕が、貯蔵具は須恵器甕・長頸壺がある。



第80図　SB17実測図（1：60）

SB17（グリッドIVH－6）（第80図）

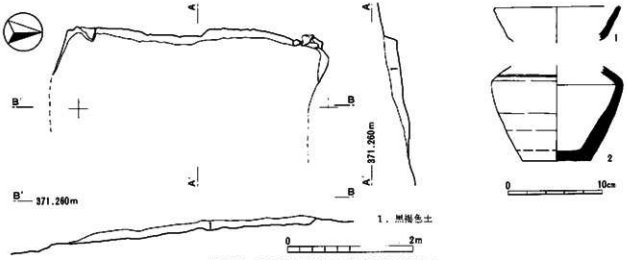
遺構：調査区内の中腹南西側に位置し、重複関係にはない。東側の大半は、削平されており、平面の形状は不明である。床面は、西壁沿いに残存する。柱穴と思われる穴がいくつか存在するが、東側にのみなので、その平面配置から上屋構造をうかがい知ることはできない。周溝は、西壁沿いに設けられている。

出土遺物：全体として少量である。このため時代的位置付けは判然としない。出土遺物の中には、食膳具として須恵器杯A・蓋、他に灰釉陶器椀、土師器杯Aが含まれている。この他、煮炊具は土師器長胴甕、貯蔵具として須恵器甕が出土している。

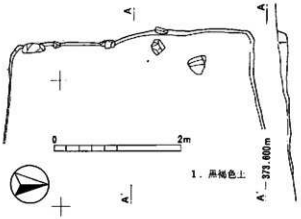
SB20（グリッドIVC－24）（第81図）

遺構：重複関係にはなく、東側の半分以上は後世削り取られているため、平面の形状は不明である。床面は貼床で、堅くしまった状態で構築していた。カマド等は不明である。

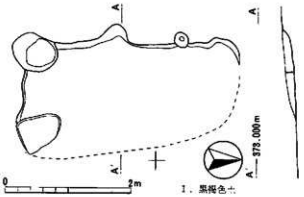
出土遺物：全体的に少量である。床面付近より須恵器杯B（1）・壺（2）、土師器長胴甕が出土した。



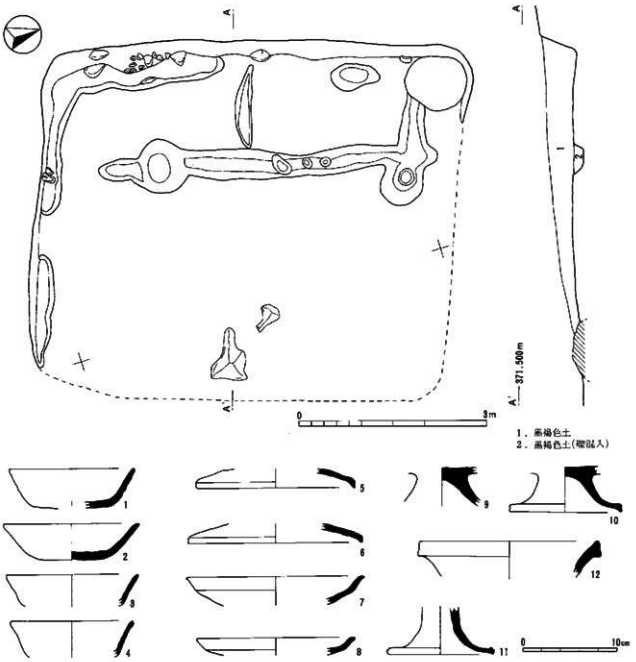
第81図　SB20実測図及び出土土器実測図



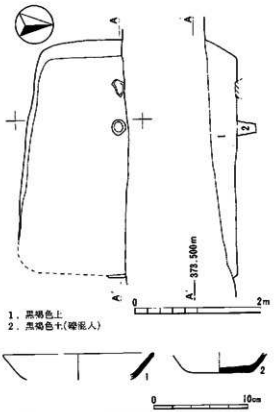
第82図　SB21実測図（1：60）



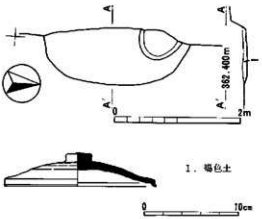
第83図　SB22実測図（1：60）



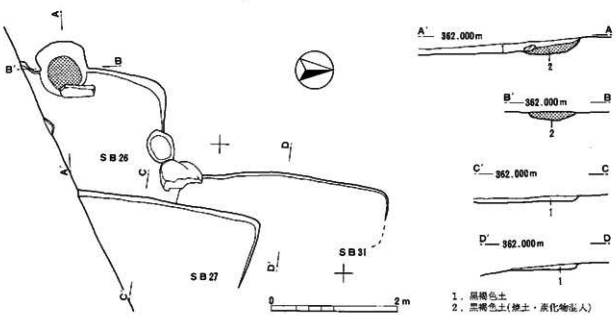
第84図　SB23実測図及び出土土器実測図



第85図　SB24実測図及び出土土器実測図



第86図　SB25実測図及び出土土器実測図



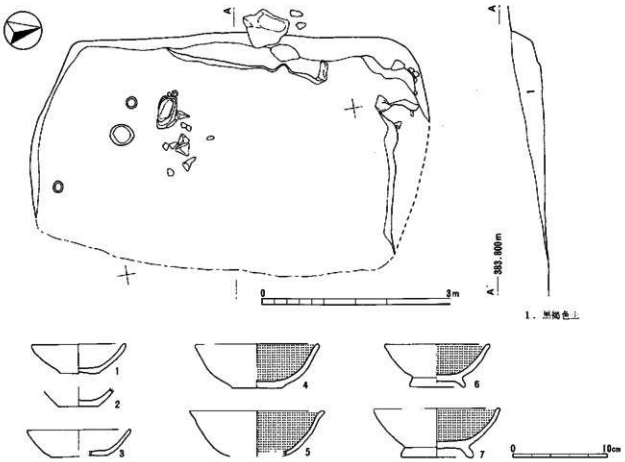
第87図　SB26・27・31実測図（1：60）

SB21　（グリッドⅣC－12）（第82図　PL. 6）

遺構：重複関係にはなく、東側半分は失っており、平面の全容は明らかではない。壁及び床面の残存率は極めて低い。

出土遺物：全体的に少量で、黒色土器杯A・土師器甕等がみられる程度である。

SB22　（グリッドⅣC－13・18）（第83図）



第88図　SB43実測図及び出土土器実測図

遺構：南西隅と西壁は土坑により、東側の大半は後世削り取られており、残存状況は極めて悪い。柱穴・カマドは、位置も含めはっきりしない。

出土遺物：全体的に少量であり、黒色土器杯A、須恵器杯Bがみられる。

SB23（グリッドⅣC－14・19）（第84図　PL. 7）

遺構：重複関係はなく、東側の大半は削平されており平面の形状は不明である。壁・床は西側に残されるが、北側と東側は消失している。床面は掘り方をつくりとし、埋め戻しをして床面を叩きしめている。柱穴は2箇所にあり、それを繋ぐような溝が確認されている。周溝は、西壁沿い中央寄りから南壁沿いにかけて継続的に延びる。

出土遺物：食膳具として須恵器杯A（1・2）・杯B（3・4）・杯蓋（5・6）・高杯（11）・盤（7～10）があり、杯Aはいずれもヘラキリである。黒色土器杯A及び灰釉陶器椀は検出時に確認されたが混入の可能性が高い。この他、煮炊具では土師器刷毛甕、貯蔵具としては須恵器壺（12）・甕が認められる。

SB24（グリッドⅣC－8）（第85図）

遺構：北側半分以上は先行トレンチ調査により破壊してしまい、その平面形は明らかにできない。壁は西壁のみ良好に残り、床面は地山を削り込み平坦面としてそのまま床としている。

出土遺物：食膳具は須恵器杯A（2）・杯B（1）があり、前者は糸切りである。煮炊具は土師器刷毛甕が、貯蔵具では須恵器甕が出土している。

SB25（グリッドⅣE－6）（第86図）

遺構：大半が埋設されたガス管あるいは迂回路の下にはいるためはっきりしないが、貼床が存在していることから住居址と判断した。確認されたピットは1ケ所であり柱穴とは判断できない。

出土遺物：全体的に少ない。食膳具の須恵器蓋と煮炊具のナデ調整の土師器長胴甕がある。

SB26（グリッドⅣE－6・11）（第87図）

遺構：SK111が切り込み、またSB27・31と重複するが、斜面のため削平が著しく詳細は不明な点が多い。遺構の残存状況は極めて悪く、床面は若干の凹凸があり西側は比較的硬い床をもつ。カマドは、西壁より突出した形で設けられ、周辺の床面に焼土粒が見られた。

出土遺物：全体的に少量である。カマドの前面と内部から土器片がまとまって出土している。食膳具はなく、煮炊具の小型刷毛甕や刷毛長胴甕がある。

SB27（グリッドⅣE－7・12）（第87図）

遺構：SB31と切り合った状態で存在する。遺構の保存状態は、SB26・31同様に極めて悪く、西北壁の一部と床を残すのみである。カマドや柱穴等は確認されていない。しかし若干の凹凸はあるものの整地して貼床をしており、住居址と判断した。

出土遺物：極めて少ない。食膳具・貯蔵具はなく、煮炊具の土師器長胴甕のみ出土している。

SB43（グリッドⅣA－13・14）（第88図　PL.31）

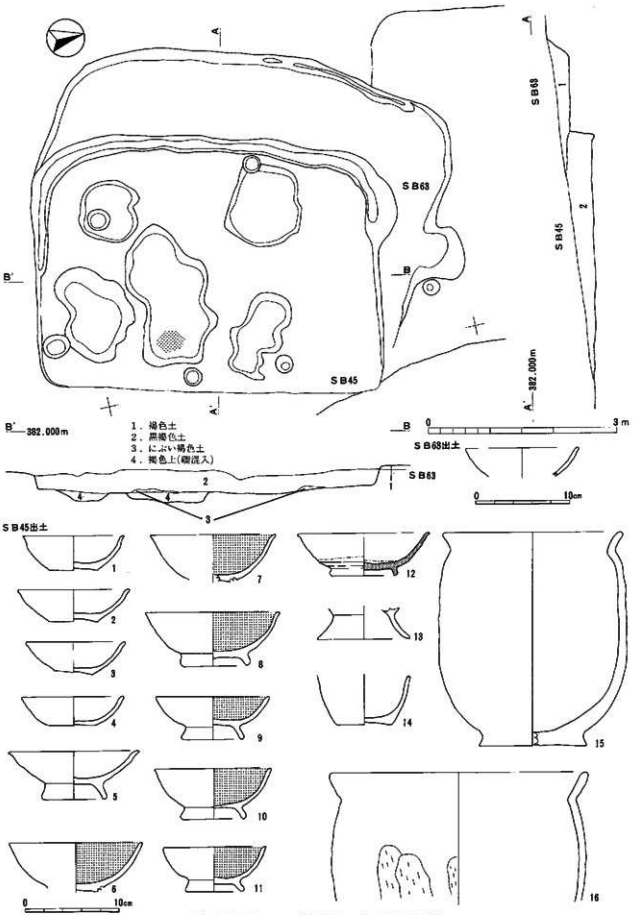
遺構：重複関係はなく、東側の大半が削平されている。壁は、西壁から南壁にかけては残存し、西壁沿いには部分的にテラス状の段差が付く。北壁側も同様で、テラス状に段がつき若干内部に入り込む。床面は細粒砂が混じる貼床で、カマドは認められなかった。柱穴は、南側にあるピット数個にその可能性が考えられるが、どれも浅く柱痕とは断定できない。

出土遺物：食膳具は土師器杯AⅡ（1～3）、黒色土器杯AⅡ（4）・椀（5～7）がある。杯Aには土師器が、椀には黒色土器Aが多くみられる。煮炊具は羽釜が、貯蔵具は須恵器甕片が少量出土している。

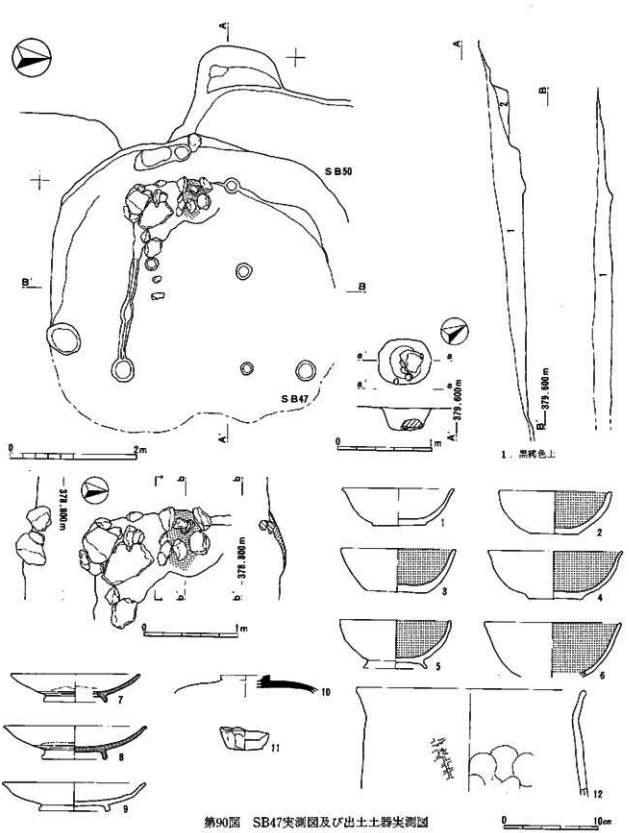
SB45（グリッドⅣA－10・15，ⅣB－6・11）（第89図　PL.7・31）

遺構：当初、検出段階において覆土の範囲とその平面形状から一住居址としたが、掘り下げて行く過程で、北西にSB63と重複していることが確認された。覆土に違いはみられなかったため、床面の高低差から本址が新しいと考えられるが詳細は不明である。床面は貼床をせず、地山を平坦に仕上げている。カマドそのものは認められなかったが、東壁寄り中央付近に焼土塊が数ケ所あり、それを痕跡と見ることもできる。その場合には、調査区内においてはSB48とともに2例目の東向きカマドをもつことになる。柱穴と思われる掘り込みは数ケ所あるが、それと断定する根拠は乏しい。周溝は、やや礫の多い北壁面からその両端隅にかけて平行して設けられている。床下に土坑状の掘り込みがみられるが、床面構築時の自然礫の抜取り跡の可能性が高い。

出土遺物：比較的まとまった量が出土しており、食膳具では土師器杯A（1～4）・椀（5）・盤B（13）、黒色土器A椀（6～11）、灰釉陶器椀（12）がある。煮炊具はやや調整の粗いナデ甕（15）、ロクロ調整で下部をヘラケズリで仕上げる長胴甕（16）、ロクロ小型甕（14）がある。貯蔵具は須恵器甕が出土している。



第89図　SB45・63実測図及び出土土器実測図



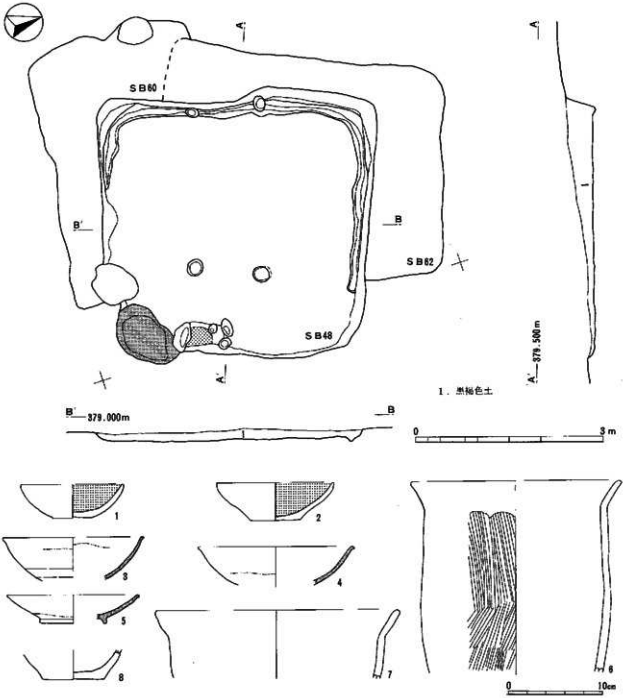
第90図　SB47実測図及び出土土器実測図

SB47　(グリッドⅣB－8・13)（第90図　PL.7・31）

遺構：北側の一部は先行トレンチ調査により破壊し、東側は斜面の傾斜とともに削平されているため正確な平面形は明らかにできない。切り合い関係は、SB50及びSB51を切り込んでいる。平面形態は、残存部分から3m×3mの小規模な隅丸正方形のプランと思われる。カマドは南西隅寄りに、平面八の字に袖石が良好に残存している。またカマド左袖外側には、大小の礫を意識的に並べた施設がみられた。ピット

は住居址内に6ケ所確認されているが深さ等一定でなく、柱穴とは断定できない。周溝はカマド前左脇から南側壁沿いに延びるが、他には存在しない。

出土遺物：食膳具としては土師器杯A（1）、黒色土器A杯A（2～4）・椀（5・6）、灰釉陶器皿（7・8）、緑釉陶器皿（9）が出土している。灰釉陶器は、東濃産光ケ丘1号窯式である。杯Aは若干の土師器がみられるが、黒色土器Aが圧倒的である。この他須恵器蓋（10）、手づくねの土師器（11）があるが、混入の可能性が高い。煮炊具は全体をロクロ調整し下部をタタキで仕上げた土師器長胴甕（12）・羽釜がある。貯蔵具は、須恵器甕がある。この他、鉄滓が1点出土している。また、黒曜石剥片、縄文時代晩期氷式土器片や土偶の胴部、古墳時代前期土器が出土しているが混入と思われる。



第91図　SB48実測図及び出土土器実測図

SB48（グリッドⅣB－17・18）（第91図　PL.7）

遺構：SB60及びSB62を切り込んでおり、SK156に切られている。床面は一部に貼床されるが、大部分は地山を利用し平坦に仕上げている。東壁の東南隅寄りにカマドがあるが、破壊が著しく、袖部分及び支脚石の抜痕、掘り方が検出されたのみである。カマド右脇には焼土炭を多数含むピットがある。周溝は、西壁沿いから南壁北壁沿い途中まで延びている。ピットは4ケ所あるが、東側の擂いは周辺の状況から柱穴と思われる。周溝内に存在するピットは東側の柱穴と東西方向列に各々が揃う点から、柱穴の可能性が捨てきれない。

出土遺物：食膳具は、黒色土器A杯AⅡ（1・2）、東濃産光ケ丘1号窯式の灰釉陶器椀（3・4）・皿（5）があり、杯Aのほとんどは黒色土器Aである。この他土師器杯A、黒色土器A片口鉢、須恵器杯Aが少量出土している。煮炊具では、土師器ハケ甕（6）、ロクロ調整の鍋（7）、ロクロ小型甕（8）が、貯蔵具では須恵器甕が出土している。その他、弥生土器及び縄文土器が少量出土している。

SB51（グリッドⅣB－13）（第92図　PL.7）

遺構：SB47に切られ、東側は削平されている。壁面は西側のみ残るが非常に壁高は低い。床面は、残存する範囲で貼床が確認され、東寄りには焼土が残される。ピットは5ケ所あるが、プランがはっきりせず本址にともなうものかは判断できない。

出土遺物：全体的に少ない。食膳具は、黒色土器A杯A・土師器杯A、煮炊具は小型甕が出土している。貯蔵具はない。

SB52（グリッドⅣA－5・10，ⅣB－1・6）（第93図　PL.7）

遺構：SK155・162・SB63に切られ、東側は自然削平されているために残存しない。床面は地山が露出した状況である。周溝は西壁に沿ってのみ確認された。柱穴は、西壁沿いに揃う列とそれと平行に列をなすP_2～P_3と思われる。カマドは検出されなかった。二次的に炭化物が覆う範囲が認められた。

出土遺物：食膳具は土師器杯Aが主体で黒色土器A椀がみられ、他に須恵器短頸壺、土師器の甑がある。その他に黒曜石剥片が出土している。

SB53（グリッドⅣB－1・6）（第93図）

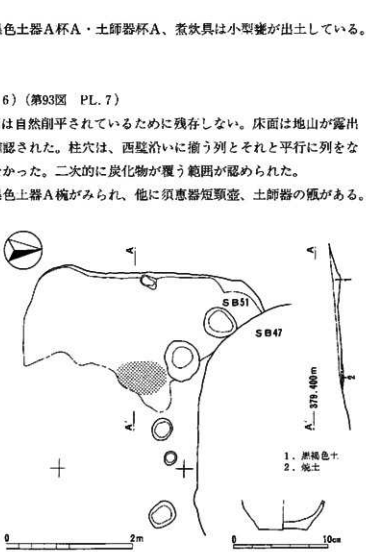
遺構：SB45に切られ、西側に隣接してSB52が存在する。残存状態は極めて悪く、壁は北西側のみ残り、床は地山を削り平坦にしている。

出土遺物：食膳具は黒色土器杯A主体とし、煮炊具はロクロ甕がある。

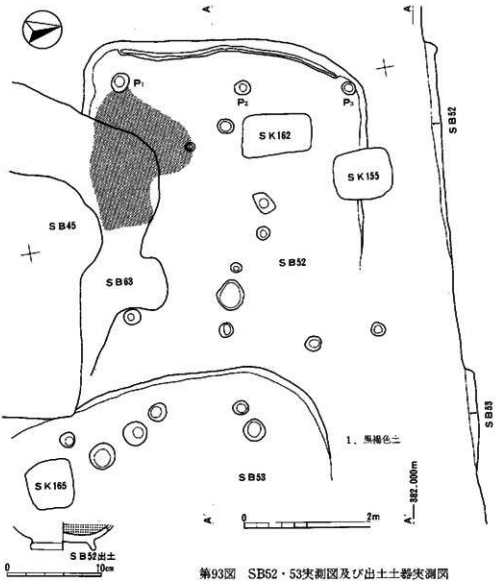
SB55（グリッドⅣB－4）（第94図）

遺構：切り合い関係はないが、上層は攪乱されており、床面や壁の残存状況は極めて悪い。カマドは現状の床面上からは確認されなかった。

出土遺物：全体的に非常に少ない。食膳



第92図　SB51実測図及び出土土器実測図



第93図　SB52・53実測図及び出土土器実測図

具と煮炊具はなく、貯蔵具として須恵器大甕が多数出土している。

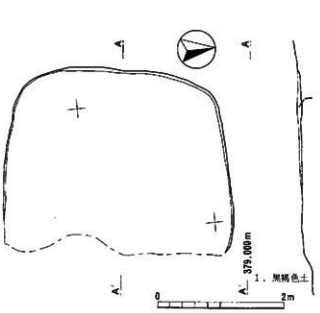
SB56（グリッドⅣG－10）（第95図）

遺構：南側をSK208に、東側をSB66に切られ、西側の一部のみ残る。床面は地山を削り下げ床面としている。カマド等の施設は明らかではない。

出土遺物：少量で、食膳具には須恵器杯B・蓋、黒色土器A椀、灰釉陶器椀がある。煮炊具はなく、貯蔵具として灰釉陶器広口瓶及び須恵器の甕が出土している。その他縄文土器片が数点出土している。

SB57（グリッドⅠW－25，ⅠX－21）
（第96図　PL.7・31）

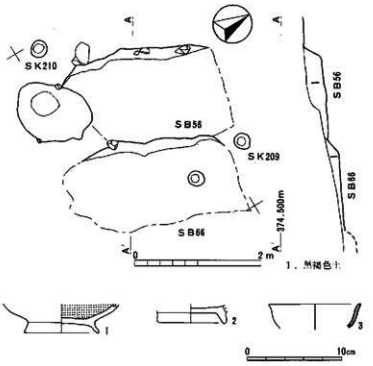
遺構：切り合い関係はなく、掘り込みも浅く上部



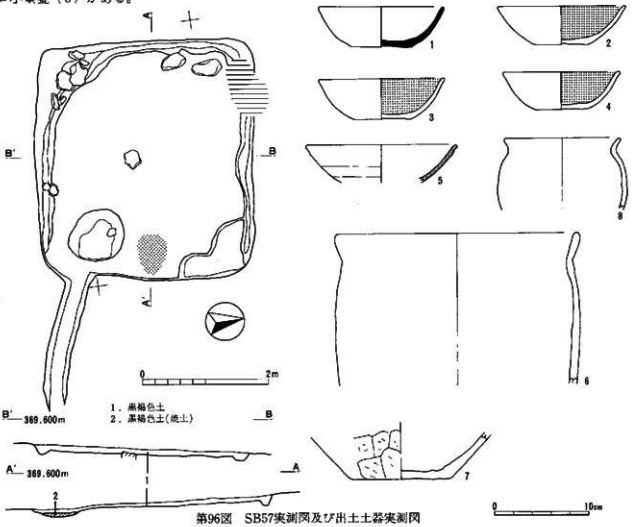
第94図　SB55実測図（1：60）

が削平されているため残存状況は極めて悪い。壁はわずかながらも残存し、ほぼ正方形のプランを呈する。床面は地山を整地しており、東側の中央に焼土の集中部分があり、カマドと考えられる。柱穴は確認されなかった。なおカマド右脇に土器片が数点含まれるピットが確認されている。周溝は東壁を除く壁に沿ってみられる。また南西隅より外部へのびる一条の溝があるが、構築時あるいはそれ以降と思われ、廃絶後の重複とはいえない。

出土遺物：食膳具では黒色土器杯A（2～4）を主体として鉢も含まれ、少量の軟質須恵器杯A（1）がある。そのほか灰釉陶器椀（5）が1点出土する。煮炊具はロクロ長胴甕（6・7）・ロクロ小型甕（8）がある。



第95図　SB56・66実測図及びSB66出土土器実測図



第96図　SB57実測図及び出土土器実測図

SB63（グリッドⅣA－10・15，ⅣB－6・11）（第89図　PL.7）

遺構：SB45に大半が切られ、SB52を切っている。わずかに残る北壁も東側は傾斜とともに削平されているため、平面形は明らかではない。床面は地山をそのまま使用しており、周溝は西壁沿いに設けられている。北壁の外側に突出した張り出し部はカマド等の施設ではなく、礫の抜取り痕の可能性がある。

出土遺物：少量で、食膳具には土師器杯Aと黒色土器Aがみられ、煮炊具及び貯蔵具は出土していない。

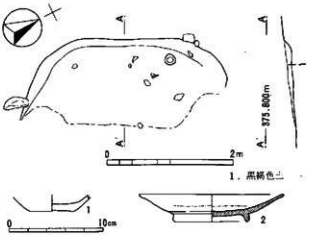
SB64（グリッドⅣB－20，ⅣC－16）（第97図）

遺構：床面が確認され、わずかに壁が認められることから竪穴住居址として判断した。大半を削平されており、プラン等は不明である。

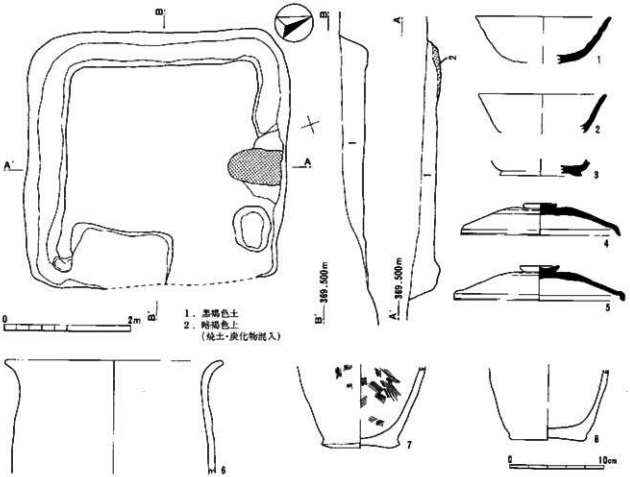
出土遺物：少量で、土師器杯A（1）と灰釉陶器皿（2）が出土している。煮炊具及び貯蔵具はない。

SB65（グリッドⅠW－25，ⅠX－20，ⅣC－5，ⅣD－1）（第98図　PL.7・32）

遺構：SD06に切られている。ほぼ正方形のプランをもち、カマドは北壁中央両側の袖部を若干残しており、カマド構築用の礫やその痕跡等は確



第97図　SB64実測図及び出土土器実測図



第98図　SB65実測図及び出土土器実測図

認されなかった。柱穴と思われるものは検出されず、カマド右脇にやや深いピットが設けられている。周溝は壁に沿っておりカマドにつながり、浅く、幅が広いのが特徴といえる。

出土遺物：食膳具の大半は須恵器が占め、杯A（1）の底部はヘラ切り、杯B（2・3）・蓋（4・5）がある。煮炊具ではナデ調整の甕（6～8）が出土している。

SB66（グリッドⅣG－10・15）（第95図）

遺構：SB56を切っており、床面が確認されたため住居址と判断した。東側の大半は耕作等による攪乱と削平を受けており、プラン・施設等は不明である。他にピットがある。

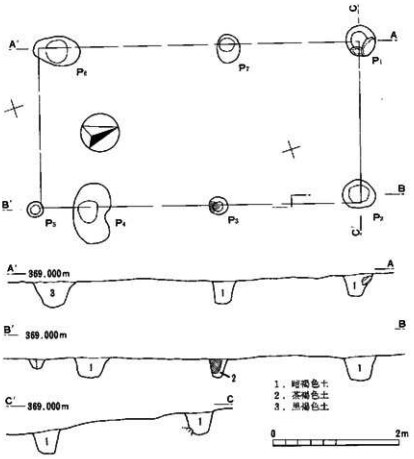
出土遺物：食膳具は土師器主体で杯A・椀（2）、灰釉陶器椀（3）や黒色土器A椀（1）が少量含まれる。煮炊具は羽釜が、貯蔵具は灰釉陶器長頸瓶がある。

(2) 掘立柱建物址

ST02（グリッドⅣD－16）（第99図）

遺構：長軸を南北方向にもつ小規模の2間×1間の掘立柱建物址である。他の遺構との間に重複関係はない。平面形は桁行に相当する東側柱列と西側の柱列の間隔はほぼ平行に保たれる梁間であるが、両柱穴列において柱間間隔及び全長が均等に揃わず、やや不整形プランとなる。細部における特徴としては、柱穴掘方は断面はU字形状の楕円形や円形で、底部は検出面より深さ16～40cmの範囲と規則性はない。底面は堅く自然石をそのまま利用している。桁行中央の柱穴掘方2つは一廻り小形である。覆土は、Ⅲ層基調で軟質であった。南東隅の柱穴掘方には柱抜取り痕跡が、また東側柱列中央には柱痕跡が認められる。この他、東側柱列上に並ぶ最南端の小型のピットが本遺構に伴う可能性を無視できない。隣接するこの他のピットも同様である。本址は建て替えもなく一時期で閉鎖したものと思われる。

出土遺物：土師器小片が少量出土しているのみである。



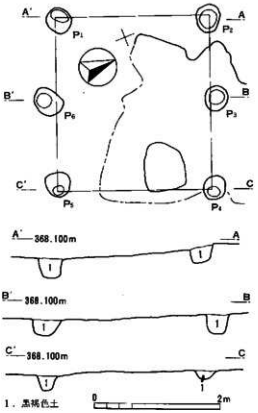
第99図　ST02実測図（1：60）

ST03（グリッドⅣI－1・6）（第100図）

遺構：ほぼ正方形で小規模の2間×1間の掘立柱建物址である。重複関係は、柱穴がSB03の床面下の精査の際には確認されたため、SB03に切られたと判断した。また南東側に存在するST01とは直接的な切り合い関係はないが、隣接状況からすると同時期存

在を否定するものと思われる。桁行の北側柱列と南側柱列は各々柱間間隔がほぼ均等であった。梁行の柱間間隔は、桁行の柱間間隔に比べやや広く開いている。中央柱間のみ外側に張り出し全体的に外湾している。桁行を傾斜方向にとる。柱穴掘方は、円形や楕円形で、断面形は箱型を呈し底部に柱圧痕の円形の落込みを思わせる跡がいくつかにみられる。覆土はⅢ層基調で、柱痕跡は認められなかった。建て替えもなく一時期のみの建物であったといえる。

出土遺物：土師器小片が少量出土しているのみである。

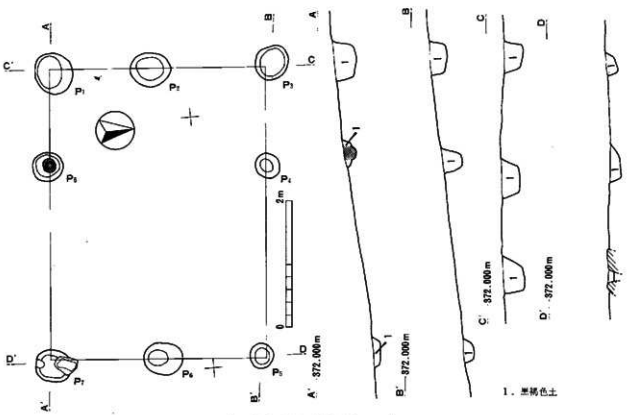


第100図　ST03実測図（1：60）

ST05（グリッドⅣC－9・14）（第101図）

遺構：長軸を東西方向にもつ長方形で、小規模の2間×2間の掘立柱建物址である。重複関係はない。構築面は傾斜角が割合にきついが、斜面に対し段切りや盛り土など基盤面を水平に保つ整地作業跡は認められない。柱穴掘方は、円形や楕円形で断面形が箱型をしており、底部は東側柱穴列では浅くなる。配列は桁行の南北両側柱列が、1：2の割合で中央列が西に寄る。残存状況から建て替えのない一時期の建物と考えられる。

出土遺物：須恵器杯A・蓋・壺の小片が出土している。

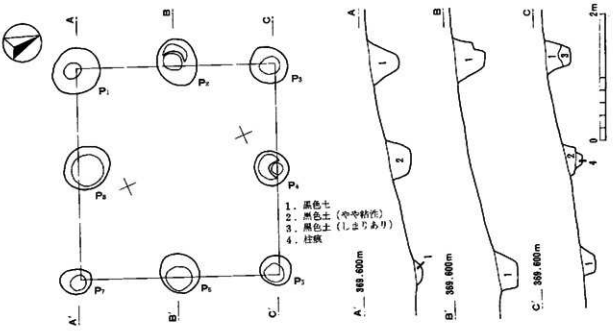


第101図　ST05実測図（1：60）

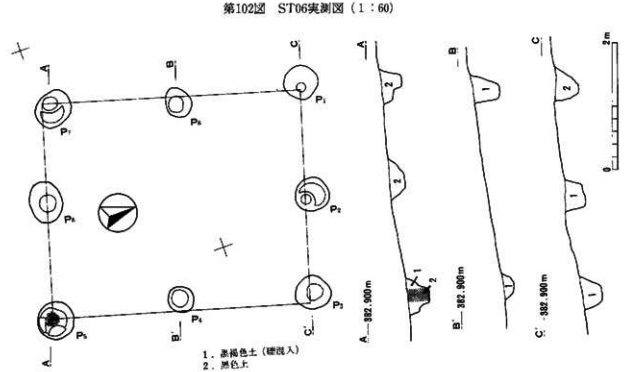
ST06（グリッドFIVH－4・5・9・10）（第102図　PL.8）

遺構：ほぼ正方形で小規模の2間×2間の掘立柱建物址であり、重複関係はないが、北西のSD06が西側柱穴列に沿うように延び近接している。柱穴掘方は、楕円形でまとまっているが、断面形はまちまちであり規格性はない。3ケ所の底部には柱にかかる荷重の圧迫跡が残されていた。この様な平面形の場合、総柱建物として身舎空間中央部に柱を置く場合があるが、本址の場合は無い。それは四方の柱穴列の柱間間隔が心々で約1.5mと狭いため不必要とされたのかも知れない。

出土遺物：土師器小片が少量出土しているのみである。



第102図　ST06実測図（1：60）



第103図　ST07実測図（1：60）

ST07（グリッドⅣA－９・10）（第103図）

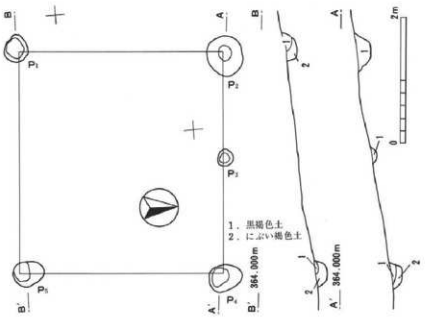
遺構：長軸を南北方向にもつ長方形の小規模な２間×２間の掘立柱建物址であり、他の遺構との重複関係はない。柱穴の配置は、傾斜面方向に梁間を置き、長軸の桁行方向はそれに直行する。桁行の中央柱間のみ若干内側に入り込み、全体的に内湾する様相を呈する。前述したST03は逆に、中央柱穴掘方は外側に外湾している。柱穴掘方は、円形や楕円形で、桁行の中央は他に比べ小径である。断面形に規則性はない。１ケ所（P_8）からは柱痕跡が、また数ケ所からは炭化物の混入が認められた。身舎中央に柱穴は存在していない。

出土遺物：弥生式土器を少量含むが混入と思われる。

ST09（グリッドⅠW－18・23）（第104図）

遺構：長軸を東西方向にもつ小規模な２間×１間の長方形の掘立柱建物址であり、切り合い関係は存在しない。東側に北東・南東方向に延びるSD10が隣接して存在する。柱配置は、２間×１間ではあるが北側の中央柱穴が小径であり、また南側柱穴列の中央柱穴が存在していないため、実際には１間×１間に類似する性格かもしれない。柱穴掘方は、四隅がほぼ楕円形で、北側柱穴列の中央柱穴は小型の円形である。断面の形状はU字形で、検出面からの深さは非常に浅い。

出土遺物：土師器片が少量出土する。



第104図　ST09実測図（１：60）

ST10（グリッドⅣC－４）（第105図　PL.８）

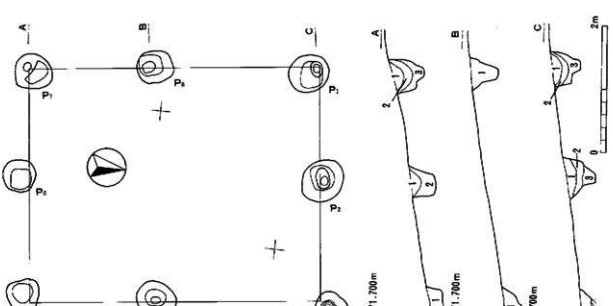
遺構：長軸を南北方向にとる２間×２間の長方形の掘立柱建物址であり、切り合い関係は存在しない。柱配置は、梁行が東西方向僅かではあるがハの字に広がり、西側柱穴列に比べ東側柱穴列の柱間が広くなる。柱穴掘方は円形が多く、底部は西側が深く東側は浅い。断面はU字状をしている。覆土は、自然堆積らしく、完全に堆積するまで時期を要していたようである。

出土遺物：弥生式土器がその中心を占めるが、これらは混入と思われる。

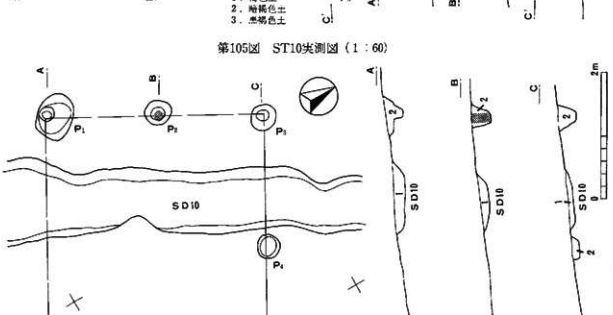
ST10完掘（柱イメージ）

ST11（グリッドⅣB－20・21・25）（第106図　PL.８）

遺構：長軸を東西方向にとる２間×２間の長方形の掘立柱建物址であり、南西から北東方向へ延びるSD10と重複関係にある。新旧関係はその判



第105図　ST10実測図（1：60）



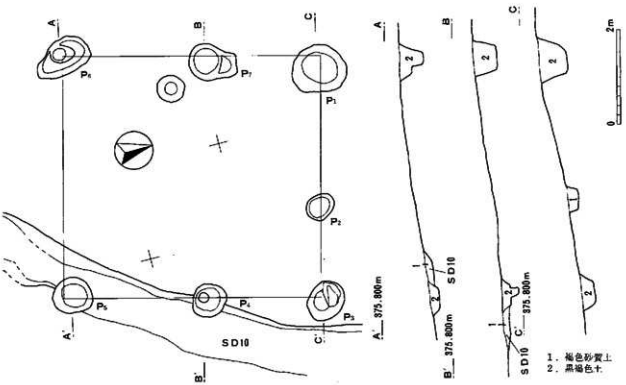
第106図　ST11実測図（1：60）

断材料に乏しく、検討する余地がありそうである。柱配置の桁行は、北東側が中央を含めて2間であるのに対して、南西柱穴列では中央に柱穴は存在せず、1間の柱間となり規則性は見られない。梁間は北西と南東がほぼ平行であり柱間も揃えられている。各々の柱穴掘方は、円形に近いがやや不整形をしている。断面は、北西側が南東側に比べて検出面から深いが全体的には浅い。

出土遺物：確認されていない。

ST12　〔グリッドⅣC－6・11・12〕（第107図　PL.8）

遺構：2間×2間でほぼ長方形のプランを呈する掘立柱建物址であり、SD10が東側の柱穴掘方2基に



第107図　ST12実測図（1：80）

よって切り込まれている。柱配置は、東西は2間で並び、南北は不規則で、北側は柱穴が間にあるもののやや東に寄っており、南側は1間となる。柱穴掘方の平面は、円形に近く、不整形な2ケ所は柱抜取り痕跡であろうか。断面は箱形で、底部は平坦で堅い。西側柱穴列の掘方の柱痕跡は、1基のみ確認されている。

出土遺物：確認されていない。

(3) 溝　址（第108図）

溝の配置をみると、ほとんどが等高線に沿うかたちで南北方向に掘られている。ただしSD09は等高線に直行してつくられており、その遺物の出土状態は特異である。いずれにも共通することではあるが、後世の耕作・造成あるいは自然的な力により削平されている部分があり、連続しない場合が多くみられることも特徴の一つである。埋土自体も耕作土に近く畑地の造成の際の痕跡、あるいは現道に平行している場合は旧道の痕跡と考えられる例も多い。

また、遺物量に差はあるが、ほとんど古代を含んでいる。そのためここで各遺構の記述をしたい。なお、遺物については各時代の項でふれる。

SD01（グリッドＩＹ－17・21・22）（第108図）

遺構：現道と平行してSB04（弥生後期）をきって検出された。掘り込みは10～20cm、また幅も30～70cmと一定していない。埋土は耕作土に近く小石を多く含む。位置的関係から、現道以前の道に関連した側溝的な機能をもった遺構の可能性が高い。時期的には近世以降と考えられる。

出土遺物：少量の弥生時代後期の土器片がみられるのみである。

SD02・03・04（グリッドⅠX－13・18・23，ⅠVD－3）（第108図　PL.8）

遺構：いずれも他遺構との間に切り合い関係にはない。SD02と03は1mほどの間隔をもって平行しており、2条一組でつくられた可能性が高い。SD04はSD03の位置的に延長上にあり、途切れてはいるが連続する溝と考えられる。埋土は拳大の礫を多量に含んでおり、幅は60～80cmと一定しておらず、深さは10～20cmと浅い。機能的には、中央部を道とし、溝を側溝と考えることもできるが、道の痕跡は検出されておらず、東西を区画する機能をもっていたと考えておきたい。

出土遺物：土師器の小片が出土したのみである。

SD05（グリッドⅠH－9・13・14）（第108図）

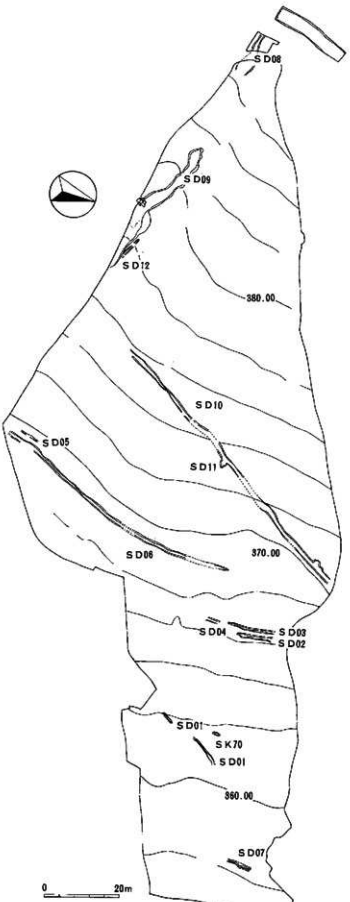
遺構：SD06と平行するかたちでつくられる。しかし幅は不規則で20～40cmと狭く、この点はSD06と大きく異なる。埋土は小石を若干含むⅢ層をベースとしており、断面は半円、逆台形と一定していない。

出土遺物：土師器・須恵器の小片が出土したのみである。

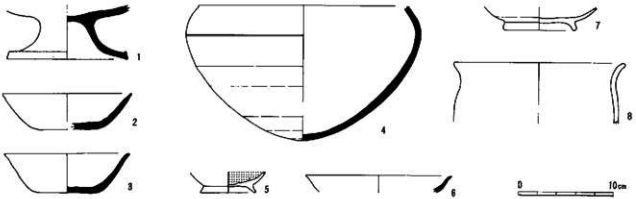
SD06（グリッドⅠX－21，ⅠVC，ⅠVD，ⅠVH）（第108・109図　PL.9）

遺構：市道長谷北線（352号線）の直下に位置し、SB65を切り込む。幅は120cmでほぼ一定しており、緩やかに東に湾曲して南北方向につくられる。埋土は黄褐色の砂を含み、水の流れた痕跡が認められる。位置的にみて市道を造る際に埋められた小水路の可能性が高く、時期も近世以降と思われる。

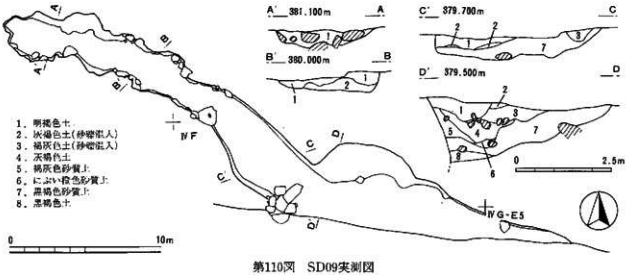
出土遺物：1は須恵器の甕の脚部である。全体に少量で、近世あるいは近代の陶磁器が出土しており、時期的には近世以降と思われる。



第108図　溝址遺構全体図（1：1000）



第109図　SD06～11（09を除く）出土土器実測図（1：4）



第110図　SD09実測図

SD07　（グリッドＩＹ－10・15）（第108・109図　PL. 32）

遺構：SB39を切っており、南側部分ははっきりしない。幅も不規則で、深さも40～120cm、断面形も半円であるが一定していない。埋土はⅢ層をベースとした、小礫を含む黒褐色土である。

出土遺物：２・３は須恵器杯ＡⅡで、底部をみると２はヘラキリ、３は糸切りである。４は鉢を模倣した鉢形の須恵器で、全体の形態がわかる珍しい例である。口縁端部を面取りし内湾させ、体部下半はロクロヘラケズリを用い底部を鋭い尖底に仕上げている。

SD08　（グリッドⅣＥ－19・20）（第108・109図）

遺構：調査区西端の市道をはさんで、等高線に直行して検出された。幅、深さともに一定していない。埋土は耕土に近く小石を多く含み、現代の陶器や瓦が混じっており、最近まで機能していた小河川の可能性が高く、市道の造られる際に埋め立てられたと考えられる。

出土遺物：全体に遺物量は少なく、近代の陶磁器が混ざる。５は黒色土器Ａ椀である。

SD09　（グリッドⅣＡ－23・24，ⅣＦ－４・５・10，ⅣＧ－１・６・７）（第110・111図　PL. 9）

遺構：調査区の西端に、等高線に直行するかたちで位置する。当初不整形のため自然流路と考えられたが、縄文時代から平安時代にわたる遺物が発見され人工的と考えて調査を実施する。断面形は、中央の深い部分でＶ字形をしており、その埋土の堆積状況も複雑である。東西部分は、比較的浅く底面は平坦で、

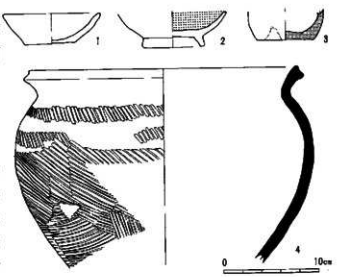
複雑な堆積状況は示さない。比較的大きな石が、下部にいくほど多くみられる。堆積状況から比較的長い期間かかって、埋没したと考えられる。性格等は不明である。

出土遺物：土師器・須恵器の小片が出土しているが、量は多くない。1は土師器杯A、2は黒色土器A椀、3は灰釉陶器小瓶、4は須恵器甕である。しかし主体をなすのは、縄文時代晩期・弥生後期であり、それらについてはそれぞれの項でふれている。

SD10・11（グリッドⅠW，ⅣB，ⅣC）（第108・109図　PL.8）

遺物：SD10は調査区内中腹部に等高線に沿うかたちで南北にほぼ直線的に横断する。途中で連続しない部分もみられ、南側へ延びる部分ははっきりしない。いくつかの遺構と重複関係をもつが、最も新しい。幅は0.5～2.3mと一定しておらず、また深さも15～30cmで底面に凹凸が多くみられる。自然流路の可能性が高い。SD11はSD10より枝別れをしており、性格も同様と思われる。ともに埋土はⅢ層をベースにした砂・小礫を多量に含む黒褐色土である。

出土遺物：6は須恵器盤の口縁部、7は灰釉陶器光ケ丘1号窯式の椀、8は土師器長胴甕で器面のあれが著しい。

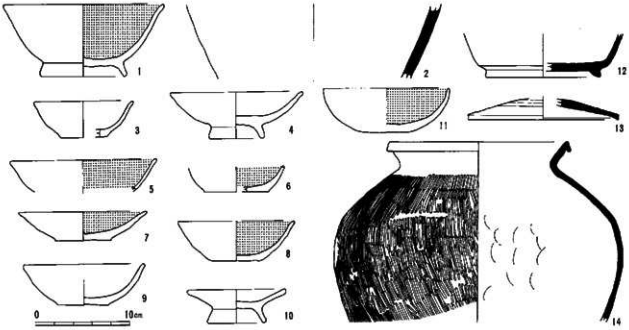


第111図　SD09出土土器実測図（1：4）

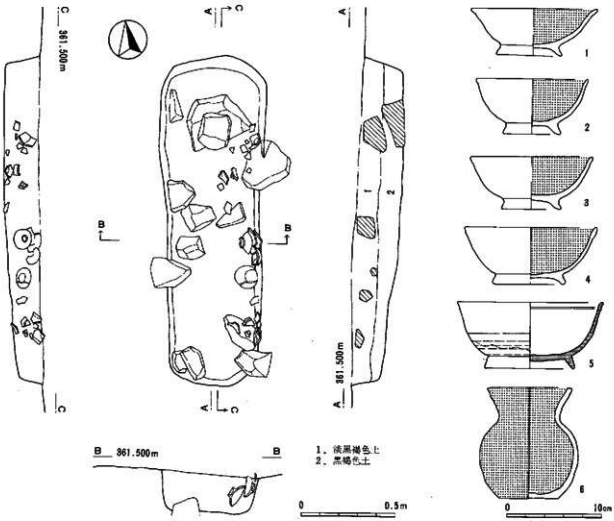
(4) 土　坑

SK59（グリッドⅣH－2・7・8）（第112図）

遺構：長軸190cm、短軸160cmで、隅丸長方形の平面形を呈する。底面は平坦であるが北東の隅の一部分に直径40cm程の摺鉢状の穴があく。埋土は、第1層が淡黒褐色土で第2層が黒褐色土、第3層は白色凝灰岩風化物層で各層の層界は明瞭であった。遺物はこの第2層下面から主に出土して



第112図　土坑一括（SK70除く）出土土器実測図（1：4）



第113図　SK70実測図及び出土土器実測図

いる。

出土遺物：土師器杯、黒色土器椀（1）、須恵器甕（2）がある。この他、第1層からチャート製の石鏃1点と摺鉢（近世）が出土しているが、混入と思われる。

SK70　（グリッドⅠY－16・21）（第113図　PL.8・32）

遺構：長軸を東西方向にとる180×50cmの隅丸長方形を呈する。掘込みは平均16～20cmを測り、北壁ほど深くなる。遺構断面はU字形であるが、底部や壁面上には、Ⅳ層中の角礫がそのままかあるいは露出した部分もみられる。遺物は、南側から灰釉陶器・土師器の食膳具、黒色土器B壺等が1点を除き底部を壁側面に寄せた状態で出土している。このような遺物の出土状況や掘り込みの形態から、いわゆる平安時代の土壙墓と考えられる。遺体の残存はなく、焼骨片も検出していないことから土葬と考えられる。ただし木棺等の痕跡は認められない。北側底部に20×30cmほどの偏平な角礫が置かれており、枕石の可能性が考えられ、この場合北向きに埋葬されたことになる。

出土遺物：灰釉陶器椀1点（5）、黒色土器椀4点（1～4）、黒色土器B壺1点（6）が出土している。灰釉陶器を除きほぼ完形である。これは、県内の土壙墓に通有にみられる多量の食膳具と貯蔵具の組合せと同一であり注目される。灰釉陶器は、東濃産虎溪山1号窯式であり、10世紀後半と考えられる。

SK153（グリッドⅠV－23）（第112図）

遺構：切り合い関係はなく、東西方向に長軸をとる楕円形プランで、断面は円弧形状となる。

出土遺物：土師器杯A（3）・椀（4）、須恵器甕が出土している。

SK158（グリッドⅣB－18）（第112図）

遺構：SB48・60に切られ、SK157が隣接する。不整円形で、底部は浅く平坦で断面台形を呈す。

出土遺物：食膳具では糸切りの須恵器杯Aと黒色土器杯A（5・6）が多く出土している。このほか、ロクロ調整の長胴甕、須恵器甕がある。

SK164（グリッドⅣB－6）（第112図）

遺構：SB53に切られ、隣接してSK165・166が存在するが、互いに規則性はなく一連のものとはいえない。ほぼ円形のプランで、底部は平坦で断面台形を示す。

出土遺物：黒色土器杯A（8）、無台の皿（7）が出土している。

SK187（グリッドⅣB－1）（第112図　PL. 32）

遺構：不整の楕円形で、底部下端が南西寄りに片寄る擂鉢状を示す。底部からは土師器1点が伏せた状態で出土している。

出土遺物：土師器杯（9）と小型の盤（10）が出土している。

SB30（グリッドⅡU－16・21）（第112図　PL. 31）

遺構：当初、焼土粒のまとまりとともに土器片が確認され、住居址のカマドと判断した。しかしその後、床面を構築した形跡は認められず土坑とした。

出土遺物：黒色土器杯A（11）、須恵器杯B（12）・蓋（13）、土師器ロクロ長胴甕、須恵器甕（14）がみられる。

(5)　その他の遺構

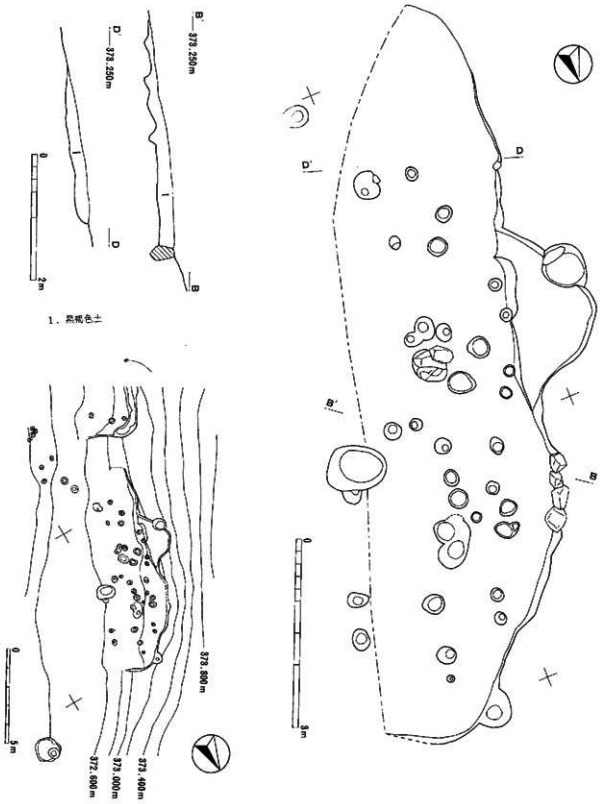
SB18・19（グリッドⅣC－21・22，ⅣH－1・2）（第114図）

遺構：切り合い関係はなく、東側は地形による傾斜とともに後世の耕作等により削平されたものと思われる。このため全体の形状は不明である。検出時、埋土の広がる範囲からみて2～3軒の住居址が切り合っていると想定した。しかし埋土はⅡ層を基調とした堆積層となっており、また床面も若干の傾斜をもっており、他の竪穴住居址と異なっていることが確認された。ピット内には礫や炭化粒が含まれ、同一埋土として認められ同時期と判断している。性格に関しては、近隣古老より「かなり以前に民家があった。」と教えていただいており、民家との関連する建物址の可能性は高いといえる。その場合、ピット群及びピット内炭化物はそれに由来するものかと思われる。

出土遺物：土器小片が多数出土しているが、時期を特定できる遺物はない。

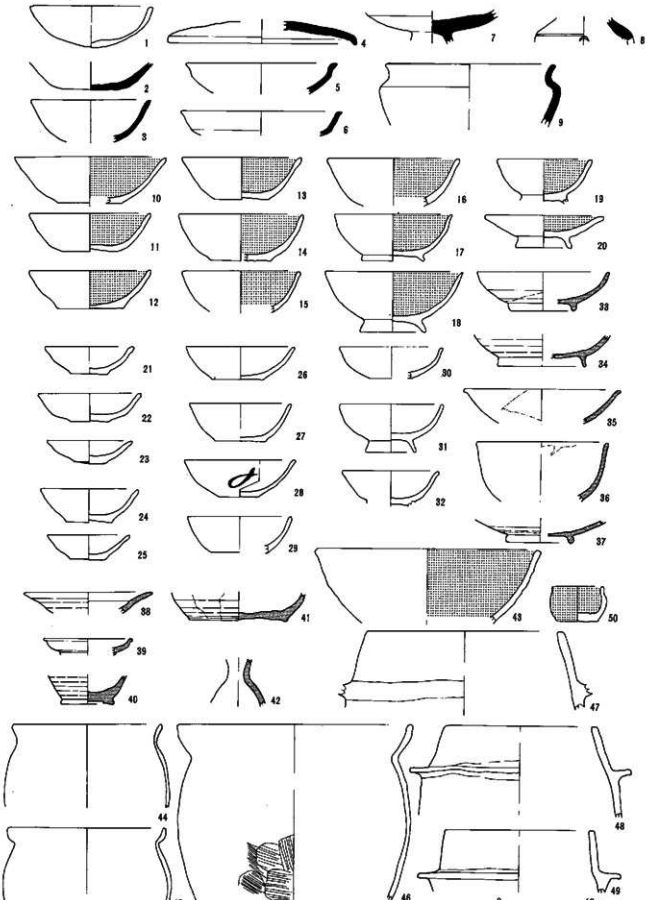
2　遺構外出土遺物（第115図　PL. 32）

1は手づくねの内黒土師器の杯である。2～9は須恵器で、2はヘラキリの杯A、3は軟質焼成の杯A、4は杯蓋、5・6は盤の口縁、7は盤の脚部、8は甕、9は鉢である。10～20は内面を放射状のヘラミガキで仕上げる黒色土器Aで、10～14は杯A、15・16は杯Aあるいは椀、17～19は椀、20は皿Bである。



第114図　SB18・19実測図

21～32は土師器で、21～30は杯A、31・32は椀である。なお、28の「の」の字状の墨書が記され、当遺跡では唯一の例である。33～42はいずれも東濃産の灰釉陶器で、33～36は椀、37は皿B、38は段皿、39は折縁皿、40・42は小瓶、41は広口瓶である。なお、33・35は光ケ丘1号窯式、36は虎渓山1号窯式である。43は片口が付されると推定される黒色土器A鉢である。44～46はロクロ調整の長胴甕で、46はタタキにより下半を仕上げている。47～49は土師器羽釜、50はロクロ小型甕である。



第115図　遺構外出土土器実測図（1：4）

第6節　中世以降

概　観

中世以降の遺構・遺物についてここで取り上げる。ただし、発掘時において奈良・平安時代として調査した遺構については、前節でふれた。中世とした理由は、掘立柱建物址の形態および柱穴の規模、墓については渡来銭の伴出があげられる。分布・集中は見られず散在する。遺物は遺構内からの出土はほとんどなく、検出面からの出土で、やはり集中せず散漫な分布を示す。時期的には13世紀から16世紀までと幅をもっており、近世陶器も若干ではあるが認められる。

1　遺構と遺物

(1)　掘立柱建物址

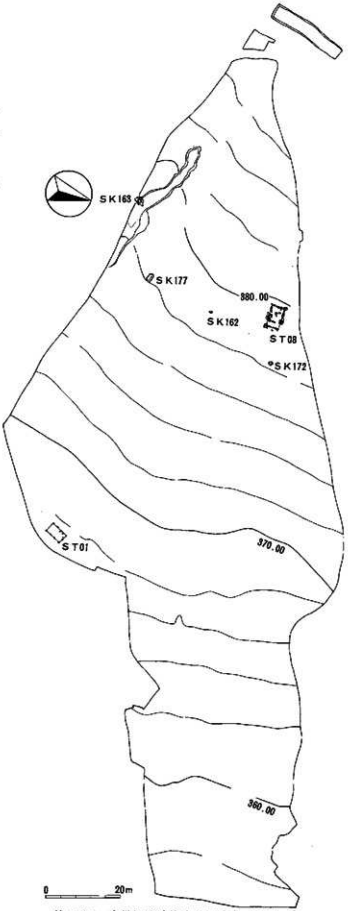
ST01　(グリッドⅣⅠ－1・6)
(第116・117図)

遺構：調査区内の中腹東寄りに位置する。重複関係はない。柱穴の埋土は、上層部がⅢ層を基調にし風化した凝灰岩を多量に含む褐色土で、周囲の地山のⅣ層とは容易に区別できた。平面形態は3間×2間で、南西―北東方向に長軸をとる長方形の掘立柱建物址である。柱間間隔は、桁行が1.5mであるが梁間はやや狭くなる。また梁間南面は、中央に柱穴は存在しない。柱穴掘方は、直径30cm前後の円形で、検出面からの深さは30～50cmとなる。建物址としての平面形態や個々の柱穴の形態より中世に属する遺構と判断した。

出土遺物：遺物量は極めて少ない。土師器小片が出土したのみである。

ST08　(グリッドⅣB－2・3)
(第116・118図　PL. 9)

遺構：調査区内の西域中央北側に位置する。重複関係はなく南東に近接してSB46が位置している。遺構は、自然地形面を段切り

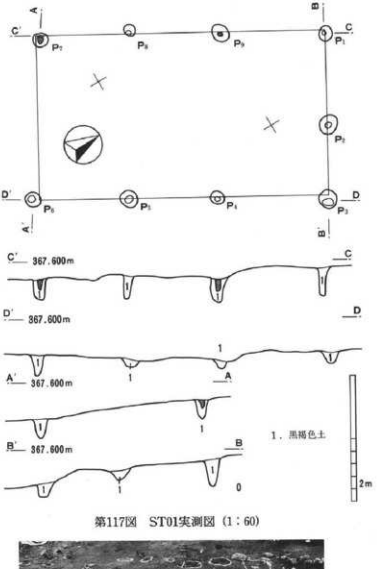


第116図　中世以降遺構全体図(1：1000)

（山削り）した緩斜面（基本土層Ⅳ層）上に構築されている。この段切りは、北西隅部において外部へ張り出しており、何等かの付属的施設として注目したいが、北側は調査区域外に広がるためその全貌は不明である。何れにしろ単独ではなく複合的建物址の可能性が示唆されよう。平面形状は、ほぼ東西方向に長軸をもつ長方形の掘立柱建物址である。規模は、桁行方向5.8m、梁間方向3.8mを測る。特徴としては、四隅の柱穴は南西隅を除いてその中央間のそれと比較して大きいことがあげられる。建物内部は、南北方向に柱穴が並ぶ列が2列あり、側柱と連絡させている。それぞれの柱穴掘方は東面列の小径の円形を除くと方形である。底面は、すべて平坦面である。柱抜取り痕が南東隅より南柱列に3ヶ所確認された。時期は、整地された地面上に構築されており、奈良・平安時代の掘立柱建物址とは明らかに異なる。平面構造上、中世以降に属すると思われる。

また、周囲には中世の土壙墓SK162・172が存在するため、宗教性を帯びた寺的性格の可能性も考えられたが、建物等からは言及できない。

出土遺物：全体的に遺物量は極めて少ない。



第117図　ST01実測図（1：60）

ST08検出状況（東より）

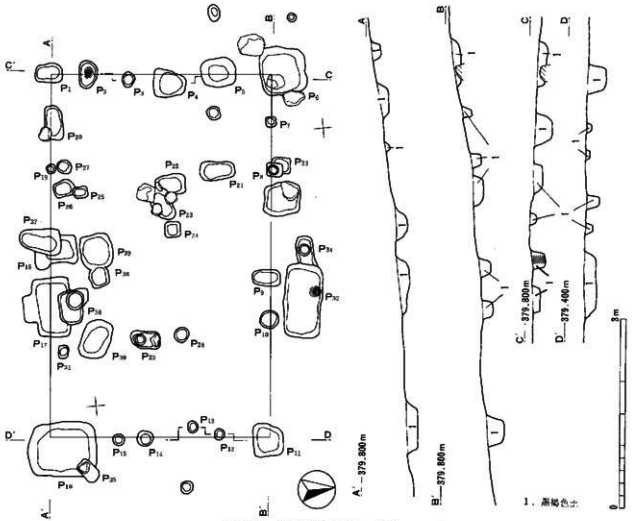
(2) 土　坑

SK162（グリッドⅣB－1・6）

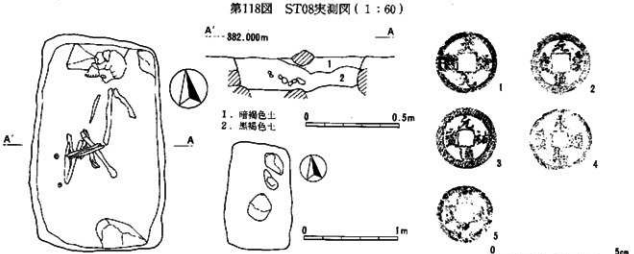
（第119図　PL. 9・34）

遺構：調査区内の西域中央北側に位置する土壙墓である。Ⅳ層面上で検出され、軸がやや北東側に振れるもののほぼ南北方向にとる、長軸120cm短軸70cmで、検出面からの深さは80cmを測る長方形プランをもつ。埋土上には、3点の礫が南北方向に並べられた状態で存在する。埋土は、分層できないが2層は凝灰岩の細礫を中心とした砂利状の灰褐色土で、人骨上に覆いかぶさっている。上部構造の有無は不明である。

人骨の出土状態：肋骨・手骨・足骨等が残存せず保存状態は極めて悪い。しかし頭蓋骨部分は自然礫平坦面を枕に固定された状態にあり、遺体を北側に向け顔面は西側に向けられている。また四肢骨は骨端部が失われているものの、膝を折り曲げた屈葬状態で安置した様子を窺い知ることができる。埋葬方法は、



第118図　ST08実測図（1：60）



第119図　SK162実測図及び出土銭貨拓影

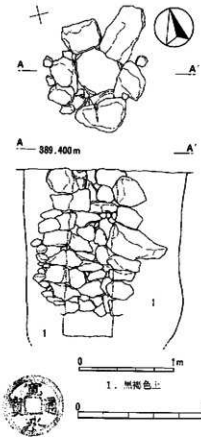
中世の埋葬形式に沿った北枕であり、西方浄土を願った風習を踏襲している点注目される。（人骨鑑定については付章参照）。

出土遺物：古銭が5点、四肢骨の折り重なる西側にまとまって出土している。1は天聖元宝（初鋳造年1023年）・2は元豊通宝（同1078）・3は元祐通宝（同1086）・4は永楽通宝（同1408）と判読できるが、5は判読できない。これらの古銭は六道銭と思われる。

SK163（グリッドⅣF－5・10）（第120図　PL.9・34）

遺構：西域の調査区域沿いに位置する井戸址である。重複関係はSD09を切り込む。後世の影響が大きく、調査時点においては、市道352号線上コンクリート舗装に接触しており、上部の石積みは不明である。構造は、円形に河原石を積んで井戸枠をかたちづくり、その周囲に角礫を詰め込み固定している。底部は石積みによる施設は設けられていない。深さは、最上部礫上面より174cmを測り比較的浅い。掘方は北側が南側に比べ広く取られている。

出土遺物：遺物は極めて少ない。寛永通宝1点が出土している。



第120図　SK163実測図及び出土銭貨拓影

SK172（グリッドⅣB－4）（第121図　PL.9）

遺構：調査区内の西域北東側に位置する。他の遺構との間に直接的な重複関係は存在しない。遺構の平面形状は、やや南北方向に直径90cmほどのほぼ円形プランを呈する。検出面からの深さは、最深部で約40cmである。底部は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土中の礫は、壁面沿いに立て並べて張り付けた状態で置かれ、上層部にそれよりやや小形の礫が含まれている。周辺の土坑に同類のものは存在しない。性格であるが、埋土がSK162に類似しており、歯が出土していることより中世の土壙墓と考えられる。

出土遺物：歯骨破片が数点出土しているが、細かく砕けており分析には耐えられない。

第121図　SK172実測図（1：40）

SK177（グリッドⅣB－22，ⅣG－2）（第122図　PL.34）

遺構：調査区内の西域南側にある。他の遺構との切り合い関係はない。平面形は、北西―南東方向に長軸をもつ楕円形のプランで、規模は2.22×1.20m、検出面からの深さは29cmを測る。埋土は単層で底部面は平坦である。

出土遺物：遺物は極めて少ない。キセルの吸口部分と寛永通宝がそれぞれ1点出土している。これらから近世の遺構と判断した。

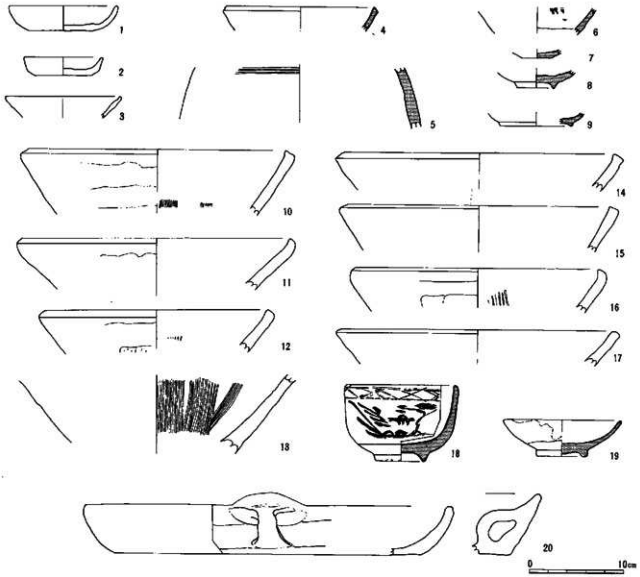
2　遺構外出土遺物

土器・陶磁器（第123図　PL.33）

1・2はロクロ調整の軟質の焼成の土器皿で、糸切痕を残す。1は口径11.8cm、器高2.5cmを測り、内部底面は横方向のナデ調整が施される。2は小形で、口径8.1cm、器高2cm、3は硬質灰白色の手づくねの土器皿で口縁端部に面取りされる。図示した以外にも多数出土しているがいずれも細片で、ロクロ調整がほとんどである。

4～6は瀬戸・美濃系陶器で、これ以外にも天目

第122図　SK177実測図及び出土銭貨拓影



第123図　遺構外出土遺物実測図（1：4）

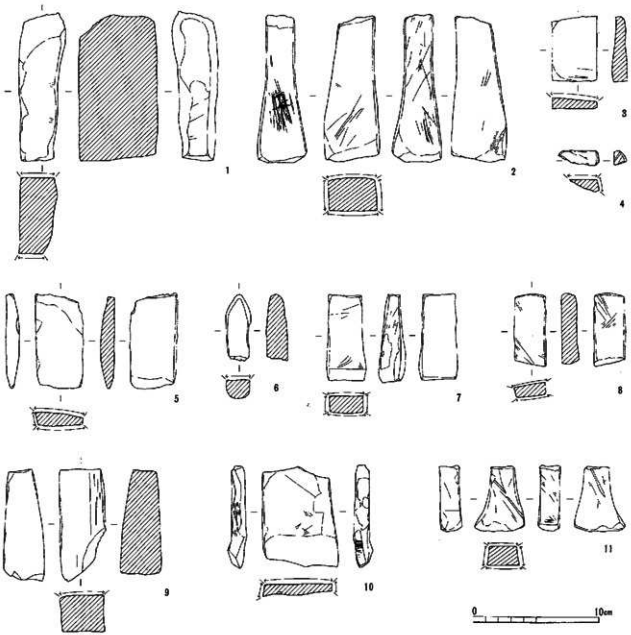
茶碗がある。4は古瀬戸卸皿で端部が面取りされ黄色がかった灰釉が口縁部に薄く掛けられている。5は古瀬戸瓶子の体部で、3条の沈線が施され、薄い自然釉が掛かる。この2点は、時期的には14世紀代と思われる。6は大窯期の灰釉丸皿である。

第124図　遺構外出土銭貨拓影（2：3）

7～9は輸入陶磁器である。図示した以外にも龍泉窯系青磁碗がある。7は同安窯系青磁碗の体部である。8は白磁皿、9は内面見込み部が輪状に釉が拭われる白磁Ⅷ類碗である。時期的には12世紀代である。

10～17は珠洲系の摺鉢である。胎土・焼成をみると、16は灰白色の軟質の焼成である以外、青灰色の硬質の焼成である。口縁の形態をみると、断面方形（14・15・17）、断面方形でやや内湾（10・12）、丸味を持ち内湾（11・16）の三種に分けることが可能である。また調整をみると、外面を縦方向のヘラケズリで仕上げた例がいくつかある（14・15）。時期的には14世紀代に比定される。

18～20は近世と考えられる。18は唐津産の碗、19は肥前系の瑠璃釉の輪禿碗である。20は、内耳質のほ



第125図　遺構及び遺構外出土石製品実測図（１：３）

うろくで、取手部の上部が半円形に盛り上がっており、鉄製のほうろくの模倣と思われる。

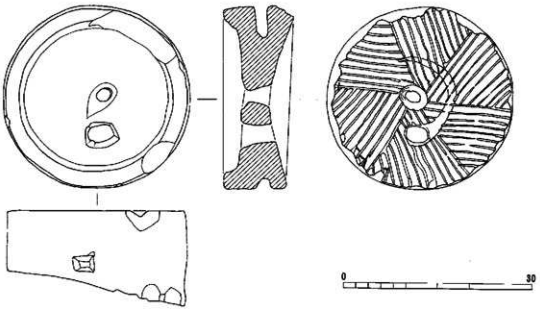
銭貨（第124図　PL.34）

渡来銭が２点出土している。１は熙寧元宝（初鋳造年1068年）、２は淳化元宝（同1265年）で、いずれもグリッドＩＹのⅢ層上面より出土している。周囲に関係する遺構はみられない。

この他、寛永通宝がSB53上層より１点出土している。

鉄製品（PL.33）

１は鉄鏃でグリッドⅣBより出土している。身部が長三角形を基本平面形として身部関（屑部）の形状は撥形の曲線を描き、断面は両面平坦であるが先端部は鎬が付く可能性がある。篦被部（頸部）断面は角である。全体の形状は残すものの錆による影響が強く残る。出土層位より中世としたが、古代の可能性も否定できない。２は刀子でSB47の埋土より出土している。身部の棟側は若干の反りをもつ。刃部先端及



第126図　遺構外出土石臼実測図（１：６）

び中央付近で欠損する。使用減りかは分からない。断面が直線的に減幅して刃部側とする。両関を保つ茎部は残される。

この他、のみ状（３）と形態不明（４）の製品がそれぞれ１点、グリッドＩＹ－20より出土している。この内のみ状の製品は、先端部を刃部とし両側に鑿を削っており断面は方形である。

石臼（第126図　PL.34）

グリッドⅢＥ－13で、耕作土中から出土した。凹側のみであり、時期の特定はできない。

砥石（第125図　PL.34）

砥石は、竪穴住居址と検出面から出土しており、時期的には古代に含まれる製品もいくつかあると思われるが、ここで一括して取り上げる。石質は１・３・４・６・８・９・10が硬砂岩、２・５・７・11は硬質の凝灰岩である。

１はSB02出土で、自然石を割り成形しているが一面のみが磨かれている。２はSB43出土で、四側面が使用され、研ぎ減りが著しく内湾している。なお、線条痕がそれぞれにみられる。５はSB47の出土で、偏平に成形されており、四側面が使用され、研ぎ減りが著しく先端が尖っている。６はSB65出土で、一面が磨かれているのみで自然面を多く残している。他は、いずれも遺構外の出土である。３・４は欠損しているが、偏平に成形され四側面が磨かれている。７は四側面が磨かれ、線条痕がみられる。７・８・９は先端部を欠損しているが、四側面が磨かれている。10は偏平に成形され四側面が磨かれているが、欠損部が多い。11は四側面が使用され研ぎ減りが著しいため内湾しており、線条痕がみられる。

参考文献

㈶長野県埋蔵文化財センター；1990　『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書７――南栗遺跡――』

第4章　調査の成果と課題

第1節　縄文時代晩期終末の石器群について

長野県における晩期終末期の石器群は、これまで幾つかの報告文中で取り上げられてきた〔和田；1982、前田；1985、松本；1987、鶴田；1988〕。石器残存数量比に基づく組成表の提示とその解釈が主な骨子で、石鏃と打製石斧の数量から、地域差〔和田；1982〕あるいは生業差〔鶴田；1988〕を推論するものであった。今回、鶴前遺跡のSD09を中心とした該期出土資料から、同様な考察を行うには、文化遺物の複合があり多少困難がある。ただし幾つかの器種については、個別的な特徴から該期の石器を考察・言及することが可能なので、以下にその一二を記す。

(1)　石鏃の特徴と編年的位置

石鏃で晩期終末に位置付けることのできる資料は、有茎式鏃の中にある。長野県における有茎式の受容は縄文時代後期前半までは確実にさかのぼり、後期中葉の加曽利B2式期には一般化する。晩期では前半期と後半期で様相を異にし、容易に石鏃型式を括ることができるので、以下に指標となる特徴をまとめ、鶴前遺跡の内容を検討する。

有茎式鏃には形態的に様々な例が存在するが、側辺部が内湾しあるいは翼状に張り出した凹基の有茎式は、晩期に入ってから盛行すると考えられる。さらに晩期前半の特徴としては石材に頁岩ないしはチャートを多用する点、大きさで2.0cmを超える大形例が一般的な点などを加えることができ、鋸歯状側辺の発達を挙げることもできる。これらを総合した形態が、本県における晩期前半の佐野式期に最も指標的な石鏃であり、資料として半札村茶臼山遺跡〔半札村教委；1980〕、長野市宮崎遺跡〔鶴田；1988〕、大町市一津遺跡〔大町市教委；1990〕に良好な例がある。

一方、晩期後半の特徴としては石材に黒曜石を多用する点、大きさで2.0cmを下回る例が一般的となる点などを挙げることができ〔町田；1992b〕、形態的には翼状の張り出し部が基部端に後退し、鋸歯状側辺が減少するなどの点を認めることができる。これらが晩期後半の氷式前後の指標的な石鏃であり、資料としては上郷町（現飯田市）矢崎遺跡〔上郷町教委；1988〕、茅野市御社宮司遺跡〔和田；1982〕、松本市石行遺跡〔松本；1987〕に良好な例がある。

鶴前遺跡SD09出土の有茎式鏃(第24図18～22PL.14－18～23)は、すべて凹基式であり、全体の約7割を黒曜石が占める。個々の資料を検討すると2.0cmを超え、鋸歯状側辺を呈したチャート製の20が、器素からすると古出形態で、2.0cm以下で先端部がやや先細り状を呈した黒曜石製の18・19は晩期後半に盛行する形態といえる。基部のえぐりが深く、側辺部が外湾する21・22は同様に後半期の例と考えられ、浮線文の成立する女鳥羽川段階以後に登場し、弥生時代中期栗林式期まで存続する形態である。遺構外出土資料にも良好な例が存在し、これらを合わせ概観すると佐野式の後半から氷式段階までに相当する石鏃が認定できる。

(2)　大形刃器の特徴と編年的位置

刃器類で終末期に位置付けることのできる資料は、大形刃器中にある。長野県の刃器変遷で、大形の類は縄文時代中期後半にひとつ、後期段階は資料的な制約もあって不明であるが、晩期にひとつ変化が認められる。弥生時代中期後半には大きな製作・用法上の転換が生じ、形態的にも一線を画することになる〔町田；1993b〕。以下に変化の特徴を記し、鶴前遺跡例を検討する。

縄文時代中期後半の技術的変換とは、打製石斧製作関連の作出剥片を素材とするのではなく、独自に素材を選択し大形刃器を製作する点にある〔長野県埋文センター；1993ａ〕。晩期の変化は素材獲得の点では同様であるが、様々な形態的特徴をもった石層的な剥片を多用する点に違いが認められ、後半期には粘板岩や頁岩などの石材を用い、方形ないし長方形を規範とする例が増加してくる。ただし晩期後半は県北と県南で様相を異にし、県南では砂岩を用いた半月形の所謂横刃形が存続している。資料としては茅野市御社宮司遺跡、松本市石行遺跡に良好な例がある。

鶴前遺跡SD09出土の刃器中では、PL.15－35が該期の特徴を示す資料である。頁岩製で刃部を欠損するが、背部を直線的に加工したやや長方形に近い形態を呈する。また遺構外出土資料中にも好例があり、頁岩製の方形または長方形に近い形態を呈している（PL.21右端下２例）。

(3) 磨製石斧の特徴と編年的位置

磨製石斧は晩期終末で最も指標となり得る石器のひとつである。縄文時代の磨製石斧は大別して２種の形式が存在し、ひとつは定角式であり、もうひとつは乳棒形式である。長野県の石斧形式の変遷は、中期に乳棒形式が発達する中信地域と定角式が用いられる北信地域で様相を異にするが、後期から晩期前半にかけては大略全県的に定角式が盛行する。ところが晩期後半に至ると、突如として乳棒形式が再来するのであり、あたかも周辺地域からの流入を思わせる感がある。時同じくして県内には浮線文が成立し、以後東海系条痕文土器が到来する時期に相当している。近年の研究成果では、愛知県豊川市麻生田大橋遺跡〔愛知県埋文センター；1991〕（註１）に乳棒形式の石斧製作跡が確認され、時期的には五貫森式から水神平式で、本県の晩期後半、女鳥羽川段階から永式期に大方合致した時期の資料である。したがって形式上の系譜と出現時期、周辺地域の状況を総括すれば、この類を東海系の乳棒状磨製石斧と称することも妥当であり、該期石斧の指標と成し得ることができる〔町田；1992ａ〕。

特徴をまとめると、ａ全体形が乳棒状を呈する・ｂ刃部に敲打痕跡を残し、刃部のみ研磨する・ｃ材質に緑色片岩？・塩基性岩〔愛知県埋文センター；1991〕を用いる・ｄ重量がある（比重のある石材を用いる）などである。県内での類例を列挙すれば上郷町矢崎遺跡、駒ヶ根市荒神沢遺跡〔駒ヶ根市教委；1979〕、茅野市御社宮司遺跡、松本市石行遺跡、長野市篠ノ井遺跡―犀川堤防地点―（長野市教委；1992）、更埴市屋代清水遺跡〔中島；1992〕などがある。

鶴前遺跡SD09出土の磨製石斧は、４点中３点（第24図47　PL.16－46～48）がこれに該当する。46は刃部のみの破片であり、麻生田大橋のＣ類「側縁の湾曲が強く身が膨らむ」例に、47はほぼ完形でＡ類「側縁が刃部に向かって幅を増す」例に相当すると考えられる。48は基部に敲打痕跡を残す欠損例である。

SD09ではないが、グリッドⅡＡより形態的に柱状片刃石斧と考えられる資料が１点出土している（第24図右端下　PL.17－上）。断面は正方形に近い四角形、頭部は切断状の面を呈し、各面良好に研磨されている。頭部付近には装着痕跡と考えられる損傷（摩耗）が認められたが、刃部には研磨痕以外の使用痕跡は確認できなかった。頁岩製で法量は7.6×2.6×2.0cm、76ｇ、刃角40度・刃部角22度を測定する。ただし注意しなければならない点は、非常に小形で長さが短いこと、晩期後半または弥生時代後期以外の資料が出土していない点、古代の頁岩製砥石が少なからず出土している点など、大きさ・時期・類似石器の出土と形態的特質以外に障壁となる要素が多々ある。今後の類例または詳細な検討が必要である。

(4) その他

以上の他、晩期終末に位置付けが可能な石器には石錐と打製石斧があり、SD09より出土のある後者について若干言及しておく。打製石斧は従来石器総数あるいは石鏃数に対してその割合を云々してきたが、北信地域は出土量が僅かであると考えられてきた〔和田；1982、鶴田；1988〕。鶴前遺跡における本器種を時期的に限定することは難しく、数量的な比較はもちろん行うことはできない。全出土数を合算したとし

第2表　石器の消長表

ても石鏃量の2分の1程度であり、傾向としては従来の見解を違えるものではない。しかしながら最近の発掘事例では、晩期前半(佐野式期)の相当面から打製石斧が豊富に出土し〔長野県縄文センター；1992、同；1993b)、後半期（水Ⅰ式前後）でも比較的数量の多い遺跡〔中島；1992〕が確認されてきている。これまで調査の行き届かなかった沖積地（生産域を含む）の事例であり、居住地内での石器組成には組み込まれなかった石器が抽出されるようになったといえる。これを文化遺物の複合〔長野県縄文センター;1993c〕に対し分散という概念で包括するが、居住地と生産地を組み合わせとして認定することに課題が残っている〔渡辺；1989〕(註2)。

石器の形態には様々な要素が含まれており、形態を観察することは方向を間違わない限り非常に有効な一方法論である。屋代清水遺跡で提示された打製石斧の典型（範型）が縄文時代終末の一型式を表現したものであるなら、鶴前遺跡にみる第24図38、PL.15－37・38例などは同一ではないにしても、同じ形態的特性を担う類型として抽出することが可能であるかも知れない。

(5)　**晩期終末における石器群の消長**（第2表）。

石器の形態と時間的な位置付けについては概略したが、数量の多少に問題が残るので、御社宮司遺跡例を参考として、該期石器群の消長をまとめておく。

石器個々の時間的前後関係において比較すると、①前段階からの継続、②新しい段階を形成、次段階の萌芽に区別して考えることができる。

①の様相……磨石・凹石・敲石・刃器（小形）・砥石

《調理加工具、ただし細には相対的な変化は認められる》

②の様相……石鏃・打製石斧・刃器（大形）・石錐・磨製石斧

《狩猟具・採集具・加工具、調理加工具や祭祀具の一部は消滅》

各様相の示す主体的時期は、①が晩期前半（前葉～中葉）に、②が晩期後半（後葉～終末）から弥生時代中期初頭に相当し、鶴前遺跡SD09出土の中心的資料は②にあたる。

①から②に石器群は大きな変化を示し、大方の器種が一新される。石鏃・石錐には形態的・材質的な変化が認められ、打製石斧・刃器（大形）には形態的な変化が、そして磨製石斧に至っては新たな形式の導入がみられる。今後①の様相とした中で変化のつかみ難い器種、具体的には調理加工用の道具についての詳細な分析が必要である。

最後に、長野県の縄文時代晩期における生業を推考してみると、石鏃を用い動物質食料の獲得と打製石斧と大形刃器を多用した植物質食料の収集が並立している段階を想定できる。この段階には、調理具としての磨石・石皿が減少し、祭祀具である石剣・石刀にも減少の傾向が認められる。具体的には後半期、狩猟具としての石鏃に法量・材質面での転換が生じ、打製石斧にも形式的な集約が計られる。台石以外の石

皿は消滅し（町田；1993ａ）、祭祀具にも衰退・消滅が起こる。この変化をｉｂとし、晩期における生業の発展段階として位置付けたい。恐らくは栽培植物の生産に関わる依存度、ないしは対象植物の種類によっての変移と考えられるが、証明は石器からだけでは難しい。後半１ｂ期における御社宮司遺跡の縄文土器の発見を好意的に解釈すれば、その変化にコメが関与していた可能性は大きいと言えよう。

採集狩猟民と栽培植物の関係は、続くコメ作り農民の出現、長野県における弥生時代のはじまりを考える上に、欠くことのできない検討課題である。鵜前遺跡前後期の様相解明も含め、これからの調査・研究に期待したい。

註１　1988～89年に実施された県埋文センター関係の調査では分類可能な磨製石斧が645点出土している。この内199点の資料に対し、１肉眼観察・２実体顕微鏡観察・３偏光顕微鏡観察（35点）を行い、岩石学的分析を実施している。結果、粗粒ゲンブ岩・ゲンブ岩・変粒岩岩と分類された暗緑～黒色を呈した試料を「変塩基性岩」と呼称し、限定された岩石の分布帯の提示と、偏光顕微鏡下での観察を促している。従来「緑色片岩」と安易に記載されていた例を含めて、再検討の余地は十分ある。

註２　長野県では中央道・上信越道と雪光平を横断する大規模調査を実施している。千曲川・犀川沿いに、自然堤防と後背湿地を各所で発掘し、例えば石川条里遺跡の集落域と水田域、春山遺跡（集落域）と川田条里遺跡（水田域）のように居住域と生産域を組み合わせて調査する結果となった。現在報告書をまとめつつあるので、成果に期待したい。

参考文献

㈶愛知県埋蔵文化財センター；1991『麻生田大橋遺跡』

大町市教育委員会；1990『一津　―内陸における縄文時代玉作り遺跡―』大町市教育委員会　1990

上郷町教育委員会；1988『矢崎遺跡』

駒ヶ根市教育委員会；1979『荒神沢遺跡』

鶴田典昭；1988「２　石器　宮崎遺跡の石器組成」『宮崎遺跡』長野市教育委員会

中島庄一；1992「第７章　考察　１　打製石斧について」『歴代清水遺跡』長野県教育委員会・更埴市教育委員会

㈶長野県埋蔵文化財センター；1992『更埴条里遺跡』『長野県埋蔵文化財センター年報』　9

㈶長野県埋蔵文化財センター；1993ａ　『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書11―明科町内―　北村遺跡』

㈶長野県埋蔵文化財センター；1993ｂ　『更埴条里遺跡』『長野県埋蔵文化財センター年報』　10

㈶長野県埋蔵文化財センター；1993ｃ　『中央道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書12― 東筑摩郡坂北村・麻績村内 ― 向六工遺跡ほか』

長野市教育委員会；1992『篠ノ井遺跡群(4)―犀川堤防地点―』

前田清彦；1985「８　調査の成果と課題　３）石器について」『豊の前・福沢・青木沢』塩尻市教育委員会

町田勝則；1992ａ　「信濃における弥生時代石器文化の終焉」第31回埋蔵文化財研究集会

町田勝則；1992ｂ　「信濃に於ける米作りと狩り」『人間・遺跡・遺物　２』

町田勝則；1993ａ　「信濃に於ける米作りと採集」『長野県考古学会誌』　68号

町田勝則；1993ｂ　「３　粗製剥片石器の使用痕について」『朝日遺跡Ⅳ』㈶愛知県埋蔵文化財センター

松本健速；1987「(3)　石器」『松本市赤城山遺跡群Ⅱ』松本市教育委員会

牟礼村教育委員会；1980『明寺寺・茶臼山遺跡』

和田博秋；1982「第Ⅴ章　御社宮司遺跡の諸問題　２　石器の問題」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 ―茅野市その５―昭和52・53年度』長野県教育委員会

渡辺敏泰；1989「善光寺平南部の自然堤防と沖積地」『長野県埋蔵文化財センター年報』　6

第2節　弥生時代後期～古墳時代前期の遺構・遺物

(1) 北陸系土器について

① 外来系土器出土の状況

本遺跡からは弥生時代後期に千曲川流域に広く分布する箱清水様式には見られない土器群（外来系土器）が多数出土した。遺構によっては箱清水式土器群を圧倒する数量であり、主体的なあり方をしている。これら外来系土器の多くは、遺構埋土からの破片出土で、完形になる資料は少ない。このことは遺跡が斜面に立地しているためと思われるが、該期では器種の揃った土器を出土する住居遺構が少ないという時期的な特徴もある。多量に出土した破片資料をもって、外来系土器群を主体とする集団の存在を過大に評価することはできない。しかし、土器が特定の器種に偏ることがないことから、箱清水式土器群をもつ在地の集団とは系譜の異なる集団による集落が、弥生後期に存在していたことは確かである。

外来系土器と認識した土器群の大半は北陸地方に本貫を置くものであり、器種の組成、土器製作技法から見て北陸北東部域の状況に近似していると判断された。以下北陸系土器群を中心とした検討を行った。

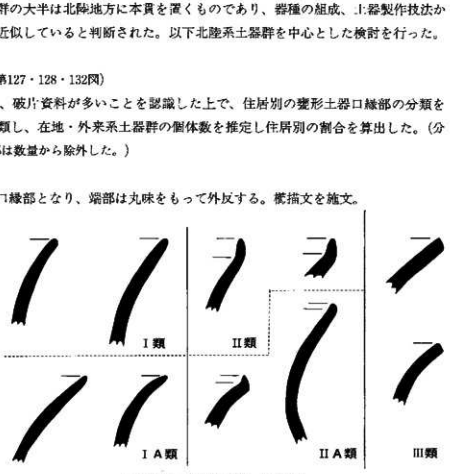
② 甕形土器口縁部の分類（第127・128・132図）

本遺跡から出土した土器は、破片資料が多いことを認識した上で、住居別の甕形土器口縁部の分類を行った。以下の観点により分類し、在地・外来系土器群の個体数を推定し住居別の割合を算出した。（分類にあたって1.5cm以下の口縁部は数量から除外した。）

Ⅰ類口縁…比較的幅広の口縁部となり、端部は丸味をもって外反する。櫛描文を施文。

ⅠA類…比較的幅広の口縁部となり、端部は先鋭状に外反する。櫛描文を施文。

Ⅱ類口縁…端部がつまみ上げによって、受け口状となる比較的幅の広いもの。櫛描文を



第127図　甕口縁分類Ⅰ（在地系）

第128図　甕口縁分類Ⅱ（北陸系）

施文。

ⅡA類…端部がつまみ上げによって、先鋭状になるもの。櫛描文を施文。

（Ⅱ類、ⅡA類口縁の分類は中間的なものが多く分類に曖昧さを残す。）

Ⅲ類口縁…比較的幅広の口縁部となり、端部は平坦に撫でられ角状になる。櫛描文を施文。

Ⅳ類口縁…有段口縁となり、端部は先鋭状に外反するものが多い。擬凹線文を施文。

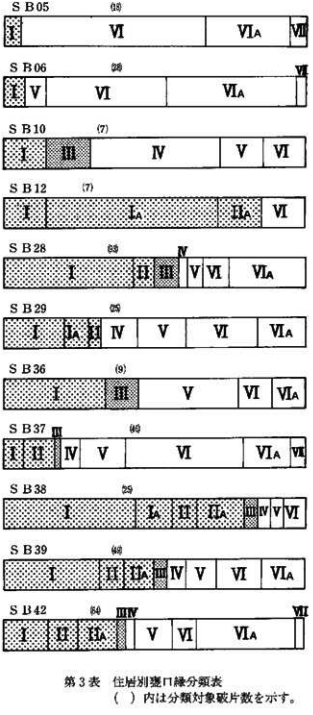
Ⅴ類口縁…有段口縁となり、端部は先鋭状に外反する。擬凹線文を施文せず、ナデによる整形。

Ⅵ類口縁…「く」・「コ」の字に外反し、端部は平坦に撫でられ角状に面取りが行われる。

ⅥA類…「く」の字に外反し、端部は撫でによって整形されるが面取りが行われない。

Ⅶ類口縁…その他

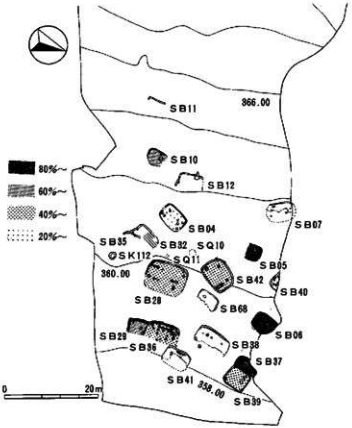
Ⅰ類・Ⅱ類が在地の系譜をひく形態であり、千曲川流域では普遍的にある。Ⅲ類は北陸地域の影響のもとに在地から派生した形態と考えられ、本遺跡では良好な資料がないが、頸部は「く」の字に近い形状をとるものに多い。Ⅰ～Ⅲ類には頸部に篦状文、口縁・胴部に波状文が施文され、内面は磨きによって調整されている。Ⅳ～Ⅵ類口縁が北陸系であり、北陸南西部域に高い比率で出土するⅣ・Ⅴ類と、能登地域を中心とする北陸北東部域に多出するⅥ類がある。前者、北陸系有段口縁土器群の大半は、口縁端部が先鋭状に外反し、胴部との接合には外面または内面に粘土帯を貼り肥厚させている。このため頸部（接合部）に著しい粘土帯を残しているものが認められた（SB04－1、SB28－6・52・58・59、SD09－79等）。口縁内面は横ナデによって調整されており、頸部以下の資料は少ないものの体部外面はハケ、内面は削りが残されたもの（SB04－1、SB28－7）とナデに近い削りのもの（SB28－7等）が観察された。Ⅵ類には口縁端部に側面から強いナデが加えられ平坦面を作り出している例と、面取りが行われず丸縁状になる例とがある（ⅥA類）。面取りをする口縁には、更に内面からのナデによって平らに仕上げられたものが多数ある（SB04－3、SB05－1・3・4、SB10－1、SB28－9・10等）。口縁内面はナデ、体部はハケもしくはナデによる調整



第3表　住居別壺口縁分類表
（　）内は分類対象破片数を示す。

である。

外来系土器の出土比率が高い遺構は丘陵端部の東に集中しており（第129図）、SB12・38以外は在地土器とほぼ同比率もしくは在地を上回る比率で出土している。ことにⅠ類に継いでⅥ類が高い割合を示し各遺構に普遍的に見られることは、北陸北東部域の状況に似ており（註1）、各住居において在地・北陸系Ⅳ類・Ⅵ類の出土個体数の差は時期差を表すものと考えられる。SB04・10・29等のⅣ類が一定の出土率をもつ遺構群は、北陸南西部域の影響を残す段階、SB05・06・37等のⅥ類が50％以上を占める遺構群は、北陸北東部域との密接な関連をもつ弥生終末期～古墳前期初頭段階とみられる。（第3表）



第129図　甕口縁の外来系土器比率別住居分布図

③　北陸系土器群の成形・施文について

北陸地方に系譜をもつ土器群として認識された甕がいくつかに分類されることは先に述べた通りであるが、中でもⅣ類口縁における擬凹線文の施文にいくつかのバリエーションが認められた。本遺跡出土の擬凹線文、刺突文等について他の器種も含めた状況を整理してみたい。

擬凹線文

擬凹線文に関する分類は〔品田；1990〕・〔滝沢；1993〕等によって行われ、地域・時期の検討がされているが、本遺跡出土の擬凹線文は大きく2種類に分けることができた。

A…ヘラ状工具等により1本ずつ沈線を数条施文する（多条沈線）。沈線は幅広のものと狭いものがある品田（1990）の指摘する疑似擬凹線文に相当する。本遺跡からは壺・高杯（あるいは器台）にのみ施文され、甕への施文はなかった。（第130図1～3）

B…ハケ状工具等の木口を用いて2～3単位で数条にわたり施文する（第130図4～9）。木口の幅の違いから広いもの（B1）と狭いもの（B2）がある。甕の施文は全てこの技法によって行われており、擬凹線B1・B2を併用する例もみられた。一点、椀（鉢か）にもこの技法が見受けられた（遺構外－112）。

また擬凹線文施文後にナデが口縁端部に施され上端の擬凹線が不明瞭となるもの（B3）もあり、このナデによって端部が先鋭状に外反したと考えられる（SB04－1、SB28－6・52、遺構外－147）。口縁内面に指頭圧痕が明瞭に観察されたものはSB04－1、SB28－6のみである。

本遺跡出土土器には擬凹線文の器種別の使い分けがなされていたと見ることができ、北陸地域と同様の状況が伺える〔滝沢；1993〕。

体部文様

甕で体部刺突文がある例は破片を含め7個体である。口縁形状までわかるものはSB28－6のみであるが、恐らく体部刺突文が施される甕は、有段口縁に限定されるであろう。刺突文はすべてハケ施文の上か

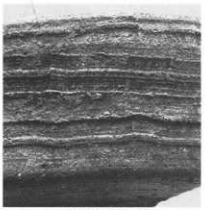
擬凹線文Ａ

1（SB29－1）A

2（遺構外－18）A

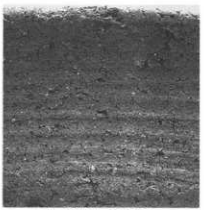
3（遺構外－22）A

擬凹線文Ｂ１



4（遺構外－106）B 1

5（遺構外－111）B 1



6（遺構外－105）B 3

擬凹線文Ｂ２

7（遺構外－103）B 3

8（遺構外－105）B 2

9（遺構外－112）B 1

有段口縁無文

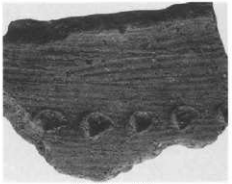
10（遺構外－125）

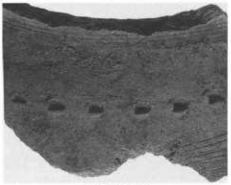
11（遺構外－123）

第130図　北陸系土器群調整技法１

体部刺突文

12（SB28－６）


13（遺構外－121）


14（SB28－59）

15（SB28－58）

16（SB05－91）

17（遺構外－61）

北陸系甕底部

18　B

19　B

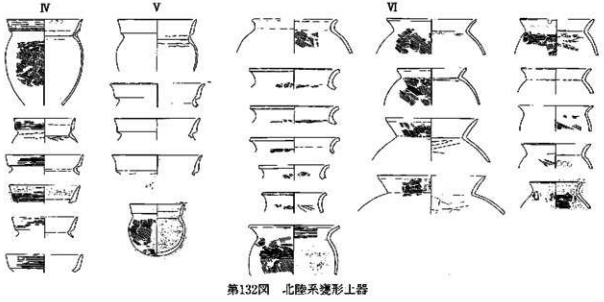
20　B

21　B

22　A

23　C

第131図　北陸系土器群調整技法２



第132図　北陸系甕形上器

ら角状の工具（ハケ原体に用いられた木端か）によって行われており、右から左への刺突である（第131図12～15）。装飾壺の隆帯にはヘラ状工具による刻みが施されている（第131図16・17）。

このほか甕への施文としては、SB39－1にみるヘラ描沈線文がある（PL. 29）。成形段階のハケ目をナデた後に、在地の文様である櫛描波状文を模したとおもえる施文である。胎土・焼成ともに在地の甕とは異なり、口縁部形状からすると異質な甕である。

底部成形

甕底部の出土は極めて少ないが、形状から3種に分類された。在地との識別には体部外面成形がミガキ以外のものを該当させた。ケズリ（ケズリに近いナデ）・ハケによる成形がある。

A…比較的広い底をもち平坦になるもの（第131図22）。

B…底部と底側面の境界に底側面からの粘土の飛びだしが線状もしくはドーナツ状に残るもの（第131図18～21）

C…丸く仕上げられたもの（第131図23）。

A～Cの比率的な検討は数量が少ないため言及できないが、B・Cの底部製作には体部下半の粘土をハケ（ヘラ）によって押し付けて作られており、体部と底部が一体となっている。

以上のことから、在地の胎土であっても器形・製作技法ともに北陸地域の正確な模倣が行われている。また甕の組成、内面整形にみる特徴は、北陸地域でも北東部域の影響が伺われる。

(2)　各器種の検討

①　北陸系以外の甕

SB42－2・3、SB68－1・2、SQ12－6、SD09－49～52等は、前記した北陸北東部域の「く」の字甕の影響のもとに変化した古墳前期の在地の器形と考えられる。SB37－10、遺構外104・105は、S字状口縁甕の破片があり、SB37は頸部下に横ハケがみられる。また、SB37－5は口縁が強く「く」の字に屈曲し内湾する小型甕である。摩滅が著しく整形は不明であるが布留系の甕である。

在地系の甕は、SD09出土を除くと遺構に伴う甕は極めて少量であった。SQ10－2は口縁部が無文であり櫛描波状文が肩部のみ施文される。SD09－40は胴部破片ながら櫛描斜状文を交差させている。両者は後期前半（千野1988　1～2段階）の特徴をもつ。SB28－1は口縁部が広く頸部に屈曲部をつくって外反する器形となり、波状文の乱れが顕著に見受けられる。SD09－29～39の甕もほぼ同様の特徴があり、後

期後半に位置づく（千野1988　4～段階）。

② 壺

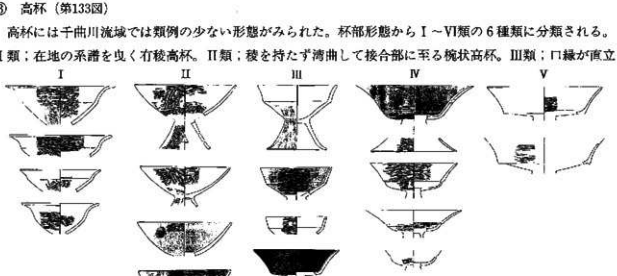
各遺構からの壺の出土は少なく、また小破片のため遺構共伴資料として認識されたものは少ない。在地系と外来系、中形と小形に分類される。

在地系の器形は断片的な資料ながら後期中葉段階と後期終末段階の2つに分類される。前者は、口縁部がラッパ状に伸び頸部から緩やかに外反し、比較的胴長になるが体部下半には緩い稜が認められるもの。文様は頸部に櫛描横線文（SB34－1、SD09－2等）・簾状文（遺構外－3）、横線文の下に鋸歯文・波状文を付加するもの、ヘラ描T字文・矢羽状文がある。SB02・34・38・54、SQ10・11出土資料が該当する。後者は頸部の屈曲が強く、胴部が張って球胴化するもので、文様は頸部に櫛描T字文が施される。遺構外－4・6・7で全容が理解されるが、SB05出土の破片資料が該当する。

北陸系土器としては、有段口縁壺がSB29－1・2、36－1、SD09－4、遺構外－18に、小形装飾壺がSB05－11、遺構外－61にみられた。SB29－2は口縁部と体部の接合に多量の粘土で肥厚させており、有段甕と同様の製作技法が伺えた。東海系の土器としてSB37－1、遺構外－19がある。遺構外－19にはパレス壺の文様が施文されていた。このほか折り返し口縁（遺構外－2）、二重口縁、直立口縁壺がある。

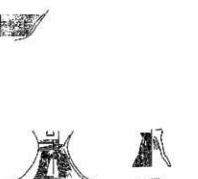
③ 高杯（第133図）

高杯には千曲川流域では類例の少ない形態がみられた。杯部形態からⅠ～Ⅵ類の6種類に分類される。Ⅰ類；在地の系譜を曳く有稜高杯。Ⅱ類；稜を持たず湾曲して接合部に至る椀状高杯。Ⅲ類；口縁が直立



第133図　高杯形土器の分類

もしくは緩く外反し、杯部中位に稜をもつ高杯。Ⅳ類；幅広の口縁が強く外反し、杯部下位に稜をもち湾曲して接合部に至る高杯。Ⅴ類；幅広の口縁が強く外反し、杯部下位に稜をもち直線的に接合部に至る高杯。Ⅵ類；小型高杯（SQ12－7）。Ⅰ類は、高杯C類（青木；1986）に該当し、在地の高杯では後期後半に普遍的に見られる。Ⅱ類は後期後半に出土例があり（註2）、終末までの高杯組成に組み込まれる。椀状高杯の成立要素は不明であるが、東海地域の影響が考えられる。Ⅲ類は類例のない器形であり、北陸地域の高杯と在地の『折衷』型とで、成立時期は月影式に平行する段階かと考えられる。Ⅳ・Ⅴ類は北陸地域に系譜をもち、SB04－9・10、06－6の脚部が接合すると思



第134図　北陸系器台・高杯脚部

われる。これらの高杯は胎土が比較的精選され極めて薄い作りで、在地の高杯と隔質があるやにみうけられる。同地域の脚部は断片的であるが特徴的なものとして稜を有する例、稜に刻みをつけ孔が穿たれた例、端部が先鋭化する例がある。Ⅵ類を含め東海地域に系譜をもつものとしてはSB06－7・36－4・42－11の脚部がある。

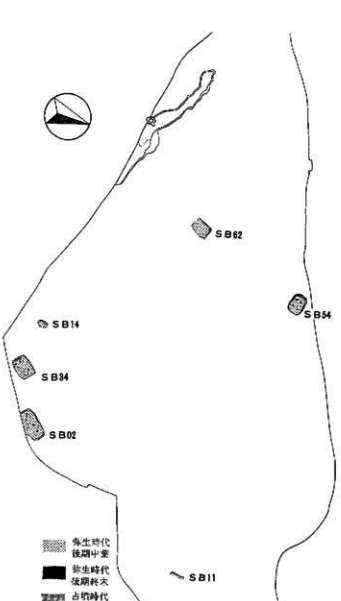
④　器台（第134図）

器台も比較的多く出土したが器形を把握できる資料はない。北陸地域の大型器台と、小型器台に分類される。SB28－34はくびれ部にヘラ描T字文、受け部・脚部に方形の透かしを配するなど在地の要素が取り込まれている。遺構外－122は擬凹線A（多条沈線）が施文されており、形態は異なるがSB28－35・遺構外－58の脚部に段部をもつものと合わせて筒形脚の器台になると思われ、北陸地域の法仏式に系譜が求められる。SB06－10・37－16、遺構外－55は赤彩された小型器台であり東海地域の系譜のなかにあると思われる。

遺構外－55は丸底になる有孔鉢であり北陸地域に系譜がある。SB42－8は布留系の有段鉢であり、器厚が薄く緻密な胎土である。

(3)　集落について（第4・5表）

出土した土器群、遺構の検出状況から、本遺跡の弥生後期から古墳前期の集落は4小期に区分され、弥生時代後期と弥生時代終末期～古墳前期初頭に属する竪穴住居は異なった立地を見せている。前者は標高368m以上の丘陵中位で、分散するものと2か所の固まり、360m前後の1か所の固まりである。それに対して、後者は362m前後の丘陵端部に密集している。丘陵全域にわたる調査ではないため断定はできないものの、丘陵端部が弥生終末期（外来系の土器群をもつ集団）以降の集落立地様相ではないかと思われる。



第135図　弥生～古墳時代時期別遺構分布図（1：1000）

各遺構は以下の如く整理される。外来の要素に影響されない時期としてSB02・11・14・34・38・41・54・62の8軒とSD09の溝、SQ10・11がある。壺・甕の形状から箱清水式期でも古相である。北陸地域の

影響を受けた時期としてSB04・05・06・07・10・12・28・29・32・35・39・40・42の13軒とSD09の溝。この時期は土器様相、遺構の切り合いから2小期に区分される。北陸地域に畿内・東海地域の影響が加わった時期の遺構としてSB36・37・68、SK112、SQ12がある。

竪穴住居の形状・規模が明確に検出されたものはSB04・34・39・42・54の5軒のみであり、住居構造に関する所見は必ずしも十分ではなかった。大半の住居は入口部を南もしくは南西側にもち、南北に長軸をとるものである。SB04・34には住居南西側に出入り口施設と考えられるピットが検出されている。SB54のみ丘陵頂部側に出入り口をもち、他と異なる主軸であった。

炉施設に関しては、明らかに炉をもたない住居がSB05・06・68の3軒存在する。この3軒はいずれも柱穴が検出されず規模も小形であることから住居以外の機能が考えられる。炉の構造は、床面を浅く窪めた地床炉と土器敷き等、炉に土器を用いたものがある。多くの住居が地床炉であったが、SB02・34の2軒は壺を利用した土器炉でありいずれも箱清水式段階でも古相の住居である。複数の炉をもつものとしてはSB02・04・28の3軒であり、大形住居に付随した施設と考えられるが、複数の炉が同時に機能していた状況はみられない。

良好に残存する住居を見ると柱穴は4か所、出入り口施設のピットを設け、貯蔵穴を脇に付設している周溝は多くの住居に見られ丘陵頂部側に存在する。SB28・36には周溝からつながる施設として間仕切り溝が見られ特殊な存在である。住居の規模は長軸7.0m以上の大形（SB02・28・36・38）、5.5m以上の中形の大（SB41・42等）、5.4m以下の中形の小（SB04・34等）の3分類されるが残存状況が悪いため集落構造に関する所見は得られなかった。

特殊遺物として竪穴住居址から銅鈴1・管玉2が出土した。SB28出土の銅鈴は摩耗が著しく、小破片になっているものの湾曲した形状を残している。このSB28は長軸8.3mを測る大形住居であり複数の炉を配し、住居群の中央に占地されていることから集落の中心的機能が示唆される。県内の弥生後期～古墳前期集落遺跡から青銅製装飾品が出土した例としては、佐久市北西の久保遺跡Y88号住〔佐久市教委；1987〕（銅鈴破片1　後期後半）・長野市四ツ屋遺跡SB9住〔長野市教委；1987〕（銅鈴完形〈鈴環〉2　後期後半）・箕輪町北高根A遺跡住1〔長野県教委；1972〕（銅鈴完形1　後期後半）・上田市琵琶塚遺跡第62号住〔上田市教委；1989〕（銅鈴破片1　後期）等があり、他に長野市春山B遺跡〔長野県埋文センター；1990〕出土例が住居に伴うことが確認されており長野市屋地遺跡〔大川；1977〕（銅鈴破片1　後期）例も出土地点より住居に伴う可能性がある。

今のところ青銅製装飾品の出土をもって社会構造の状況について言及はできないが、銅鈴を出土する住居は本址を含め遺物が比較的まとまって出土すること、四ツ屋遺跡例では卜占骨を伴うなど集落内の特別な位置を占めていたと思われる。青銅製品の分布は、多くの研究者が指摘する如く千曲川流域を中心とする北信に偏る。それは広域の沖積低地をもつ地域であり、これを利用した水稲耕作による階層分化の現れと見ることができないであろうか。

SB37・41から緑色凝灰岩製の管玉が各1点、SB02から緑色凝灰岩の原石片がそれぞれ覆土中から出土した。SB37の例はSB39に属する可能性があり、各遺構に伴うものか疑問が残るが、集落域から出土したことは注目される。管玉が出土（所有）した住居の特殊性はなく、集落内の占地、構造面は不明である。

県内で当該期集落における緑色凝灰岩製管玉の出土例は、工房址として著名な長門町中道遺跡SB11〔長門町教委；1984〕・長野市小鳥境遺跡〔長野市博；1983〕・丸子町社軍神遺跡〔丸子町教委；1980〕があり、一般集落では上田市琵琶塚遺跡第15号住・岡谷市橋原遺跡58住〔岡谷市教委；1981〕等がある。いずれの遺跡例も北陸色が強い点、本遺跡と類似しているといえる。

遺構	平面形規模	主　軸	炉形態	施設(ピット・周溝)	時　期	備　考
SB02	隅丸長方形 7.7×(5.0)	N－33°－E	地床炉…1 土器炉…1	9	後期中葉	緑色凝灰岩原石
SB04	隅丸長方形 5.4×3.8	N－30°－E	地床炉…2 (緑石1)	17　柱穴4 周溝・出入り口	後期終末古	ガラス小玉
SB05	隅丸長方形 (4.5)×3.1		なし	なし	後期終末新	
SB06	隅丸長方形 (5.3)×3.8		なし	なし	後期終末新	
SB07	隅丸長方形 (5.8)×(3.6)	N－28°－W	地床炉…1	6　柱穴3	後期終末	
SB10	不明	N－7°－E	地床炉…1	1	後期終末	
SB11	不明		不明		後期	
SB12	隅丸長方形 (5.5)×－		不明	2	後期終末	
SB14	不明	(N－7°－E)	焼土溜り		後期	
SB28	隅丸長方形 8.3×(6.2)	N－4°－E	地床炉…3 (緑石2)	8　柱穴3 貯蔵穴・周溝	後期終末古	銅鋲
SB29	方形		地床炉…1	2 周溝	後期終末古	SB36に切られる
SB32	隅丸方形 －×(5.8)		不明	4 周溝	後期終末古	SB35に切られる
SB34	隅丸長方形 5.4×4.4	N－45°－E	土器炉…1	14　柱穴4 貯蔵穴・出入り	後期中葉	
SB35	不明		不明	0 周溝	後期終末古	SB32を切る
SB36	隅丸方形 (7.3)×(6.5)	N－4°－E	地床炉…1	7　柱穴3 周溝	古墳前期	SB29を切る
SB37	隅丸方形？		地床炉…1	5	古墳前期	SB39覆土下管玉
SB38	隅丸長方形 (7.4)×(4.9)	N－22°－E	地床炉…1	10　柱穴3 貯蔵穴・周溝	後期中葉	土製円盤
SB39	長方形 4.4×3.8	N－18°－E	地床炉…1 (小礫)	6	後期終末	
SB40	不明		不明	4 周溝	後期終末	
SB41	隅丸長方形 5.8×(3.7)		不明	2 周溝	後期終末	管玉
SB42	隅丸長方形 6.3×4.9	N－44°－E	地床炉…1 (緑石1)	4　柱穴3 貯蔵穴	古墳前期	
SB54	隅丸長方形 4.8×3.5	N－73°－W	地床炉…1	7　柱穴4 周溝・出入り口	後期中葉	
SB62	隅丸長方形 (4.5)×3.3		不明	2	後期中葉	
SB68	隅丸長方形 4.3×(3.1)	N－20°－E	焼土溜り	なし	古墳前期	

第4表　弥生～古墳時代住居址一覧表

(4) 北陸系土器群出土に関する一視点

北陸地方に本貫を置く土器群と認識されるものが、器種組成・技法から北陸北東部域に近似することは先に述べたところである〔＝越後系（註3）〕。ここでは県内の北陸系土器の状況について簡単に触れ、本遺跡の特質を明らかにしたい。

県内における北陸系土器の研究としては、近年の調査成果を基にした前島の集成〔前島；1993〕に詳しく、土屋が流入の様相を簡潔にまとめている〔土屋；1993〕。北陸系土器群の県内への流入（搬入・模倣など）は希薄な地域はあるものの、千曲川中・下流域を中心にほぼ全県にみられる。法仏・月影式段階では下伊那の飯田市兼田遺跡〔上郷町教委；1990〕の有段口縁擬凹線甕の出土を南限とし、岡谷市橋原遺跡に体部列点文を有する有段口縁甕、塩尻市上木戸遺跡〔長野県埋文センター；1988〕・松本市県町遺跡〔松本市教委；1990〕の有段口縁擬凹線甕、向畑遺跡〔松本市教委；1988・1989〕・塩尻市平出遺跡〔塩尻市教委；1987〕の有透装飾器台等、中南信地域は点的な広がりを見せている。千曲川流域は前島の指摘するとおり、善光寺平に面的な広がりがある。白江式段階以降は東海地域の土器群に圧倒されるものの、箕輪町北高根A遺跡の有段口縁小型甕の出土を南限とし、向畑遺跡など中信地域以北は「く」の字口縁甕が多出する遺跡が分布する。千曲川流域では前段以上の広がりが東海・畿内の土器とともに見られる。県内への流入状況の詳細は別稿に譲る事とするが、庄内古段階以前における北陸南西部域を含めた北陸地域全域との交流（物の移動）、庄内新段階以降の全国的な土器の移動と連動した北陸北東部域との頻繁な交流（人の移住）という、2段階の異なる様相が想定される。またこれらの交流は、北陸地域からの流入という一方的なものである（註4）。本遺跡はこの2段階の北陸系土器流入の変化が顕著に現された事例といえる。

北陸系土器の善光寺平への流入時期は、法仏式の段階に遡って盛んに行われていたことが本村東沖遺跡調査によって明らかになった〔長野市教委；1993〕。今後の発掘調査によっては更に時代が遡って（猫橋式段階）流入があった可能性もある。つまり弥生時代全般を通じて北陸との交流があり、善光寺平の稲作文化は北陸の影響を多分に受けて熟成していったと考えられる。

北陸地域との交流は具体的にどのような内容であったかが問題となる。本遺跡では北陸系土器群流入段

鶴前遺跡 主な住居	善光寺平 青木・千野（一部加筆）(1989)		漆町編年 沼鳴（1986）		北陸貫 谷内尾（1983）	新潟シンポ（1993）	東海 赤塚（1990）	畿内
SB02・14・34 38・54・62	木村東沖	3	2群	法仏	法仏 Ⅰ	2	廻間Ⅰ…	Ⅴ様式
	生仁Y8住	4			法仏 Ⅱ	3		庄内 古
			3群	月影Ⅰ	月影 Ⅰ			
SB28・29 SB04・39			4群	月影Ⅱ	月影 Ⅱ	4		
	四ッ屋30住	5						
SB05・06・37	四ッ屋9住		5群	白江		5	廻間Ⅱ…	庄内 新
			6群		古府クルビ	6		
	篠ノ井環濠	湯屋敷						
SB42	炭塚1住		7群	古府クルビ		7	廻間Ⅲ	布留 古

第5表　編年対称表

階を通じて、在地の壺が良好な形で出土していないこと。白江式段階の遺構にみる北陸系土器群の量は在地を圧倒していること。更にSB28にみる間仕切り溝を入口から設ける住居の形態は、飯山市上野遺跡〔飯山市教委：1990〕H9住居址の能登地域に分布する特殊な住居の形態に類似して注目されること。これらのことなどから、『単位集団の移住』という可能性が大きいと考えられる。そしてこの移住は極めてスムーズに行われ、在地の集団と異なる玉造りなどの特殊集団としての位置付けがなかったかに見受けられる。

本遺跡は弥生時代終末期に北陸北東部域の土器移動という現象が明確化したものであるが、その要因が何であるのかが今後の課題である。北陸北東部域独自の土器の限定と在地土器群の詳細な検討が今後必要である。

本遺跡は、自然堤防上に立地する集落遺跡である篠ノ井遺跡群、塩崎遺跡群、後背湿地に立地する生産・祭祀遺跡である石川条里遺跡、丘陵に点在する古墳群等の状況と合わせて今後様々な分析・検討がなされるものであり、善光寺平南部域の古墳時代初頭の展開が明確になると思われる。

なお、本節を書くにあたり同僚である青木一男氏との間で土器理解の相違があった。浅学ゆえに誤解を招く内容があったかと思われる。御批判、御教示をいただければ幸いである。

註1　北陸地域の区分としては、越前・加賀の南西部、能登・越中・越後・佐渡の北東部に2分され前者が有段口縁擬凹線文甕・有逆縁台が盛行し、後者が「く」の字口縁甕・台付装飾壺が盛行するとの指摘がある越後地域では北東部の中でも有段口縁擬凹線文甕の出土比率が特に低く、「く」の字口縁甕が増加する傾向にあるという。また甕の内面調整も形態差による調整の違いはあるものの「ヘラ削り」調整は庄内併行期までは継続しないという。

註2　中俣遺跡13号溝・平礼バイパスA地点2号住等の出土資料と類似するものであり、SB28－23に見る杯部の深い器形と共に高杯小形化の経過を現す器種ととらえられる。

註3　長野県史考古資料編において笹沢氏が“越後系”と統一された用語を用いているのは、何らかの根拠に基づくものと推察されるが、越後地域の状況や県内の資料の増加を考えて北陸北東部系という意味での“越後系”という用語の理解が妥当かと思われる。

註4　箱清水式土器の流出状況は越後の一部の地域にみられるものの北陸地域への影響を顕著に見ることはできない。白江式段階以降（布留古）に出現する幅広の口縁をもつハケ痕に交流の一端が何えるにとどまる。

参考文献

青木　祝明；1984　「箱清水式土器の編年予察－千曲川流域弥生土器における高坏型土器を中心として」『長野県考古学会誌』48

青木　一男；1989　「土器にみる森将軍塚古墳出現の前後－千曲川中流域の研究と今後の課題」『長野県埋蔵文化財センター紀要』2

青木　一男；1993　「土器様相変化の素描」『長野県考古学会誌』　―古墳時代特集号―69・70

赤塚　次郎；1990　『考察』『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター

飯山市教育委員会；1990　『上野遺跡　小沼湯滝バイパス関係遺跡発掘調査報告II』

上田市教育委員会・上小地方事務所；1989　『琵琶塚II』

大川　清；1977　『長野県松代原地遺跡』（日本窯業史研究所報告第4号）長野県企業局・日本窯業史研究所

岡谷市教育委員会・日本国有鉄道岐阜工事局長野工事事務所；1981　『機原遺跡－中部山岳地の弥生時代後期集落址－』

上郷町教育委員会（現　飯田市）；1990　『兼田遺跡－地域農業拠点整備事業小手沢地区に伴う埋蔵文化財報告書』

桐原　健；1980　「信越両国間交流についての考古学的所見」『信濃』第32巻　第12号

更埴市教育委員会；1969 『生仁　ー更埴市生仁遺跡ー次緊急発掘調査報告ー』
笹沢　浩；1988 「古代の土器」「長野県史」考古資料編全1巻 (4)遺構・遺物
佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財センター；1987 『北西の久保　ー南部台地上の調査ー』
塩尻市教育委員会；1987 『史跡、平出遺跡』
品田　高志；1990 「弥生時代の時期区分」『吉井遺跡群II』柏崎市教育委員会
滝沢　規朗；1993 「越後における古墳出現前夜の土器様相ー甕の類別構成比と内面調整を中心にー」『新潟考古学談話会会報』第11号
滝沢　規朗；1993 「越後における弥生後期以降の土器文様ー四線文土器と刺突文を中心にー」『北越考古学』第6号
田嶋　明人；1986 「考察ー深町遺跡出度土器の編年的考察」『深町遺跡Ⅰ』
谷内尾晋司；1983 「北加賀における古墳出現期の土器について」「北陸の考古学」
千野　浩；1988 「千曲川水系における後期弥生式土器の変遷」『信濃』 第41巻　第4号
土屋　積；1993 「長野県における集落・墳墓の概要」「東日本における古墳出現過程の再検討」日本考古学協会新潟大会報告
長門町教育委員会；1984 『中道遺跡』
長野県教育委員会・日本道路公団名古屋支社；1972 「北高根A遺跡ほか」「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書　上伊那郡南箕輪村その1・その2」
㈶長野県埋蔵文化財センター；1988 「上木戸遺跡」「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書2」
㈶長野県埋蔵文化財センター；1990 「春山遺跡、春山B遺跡」「長野県埋蔵文化財センター年報7」
長野市教育委員会；1987 「四ツ屋・御岡・塩崎遺跡IV」（長野市の埋蔵文化財第9集）
長野市教育委員会；1993 「本村東沖遺跡　浅川扇状地遺跡群」（長野市の埋蔵文化財第50集）
長野市立博物館；1983 「小島城遺跡出土遺物」「第5回企画展　シナノから科野国へ」
前島　卓；1993 「北陸系土器の動向」「長野県考古学会誌」　古墳時代特集号ー69・70
松本市教育委員会；1988・1989 「向畑遺跡Ⅰ～Ⅲ」
松本市教育委員会；1990 「松本市県町遺跡」（松本市文化財調査報告No.82）
丸子町教育委員会；1980 「三角　三角遺跡群（社軍神遺跡・諏訪田遺跡）」

第3節　奈良・平安時代の遺物と集落

善光寺平の奈良・平安時代の遺跡の調査は、従来より数多くなされており、資料の蓄積も多い。しかし、土器編年や集落の研究はあまりすすんでいない。今回得られた資料は、地形的な制約により遺構の残存状況が悪く、それらを解明するには良好とはいえない。

ここでは、遺物と集落について若干のまとめをしてみたい。

(1)　遺　物

ほとんどを占める焼物を取り上げてみたい。

焼物の種類としては、須恵器・手づくね（非ロクロ調整）土師器・土師器（ロクロ調整）・黒色土器A・灰釉陶器が主体であり、わずかに緑釉陶器がみられる。本来ならば、量的な構成比を各遺構ごとに行わなければならない。しかし、遺構の残存状況が悪く、明らかに該期の遺構でカマドも付属しているにもかかわらず、弥生時代後期から古墳時代前期の遺物の量が多い例もみられるため、その埋上の一括性は疑わしい。そのため、県埋文センターが松本平で実施したような重量比あるいは口縁による個体推定法をとることには疑問が生じる。そこで、主観的ではあるが、食膳具の焼物量を住居址別に表したのが、第6表である。この結果、大きく須恵器主体（A群）と土師器・黒色土器・灰釉陶器主体（B群）の二者に分けることが可能である。

A群……SB20・23・24・25・26・64

B群……SB01・03・08・17・21・43・45・47・48・51・52・56・57・63・66　SK70

A・B群の個々についてみることにする。

A群は、焼物としては須恵器がほとんどであるが、器種的にみると、杯Aと杯B・蓋が主体をなしており、第1段階の食膳具構成（註1）である。しかし搬入品など年代を特定できる資料はない。杯Aをみると底部の切り離しに、ヘラキリと糸切りの二者がみられ、前者が圧倒的に多い。松本平の成果では、ヘラキリは8世紀前半まで存在し、徐々には糸切りと交替し8世紀末には糸切りのみになるという結論が得られている。これをそのまま当てはめると、A群には8世紀中頃という年代が与えられそうである。

B群は、器種的にみると、杯Aが黒色土器・土師器、椀が黒色土器A・土師器・灰釉陶器、皿Bが黒色土器A・灰釉陶器がみられる。この組成は、第2段階の食膳具構成（註2）である。年代的にみると、伴出した灰釉陶器は東濃産光ケ丘1号窯式から大原2号窯式であり、それらは9世紀後半から10世紀前半に比定されており、B群の年代もほぼ同様な時期が与えられよう（註3）。細かくみると、黒色土器A主体と土師器主体に分けることも可能ではあるが、今回の資料だけでは言及することは避けたい。しかし黒色

		SB	01	03	08	09	15	17	20	21	22	23	24	25	26	27	43	45	47	48	51	52	53	55	56	63	64	66
須恵器	杯B・蓋							△	○			◎	△	△	△										△		◎	
	杯A　ヘラキリ				△			△	△		△	◎	△	△	△										△		◎	
	糸切												○															
黒色土器A	杯A		○	△	△			△		○	○						○	△	◎	◎	○	△	○					○
土師器	杯A		◎	◎	○		◎				△						◎	◎	○	○	○	◎				○		◎
灰釉陶器			○	○			△	△										○	○	○					△	○		◎

◎多量　○平均　△少量

第6表　竪穴住居別焼物の出土量

土器Aから土師器という主体となる焼物の流れが善光寺平でも肯定され、灰釉陶器の二窯式との対比が可能であれば、二時期に分けることも可能であろう。

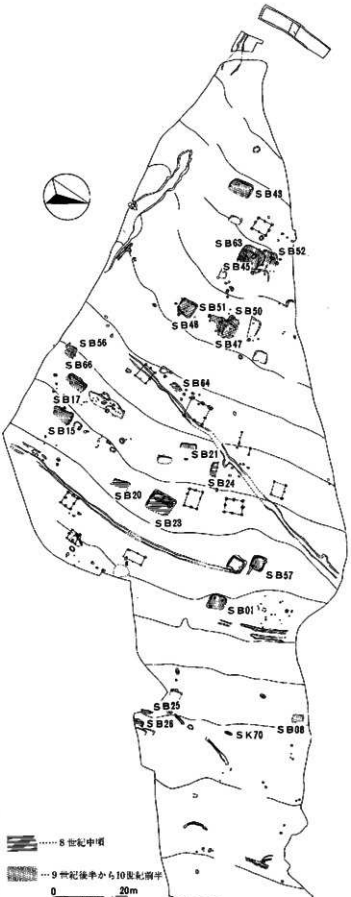
以上遺構出土の遺物からみると、本遺跡は8世紀中頃に主体をおく段階と、100年弱の空白をおいた9世紀中頃から10世紀中頃までの段階の二時期に分けて、集落が営まれたと考えられる。

遺構外出土の遺物をみると、土師器の小口径の杯や東濃窯虎渓山1号窯式の灰釉陶器があり、年代的には10世紀後半から11世紀前半が与えられ、この段階でも遺構としては検出されなかったが、この地で何らかの人間行動を考える必要があろう。

(2)　集　落

検出された遺構は、竪穴住居址・掘立柱建物址・墓・土坑である。前述したように、遺物は大きく8世紀中頃と9世紀後半から10世紀前半に分けることが可能であり、この時期分けに従い竪穴住居址の分布をみると、第136図に示すとおりである。時期別にみてみたい。

8世紀中頃の竪穴住居址は、調査区中央部と東側に2ケ所にまとまって展開する。後者の一群は用地外にかかっており、その内容ははっきりしない。中央の一群についてみると、比較的規模の大きなSB23を中心に周囲に小規模な竪穴住居址が展開するようにもみえる。また掘立柱建物址も中央部に展開しており、該期の竪穴住居址と分布が重複している。松本平の所見（註4）では、この時期が最も掘立柱建物が盛行するという成果が得られていることから、善光寺平においても今後検討する必要はあるが、周囲の掘立柱建物も同時期と考えられる。ただし総柱建物はなく、すべて側柱建物がほとんどであり、倉庫とは考えられず居住空間であった可能性が高い。



第136図　奈良・平安時代竪穴住居址全体図（1：1000）

9世紀後半から10世紀前半の竪穴住居址はほぼ全体に分布する。しかし、切り合いがみられることから、一時期に存在した住居址はさらに少なくなると思われる。また住居の規模をみても、核になるような大きな住居は見つからない。

本来ならば、次に集落成立の背景について言及しなければならないが、今回調査の資料のみでは明らかに不足している。今後、県埋文センターが調査を実施した近接する石川条里遺跡や篠ノ井遺跡など（註5）の整理作業が進む中で周辺調査遺跡も加えながら千曲川西岸域全体、または塩崎地区という小空間内での古代集落の展開が明らかにされれば、それとの関連の中で鶴前遺跡の評価を下すことが可能となろう。

註1　善光寺平の古代遺跡の調査は数多く行われているが、焼物の編年研究はいまだ進んでおらず、その確立は今後の課題である。ここでいう第一段階は、松本平の資料をもとにした奈良・平安時代の三段階の食器具構成のうち、8世紀末から9世紀前半に主体をなしている〔原：1987〕。

註2　註1でふれたように、松本平の食器具構成をもとにしている。第2段階は9世紀中頃に成立し、変質しながら10世紀後半まで継続する。

註3　灰釉陶器の年代は、前川要の研究にしたがう〔前川：1984・1987〕。

註4　松本平の集落研究の成果は、小平和夫氏の研究にしたがう〔小平：1990〕。

註5　県埋文センターの石川条里・篠ノ井遺跡の調査概要については、年報に報告されている〔長野県埋文センター：1988・1989・1990・1991〕。

参考文献

小平　和夫：1990　「古代の集落」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4　総論編』（財）長野県埋蔵文化財センター

（財）長野県埋蔵文化財センター：1988　『長野県埋蔵文化財センター年報』5

1989　『長野県埋蔵文化財センター年報』6

1990　『長野県埋蔵文化財センター年報』7

1991　『長野県埋蔵文化財センター年報』8

原　明芳：1987　「松本平における平安時代の食器具」『信濃』第37巻　4号

前川　要：1984　「猿投窯における灰釉陶器生産最末期の諸様相」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要III』

1987　「平安時代における東海系緑釉陶器の使用形態について」『中・近世土器の基礎研究III』

第5章　結　　語

今回の発掘調査では、旧石器時代から中・近世にわたる遺構・遺物が量や質の差こそあれ、ほぼ切れ目なく発見された。このことは、この場所が人々の絶え間ない生活・生産活動の場であったことを示している。その中でも、弥生時代後期から古墳時代前期、奈良・平安時代にかけてが、最も盛んであった人々の営みを残している。が、大部分は、短期的な生活の痕跡しか認められなかった。

各時代の特徴および成果について、時代をおって簡単に述べてみたい。

旧石器時代から縄文時代晩期・弥生時代中期初頭については、その生活の痕跡は貧弱で、短期的な生活の場であったことを物語っている。このような内容は、県埋文センー発掘調査報告書16に報告されている更埴市鳥林・小坂西遺跡、長野市塩崎城見山砦遺跡など、篠山の山麓部に立地する遺跡にいくつかみられる。しかし近年、善光寺平でも縄文時代の拠点的な集落と思われる長野市屋代・松原遺跡などが調査されてきており、それらとの対比が必要となろう。

弥生時代後期から古墳時代にかけては、その集落の形成時期が、眼下に広がる石川条里遺跡の水田の形成と期を同じくしている点が注目される。該期の拠点的な集落は、千曲川の自然堤防上の塩崎遺跡群・篠ノ井遺跡群にみられ、当遺跡との関係が注目される。遺物としては、北陸系土器の量の多さが注目され、該期の在地の土器様式の成立を考える上で重要な資料と考えられ、第4章で詳しくふれている。

奈良・平安時代になり再び集落跡が確認される。しかし該期としては通有な集落であり、大きな特徴はない。しかし、奈良時代に成立し短期間で消滅し、再び9世紀後半に展開する動向は、本遺跡独自とは考えられず、自然堤防上の拠点的な集落の変化と連動していた可能性が高い。

以上のように各時代の特徴をあげることができるが、内容の差こそあれ、各時代とも継続的な拠点的な集落でなかったことは共通する。そのため、本遺跡の評価は集落と生産域、拠点的な集落との関係を明らかにしていく中で、内容も深まり正当にできると考えられる。具体的には、眼下に広がる水田遺跡の石川条里遺跡、その南の自然堤防上に広がる伝統的な集落遺跡である篠ノ井遺跡群・塩崎遺跡群の両者がどのような関わりをもっていたかを明らかにし、その大きな変容の中で、鶴前遺跡の評価を塩崎地区あるいは千曲川西岸という広い視野にたって行う必要がある。今後、県埋文センターで調査を実施し現在整理作業をすすめている石川条里・篠ノ井遺跡の報告の際に、今回の成果をふまえたまとめが必要となろう。

本書の刊行をもって、鶴前遺跡の記録保存は完了する。比較的小規模な当遺跡の報告に、調査開始から六年の歳月を費やしてしまったことは、速やかな公開という本来の目的から大きく逸脱している。この原因は、石川条里・篠ノ井・松原・川田条里・榎田遺跡のような、県埋文センターでも経験したことのない大規模遺跡の調査の実施が急がれたことにあったとはいえ、その責任を免れることはできない。大いに反省すべき点である。

最後に、これまで御協力、御支援いただいた関係各位、諸団体に深い感謝の意を表わし、さらに本書が地域の歴史を再構成する上で少しでも活用されることを念願して結語としたい。

付章 SK162出土人骨

獨協医科大学第一解剖学教室
阿部修二・茂原信生・芹澤雅夫

（1）保存状況

保存状態はよくない。頭蓋骨は顔面部が完全に失われている。頭蓋冠および側頭部の一部が残っている。四肢骨は骨端部は失われており、骨幹の部分が残っているが、骨の種類を確認できるのは大腿骨くらいである。

（2）頭蓋骨の特徴（PL. 35）

左右側頭骨、右頭頂骨、後頭骨鱗部が比較的よく残っており、その他の部分は細片化しており同定できない。残った部分に重複する部分はない。

乳様突起は普通だが、左右で厚みが異なっている。左の方がやや厚く、乳突切痕も深く明瞭である。耳道上稜はよく発達しており、いわゆる前上乳突結節として膨隆している。したがって、乳突上溝は明瞭である。乳突上溝の上部にはやや窪んだ小窩がみられる（左右とも）。この部分は頭頂切痕骨になっている。側頭筋の発達状態を示す側頭線は目立たない。

後頭隆起は発達しており、その正中に位置する外後頭隆起は比較的発達しており、ブロカのIII型である。骨はあまり厚いとはいえない。

頭蓋の縫合は矢状縫合とラムダ縫合が見られるが、どちらも内板・外板ともに癒合しておらず、さほど高齢ではない。

頭蓋骨は骨は厚くないが、乳様突起や後頭部の発達状態から男性の可能性が高いと考える。ただし、年齢はさほど高くない。

（3）歯（表7・8）

歯はすべて永久歯である。下顎が11本、上顎が15本残っている。上顎は左右ともに第3大臼歯が残っているが、下顎左第3大臼歯が失われているらしい。第3大臼歯が萌出していても咬耗はほとんどなく、しかも第2大臼歯との隣接面に隣接面磨耗もできていないことを考えると、この個体は第3大臼歯が萌出直後ぐらいの年齢と考えられる。すなわち、20歳前後であろう。

上顎の切歯は、中切歯・側切歯ともにシャベル型でありとくに中切歯は唇側面もやや凹んだダブルシャベル型である。上顎の大臼歯は第3大臼歯まですべて4咬頭性である。下顎の大臼歯の咬頭と溝の型は、第1大臼歯が＋5型、第2・第3大臼歯がX4型である。咬耗は切歯、第1大臼歯が象牙質の露出したモルナーの3である以外は、象牙質の見られないモルナーの2（ブロカの1）である。歯にエナメル質減形成は認められない。

（4）四肢骨

左右大腿骨骨体中央の長さが約27cm、左脛骨中央の約24cmが確認できる。大腿骨は、両側とも上部外側に殿筋隆起と思われるはり出しがあるため扁平である。粗線はさほど発達していない。

現代人で中央の長さがほぼ同じぐらいの大腿骨を探しだし、その長さをもとにして〔藤井；1960〕の式で計算した推定身長は、155～160cmぐらいと推測される。この身長は〔平本；1977〕の報告している古墳時代の日本人の男性の平均身長よりもやや低目であるが、鎌倉時代や室町時代の男性の平均値159.00cmや

遺跡名	No.	所在地	時代	性別	I 1		I 2		C		P 1		P 2		M 1		M 2		M 3	
					m−d	b−l	m−d	b−l	m−d	b−l	m−d	b−l	m−d	b−l	m−d	b−l	m−d	b−l	m−d	b−l
鶴前遺跡	1	長野県	中世	♂	8.9	7.7	7.7	6.4	8.4	9.0	7.2	9.5	6.9	9.1	10.3	11.9	10.2	12.4	9.6	11.6
					8.8	—	—		8.4	8.6	7.3	9.3	6.7	9.2	10.3	11.7	9.8	12.5	8.8	12.0
				平均	8.9	7.7	7.7	6.4	8.4	8.8	7.3	9.4	6.8	9.2	10.3	11.8	10.0	12.4	9.2	11.8
大坂古墳（♂＋♀）		長野県	古墳		(8.4)	(7.5)	(7.1)	(6.1)	8.5	10.3	7.4	9.4	7.0	9.[illegible]	10.5	11.6	9.7	11.4	8.9	10.7
岡山古墳人	く	岡山県	古墳	♂	8.6	7.3	7.0	6.8	8.2	8.4	7.4	9.2	6.6	9.2	10.5	11.9	9.6	11.6	9.1	11.1
				♀	8.7	7.1	6.8	6.4	7.9	7.9	7.5	9.6	7.0	9.3	10.7	11.6	10.4	12.2	—	—
江戸 (Brace 5)		東京	江戸	♂	8.2	7.4	5.8	6.5	7.7	8.5	7.2	9.6	6.9	9.5	10.5	11.6	10.3	12.7	9.5	11.3
				♀	8.3	7.0	5.7	6.3	7.9	8.6	7.4	9.5	6.8	9.2	10.4	11.4	9.9	12.5	9.7	11.6
日本人 (樋口, 1956)			現代	♂	8.67	7.35	7.13	6.62	7.94	8.52	7.38	9.58	7.02	9.41	10.68	12.25	9.91	11.85	8.94	10.79
				♀	8.55	7.28	7.06	6.51	7.71	8.13	7.37	9.43	6.94	9.25	10.47	11.40	9.74	11.31	8.86	10.50
中部日本人 (鈴木, 浦井, '57)			現代		8.68		7.18		8.22		7.40	9.61	6.94	9.58	10.68	12.74	9.59	12.76		
					8.55		7.15		7.91		7.62	9.38	6.97	9.28	10.33	11.27	9.55	12.37		

第 7 表　鶴前遺跡出土人骨の上顎歯の計測値と比較資料

遺跡名	No.	所在地	時代	性別	I 1		I 2		C		P 1		P 2		M 1		M 2		M 3	
					m−d	b−l	m−d	b−l	m−d	b−l	m−d	b−l	m−d	b−l	m−d	b−l	m−d	b−l	m−d	b−l
鶴前遺跡		長野県	中世	♂		—	6.0	6.0	7.2	7.9	6.7	8.0	7.2	8.2	10.9	10.3	11.0	10.4	11.0	10.7
					—	—	—	—			7.1	8.0	6.9	8.2	10.8	10.4	11.2	10.5		
				平均			6.0	6.0	7.2	7.9	6.9	8.0	7.1	8.2	10.9	10.4	11.1	10.5	11.0	10.7
大坂古墳（♂＋♀）		長野県			—	—	—	—	6.8	7.3	7.2	7.8	7.5	8.1	11.3	10.4	11.1	10.0	10.1	9.8
江戸時代人 (Brace)			江戸	♂	4.9	5.7	5.8	6.4	6.7	7.7	7.2	8	7.3	8.4	11.5	11	11.3	10.6	10.7	10.1
				♀	5	5.1	5.6	5.8	6.4	7.2	6.8	7.4	6.9	8.1	11.1	10.7	10.9	10.4	10.9	9.9
日本人 (樋口, 1956)				♂	5.48	5.88	6.20	6.43	7.07	8.24	7.31	8.06	7.42	8.53	11.72	10.89	11.30	10.53	10.96	10.28
				♀	5.47	5.77	6.11	6.36	6.68	7.66	7.19	7.77	7.29	8.25	11.32	10.55	10.89	10.26	10.65	10.02
中部日本人 (鈴木, 浦井, '57)				♂	5.65		6.28		7.21		7.28	8.13	7.13	8.51	11.53	10.98	10.89	10.57		
				♀	5.55		6.19		6.89		7.24	7.77	7.19	8.27	11.16	10.67	10.60	10.25		

第 8 表　鶴前遺跡出土人骨の下顎歯の計測値と比較資料

156.81cmはこの範囲に入っている。

（5）まとめ

この個体は、頭蓋骨の縫合が癒合していないこと、歯の咬耗が少ないことなどから20歳前後の年齢と推定され、頭蓋骨の形態から男性の可能性が高い。時代的な特徴については明らかにできなかった。骨に病変はない。

参考文献

藤井　明：1960　因故長骨の長さと身長との関係に就いて　順天堂体育学部紀要　3：49－61
平本嘉助：1977　日本人身長の時代的変化　自然科学と博物館　44(4)：169－172

調査遺跡周辺

PL. 1

PL. 2

遺跡全景

1. 遺跡全景
（東より）

2. 遺跡全景
（南上空より）

遺構 1

調査前遺跡全景
(石川条里遺跡より)

左. 調査前遺跡
(西より)

右. 調査前遺跡
(西より)

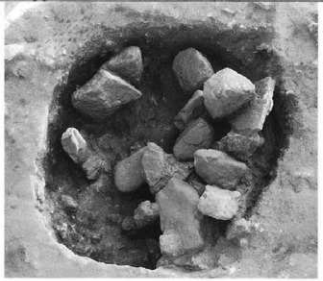
左. 調査地南部西
(東より)

右. 調査地中央部
東 (東より)

左. ⅡC北全景
(北より)

右. ⅡC南全景
(北より)

PL. 4



遺構 2

左. SB13
(南より)

右. SK169集石
状況(北より)

左. SK173
遺物出土状況
(東より)

右. SK173
遺物出土状況

左. SB02
(北より)

右. SB02炉 (F_1)
出土状況

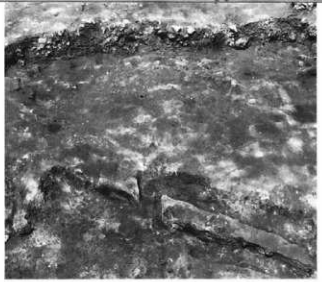
左. SB04
(北東より)

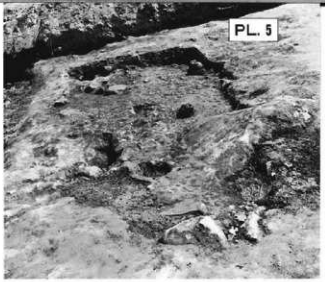
右. SB04
柱痕半裁状況
(東より)

遺構 3

左. S B05
(東より)

右. S B12
(北より)





左. S B28
(北より)

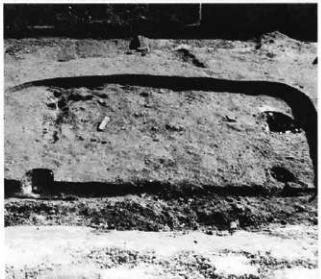
右. S B28
遺物出土状況

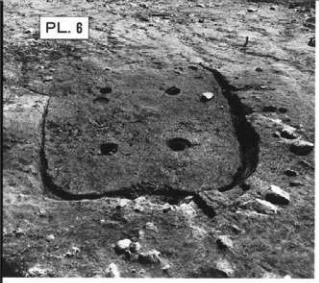
左. S B32
遺物出土状況
(北より)

右. S B36
(東より)

左. S B37
(東より)

右. S B42
(北より)





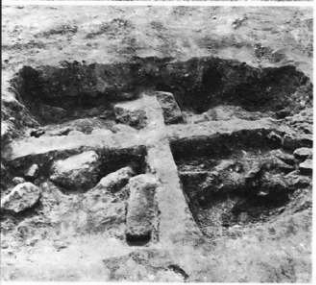
遺構 4

左. S B54
（西より）

右. S B54
P_4

左. S K112
遺物出土状況
（南より）

右. S K122
遺物出土状況
（南より）



左. S B01
（北より）

右. S B03
カマド出土状況（東より）

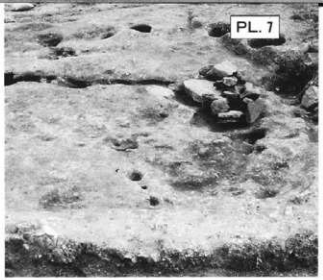
左. S B15
カマド出土状況
（東より）

右. S B21
（東より）

遺構5

左. SB23
(北より)

右. SB47・50・51
(北より)



左. SB45・63
(東より)

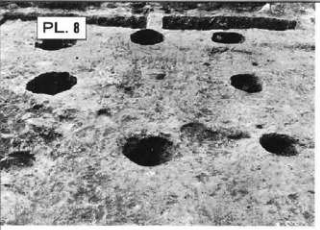
右. SB45P7
遺物出土状況
(南より)

左. SB48
(西より)

右. SB52
(東より)

左. SB57
(東より)

右. SB65
(東より)



遺構 6

左. ST06
(東より)

右. ST10
(北より)

左. ST11
(西より)

右. ST12
(東より)

SK70
遺物出土状況
(東より)

左. SD10
(南より)

中. SD11
(東より)

右. SD02・03
(北より)

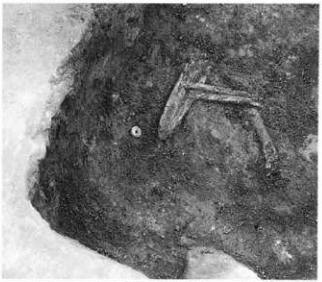
遺構 7

左. ＳＴ08
（東上空より）

右. ＳＴ08
（東より）

左. ＳＫ162
人骨出土状況
（東より）

右. ＳＫ162
遺物出土状況
（南より）



左. ＳＫ172
（南より）

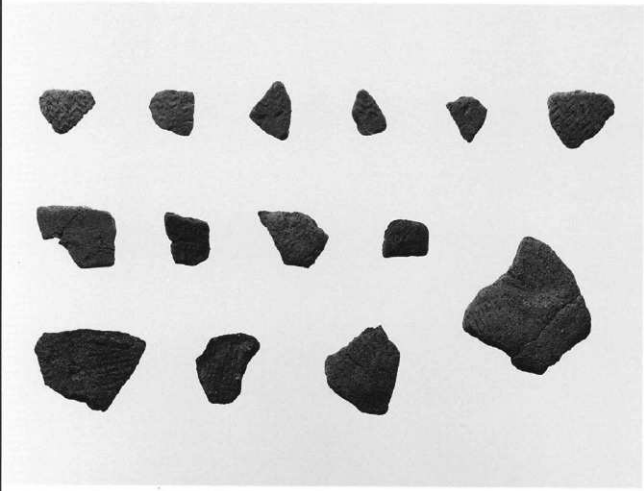
右. ＳＫ163
井戸出土状況
（北より）

左. ＳＤ06
（北より）

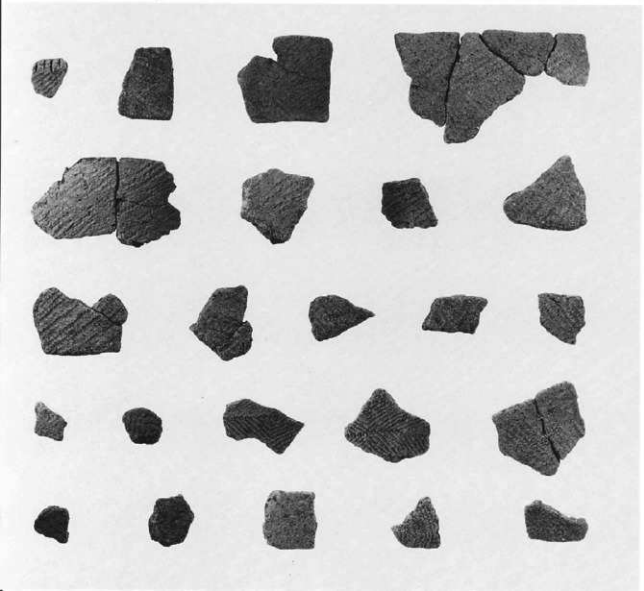
右. ＳＤ09
（北上空より）

縄文土器 1

縄文早期

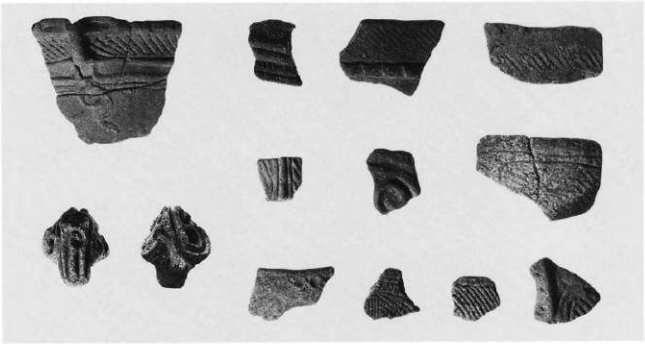


縄文前期



縄文中期 1

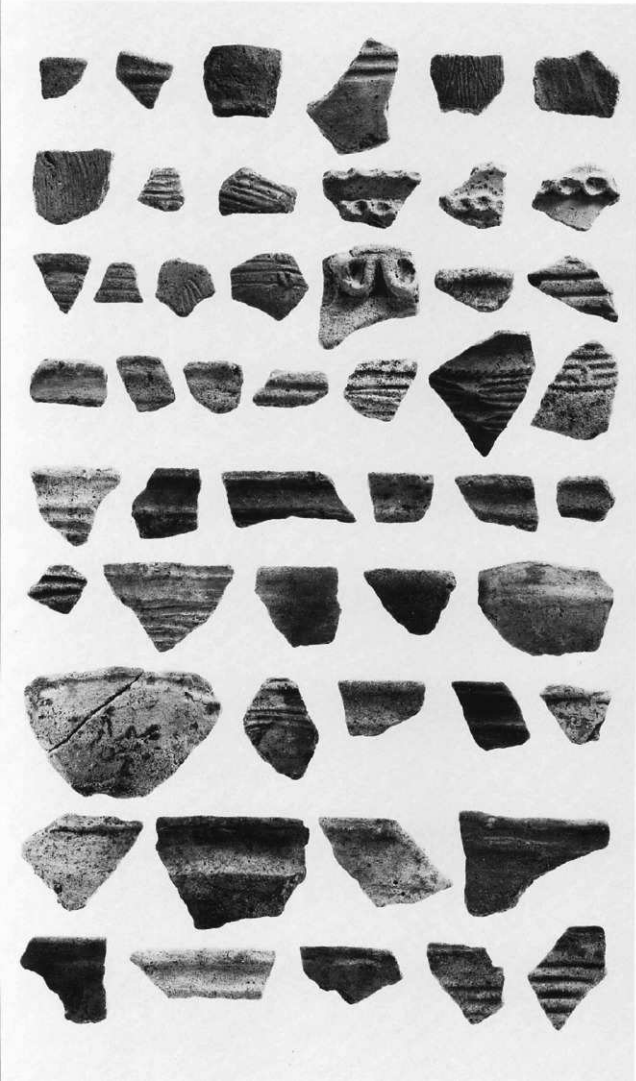
縄文中期 2



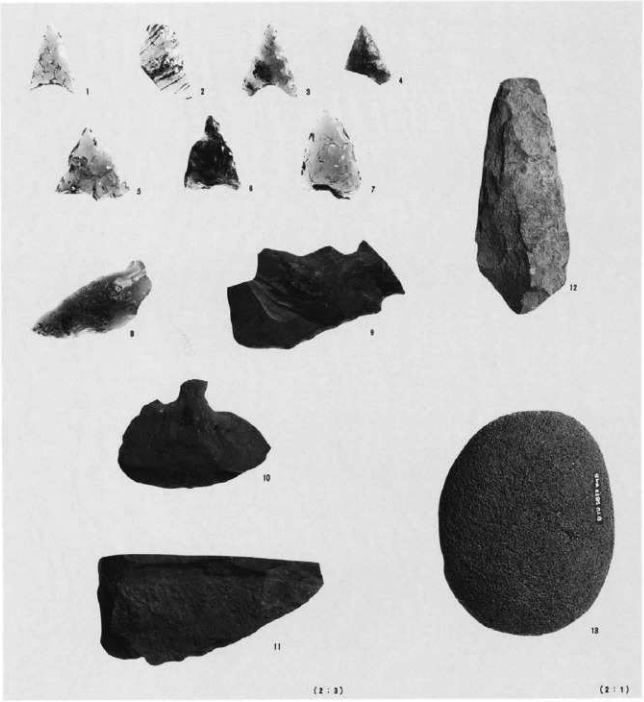
縄文後期・晩期 1

縄文土器 3

縄文後期・
晩期 2

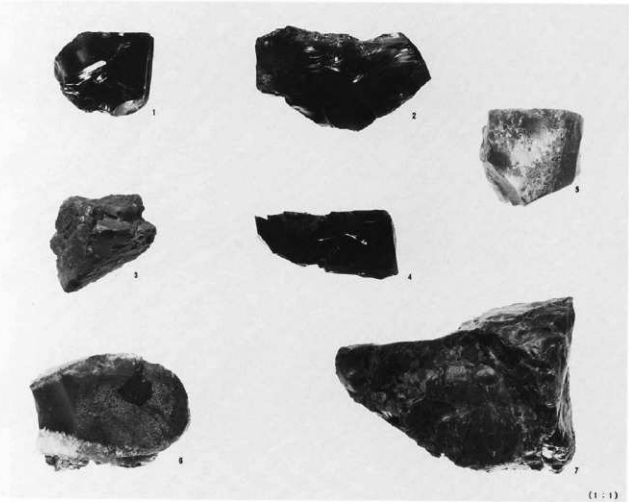


ＳＢ13出土

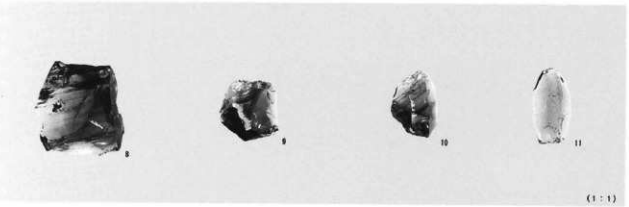


左，ＳＢ60出土
右，ＳＫ169出土

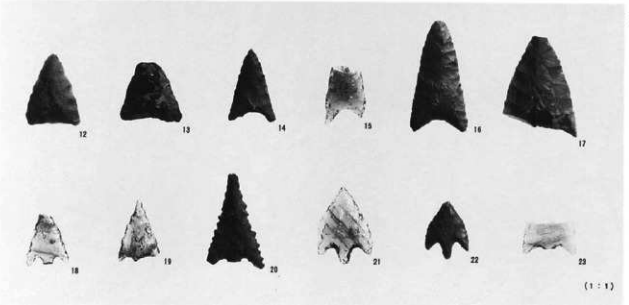
遺構出土石器 2



S D09出土
石核

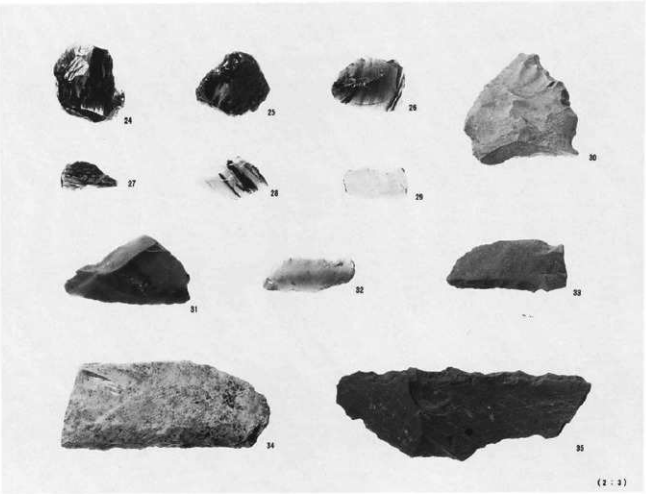


S D09出土
剥片A
(楔形石器)

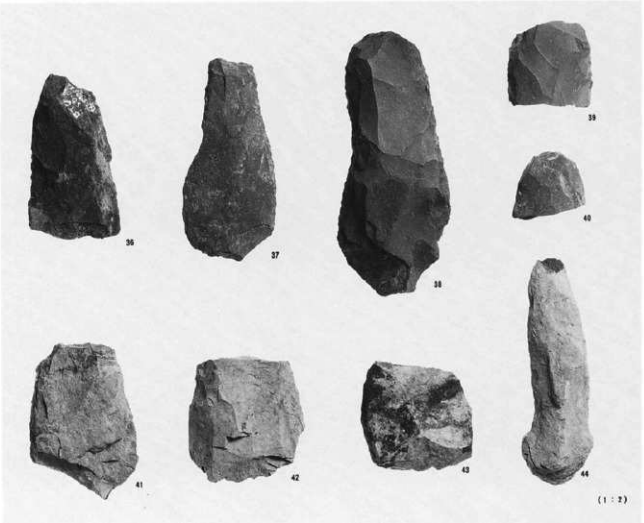


S D09出土
石鏃

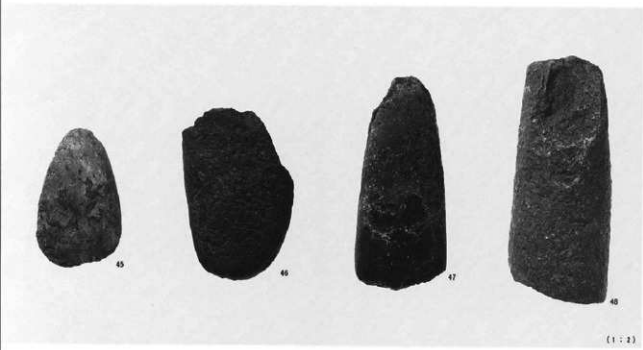
ＳＤ09出土　刃器



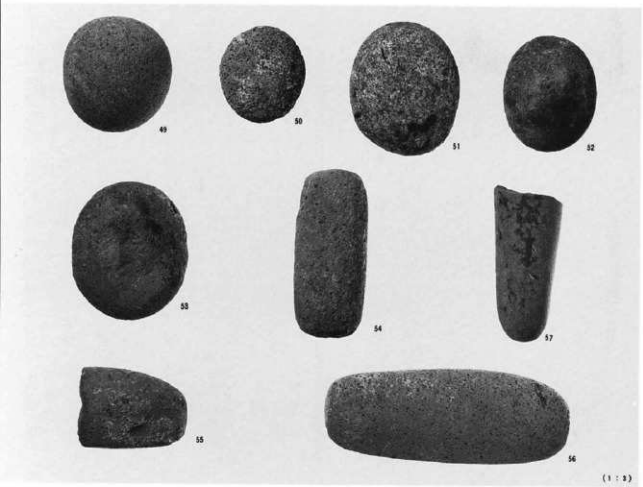
ＳＤ09出土
打製石斧



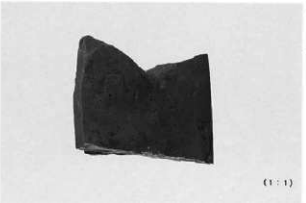
遺構出土石器 4



S D09出土
磨製石斧



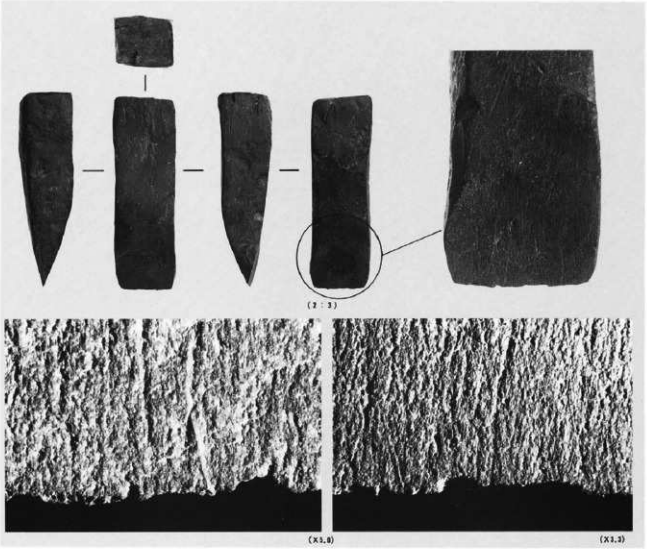
S D09出土
搬石（磨石）



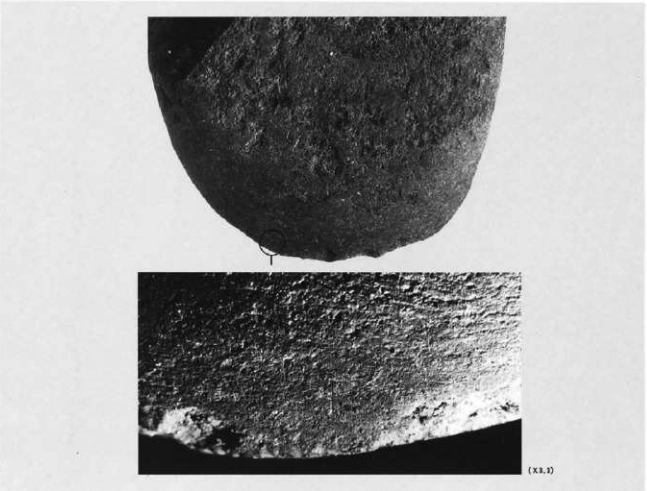
左、S B28出土
磨製石鏃

右、S B54出土
磨製石器

ⅡA区出土
柱状片刃石斧



SD09出土
磨製石斧刃部

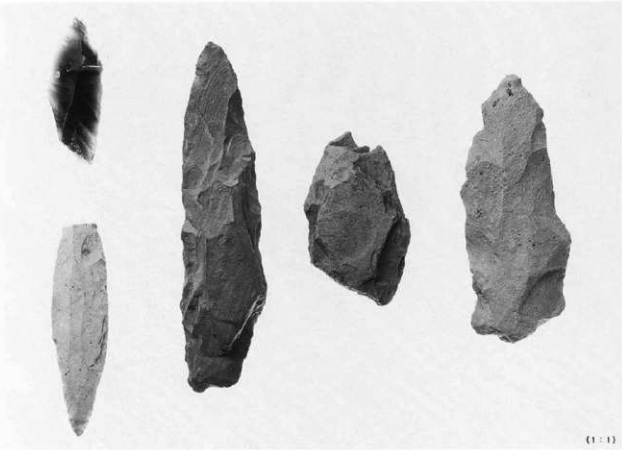


遺構外出土石器 1

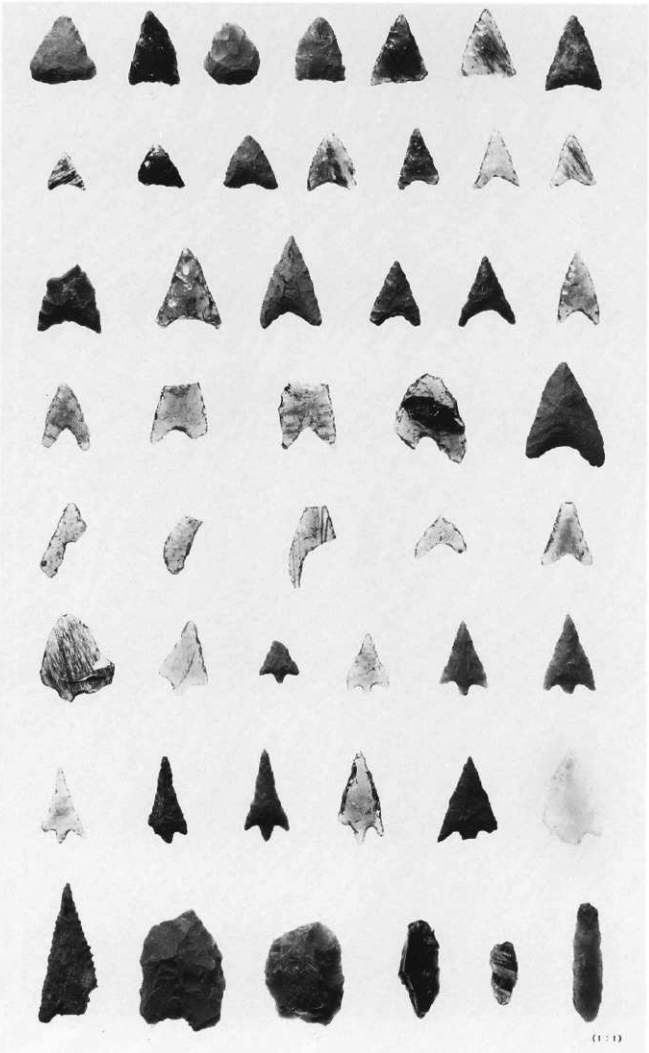
石核 1

石核 2

ナイフ形石器
石槍



石鏃
石錐



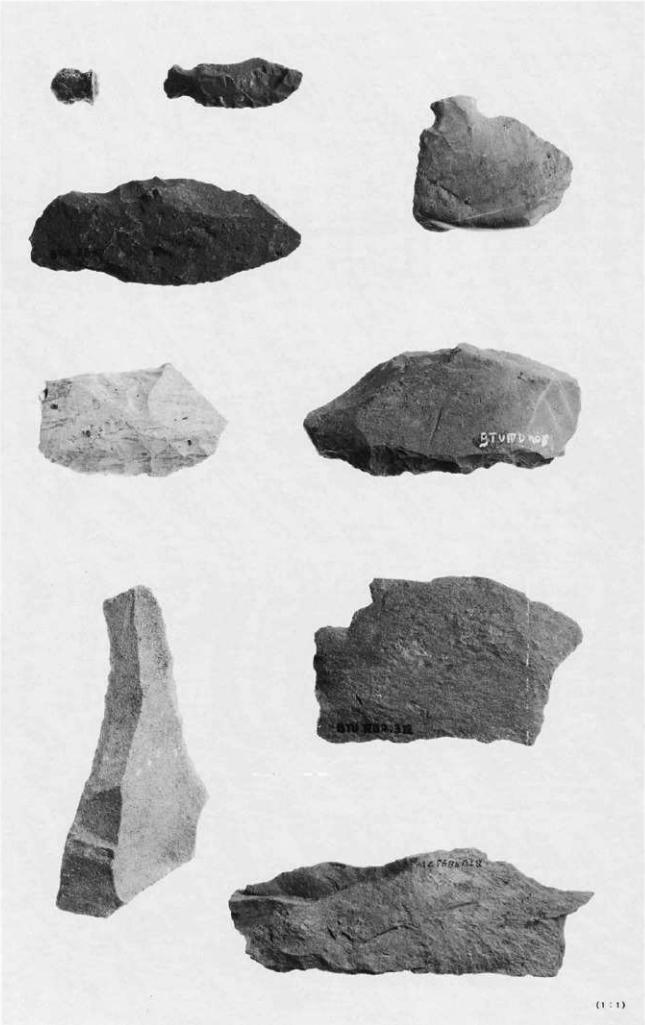
(1:1)

遺構外出土土石器 3

打製石斧

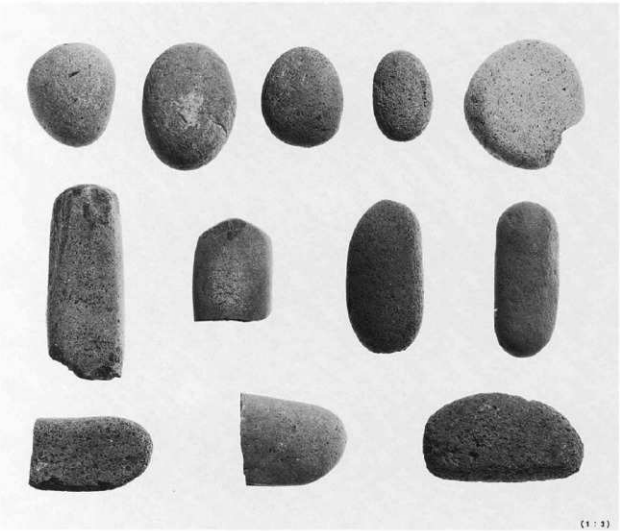
(1 : 2.5)

石匙・刃器

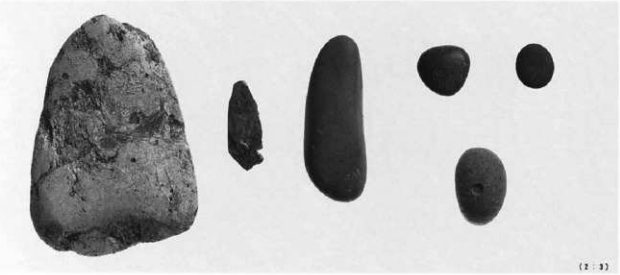


(1:1)

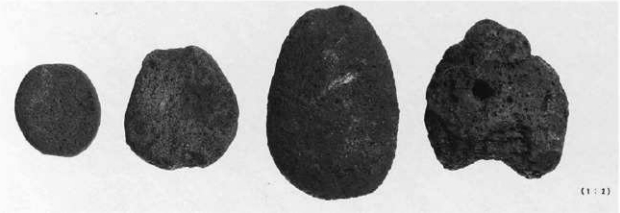
遺構外出土石器 5



椎石
(磨石)



磨製石斧
磨き石

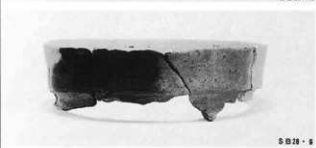


石鏃

弥生時代後期～
古墳時代前期土器1

弥生後期～
古墳前期土器 2

SB28・9


SB28・5

SB28・8

SB28・34

SB28・4

SB28・1

SB28・2

SB28・7

SB28・8

SB28・12

SB28・36

SB28・33

SB32・1

弥生後期～
古墳前期土器 3

SB37・5

SB40・1

SD09・48

SD09・42

SB36・1

SB37・6

SD09・34

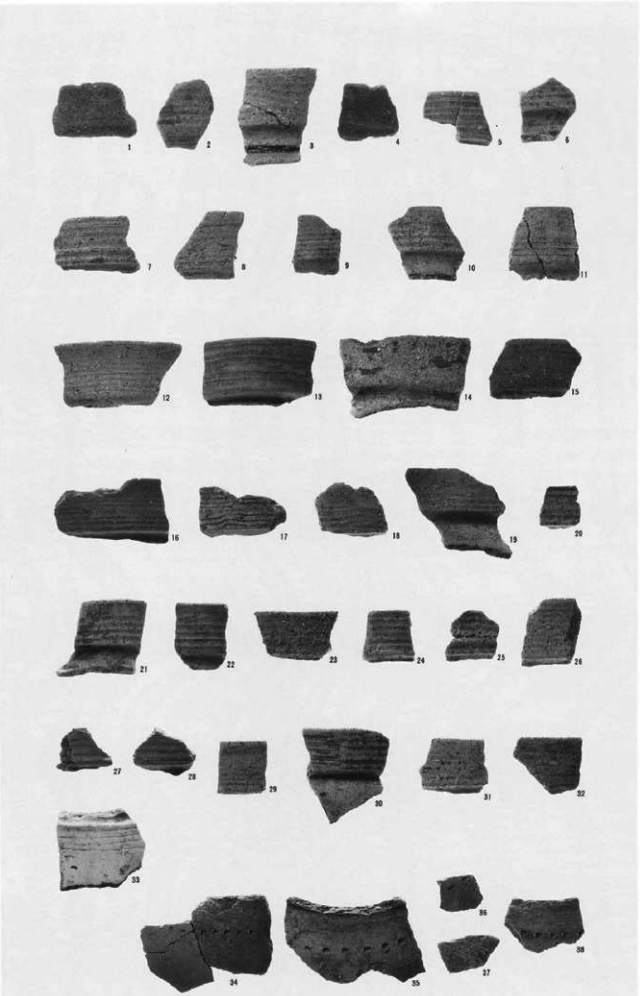
SD09・30

SD09・41

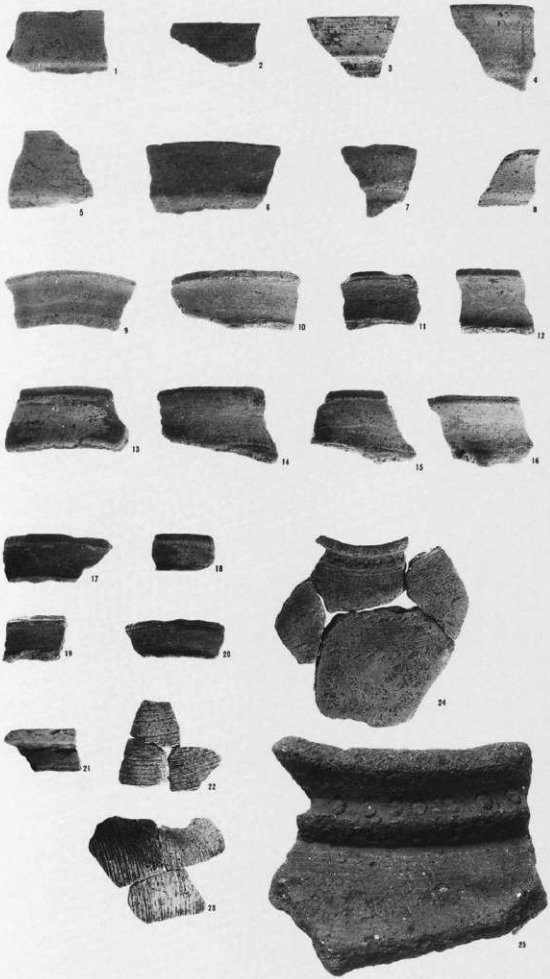
弥生後期～
古墳前期土器 4

弥生後期～
古墳前期土器5

1. S B10・2
2. S B10・3
3. S B28・52
4. S B28・53
5. S B29・9
6. S B29・10
7. S B37・20
8. S B39・12
9. S B42・20
10. S D09・79
11. S D09・80
12. 遺構外・105
13. 遺構外・106
14. 遺構外・104
15. 遺構外・109
16. 遺構外・103
17. 遺構外・108
18. 遺構外・107
19. 遺構外・117
20. 遺構外・113
21. 遺構外・110
22. 遺構外・111
23. 遺構外・114
24. 遺構外・115
25. 遺構外・118
26. 遺構外・119
27. 遺構外・120
28. 遺構外・121
29. 遺構外・147
30. 遺構外・112
31. 遺構外・116
32. 遺構外・146
33. 遺構外・122
34. S B28・58
35. S B28・59
36. S B29・11
37. 遺構外・130
38. 遺構外・129



弥生後期～
古墳前期土器 6



1. S B28・51
2. S B29・8
3. S B39・11
4. 遺構外・123
5. 遺構外・124
6. 遺構外・125
7. 遺構外・128
8. 遺構外・127
9. 遺構外・133
10. 遺構外・134
11. 遺構外・135
12. 遺構外・132
13. 遺構外・140
14. 遺構外・143
15. 遺構外・139
16. 遺構外・136
17. 遺構外・142
18. 遺構外・141
19. 遺構外・131
20. 遺構外・138
21. S B37・21
22. 遺構外・145
23. 遺構外・144
24. 遺構外・19
25. 遺構外・19

SB38・1

SB38・1

遺構外72

遺構外18

遺構外26

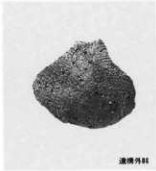
遺構外77

遺構外84

遺構外81

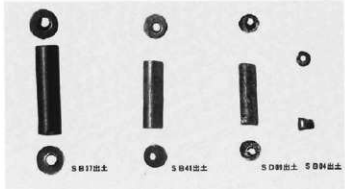
遺構外78

遺構外79


遺構外86

遺構外87

遺構外85


SB37出土　SB41出土　SD01出土　SB04出土

SB34出土

古墳中期土器・
平安時代土器 1

遺構外・4

遺構外・1

遺構外・3

遺構外・5

遺構外・2

遺構外・16

SB01・3

SB01・14

SD01・6

SB01・12

SD03・4

SB15・1

SB15・2

SB39・11

SB43・8

SB45・4

SB45・3

SB45・8

SB45・13

SB45・11

SB45・12

SB47・2

SB47・1

SB47・3

SB37・4

平安土器 3

SB85・4

SB85・5

SK78・5

SK78・1

SK78・4

SK78・8

SK78・1・4・5・6

SK187・9

SK187・10

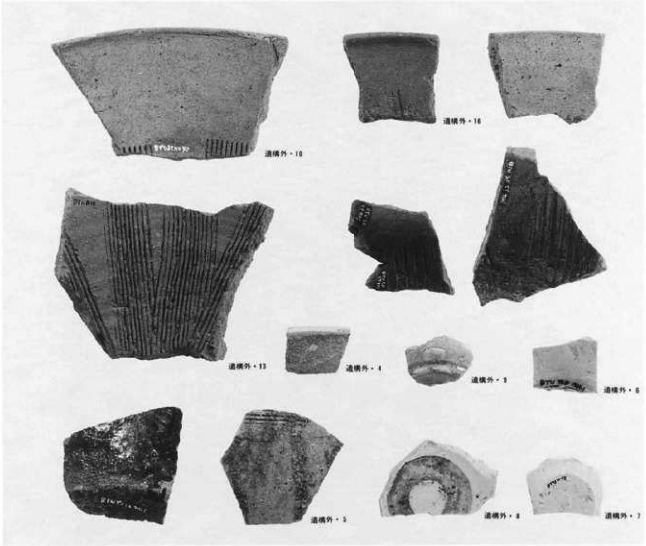
SD87・4

遺構外・50

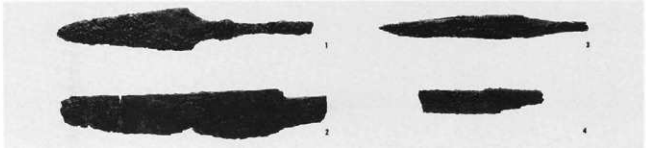
遺構外・1

SD87・3

中・近世遺物1
遺構外出土
土器・陶磁器



鉄製品



中・近世遺物 2

銭貨

永乾通寶　光始通宝　天聖元宝　?　元豊通宝

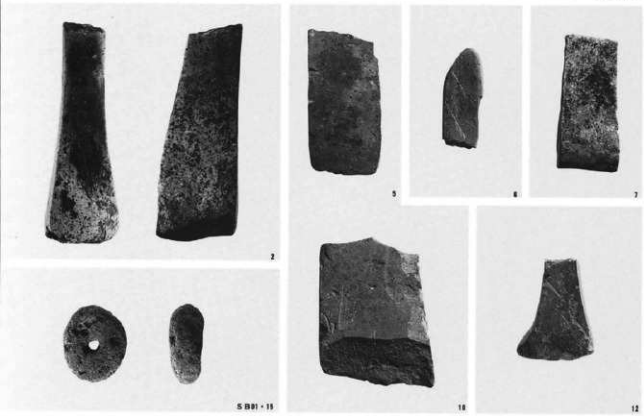
SK162・4　SK162・3　SK162・1　SK162・5　SK162・2

?　SB83出土　寛永通宝　SK177出土　寛永通宝　SK163出土　虎淳元宝　遺構外2　慈孝元宝　遺構外1

キセル

SK177出土　ST88出土

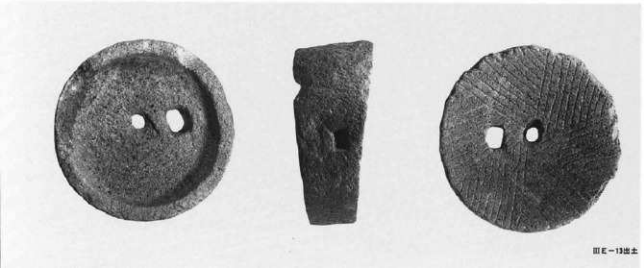
砥石



2　5　6　7　SB01・15　10　12

左：石錘

石臼



IIIE－13出土